

2000年最初の今週の主張 1／1 国歌を合体させてもいいじゃないか

2000年の正月、いかがお過ごしでしょうか。1月1日に書き始めたんですが、風邪

をひいて、その後仙台の実家に帰って、ノートで続きをやっています。

東京・上高田の自宅には随分と年賀状をいただきました。また、一水会事務所の方もそうです。ありがとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひします。

じゃー赤坂が「である」と「ですます」をまぜるな、といつもうるさいので、文体を戻そう（赤坂注・新年早々ワルモノにしないでくださいよ。基本中の基本でしょーが。みなさん、懲りずに

今年もよろしくお願ひします。そういえば邦男さんは去年も今頃風邪ひいてました）。

「皇紀」って知ってる？

上高田に来る年賀状は300枚くらいで「2000年元旦」と書いてあるのが多い。「平成12年正月」というのもあるけど、せっかく区切りのいい時なんだし、思い切って使おうという感じだ（赤坂注・別に「思い切って」もないんじゃないですか）。

でも事務所に来るのは200枚くらいで右翼が多いから「平成」がほとんど。何割かは「皇紀」を使っている。「こうき」なんてワープロ（ワードだよん）でも出やしねー。「皇紀」っていうのは神武天皇が即位してから日本の歴史を数える。たしか今は2660年くらいじゃないのかな。右翼やってたときはキチンと覚えてたけど、一水会代表を辞めたとたん、「右翼の記憶」も消滅してしまった（赤坂注・ウソウソ。去年の今頃も同じこと聞かれました、私。広辞苑によると「皇紀」は明治政府が1872年に始めたんですね。西暦の紀元前660年を元年にしてるそうです。だから今年は2660年です）。

そうだ、この前ジャナ専（赤坂注・おなじみ日本ジャーナリスト専門学校。邦男さんが現代史を教えてます。昔は真理ちゃんと冷やかして行ってたけど最近はさぼってます。読者の皆様も乱入してみてください）の生徒たちとカラオケに行ったら、そこはなんと軍歌が50曲くらいあった。すげーと思った。これも「時代」なのかな。その中に懐かしくも「紀元は2600年」という歌があったんで、30年ぶりに歌った（赤坂注・その歌、父がよくお風呂で歌ってます。苦笑。生徒さん腰引けてませんでしたか？）。確か戦前だよね、2600年は。

でも「皇紀」と書かれ、「尊皇」「維新断行！」なんて印刷された年賀状は普通の人には出せないよね。「業界」の人しか友達がいないのかもしれないが。

そこでだ。西暦、元号、皇紀だけかと思ったらまだある。「仏暦」というのが

あった。フランス革命（1789年）から数えているのかな。そしたら今年は「仏暦211年」かな。ところが、タイからの年賀状だ。田中義三さんの支援運動でタイに行ったとき知り合った人だ（赤坂注・田中さんは元赤軍兵士で、「よど号ハイジャック犯」の一人。北朝鮮に約30年政治亡命してましたが何故だか96年春にカンボジアでニセ米ドル供給犯として逮捕。これも何故だか逮捕状はタイから出てたのでタイで3年間裁判。99年6月に無罪判決。そういえば邦男さんは去年の12月の中旬にもタイに行ってました）。

だから、「仏」はフランス（仏蘭西）でなく「仏陀」のことなんだ。お釈迦様が生まれた年を「仏暦元年」にしてるんだ。西暦はイエス・キリストの生誕年を元年にしてるし、イスラム暦はマホメットの生誕年を元年にしてる（赤坂注・厳密には違うようですが、この際細かいことはいいですね）。

タイに行ったとき、不思議に思ったのは、裁判資料、記録もこの仏暦が使われていたことだ。仏暦だと今は2500年くらいで、田中さんがカンボジアに来た、そこで逮捕された・・・と。不便でしかたがない。まあ相手国のある外交文書には使わないんだろうが。でも、キリスト教に対抗しているんだから意地でも西暦は使わないのかな。

タイの2曲の国歌

ともかく、タイ人は信仰厚く、そして王室への尊崇？の気持ちが強い。これは先週のこの欄にも書いた。国歌が流れてる時に無視したり、ペッなんて唾を吐いたら外国人でも逮捕されてしまう。

しかし、しかしだ。その国歌は2つあるというから頭がこんがらかる。カタログハウス発行の「通販生活秋の特大号」に書かれていたことだけど。

タイでは、「王室用」と「一般用（プレーン・チャートという）」の2種類の国歌がある。ともに1935年制定。「王室用」は国王が臨席する行事を始め、映画館や競技場、テレビ番組終了時などに演奏される。「一般用」は種々の儀式や行事で歌われる。王室用は、

尊き王のいつくしみ受け 栄えゆく われら

で始まる。

一般用には「王」という言葉は入っていない。

いくさをも恐れず われらが国ため ささげん この命 ばんざい

という言葉が見える。国民としての決意表明の歌なのだろうか。

でも、この2曲はキチンと区別されているのだろうか。今度タイに行ったら聞いてみよう。「2つの国歌がある」と聞いたとき、僕はこう思った。

「王室用」は国王が臨席される場所で流され、他のスポーツや映画館では「一般用」を流されるのかと思った。しかし、違っていた。競技場でも映画館でも流れるのは「王室用」なんだ。だからこそホモホモ7ちゃんも立ってるのに「立て！」と

女性に叱られたんだよね。「一般用」なら何も立たなくてもよかったですのかもしれない。すると、僕の理解では「王室用」が国歌であって、「一般用」は「愛唱歌」とか「第二国歌」じゃないのかな（赤坂注・タイは仏教も2つなんですね。「大乗」と「小乗」。でも「小乗」といういい方はサベツだそうです）。

タイの他にも、2つの国歌をもつ国はある。まずニュージーランドだ。ここはオーストラリアやカナダと同じく、イギリス連邦の一員だ。オーストラリアでは20年前までは「イギリス国歌」を歌っていたが、一般公募で自分たちの国歌を作った。でも曲は昔からあって、羊泥棒が作ったものだ。親しまれているから歌詞をつけたという。11月22日の「今週の主張」に書いたよね。

ニュージーランドは、今でも正式な国歌はイギリス国歌だ。1940年に「国民歌」が制定され、現在では2曲を同格に扱っている。オリンピックでは「国民歌」を使用。ということは「国民歌」が国歌だよ。そのうちそう決められるだろう。イギリス国歌は「英連邦の一員」としてのいわばグループ歌だね。あるいは自分たちのルーツはイギリスだ、ということを確認するためのものだ。対外的には、すべて「国民歌」が国歌の代用をしている。

この「国民歌」は、

われらが神よ 御国を守れ

と出だしはイギリス国歌と似ている。しかし、ラストは

助けよ神よ 守れ ニュージーランド

とある。なるほど。これをいいたいために「国民歌」を作ったんだ。イギリス国歌じゃニュージーランドなんて出てこないし、どこの国歌かわかんない。そういう国歌のプライドとアイデンティティのために「国民歌」を作ったんだろうよ。

さらに、2つの国歌を持つ国としてはデンマークがある。王国としての国歌と国内的な行事で使われる国民歌の2曲がある。王国国歌は古い民謡に基づくもので、1776年頃から国歌として使われている。国民歌は穏やかな国土の自然を讃えたもの。王国国歌は「王」が何度も出てくる。

帆柱に立ちて、クリスチャン王は、きらめく剣を、うちふるそのとき
(略) たたえよ、クリスチャン王、たたえよ、デンマークのクリスチャン王

と。「国民歌」の方は、クリスチャン王もデンマーク王も出てこない。

愛する国、美し森は岸に茂る、岸に茂る
みどりの山々、その名はデンマーク
女神が住む、女神が住む

美しい女神が住む、美しい自然の国、デンマークなんだ。行ってみたくなる（赤坂注・「美しい」は「女神」にかかってません）。でもこれはどんな時に使われるんだろう。多分、国歌の行事などはすべて「王国国歌」なんだろう。一般的概念で

いったら、これが「国歌」だ。国民歌は愛唱歌だろう。「デンマーク王」とか「クリスチャン王」といつも大声で歌うのは、恐れ多いので、酒場でも歌えるように、愛唱歌を作ったんじゃないだろうか。

日本でも一時、「第二国歌」を作ろうとか「国民歌」を作ろうという運動があった。たしか日教組でもテスト版を作った。しかし、定着しなかったよね。

日本でも合体国歌を作ろう！

突然だが早稲田大学では（赤坂注・ホントに突然ですね）、「都の西北」が校歌だ。しかし、「第二校歌」は「人生劇場」だ（赤坂注・年も改まったことだし、もーそういうインチキやめたほうがいいですよ）。

「やーると思えばどこまでやるさ。それが男の・・・という歌だ。宴会になると必ず歌う。「都の西北」より、むしろよく歌われていた。少なくとも僕が大学生の頃はそうだった。そして今、不思議な噂が飛び交っている。「都の西北」が「第二国歌」だというのだ。これを聞いたときはエッと思った。でも鈍牛といわれた小渕さんは結構やり手なんだ。国旗・国歌法案を成立させ、ゆくゆくは「都の西北」を日本の国歌にしようという。そういう野望をもっているという。いやー、そう考えると楽しいですね。（赤坂注・別に楽しくないですけど。苦笑。このことは記念すべき第1回の「今週の主張」にも書いてます。なんか今回、蒸し返しが多いですね。風邪のせい？）。

でもそのときはどうする。愛国心と愛校心の板ばさみで僕は苦しんじやうな。忠ならんと欲すれば孝ならず、だ。そうだ、面倒だ。2つを合体しちゃえばいい。

都の西北 君が代は 早稲田の杜に 千代に八千代に
なかなかいいじゃないか。

あっ、マズイマズイ。これはジョークですよ。「一水会代表をやめた途端に左翼になったのか」と思われちゃ困る。「通販生活」を読んでたら、同じページに芥川賞作家の保坂和志さんが「上を向いて歩こう」を国歌に、とコメントしてた。そんなことをいう人は一杯いるんだよね。芥川賞作家ならもっと面白いこといえよ（赤坂注・ここでケンカ売ってどうすんですか。ただでさえあちこちで敵作って四面楚歌なのに。赤坂もめんどーみきれませんよ。みてほしくもないか）。

じゃー「上を向いて歩こう」と「君が代」を合体させるか。「上を向いて 君が代は千代に八千代に」なんてメロディーがほとんど同じだからスムーズに歌えるよ。

合体はジョークだが、あながちジョークともいえない。というのは「合体」は現実にあるんだ。南アフリカ共和国の国歌がそうだ。公の場では2曲を組み合わせて演奏する。1994年の新政権発足後、白人政権時代の旧国歌「南アフリカの声」と黒人解放運動の歌「アフリカに神の加護あれ」を合体させて1曲に作り上げたものだ。年々この「合体版」が普及しているという。

普通、新政権になったんだから、前の旧い国歌は捨てて、新しい国歌を歌うと思

うのだが、これは変わっている。「合体」した国歌なんて、本当にあったんだ。

じゃー日本だって考えてもいいかもしれないな。ロック版君が代なんてレベル
じゃなくて、「君が代」と「インターナショナル」を合体させちゃうとか。

でも、そうなったら「皆、闘おう！」という気分になるからまずいか。あくまで
「君が代」は戦争否定の歌だからね。（赤坂注・そういうことで、今回も「通販生
活」様にはお世話になりました。これに懲りず
によろしくお願ひ申し上げます。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張 1／10

前田日明と内藤湖南の歴史観

人間には＜絶対量＞というものがあるのだ。幸福、不幸、病気、逮捕…と。宝くじに当たっちゃうと、「しまった、これで一生分の運を使ってしまった！」と叫ぶ、あれなんだね（赤坂注・新年早々よくわかりませんねー。宝くじはともかく「逮捕の絶対量」ってなんなんですか）。

ボクが美女と結婚しない理由

絶世の美女と結婚した人達もみんなそうだろう。それだけで自分の幸せの＜絶対量＞を使い果たしてしまったんだ。山本富士子、高橋恵子、吉永小百合…と日本を代表する美女と結婚した男たちはその後鳴かず飛ばずだ。生きているのか死んでいるのかわかんない（赤坂注・また失礼なことをー。別に美女と結婚しなくても鳴かず飛ばずの人だってたくさんいますよ。誰とはいわないけど。若尾文子さんのダンナの黒川紀章さんなんか相変わらずブイブイいわせてるし。岩下志麻さんのとことかも）。

幸せの絶対量を使い果たしただけでなく、世の男たちの嫉妬、羨望、恨みの念を浴びるんだ。それがさらにこの男たちの立ち上がるのを妨げるんだ。この世の中は見えない「念」で成立している社会だからね（赤坂注・当HPもストリッパー、現役女子大生、フリーライターと美人揃いだから邦男さんが恨みをかって…といいたいんでせうか。通用しませんぜ）。

だいたい、いい女と結婚してさらに仕事で成功したという人は一人もいない。これは歴史の法則や風水の原理からいっても定説だ（赤坂注・すみません、ばかばかしくてつっこむの忘れてました）。

だから、この世で何か＜仕事＞をしようと思ったら、ソクラテスのように敢えて主体的、チュチュ思想的（赤坂注・北朝鮮が国民にたたき込んでる”主席様が一番”的な考え方）に不美人の愚妻を選ぶべきだ。そうすると一緒にいたくないからバリバリ仕事し、学問し、研究することになる。可愛い、美人の女性と結婚するといつも一緒にいたいと思う。外に出ない。仕事もしない。本も読まない。だからもう進歩がなくなる。

今を去ること20年前、僕もそんなことがあった。毎日毎日ベタベタしてた。朝から晩まで抱き合ってた。今考えると本当にアホだった。何もものを考えてなかっただし（赤坂注・でも20年前だと36歳でしょ？ いいトシして何やってるんだとしか思えないんですけどお。朝から晩まで抱き合うのは勝手だけどお金とかどうなってたんですか？）。

田中義三さん（「よど号」ハイジャッカーの元赤軍派の一人。「先週の主張」にも登場）の裁判支援で5回、タイに行ったけど、現地の新聞社の人が面白いことを

いってた。記者にしろ商社マンにしろタイに来るとタイの女性のとりこになる。こんな可愛い女はいない。日本女性にはない素直さ、可憐さがある。ずっと一緒にいたいと思う。それで結婚しちゃうケースが多い。

遊び人ならば金だけで遊んでいればいいんだが、記者連中にはなんせく正義感>がある。社会の悪を摘発し、世の中を変えようと思って記者になっている。だから女を金で買うなんてできない。良心が許さない。どっかの議長のように少女を買うなんて絶対に許せないと思う（それはデマらしいが）。だからキチンと結婚しなくてはと思う。

そして初めのうちはいい。「でもね、キレイ、カワイイはせいぜい1年で終わりですよ。あとは親類がドッと入ってきて、金だ、生活だ、家を買え…となる。そして何かあると小さなことでケンカが絶えない。だいたい、言葉を何年も交わし合い、共通の価値観を持ったうえで結婚したんではない。」おっ可愛い、一緒にいたい”これだけだ。それでほとんどが失敗しています」。

そういうものかな。「結婚とは長い対話である」とニーチェがいってた。可愛いだけではく対話>も成り立たないのだろう。

だから、表面的なキレイ、カワイイだけでなくちゃんと対話して内面の美しさを発見してから結婚しなくちゃいけないんだ。

ということを格闘家の前田日明（あきら）さんと話し合ったんだ。前田さんは「いや、爆乳であれば何でもいい。顔なんかなくてもいい」といってたが（赤坂注・今度紹介してください！ 赤坂の爆乳は風見愛と神風真理のお墨付きです）。

なんで正月早々、結婚の話になったかというと、前田さんに会ったときに「（安生洋二に殴られた）ケガは大丈夫ですか？」と聞いたら、「そんなことより鈴木さん、結婚するんだって？」といきなりいわれてしまった。

「エッそんなことないですよ。誰がそんな噂流してるんですか。困るなー」といったら「鈴木さんが自分でSPA！に書いてましたよ」。

あっ、そうかあのことかと思い出した。エロ漫画家の玄田生（げんだ・しょう）の結婚式に出たときにく流れ>の中でつい書いちゃったんだ（週刊SPA！ 99年12月29日2000年1月5日合併号）。まあ2000年代にはするかもしれないな、と結婚の話になったんだ（赤坂注・さっさと結婚して「赤坂愛人説」を否定してください。1月6日のロフトプラスワンでも平野悠店長やら木村三浩一水会会長やらにさんざんいわれたんだから！ 私のキャリアに傷がつきます。もうついてるか）。

本当の愛国心とは

さらには西尾幹二さんの『国民の歴史』（扶桑社）の話になった。

前田さんは自らが編集する雑誌『武道通信』（八ノ巻）でこの『国民の歴史』を取り上げている。

「襟を正して読むべき民族の悲しみ憤りの偽らざる心痛の本である」と評価する。しかし、「アジアを切り捨て、欧米に謝罪する先には孤立した日本がある」と批判している。これは鋭い読み方だと思った。。また、こうもいっている。

「西尾さんの中国觀はいまの共産党支配下の中国への反感を古代・中世の中国に

投影しているだけだと思う」。

「『国民の歴史』はかつての渡来人であり、多く文化を共感してきた一番親しい隣人を愚かな民族という扱いをしている。自分が在日であるからこそ、特にそう思うといわれそうだが」。

この部分を読んで感動した。まさに前田さんのいうとおりだ。何も「在日だから」ではない。客観的に見たら、心ある日本人はみんな前田さんと同じに思っている。

会ったときにそういいたら「本当ですか」といっていた。本当ですよ。中国人や朝鮮人は愚かな隣人だといって切り捨てるの本當の愛國心ではないし、ナショナリズムではない。それは排外主義でしかない。

「日本はすばらしい。現在も過去も正しかった。間違いは何もない」という完全無謬（むびゅう）の＜愛國派＞ともうひとつは「このままの日本ではだめだ。過去の過ちは反省してすばらしい日本を作らなくては」という＜憂国派＞…。この2つの対決にこれからはなるでしょう、と前田さんにいった。「左右激突」ではなく「右右激突」になる。

「ところでケガは大丈夫ですか？」と聞いたら、「それよりも右右激突ですが…」とすぐ思想的な話になる。まあケガはいいんだろう。

1月6日付けの朝日新聞（朝刊）を見たら「前田日明さんを殴った男、罰金（千葉・市川簡易裁判所）」という記事が小さく出ていた。前田さんを殴ったプロレスラーの安住洋二に対し、市川簡裁は「罰金20万円の略式命令」を出した。「一発20万円」というわけだ。しかし、前田さんもこんなことで納得はしないだろう。安住とリング上で決着をつけるのか。路上で勝負するのか。

隣人としてアジアを敬おう！

ところで、初めに＜絶対量＞について書き出しが、何をいおうとしたんだろう。次から次へと話が拡散し、分からなくなってしまった（赤坂注・自分でわからぬくしといてそれはないでしょー）。

「君が代」を歌う絶対量の話かな。それなら前に書いたぞ。「それ100回くらい聞いた！ また同じこと書いて！ ボケ老人！」と赤坂にまた殴られるところだった。危ない、危ない（赤坂注・シャレをマジでとる人がいるんだからー。今年は心を入れ替えてくださいよう）。

ゴホゴホ、苦しい。あっそうだ。カゼの話だった。年末からずーっとカゼの引きっぱなし。実家の仙台に帰ってもずっと寝込んでいた。まったくダラシのない話だ。1月6日に東京に戻ってきたが、まだ変だ。本調子じゃない。

しかし、正月から1週間もカゼをひいてた。ということは、2000年の1年分の＜絶対量＞をひいたことになる。そう思うと安心した。今年はこれでもう大丈夫だろう。というわけでカゼの絶対量の話をしたかっただけなんだ（赤坂注・妄想もここまで来ると脱帽です）。

さて、話を日本の歴史に戻す。

内藤湖南（1866～1934年）という東洋史学者がいた。秋田県生まれだ。同郷と

いうこともあって僕は好きな学者だ。本名は虎次郎。これも僕と同じだ。違ったかな。じゃ一吉田松陰と同じだ（赤坂注・また生まれ変わり説ですか。それに吉田松陰は「寅次郎」ですよ）。大阪朝日新聞の記者から京大教授となった人で主著に『近世文学史論』『支那文学史』などがある。

湖南は中国を愛し、その学問を愛していた。孔子、老子、莊子を生み、大文学を生んだ中国を愛していた。そして湖南はさらにこんな思い切ったことをいう。

「日本は中国の一省になるくらいの覚悟がなくてはならない！」

凄い。凄すぎる言葉だ。でも湖南の一連の文章の中でそういわれると納得する。それだけ中国の学問、文学はすばらしいし、謙虚に学ぶべきだ、といってるんだ。そのとおりだと思う。

ただし、今「中国の一省に」という言葉だけ切り取られて紹介されると、「自虐的だ！」「反日だ！」といわれるだけだ。でも湖南のような人がいたことは我が国の誇りだ。また、きちんとした学問は紹介されずに「スローガン」だけが飛び交うようになっては嫌だと思う。日本にも文化大革命がくるような気がして不安だ。

と、暗い話が続いた中で（赤坂注・えっ暗かったんですか）、明るいニュースを紹介しよう。

辛淑玉さんと僕の対論『こんな日本 大嫌い！』（青谷舎）がけっこう話題になっている。発行部数は少なかったが、ジワジワと売れ行きを伸ばしている。そしてなんと、韓国で翻訳されて出版されることになった！

青谷舎からその話を聞いたときには信じられなかった。しかし、韓国の出版社の手紙を見せてもらい、やっと本気にした。半年後には韓国で出版される。どんな反響が来るか楽しみだ。

しかし、翻訳されて外国に紹介されるなんて初めてだ。対論してくれた辛さんがよかったです。やはり「シン・レッド・ライン」の力だと感謝している（赤坂注・『こんな日本～』あとがき参照）。

今年はまた、何冊か出す予定だ。『がんばれ！ 新左翼Part3 望郷篇』『右翼用語の新訳事典』『僕の改憲論』は春までには出るだろう。それと、北朝鮮について真面目な本を出そうと、今準備している。

詳しくは来週にでも…

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張 1 / 17

2000年の仕事は2つの対談から

1月7日（金）。仕事始め。といっても会社に行ったわけじゃない。原稿とか学校とか対談…とかの仕事だよ。あっ6日にHPの原稿を書いたか。でもこれは仕事じゃないな。趣味というか道楽というか。だからやっぱり7日が仕事始めだ。

見沢知廉氏と初対談！

今年の初仕事は月刊『スコラ』の対談で、お相手はあの作家・見沢知廉氏だ（赤坂注・ご存じとは思いますが、見沢知廉氏は著書「天皇ごっこ」で新日本文学賞佳作受賞。一水会相談役も務めておられます。忘れられないのは平野悠ロフト店長の「相談って…。アイツに何を？」の一言）。

「お相手」なんていい方は変かな。実は見沢氏が『スコラ』で連載対談をやっているのだ。僕の前は元刑務所の看守で、その前は塩見孝也氏（元赤軍派議長）だった。

「凄いねー。大雑誌で対談の連載をもっているなんて」といったら「でも月刊だから…。鈴木さんは週刊誌の連載だからそっちの方が凄いですよ」と見沢氏。「うかー。じゃ一問題は簡単だ。『スコラ』を週刊にしてもらえばいいじゃないか」と僕は革命的な提案をした。

「何を馬鹿なことを」と見沢氏は呆れていたが『スコラ』の編集部は「それはいいですね」といってくれた。だからそのうち『スコラ』は週刊誌になるだろう。週刊の対談になったら大変だ。エッセーの連載とは違う。やたらと時間を取りられる。そうなったら小説なんか書いていられない。

「万が一そんなことになったら大変ですよ。自分で自分の首をしめることになりますよ」と見沢氏はいっていた。「うん、昔は他人の首をしめていたけどね」とまぜ返したら編集者とカメラマンには受けた。当の見沢氏はムッとしてたから、きっとカットされるだろう。

実は、何を隠そう、今だからいうが、驚いたことに、信じられないだろうが、見沢氏と僕は「初めての対談」なのだ。「エッ」と思うかもしれないが本当だ（赤坂注・前置きが長い割にはつまんないですね。身内なんてそんなもんでしょう）。

といっても初対面じゃないよ。もう16、7年前から知っている。でも一水会に来てすぐに「例の事件」で彼は刑務所に行き、12年入っていた（赤坂注・「例の事件」については扶桑社刊『夕刻のコペルニクス』63頁あたり参照。この本は昔の邦男さんが太っているのも笑えます）。出てきたら作家になっていたから一緒に運動したのは2年くらいのものだろう。

「あの頃は鈴木さんは過激でしたよ。非合法闘争を指揮してたし。『お前らは革

命マシーンになれ』と毎日いってましたよ」という。

そうだけ。忘れてしまった（赤坂注・いつも思うけど、ご自分に都合の悪いことはキレイにお忘れですよね。いいんですかそんな人生で）。

ともかく対談では一水会の活動、「例の事件」、その反省、これからの運動について話し合った。よく会っているのに雑誌の企画でこうして2人でじっくり話し合ったなんてまったく初めてだったので、新鮮だった。

さて、できあがりはどうだろう。2月上旬には店頭に出てると思うので、読んでやってください。

そうだ、対談をやった場所は新宿南口のホテル・サンルートだった。入った途端、「あっ昔ここで故・景山民夫さん（作家）と対談したな」と思い出した。

小説の話（赤坂注・景山さんは『遠い海から帰宅』、違った『遠い海から来たCoo』で直木賞ですよね。あー自分で寒い）、彼が信仰していた「幸福の科学」の話（同・大川隆法さんがジャンボ鶴田さんに似てるとかでしょ）、そしてプロレス、格闘技の話などを聞いた。本当に楽しかった。この対談は『闘うことの意味』『宗教なんてこわくない』（共にエスエル出版会・電話0798-46-6823）に入っている。

眞面目に北朝鮮について考える

1月8日（土）は八王子で井上周八先生と北朝鮮問題について対談した。井上先生は立教大学名誉教授で「チュチェ思想国際研究所」理事長だ。チュチェ思想とは北朝鮮を支えている「人間中心の社会主义」で、日本語では「主体思想」と訳される。井上先生はその「主体思想」についての世界的権威であり、北朝鮮の切手にもなっている。外国人が切手になるなんてほとんど例がないという。

井上先生は1925年山形県生まれで、今年75歳だ。でもそうは見えない。元気だ。矍鑠（かくしゃく）としているし、北朝鮮はいかにすばらしいかについて熱弁をふるう。年末に1回、この日に1回、計8時間ほどお話をうかがった。対談ではなく一方的にお話をうけたまわった感じだ。

「チュチェ思想」の本はこのために随分と読んだ。思想としてはすばらしい。

しかし、北朝鮮がそれを実現しているかどうかは疑問だと思った。また、どんなにすばらしい思想でも上から押し付けるのはどうかと思った。そんなことも含めて「国家に思想は必要なのか」「未来社会はどうなる」「堕落する自由は必要ないのか」…などを質問した。政治の話というよりは神学論争のようになった（赤坂注・チョーシにのってヘンなこと聞いたりしてないかと不安です）。

井上先生は子供の頃から苦労し、苦学して大学まで行き、特攻隊で出撃の寸前に終戦を迎えた。何もかも信じられなくなり、「何故、日本は負けたんだ」「何故、こんな国になったんだ」と考えるうちに経済学を勉強しなくてはと思い、勉強するうちにマルクス主義に魅了される。そして、中国、北朝鮮に目を向ける。北朝鮮に対しても初めは批判的だったが、訪朝してガラリと考えが変わった。それで今は北朝鮮ほどすばらしい国はない信じている。宗教家のようにだし、宣教師のようだっ

た。日本も北朝鮮のようになるべきだという。ここまで信じ切っている先生の話はむしろ心地よかったです。

井上先生は「周八」という名前からも分かるように8番目のお子さんだ。下にもう一人いるから9人兄弟だという。いや女の子もいるから「9人兄弟姉妹」だという（赤坂苦笑・そういうのって「きょうだい」で両性をカバーするんじゃないんですか。いちいち「僕はくにんきょうだいしまいです」っていわないんじゃ？）。

「生長の家」の先輩で伊藤八郎さんという人がいた。この人も8番目なんだろう。今は「生長の家」本部に勤めている（赤坂注・新年早々「突然実名」ですね）。

井上先生について好奇心で「数字のついた名前は先生だけですか」と聞いた。世界的な大学者に失礼なことを聞いた。『そうです、一番上の名前は…、二番目は…、』と教えて下さった。何か安心した。上から順に周一、周二、周三、周四…という名前かと思ったからだ（赤坂注・画家の木村莊八さんのところはそうですね。別にいいと思うけど。やっぱ一度はヘンなこと聞くんですね）。

井上先生の本は『解説・チュチエ思想』『人民民衆中心の社会主義』（共にチュチエ思想国際研究所）をはじめ、何冊か読んだ。また、北朝鮮理解のために毎日新聞論説委員・重村智計さんの『北朝鮮・データブック』（講談社現代新書）、『北朝鮮崩壊せず』『朝鮮病と韓国病』（共に光文社）を読んだ。これは勉強になった。さらには1997年に北朝鮮から亡命した黄長（ファン・ジャンヨブ。元朝鮮労働党中央委員会書記。日本語ペラペラ）の『金正日への宣戦布告』（文芸春秋刊・訳は元赤旗記者の萩原遼さん）と『北朝鮮の真実と虚偽』（光文社刊）を読んだ。

『金正日への～』はタイトルが挑戦的だが中味は真面目なものだった。むしろ金正日が（日本での評判とは反対に）いかに政治的能力があり、優れているかが書かれていた。また、この黄さんが「チュチエ思想」をつくった人だと新聞では紹介されていたが、井上先生は「そんなことはありません。チュチエ思想は金日成さんが自ら一字一字書いてつくったのです。黄さんはその研究者の一人です」といっていた。同じ研究者として黄さんと井上先生は仲がよかった。黄さんの本にはこう書かれている。

「私は主体思想関係では関寛治教授と鎌倉孝夫教授と親しくつきあったが、兄弟のようにわだかまりなくつきあえたのは井上周八教授だった。（中略）私はもし日本で亡命が可能になれば、彼にだけはすべてを語るつもりだった。しかし彼は人間が正直すぎた。また酒に酔うと自分も分からぬうちにどんなことでもしゃべってしまうため、信頼し愛してはいたが本心を明かすことができなかった」（赤坂注・まあ酔ってなくともしゃべっちゃう人もいますしね。あっ邦男さんじゃないですよ。私ですよ）。

井上先生の人間性がよく表れているではないか。このことについては井上先生からさらに詳しい話、驚くべき新事実などを聞いた。それは本になってからのお楽しみだ。黄さんのもう一冊の本『北朝鮮の真実と虚偽』だが、この中にエッと思うところがあった。この箇所だ。

「…さらに、革命伝統について騒ぎ立てながら、わが民族を『金日成民族』と呼び、金日成の誕生日を契機に『チュチエ（主体）年号』を使うというような傲慢無

礼な行いを敢行したことは、わが民族に対する犯罪的な冒瀧であり……」。いくらなんでも「金日成民族」なんて、そんな国民を私物化したいい方はしないだろうと思った。しかし、井上先生に聞いたら、「確かにそういってます。それだけ人民は金日成さんことを尊敬し、慕っているのです。すばらしいことです」といった。

もうひとつの「チュチエ年号」だが、この本には（注）が入っている。

「チュチエ（主体）年号=金正日は金日成の三周忌の1997年7月、金日成の生まれた1912年を元年とする主体年号を制定し、金日成の誕生日（4月15日）とすることに決めた」。わかりやすい。赤坂も見習いなさい。

これも本当ですか、と聞いたら井上先生は「本当です。人民は皆、このチュチエ年号を喜んで使ってています。ただ全面的に浸透しているとはまだいえません」という。

そういえば、北朝鮮にいる「よど号」グループの人から年賀状をもらったが、西暦だけで「チュチエ年号」は書いていなかった。また、塩見孝也さんの「自主日本の会」の年賀状も西暦だけだった。じゃー、来年からおいらだけでも使ってやるか（赤坂注・その前に年賀状書いたことありましたっけ？「500枚ももらってるのに返事なんか出せるかバカヤロー」ってお聞きしたことがあります。あっ、ひょっとして赤坂にはくれてないだけ？）。

しかし、凄いよね。西暦、仏暦、皇紀…いろいろあるが、新たに「チュチエ年号」をつくってしまう。「金日成様の誕生日が元年だ」なんて日本の天皇制のようだと思った。今年はチュチエ年号で88年か。

昔の日本では天皇陛下の誕生日は「天長節」（てんちょうせつ）、皇后陛下の誕生日は「地久節」（ちきゅうせつ）といった。北朝鮮では主席様の誕生日が「太陽節」だ。似ている。日本の天皇制に学んでいるのかもしれないと思ったが、井上先生は「全く違います。本質が違います」と否定した。

しかし、北朝鮮は中国やソ連と違い、日本の天皇制を批判したことは一度もないという。これには驚いた。「天皇制を批判すると自分に向かってくるからじゃないのか。自分で自分の首をしめるからじゃないのか」と思ったが、「いや、違います。内政干渉になるから天皇制批判をしないだけです。それ以外の理由はありません」という。

ということで面白い、スリリングな本ができると思うよ。少なくとも今の腐敗した日本に活を入れるような本になると思う。

お楽しみに。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張 1/24

僕の読書論と手帳

赤坂さんが当HPをしばらくお休みすることになりました。間近に迫った〇〇〇〇の試験勉強に専念する為です。このHPは赤坂さんが発案し、赤坂さんが作り、赤坂さんが管理してきました。本当におせわになりました。試験に見事に合格し、又、帰ってきてもらいたいと思います。残った人間たちだけでこのHPが今まで通り行くのかどうか不安ですが、スタッフ一同頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

では本文に入ります。1月12日(水)、重村智計さん(毎日新聞論説委員)と対談しました。テレビではよく拝見してたので初めての感じがしませんでした。北朝鮮問題では一番バランス感覚のある発言をしてる人だと思います。でも、そういう人は親「北朝鮮」の人々からも、反「北朝鮮」の人々からも批判されているんですね。

「右か左か、どちらかに寄れ!」というのが日本の言論界なんですよ。困ったことです。

この時、内藤湖南の話をしたんですよ。先週この「主張」でも書いたんでおぼえている人も多いでしょう。湖南は中国を愛し尊敬し、だからこそ、「日本は中国の一省になるくらいの覚悟が必要だ」と言ったんですね。でも、今こんなことを言つたら大変ですね。その言葉だけをとらえて、「反日だ!」「自虐的だ!」「売国奴!」と言われるでしょうね。

そう言つたら重村さんが、「それは日本人が自信を失ったからですよ」と言ってました。それが特に印象に残りましたね。自分に自信がないから外国に対して謙虚になれない。批判ばかりする。「誇りを持て!」と、そればかり言う。なるほど、と思ったんですよ。

ところで、1月はスケジュールが確認できなくて、予定はよく間違うし、大変だった。だって、手帳がなかったんだ。僕は日本法令の「HANDY MEMORY」を使っている。何千とある手帳の中で、これが一番使いやすいし、便利だと思う。嘘だと思ったら使ってみたらいい。僕は過去20年間、ずっとこれを使っている。しかし、置いてある店が少ない。これが唯一の欠点だ。毎年、年末の11月12月はこの手帳を探す為だけに使っている。一昨年は東中野の小さな文房具屋に一冊だけあった。その前は一水会事務局の向いの文房具屋に二冊だけあった。だから、あわてて二冊買っちゃった。「2000年版」は三ヶ月探してたが見つからない。どこの本屋、文房具屋に行っても「能率手帳」ばっかりだ。こんなのは全く使いにくいのに。

1月になって焦った。そうだ、赤坂さんは〇〇〇〇を目指している。聞いたら、「あっ日本法令ね。うちの学校の傍よ。買ってきてあげるわ」と言う。いぬい・ふといちも、「うちの職場の近くで売ってますよ。買ってきてやりますよ」と言う。ホッとしてたら、それっ切りだ。二人とも口だけなんだ。完全に忘れている。万事休す。しかたがない。手帳がなけりや、予定を立てられないし、「読書記録」もつ

けられない。それで行きましたよ。住所をたよりに探しに探して日本法令に。もし
かしたら今年は出してないのかと思ったが、ありましたよ。なつかしい恋人に会つ
たように、ジワーッと涙がでましたよ。うーん、やっぱりいい。厚さも、大きさ
も、住所録も、附録の地図や年齢早見表・・なども。やっぱり、この手帳でなくて
はダメだ。

過去20年間の手帳も机の中から取り出してみた。皆、なつかしい。ただ、警察の
シールの貼ったのが何冊かある。かわいそうに、ガサ入れ(家宅捜索)の時に、持つ
ていかれたものだ。あとで帰ってきたけど、シールが貼られている。しかし、警察
もバカだね。こんな手帳に非合法活動の記録を残していると思ったのだろうか。

「1月10日、アメリカ大使館に火炎瓶なげる。命中」とか、「〇〇新聞社に時限爆
弾をしかける。うまいこと爆発」とか、「スパイを摘発し。抹殺」・・なんて書い
てると思ったんだろうか。そんなことは全く書いてない。原稿の〆切とか、対談の
日時、場所。それに(これが一番重要なんだが)毎月、何の本を何冊読んだかを書い
ている。それがないと、「月のノルマ」が達成できたかどうかが分からない。つまり、
「読書ノルマ」の為にこの手帳は必要なんだ。

ちなみに、99年の読んだ数を書いてみる。

1月、40冊。2月、41冊。3月、50冊。4月、40冊。5月、36冊。6月、43冊。
7月、37冊。8月、36冊。9月、37冊。10月、32冊。11月、35冊。12月、34冊
・・だ。「月30冊のノルマ」は無事達成している。年間合計で461冊。それを12で
割ると、「月平均38冊」になる。何の本を読んだかの内訳も書いてるが、それは省
略しよう。実を言うと、忙しい月は10冊か20冊しか読めない月もある(99年はな
かったが)。その時は、他の月で頑張って、「平均」で30冊を突破するようにするん
ですよ。

もう一つ、実を言うと・・。本当は99年だって30冊突破できない月もあった。
たとえば31日になってもまだ20冊しか読んでないとか。そんな月は、月を越さな
い。ずっと31日のままにする。5日とか10日すぎて、やっと30冊のノルマを達成し
たら、はじめて次の月になる。だから次の月は20日しかないとか、大変なんだ。これ
は今度「読書論」を書いたら詳しく書いてみよう。「読書論」も昔はよく出して
たのに、最近はどこも出してくれない。淋しい。特に、『超読書術』(かんき出版)
は好きな本なのに、絶版で、僕も持っていない。いい本だと思うのにな。神風真理
ちゃんは、『行動派のための読書術』(長崎出版)がよかったというけど、僕はこの
『超読書術』の方が愛着がある。「5冊選ぶとすればどれがいいか」ってのが前に
「掲示板」でやってたよね。遅ればせながら、自分で選んでみると・・。

1. 「現代攘夷の思想」(暁書房)
2. 「時代の幽閉者たちに」(島津書房)
3. 「天皇制の論じ方」(株式会社IPC)
4. 「超読書術」(かんき出版)
5. 「戦後民主主義を考える」(京都産業大学志学会)

あれつ、こうしてみると上位5冊は全部絶版になったままじゃないか。もうないと
思うからこそ、愛着があるのか。どっかで復刊してくれないかな。でも、古いから

ダメかな。

それから、「掲示板」で、「どこで読むか」って話で一時、盛り上がってたよね。これも遅ればせながら、参加しましょう。僕は圧倒的に喫茶店ですよ。それも「ルノワール」ですよ。日本中のルノワールはほとんど入った(とは言えないが)、東京のルノワールはほとんど入った。だから皆に「ルノワーラー」とか、「ルノワリスト」と呼ばれている(エッ、よばれていないって。じゃ呼べよ!)。

昔は、「人と待ち合わせる時に30分前にやって本を読む」なんてセコイことを考えて実行していた。どっかの「読書論」に書いてるよ。忘れたから誰か教えてよ。でも、僕の会う人はほとんど本好きの人だ(本の嫌いな人とは友達にならない)。敵もさる者、そっちも30分前に来て本を読もうとする。それじゃ、30分早くいっても仕方がない。だから今は、ルノワールで、「時間」か「頁」のノルマを決めて入る。たとえば「2時間読もう」とか、「200頁読もう。それまでは何時間かかっても出ないぞ」とか。時間のある時は、3時間づつ高田馬場のルノワールを3軒、4軒とハシゴする。10時間以上も読書できる。馬場にはルノワールが6店もあるからこれが出来る。そうだ、「1日6店」に今度は挑戦してみよう。朝の9時から夜の11時まで14時間か。6店だから1店で2時間15分づつ居て読書すればいいんだな。うん、これを達成したらこの「主張」で報告しますよ。

しかし、こんな「挑戦」や「ノルマ」はたとえ達成したって誰もほめてくれるわけじゃないし。なんか、空しい努力のような気もするな。まアこれも勉強ですよ。それと、本を読むのも「仕事」のうちですよね。まア、趣味でもあり、仕事でもあり、勉強でもあります。というとこですか。

喫茶店以外では、「乗り物」ですね。読めるのは。「他にやることがない」という状況におかれた時が一番読めるんですよ。電車、新幹線、飛行機・・なんかですね。でも最近は電車では携帯電話がうるさくってね。まいりますよ。あんなのは法律で禁止すればいいんだ。喋ってる奴は即、逮捕して銃殺したらいい。この美しく静かな日本を守るためにには強権もやむをえない。と、思う今日今頃ですよ。昔は、電車の中も静かだったのになー。喫茶店だって、「読書喫茶」っていって、喋っちゃいけない喫茶店もあった。名曲喫茶だって、ベートーベンやシューベルトを聴きながら、めい想にふけるか、本を読むかだけだった。下らない話をしたり、携帯なんてかける奴はいなかった。あーあ、人間はどんどん阿呆になってゆく。みんな、本を読めよー。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張1/31

英語版「君が代」があってもいいじゃないか

三島由紀夫・森田必勝両氏の自決から今年でちょうど30年になる。昭和45年11月25日の事だった。でも、「昭和45年」といわれると、あれから何年たったか、ピンとこない。いや、すぐに計算できない。でも、「1970年」というと、今年は2000年だから、もう30年たったのかと分かる。西暦の方が、「あれから何年・・」と数える時は便利だ。

それで、今年はいろんな催しがあるし、雑誌は特集号が出るだろう。単行本もかなり出る。「もう30年たったんだし・・」「30年目の今を逃したらもう発表の時期はない」と思ってるようだ。ぼくも、昔の仲間たちを訪ね歩いて、もう一度あの事件を考えている。それは来週から「SPA!」に書いてゆく。思いがけない事実、今まで発表できなかったこと・・なども発見された。又、自分では大したことではないと忘れてしまったことなども案外重要なものだったと知られ、思い出している。

数日前、茨城県の土浦にいってきた。元「楯の会」一期生の持丸博氏に会って話を聞くためだ。かれは、三島さんに任されて「楯の会」の人選を全てやった人間だ。いわば、彼が「楯の会」の実質を作った。彼は初代の学生長だった。彼がやめた後、森田必勝が学生長になり、あの決起・自決になる。「持丸氏がやめなければ、あの事件もなかった」と僕は思っている。これ以上書くと、SPA!の領分に入ってしまう。予告編だけでとどめよう。

久しぶりに持丸氏に会った。「いやー何年ぶりかなー」と僕が言ったら、持丸氏、開口一番。「スライド式本棚、使ってるんだって?」。いやー、笑ってしまった。「楯の会」の話を聞きに来たのに、スライド式本棚から話が始まった。「うちでとってんだよ。『通販生活』」と言っていた。元「楯の会」の他の人にも言われたな。すごいな、「通販生活」は。何せ100万部以上出てるという。HPの「掲示板」でも誰かが書いてたよね。「通販生活」(春の特大号・2000年2月号)に載ってんですよ。僕が。それにしても、スライド式本棚は使いやすいですよ。整理はできるし、便利だし、見た目もいいし。一日に何十回もチャカチャカとスライドさせてますよ。

そうだ、いろんな人がいろんなものを使ってるんだね。小田実はヤコフォーム靴を15年前から履いているというし。表紙にも出ていて、靴を履きながら、こんなことを言っている。「ヤコフォームは買いつづけたいし、第九条は守りつづけたいというのが、私の意見である」。うっ、すごい。護憲論とからめて言っている。この靴は欲しいなと思ったけど、履いちゃうと「護憲論者」になっちゃうのかな。

ともかく、この雑誌には商品紹介だけじゃなくて、「思想」と「主張」がある。そこがいい。この号だって、「憲法第九条と向き合おう」という特集をやっているし。これは勉強になるし、参考になる。又、以前「世界の国歌」という凄い特集も

やっていた。このHPで僕も、これを基にして、4、5回書いた。そして、この本は、去年の暮れには又もや、アッと驚く「問題提起」をしていた。

その前に、「レコンキスタ」の話をしよう。おなじみ、一水会の機関紙だ。僕は「クーニン報知」という、日記風の連載を書いていた。ところで、2000年の一月から、僕は一水会代表をやめ、木村三浩氏が新代表になった。新体制で皆、はりきっている。レコンも2月から8ページにし、内容もさらに充実したものにするという。僕も役目が終わったと思って、ホッとしていた。ところが、「連載は続けてくれ」という。エッ、まだやるのかよと思った。じゃ、「続クーニン報知」にしようかな、「クーニン報知・激闘編」にしようかなと考えていた。そしたら、新たに「文化欄を設けるから、そこに大作家の見沢知廉氏と共に連載しろ」という。大変だ。プレッシャーだ。見沢氏は「一水会相談役」になって帰ってきたのだ。「一水会顧問」の僕よりも偉い。

それで何を書くか悩んでた。書評、映画評もいいが、よし、いっそ<日本文化論>にしようかと無謀なことを考えてた。そして、本屋で暮に『通販生活』(99年12月号)を見付け、「これだ!」と思ったんですよ。特集が何と、「もう我慢できない。語尾上げしゃべり方」。こんな憂国の問題提起をするのは「通販生活」だけだ。それで、レコンの新連載の第一回目(2月号)には、このことを書いた。もうすぐ出るから見て下さい。語尾上げ喋り方は「日本文化」の危機だ。三島由紀夫の「文化防衛論」からいっても、まず、こんな喋り方をする奴から撲滅しなくてはならない。

おっと、ここで気がついたら、半分以上が「通販生活」のネタになっちゃった。「世界の国歌の時でもそうだけど、『通販生活』だけでこの『主張』を書こうとしてんのね。安易よね。少しは自分のポリシーを出しなさいよ」と(今はなき)赤坂嬢に言われそうだな。試験勉強で忙しいのだろうが、でも「今はない」にもかかわらず、時々掲示板にかいてるよな。なになに。「ルノワールじゃねえ、ルノアールだろうが、バカ。毎日ルノアールに入ってて、そんなことも分からんのかよ。アルツハイマー邦男め。ペッ」。あらあら、ひどい書き込みだ。でも、あまりに当たり前というか普通になってると、忘れることがあってあるのよ。いつも会ってる友人の名前を忘れたり、家でも、台所にいって、「あれ? 何で台所に来たんだろう」と思ったり。ルノアールだったかルノワールだったか、そんな不確実な原稿でも赤坂さんはちゃんと直してくれたり、突っ込みを入れてくれたりしたんだ。あっ、あの優しくて有能な赤坂さんが恋しい。いなくなつてから、今いち、原稿に力が入らない。(赤坂注)がないと、文章をかいてる気がしない。自分の文体というか身体の一部になつてしまっていたんだ。それがなくなって、ポッカリと心にも文章にも穴があいたようですよ。試験に見事合格して、早く帰ってきて下しゃい。

それで、大相撲の話ですね。あっ、いけない。「それで」というと、何か赤坂嬢とお相撲が関係あるように思われる。そんなことはない。だから取り消す。「それで」じゃなく、「話は変わって」だ。相撲が終わって淋しいね、と言いたいだけなんだけど。曙はかわいそうだよね。途中までは、「単独トップ」で、今度こそ優勝か、と思われたのに、いつも、いつも、優勝できない。もう先がないんだから優勝させてやれよ。でも、「やれよ」って誰かに向かって言ってんのかな、この人

は。と、自分で自分に文句をいってるよ。赤坂が体の中に入って、渾然一体となつたのかな。

「週刊ポスト」なんか、よく、「大相撲は八百長ばかりだ」と内部告発してるけど、だったら曙を優勝させてやれよ。かわいそうに。そうだ。曙の優勝がないことだけでも「八百長はない」と言えるんじゃないかな。

でも、曙はちゃんと「君が代」を歌えんのかな。武蔵丸は、「歌って下さいよ」とNHKのアナウンサーにいわれていた。歌わなくてもいいじゃないかと僕は思うんだけどね。今場所優勝した武双山はちゃんと口をあけて大声で歌ってたね。NHKを気にしてたんだ。では、曙はどうなんだ。「いい所までいっても、どうせ他の連中に優勝をさらわれるんだ。君が代だって歌う機会はないよ。チクショ一、誰が練習なんかするもんか。バカヤロー」と思ってるんだろうか。だったらなおさらかわいそうだ。

もし、これから優勝することがあったら、「君が代」のメロディで、アメリカ国歌を歌ってやつたらいい。それで復讐するんだよ。(復讐って? 一体誰に? と、なき赤坂なら書くとこだろうな)。でも、それじゃ、「横綱の品位にかかる」とか言われるか。ならば、「君が代」を英訳して英語で歌うんだ。さあ、どうだ。これだったら誰も文句はいわんやろう。そして、復讐もできる。(だから誰に? ウルセー、赤坂!と二重人格になっちゃったよ)。

ここで、又もや疑問。元々、日本人は全員で歌をうたうことはなかった。と思うよ。じゃ、「合唱」や「齊唱」はいつ頃から始まつたのでせう。(そもそも、合唱と齊唱はどう違うのでせう。教えてくれよん、赤坂!)。昔から日本人はね、一人が代表して出て歌つた。和歌を詠む(本当は歌う)んでもそうだよ。全員で唱和なんかしない。とすると、合唱、齊唱は、明治維新以降だな。西欧列強のマネをしたんだよ。

「小学校唱歌」なんて、その典型じゃないか。

「いや、つい60年位前からですよ」と教えてくれたのは「月蝕歌劇団」の高取英さんだった。高取さんは、昔、寺山修司と一緒に芝居をやっていた人だ。「ナチス・ドイツの影響ですよ」と言う。ナチスでは皆で大声で歌う。そうか、軍歌か。そして小学校唱歌だ。どっちにしろ、日本の本来のうたい方じゃない。ヨーロッパのマネだ。でも、「日の丸・君が代」法案が通ると、やたらと「皆で歌え」といわれるかんじだ。大相撲の千秋楽も、「国歌齊唱」の時は、座ってる奴はいない。皆、たって歌ってるよ。そういう所だけNHKは映したのかな。いやいや、今まで立たなかつた奴も、急に立つようになったんだろう。「法案も通つたし、立たないと法律違反になるのかな、逮捕されんのかな」と思つたりして。あるいは、「こいつは座ってるぞ」とNHKに映し出されたら、あとで皆に石をぶつけられるかも・・と思ってるのか。

でも、いつもいうようだが、「君が代」は難しい歌だ。だから、プロの歌手にうたわせて、あとは皆で静かにきく。その方がいい。その方がずっと厳粛な感じがする。大相撲と関係ない歌手に歌ってもらっちゃ国技の沽券にかかるというなら、いるじゃないの大相撲出身の歌手が。増位山とか、天童よしみとか、いるいる。彼らに歌わせたらいい。

ということで、無事、結論が出たところで今回はオシマイ。(ドッコイショと背後
靈の赤坂を降ろす)。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張2/7

平成必殺読書術

「今、僕がまがりなりにも本を書いたりする仕事をしてられるのは、突きつめれば中央公論社の『世界の名著』(全66巻。続全15巻)を読破したおかげだと思っている。これを読み、これを基礎にして自分の考え方なり、人生観はつくられたような気がする」

エッと思った。おいおい、そんなに簡単に言い切っちゃっていいのかよ、と思った。「生長の家」の本もあるし、山本周五郎もあるし、北一輝、三島由紀夫もあるだろう。尊敬するドストエフスキーや、トルストイ、シェークスピアもあるだろう、と思う。ダメだよな、物事を単純化して言っちゃ。その時の思いつきだけで言ってんじゃないのか、この人は。「この人」と言ったけど、実は僕だ。1990年に出した『超読書術』(かんき出版)の中にあったのだ。「全集を読むことで<世界>が見えてくる」という章にあった。でも、『世界の名著』だけではないな。他にも思想全集は読んでいる。河出の『世界の大思想』(全45巻)、『世界思想教養全集』(全24巻)もあるし、講談社の『人類の知的遺産』(全80巻)、平凡社の『世界教養全集』(全38巻)もあった。とにかく、片っ端から皆読んだ。文学でもそうだった。自分が好きな本や、面白そうだと思った本だけを読んでいたら、考えの視野が拡がらない。新しい発見がない。あんなものを読んでも仕方ない、あいつは立場が違う、難しそうだ・・と敬遠してしまう。そして一生それらに触れる機会もない。

その点、「全集読み」は、その欠点、偏食をおぎなってくれる。新しい発見がある。又、全集を読破した後の征服感、満足感は、何とも言えない。だから今でも、面白そうな本があって、それが全集の一冊ならばその全集を必ず読むようにしている。これは最近、図書館から借りて読んだのだが、「ちくま文学の森」(全15巻)、「新ちくま文学の森」(全16巻)、「ちくま哲学の森」(全8巻。別巻1)を読んだ。しかし、図書館では必ず、一、二冊欠けている。借り出して何年たっても返さない奴や、盗んでいった奴がいるんだ。全く頭にくる。全16巻で15巻読んだのに、最後の一巻だけ無いというのは、本当にムカムカする。(乃木坂注・本以外でもありますねー。「盗撮ビデオ」シリーズの一巻とか。いきなり下ネタで失礼。とほほ)図書館の人に誰が借りたかを聞いて、そいつの家に押しかけて行こうと思った。しかし、「プライバシーですから」と名前や住所を教えてくれない。こんなやつは法律で処罰しろよ!「反読書罪」とか、「読書妨害罪」とか作って、期限まで返さない奴は即、逮捕・銃殺にすればいい。その位やればいいのにと、あたしゃ本当に思うだよ。

この欠けている巻を探して他の図書館を何館も回った。中野区内ならどこの図書館でも借りられるが、原宿図書館(生長の家本部のすぐ隣にあるよ)とか、調布図書館では、見つけても借りられない。「目には目を、歯には歯を」で、僕が盗み返したら、こっちが捕まってしまう。仕方がないので、八重洲ブックセンターとか、

ジュンク堂・・などの大きな本屋で探すことになる。

そして今年の正月、仙台駅前のジュンク堂で欠巻の3冊を見つけて、無事、保護した。あっ、行方不明の少女じゃないんだ。無事、買い戻した。これも変か。無事、買った。しかし、ジュンク堂って凄いね。「立ち読み自由」なんだから。仙台は通路にテーブルとイスがあって、新刊書を座って何時間読んでもいい。コーヒー代さえ払えば、飲みながら読める。読んだら棚に返せばいい。お菓子も売っている。菓子の粉がパラパラと本に落ちてしまうこともある。僕なんて毎日、6時間づついた。タダで新本をかなり読んだ。でも、買う段になると他人が読み散らかした本を買うのはなー、と思ってしまう。他の書店で、もっと清純な、よこれ知らぬ本を買おうと思っちゃう。しかし、ちくまのシリーズはここにしかなかったので買った。

そして、昨日(2月1日)、「ルノアール」高田馬場第6号店で『いのちのかたち』(「新。ちくま文学の森」6)を読んでいた。323ページまで読み進んだ時、アッと叫んでしまった。その声に驚いてウエイトレスさんが飛んできた。「追加注文ですか?」。仕方なく、センベイ付きのコブ茶を頼んじゃったよ。

ところで、何に驚いたかだ。クロード・アヴリーヌの『ヴァンセント・ファン・ゴッホ』を読んでいたのだ。その第一行目で、アッと叫んだんよ。「『太陽と死とは凝視できない』と、ラ・ロシュフコーは言っている」・・とあったのだ。そうか、ラ・ロシュフコーだったのか。実はこの言葉だけはずっと覚えていて、『武道通信』の<吉田松陰特集号>にも書いたのだ。だが、誰の言葉だか忘れた。まわりの人に聞いたが誰も知らない。仕方がないから、「・・と誰かが言っていた」と誤魔化した。真理っぺが、「ゾクッとする言葉ね。誰が言ったの?」ってしつこく聞くから、「カミュかカフカだろう」と適当に答えておいたが、ずっと気になっていた。ラ・ロシュフコーは「箴言集」で有名な文人(1613~80)と注に出ていた。

この「ゴッホ」論では、次の一行も凄いんだ。面倒だが、はじめからもう一度、書き写してみるね。「『太陽と死とは、凝視できない』と、ラ・ロシュフコーは言っている。だが、ファン・ゴッホは、このどちらをも凝視した」。どうです。ウーンと唸る文章でしょう。普通の人間は死も太陽も正視できないよね。でも、ゴッホは、じっと正視した。太陽を見つめ黄色い渦巻きの太陽をいくつも書いた。死だって見つめて耳を切ったり、自殺をはかったりした。そして死んだ。

思いつめて、死と太陽を凝視したゴッホ。一方、死から逃れ、タヒチにいって絵を描いた楽天的なゴーギャン。二人は全く違っていたのに初めは同居してたんだよね。ゴーギャンのことはサマーセット・モームが『月と六ペンス』で書いてているよ。そういえば、「俺はゴッホだ。お前はゴーギャンだ」と昔、野村秋介さんに言われたっけ。よく分からぬけど、ほめられたのかな。

では、話変わって『週刊宝石』(2月10日号)だ。「掲示板」に管理人のおじさん(乃木坂注・鈴木さんよりずっと年下なんですけど)が書いてくれたよね。「発表・識者13人が選んだ、2000年最大の珍発明」という記事だ。僕がインタビューされた時は「最大の発明」というタイトルだった。そのつもりで真面目に話した。ところがあとの人が、皆、下らないことばかり言うんで、タイトルも「最大の珍発明」になっちゃった。ひどいよな。

まア、「20世紀最大の発明は何か」というアンケートもあったけど、これは、「2000年間」ですよ。他の人はですね、「宇宙人」「テレクラ」(成田アキラ)、「コンドーム」(立川談志)、「ピアノ」「69」‥‥と言っている。ガツツ石松というアホは、「2000年間最大の発明」は「ガツツ石松」だと答えている。やっぱり、ただのアホだ。僕はですね、「思想」と答えたんですよ。宗教も含めての「思想」ですよ。この目に見えないものが何といっても最大の発明ですよ。この思想の為なら、「死んでもいい」「殺してもいい」と思いつめるんですからね。おそろしいですよ。ということを喋ったんですよ。思想運動をしてきた人間として、偉大でもあり、又、こわいものもあると思ってますよ。まア、詳しくは本誌を読んでくんないまし。といっても、もう週が替わって売ってないか。じゃ、管理人のじいや(乃木坂注・しつこいようですが鈴木さんよりずっと年下です)に言ってコピーを送ってもらってよ。

そのかわり、今週、買えるのを紹介するね。『週刊ポスト』の「テレビ時評」のコーナーに載ってるはずだ(ボツにならなければ)。1月31日、NHK教育テレビでやった「アイヒマン裁判と現代」について書いた。これは、考えさせられた番組だった。内容が深い。アイヒマン裁判は40年も前だが、何と全て映像に収められるんよ。全部で350時間。それを2時間に短縮して出来たのが、映画「スペシャリスト・自覚なき殺戮者」だ。2月5日からBOX東中野で上映だ。これはぜひ見た方がいい。

あと、2月3日発売の『ゴング格闘技』3月増刊号(「PLUS5」と銘打っている)は『PRIDE GP2000』の特集号だが、そこで高田延彦論を書いている。それと高田へのインタビューも。面白い話が聞けたので、興味のある人は読んでくれよん。

そうだ、突然、脈絡なく思い出したけど、昔、「この本にだまされるな」という特集があった。「宝島30」だったかな、「諸君」だったかな。それでオイラは三島由紀夫の「文化防衛論」をあげた。これは、本当は「天皇防衛論」だし、三島の最大の戦略本だ。しっかりと目を見ひらいて読まんといけんよ‥‥と。まア最大限に評価して書いたんだ。ところが読解力のないアホが、「だまされるな! とは何事だ」「三島先生を冒涜する鈴木は許さん」と噛みついてきた。もう、やってらんねえなと思ったね。河合塾の牧野剛先生にこのことを言ったら、「じゃ、いっそ『この本になら騙されたい!』という特集をしたらしいのに」と言っていた。いいねー。この本になら騙されたい。この監督の映画なら騙されたい。この女になら騙されたい‥‥と。

と、全くまとまりのない中で終わる。では来週。再見。アウフビーダーゼーエン(一応、大学ではドイツ語をとってたので)。

(追伸)あっ、発売中の「スコラ」に見沢知廉先生との対談が載ってるらしいよ。じいやが見たらしい。(乃木坂注・じいやでいいですよ。もう)

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張2/14

「二人のじいやに支えられてるよ」症候群

おいらは「バットマン」だなと思った。バットマンは正義と愛の為に命をかけて闘う。うん、おいらのようだ。それに、メカにやたらと詳しい「じいや」がついている。それで思いっ切り闘えるんだ。このHPの管理人の「じいや」も、年寄りだけど、ことメカにかけては詳しい。天才だ。最近、世の中を騒がせているハッカーも、彼だという噂だ。皆、言っているよ。(乃木坂注・鈴木さんってハッカーはやらないが、発火装置は作れるでしょ。うっ、これはシャレにならんか)

そうだ、「007」にも、メカに詳しい「じいや」が出てくる。日々、新兵器を開発している研究所の主任の「じいや」だ。空を飛ぶ自動車や、水に潜る自動車、それにボールペン型ピストル・・と、いろんな武器を作っている。それで危なくなつた007を救っている。最新作の「007」は映画の題名(タイトルって言うのかな)がやたら長い。「ワールド・イズ・ノット・イナフ」。何だ、こりや。これだけで見る気がしない。(本当は面白いんだけど)。気の効いた日本語にしろよ。昔のように、「007・危機一髪」「女王陛下の007」「007・ロシアより愛をこめて」・・なんかの方がいい。(乃木坂注・「007修善寺慕情」ってのはどうですかね)

ところで、「ワールド・イズ・ノット・イナフ」だ。直訳すると、「世界は十分ではない」。そうか、冷戦が終わったとはいえ、まだまだ流血の内乱はある、ナショナリズムの暴走もある、貧困も飢餓もある。こんな世界はダメだ。変えよう。革命しよう。赤軍派に入れ!自主日本だ!・・という映画かと思った。でも、チャウんですよ。右翼も左翼も信じない脱「イデオロギー」のニヒリストの悪党が出てくる。そして、パートナーのいい女が、ソフィー・マルソーだ。この女がジェームス・ボンドを誘惑するんだ。「仲間になれば、この私も、そしてこの世界もあなたのものなのよ」。うっ、仲間になる、なる。と普通なら言う。僕だって言う。でもボンドは違う。こう言うんだ。「世界を手に入れても、それでも不足だ」。

ヒヤー、凄い言葉だ。そうだ、洋画って(と一般化しちゃいけんけど)、セリフが格好いいんだよね。思想があるよね。邦画は全くないんだ。出てくる奴らも、いかにもアホそうだし、分数の掛け算や通分だって出来そうにないし。(おいらも出来ないけど)。「知ってるつもり」も面白いんだけど、アホなタレントがゲスト(コメントーターって言うの?)で何人も出ていて、せっかく盛り上がった雰囲気をぶちこわすし。ただ、「かわいそうですね」「いい人なのに」と泣いているだけ。「ゲッベルス」の時も、「自殺してかわいそう」と泣いているアホがいた。いいんだよ、ヒトラーやゲッベルスは。世界を手に入れて(入れそこなって)、死んだんだから。

「知ってるつもり」も、そんだから、いつも録画して、このアホ達の発言部分は早送りして見ている。うちのビデオは賢いんですよ。CMは自動的に早送りしてくれ

るんだ。ついでにアホなタレントの発言も早送りしてくれればいいのに。そうだ、管理人のじいやに頼んでみよう。彼なら何でも出来るだろう。さて、話は戻って「007」だ。タイトルは長いけど、メチャ面白かったよ。やっぱり、映画は007だね。その前に、「アンナと王様」「御法度」を見たけど、その印象・感動も忘れて、吹っ飛んでしまった。エッ、「その前に」って?だから、その日の「その前に」だよ。1日に3本か4本(時には5本)、まとめて見てるんだよ。読書と同じで、集中的に見てんだよ。ウルセーな、赤坂め。

話がこんがらがるんじゃないかって。いいじゃないの、それで。こんがらがり、からみ合い、それで又、新しいストーリーが生まれるかもしれないジャン。それに強烈に印象に残ったものは忘れないよ。忘れるようなものは初めから、どうでもいいんだよ。そこで「007」だ。この中に、「ストックホルム症候群」という言葉が出てきて、エッと思った。(乃木坂注・彰晃軍?怖そうですね)こんな言葉が本当にあるのかと思って、暗闇の中で、メモをした。あとで調べてみようと思ったんですよ。「身代金」目的か、「趣味」「思想」の為にか、子供や女性を拉致、誘拐し、監禁する。でも、そのうち、人質が犯人に親密な気持ちを抱くことがある。アメリカでもあったよね。新聞王(だっけ?)の娘、ハーストが誘拐され、でも犯人側に共感し、シンパになり、一緒に銀行強盗までやっちゃった。(乃木坂注・「マクナマラ回顧録」にも出てくる「シンビオニーズ解放軍」ですね)また、「よど号」ハイジャックの時は、乗客と犯人は一緒になって「民謡大会」をやって、別れる時は、「がんばれよ!」「私も連れてって!」といった人も出た。こういう、共感・共振現象を「ストックホルム症候群」と言うのだそうだ。初めて聞いた言葉だ。あるいは「007」の造語かなとも思ったが、調べてみなくっちゃ。

といってもHPの管理人のじいやはダメだな。メカには詳しいが、「国語」「社会」はダメだ。出来るのは、平仮名を漢字に変換するだけだ。(乃木坂注・反論不能)こういうことには詳しい「ばあや」がいたけど今は「休業中」だ。困ったな。家の辞書をひいても出てないし。そこで思いついた。そうだ、もう一人の「じいや」がいた。週刊「SPA!」の僕の担当者だ(乃木坂注・変な体位でギックリ腰になった人)。年は30位らしいが、いつも60年安保や三島事件、連赤事件のことばっかり考えて、「頭の中はまるで60年安保だね」と皆からいわれてる人だ。そう、頭の中は60才の「じいや」なんだ。

そこで、じいやにメールを送った。カタコト、コトカトとFAXで送った。エッ、メールはパソコンで送るんだって?ウルセーな赤坂!手紙のことを英語でメールって言うんじゃねえか。「休業中」のくせに出てくんないよ。俺の頭の中に勝手に入ってくんじゃねえよ、パカヤロー。そんな暇があったら受験勉強しろよ。「はい、わかりました」と赤坂、ひっこむ。ところで、「ストックホルム症候群」だ。ストックホルムという人が女の子を誘拐して、その後、9年間、監禁したが、その間に女の子はストちゃんに愛情を感じ、逃げる気もなくした。その後、ストちゃんの思想(赤軍派だよん)に共鳴し、M作戦で銀行強盗をやっちゃった。こんな話だろうと思った。

でも違った。ストックホルムって地名なんですね。(ちなみにアムステルダムも地名なんですよ。けっして酒場の名前ではありません。SPA!を読んでない人には分か

らないお話です)。SPA! の「じいや」担当者がすぐに調べてFAXしてくれた。すごい。さすがは SPA! で最も有能といわれる編集者だ。せっかくだから皆にも「知識」のおすそわけだ。

「スウェーデンのストックホルムで銀行立てこもり事件があったのは 1973 年。6 日間にわたって警察が包囲するうち、人質の女性が犯人に親密な気持ちを抱くようになり、後に結婚した。ストックホルム症候群の名はこの事件に由来する」

エッ、人質と犯人は後に結婚しちゃったのか。驚きだ。事実は小説よりも奇なりだ。まるで筒井康隆の小説的展開ではないか。でも結婚したんだから、犯罪はチャラかな。だって、二人は幸せになり、どこにも「被害者」はいないんだから。しかし、愛というには余りにもドラマチックな出会いだね。そうか、好きな女がいたら、誘拐して、監禁すればいいんだ。6 日間したら、皆、「親密な気持ち」を抱くようになるし。そんなことはないか。それにヘタしたら警官に射殺されるし。あるいは一生、刑務所暮らしだ。これこそ、「命をかけた恋」だよ。日本のテレビドラマなんか見てらんねーな。何が「二千年の恋」だよ、ペッ。

あれっ、今、気がついたけど、この「スト症候群」で、「被害者」はいるんだよ。銀行だよ。それに他の人質もいたんじゃねえか。まさか銀行で一人でお仕事してたわけじゃないだろう。その人たちは怖い目に会ったんだろう。誰だ、「被害者はいない」なんてデマを流すのは。気をつけろよ、赤坂め! (と背後霊のばあやを叱る)

そうか。他の人質は怖い目に会ってるし、犯人は殺気立ってるし、「全員殺して俺も死ぬ!」って喚いている。ここは私が体を張って犯人の気持ちを静めなくっちゃと思った人がいたんだろうな。人質なのに犯人にやさしくして、「お仕事、大変ですね」と、苦労をねぎらってあげたんだろう。犯人がトイレに行く時は、かわってやったとか。他の人質に銃を突きつけて、監視してやったんだね。でも、ここまでやつたら、「共犯」になっちゃうか。それに、「その後」とは何年後なのか。きっと捕まって刑務所に行って、出てきてからだろう。もっと詳しいことを知りたいよ。ともかく、これだけじゃ、実地の参考にならないよ。(「参考」って何? 自分がやる気なの?」。ウルセー、出てくんないよ、赤坂!)。

それにしても、「犯人」の暴走や殺傷を妨ぐ為に、身をすべて犯人の気持ちを静めたなんて、すごい女性だ。山本周五郎の「日本婦道記」みたいだ。彼女はきっとこの本を読んでいたんだろうな。

そうか、分かった! と、おいらの「灰色の脳細胞」が活発に働き始めた。まるで名探偵ポワロだね。この女性は初めから共犯だったんだ。前々から銀行に勤め、手引きしたんだ。「鬼平犯科帳」にもよくあるじゃないか。盗賊の一味の女が、金持ちの商人の家に勤めていて、手引きするってのが。彼女は池波正太郎を読んでたんだよ、きっと。と、事件が目出たく解決したところで終わろうと思ったら、もう一枚、カタコトとFAXがきたぞ。

「ストックホルム症候群とは、1973年にストックホルムで発生した人質事件で、人質と犯人の間に親和感が生じて、最終的に人質を殺傷することなく事件が解決した現象を指す」。するってーと、人質事件が起きたら、「殺傷」を妨ぐために人質

の女は誰か、犯人に愛情を抱け、と言つてゐるようだ。うん。そうとしか読めないな、これは。続いてこうも言つてゐるな。「この事件以来専門家の間ではハイジャックやその他の人質事件で同様の現象が多数報告されている」。

「多数」って、どの位だろう。「ほとんど」なのか。監禁したら、必ず愛情が芽生えるものだろうか。一水会代表をやめて、「犯罪評論家」になったおいらには気になって仕方がない。じゃ、これで終わろう。でもね、この「ストックホルム症候群」と反対に、犯人が人質に感化されるケースもあるんだ。これは「リマ症候群」って言うんだって。このお話は来週ね。又、見てね。ちゃんとアメを買うんだよ。タダ見はいけないよ。あらあら、これじゃ、紙芝居のおじさんか。

(追伸)。「スコラ」は対談じゃなかったね。見沢の「事件」の解説で、来月に対談は載るそうだ。「レコンキスタ」は急に8頁で立派になったね。これで年間5千円は安い。1万円にしてもいい。僕も新連載をやってるから、ぜひ買ってね。BOX東中野でやってる(2月中)、「スペシャリスト」は実にいい映画だ。アイヒマン裁判の記録だが、本当に考えさせられた。実は今週はそのことを書くつもりだったが、007で終わってしまった。赤坂の背後靈と共に自己批判。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張2/21

「アイヒマン裁判は「両刃の剣」だね

というわけで、今回は「リマ症候群」ですね。これは3年前の、あのペルー・リマの日本大使館公邸人質事件から名前が付けられたんですよ。同じ人質事件ですが、「ストックホルム症候群」の場合は、「人質が犯人に愛情を抱く」。「リマ症候群」の方は逆に、「犯人が人質に影響される」んですね。犯人と人質に「心の交流」が出来る点は同じですが、どちらがヘゲモニー(アレッ、運動用語を突然思い出しちゃった。「主導権」という意味なんよ)を取るかで、「ストックホルム」になるか、「リマ」になるか分かれるんですね。ということは、どっちが教養があり、頭がいいかで、決まるような気がしますね。

「頭の中は60年安保」のSPA! 担当「じいや」が送ってくれた資料にも、こう書いてるぞ。おいらの思った通りだ。

<報告によると、ペルー事件では、「犯人グループのうち特に少年または女性は初めて接触した日本および西欧の文明に感化されて憧憬を感じ、学習したいという意欲を持つに至る一方、人質は『教養のある年長者』としてその要望にこたえたことが挙げられる」としている>

<さらに「立てこもりの長期化に加え、リマ症候群の影響もあって、犯人グループの緊張感が緩和し、その士気と規律を維持する必要が生じ、犯人グループはペルー人に身近なスポーツのサッカーを行わせることになった」と報告。特殊部隊の突入の際に犯人側が人質を殺すことをためらったと伝えられている点についても、「リマ症候群」が作用していた可能性があるのではないかと指摘している>

リマ事件では占拠が127日にも及んだんだよね。そうすると、「心の交流」が生まれる。特に、ゲリラ側は少年少女もいたんだし、「大人の人質に甘えたがった様子もみえた」という。軍隊の強行救出の時、人質に銃を向けながら結局撃てずに、自分が殺されたゲリラもいた。かわいそうな話だ。こんなに長く、占拠していたら、そういう気持ちが生まれるのも仕方ないだろう。これから人質を取って立てこもる予定の人は気をつけることだ。人間だと、どうしても人質に情が移るから、いっそ、ロボットのゲリラを作って、占拠をやらせたらいいんだね。そしたら情が移ることははない。HP管理人のじいやに言って作ってもらおう。

えっ、何だって。「僕は鈴木さんより若いのに"じいや"はないだろう」って。そうか、乃木坂君も45才で「じいや」はかわいそうか(乃木坂注・まだ45にもなってませんよー。お願いしますよー、お菓子あげるから)。でも、SPA! の僕の担当者は30才でもう「じいや」って皆に呼ばれてるんだよ。かわいそうに。でも、でも、だよ。「楯の会」の初代学生長の持丸博なんて、大学生の時(20才くらいで)、もう、「じっちゃん」と呼ばれてたんだよ。(あっ、いけない。この話は来週のSPA! に書

いたんだ。まア予告編はここまでだね)。そのハタチの「じっちゃん」に比べたら、30才や45才は文句いえないだろう。ハッピーだろうよ。それに、昔は、偉大な人は、若い時から「翁」とよばれてたんだよ。右翼の巨頭、頭山満なんか、30代から「頭山翁」と言っていた。「翁」は尊称だったんだよ。だから呉智英さんも、「早く年をとりたい。翁と呼ばれたい」と言ってたよ。

「でも乃木坂しゃんは、本当に"じいや"という字がピッタリですね。執事の服を着せたら似合いますよ」って真理っぺが掲示板に書いてた。えっ、まだ書いてない?じゃ、今かきつつあるんだよ。ほら、パソコンの電波が僕の目の前を通り過ぎていったよ。そうそう。真理ドンの言う通り、45才にして、もう枯れた「じいや」だね。食欲も性欲もないらしい。ただ、「パソコン欲」だけはあって一日中、画面と睨みあってるようだ。そのうち進化して、ロボットになってしまうだろう(乃木坂注・iMacみたいなスケルトンになったら気色悪いな)。昔は、生氣があって、電車の中で痴漢したり、少女を拉致、監禁したり、道を歩いてる女性を強姦したり・・と、元気があったのに(乃木坂注・今は妻がいますからね。もっとも普段は空気抜いてたたんであるけど)。今はただの枯れたじいやだ。昔、暴れ回っていたのが嘘のようだ(実際、嘘だけど)。

えーと、じゃ又、映画の話だ。アイヒマン裁判を描いた「スペシャリスト」はBOX東中野で上映中だ。2月一杯らしいから早く見に行った方がいいよ。この映画については1月31日のNHK教育テレビで紹介された。ETV特集で「アイヒマン裁判で何が裁かれたのか。ドキュメンタリー映画"スペシャリスト"から」だ。しかし、NHKが「映画の宣伝」をするなんてどうしたことだろうと驚いた。

それに、あの裁判からは40年も経っている。何を今さら、と思った。実を言うと、このETV特集のことは事前に知らなかった。ところが、当日の、それも放映2時間前に「週刊ポスト」から電話があった。これを見て、感想を書いてくれという。それで慌てて見た。そして、「日本のテレビを斬る」というコーナーに書いた。ウーンと唸った。衝撃をうけたし、考えさせられた。「週刊ポスト」から原稿依頼がなければこんないい番組を見逃すところだった。

「週刊ポスト」の記者も、これは凄い番組らしいと聞いていたのだろう。ナショナリズム、国家、戦争についての重いテーマを扱っている。じゃ、鈴木に見てもらって・・と思ったのだろう。僕はそんなことは分からぬ。何で今さらアイヒマン裁判だと思っただけだ。アイヒマンという格好悪い男を取り上げることで、最近のナショナリズムの暴走に<待った>をかけるつもりなのかと、漠然と思っただけだ。

年末、NHKで「映画の20世紀」を毎晩やっていた。又、「ヒトラーと五人の側近」(6人だったかな)も放映していた。見てると、格好いいんだな。ヒトラー、ゲッベルス、ゲーリング・・と、みな、格好いい。ユダヤ人の虐殺さえなければ、皆、英雄だ。日本の戦争指導者なんて彼らに比べたらチャチだ。善悪は別にしても、ヒトラーは「20世紀最大の男」だろう。ニュールンベルグの党大会なんて、夜に松明をたいて、20万人も集まり、ヒトラーの火のような演説を聞く。これは皆、しびれちゃうよ。おいらだってその場にいたら簡単に洗脳されただろうよ。

勿論、NHKでは「ナチスの悪逆非道」「ヒトラーの犯罪」を見せつけ、訴えるために「映像の20世紀」などを放映した。しかし、*〈映像〉*は同じでも、見る人の感じ方が違う。変わる。「何てひどいことを‥。許せん」と昔は思ったのだろうが、今は、「戦争だからどこでもやってるんだろう。ドイツだけが悪いんじゃない。アメリカやソ連だってひどい事をしたんじゃない」と皆、思い出した。たとえ「否定」する為でも、ヒトラーの画像を出すと、「格好いい」となる。

これは問題だと、NHKでも反省したのだろう。大体にして、「映像」は両刃両刃の剣だ。本人たちは「戦意高揚」の為に作っても、後から見たら、「何てバカなことを」と思える。又、「こんなことは許せない」と否定のために流しても、

「おっ、格好いいじゃん」と思われるかもしれない。いくら学者たちが必死で解説しても、「映像」の事実には及ばない。

北朝鮮は、何年か前に「パレード」という宣伝用の映画を作った。これだけ人民は一丸となり、すごいパレードをしてるんだ、という国威高揚の映画であり、北朝鮮の素晴らしさを知ってもらおうという100%宣伝映画だった。しかし、日本をはじめ、それを見た人は、「何だこれは、「これじゃ自由がない。個人がない」と嫌悪感をもった。宣伝が悪宣伝になったのだ。又、子供が銃をかついで訓練をしている宣伝映像があった。中国の映画だったかもしれない。こんなに小さいうちから祖国愛に燃えて闘っている。なんという健気さだ、とアピールしてるので。でも今、見たら、「子供にこんなことをさせるなんて残酷だ。ひどい」と思うだろう。だから、映像はこわいし、両刃両刃の剣なのだ。

でも。ヒトラーやゲッベルスは(見方によっては)格好いい。その点、アイヒマンは格好悪いし、「悪の英雄」ですらない。小官僚だし、ただ、書類にハンコをついていただけだ。それに、ヒトラーやゲッベルスのように自殺する勇気もなく、南米に逃げて、ひっそりと暮らしていた。卑怯未練な奴なんだ。つかまって、イスラエルにつれてこられて裁判をされた。たった一人だけの裁判だ。それをアメリカの映画会社が350時間も記録にして録っていた。その中の2時間だけをとり出して映画にしたのが、今、上映中の「スペシャリスト」だ。

なぜ、350時間も録ったか。これは「主役」がアイヒマンだからだ。もしヒトラーやゲッベルスが生き延びて裁判になら、こんな長時間の映像にして残さなかっただろうよ。たとえ残したとしても一般公開なんかしないだろう。裁判の被告の演説を聞いて、洗脳されちゃう人が続出するだろうし。裁判がイスラエルで開かれたら、きっと「イスラエル症候群」と呼ばれただろうよ。

昔、「東京裁判」の映画があったが、あれは「解説」もあったし、「戦争シーン」もあったから5時間でも、退屈しないで見れた。ところが、この「スペシャリスト」は、そんなサービスはなし。はじめから終わりまで法廷シーンだけ。だから、「面白い映画」ではないし、ハラハラする映画でもない。退屈なところも多い。でも、凄いんだ。「戦争」「国家」「ナショナリズム」について考えさせられた。又、NHKの番組では、この映画をとったイスラエルの監督が出演していたが、「我々はイスラエル政府のいうことだけを聞いて、アラブ諸国と戦争をしていたら、今度は我々がアイヒマンになってしまう」と言っていた。40年前は、イスラエルのア

イデンティティを確立する役目を果たした「アイヒマン裁判」だったのに、今は逆に、イスラエル国家への疑問、反逆を育てているのだ。やはり映像は「両刃の剣」なんだ。

ということで、次週にもうちょっと書く。(あれ、どうしたの赤坂の背後霊は。出てこなかつたね。テーマが高度だったから口をはさめなかつたんだろう。ザマーミ口だ。いやいや、ともかく頑張って勉強してくんまし)

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張2/28

「我々も潜在的アイヒマンなのかよ」

40年前の「アイヒマン裁判」は、絶好の政治宣伝にされた。イスラエルという国のアイデンティティの確立がはかられ、若者への教育になった。アイヒマンはヒトラーやゲッベルスのような政策決定者ではない。上の命令に従っただけの小官僚だ。でも、「ノー」といわなかつたことが「人道に対する罪」だとして裁判にかけられ、死刑になった。アイヒマンは、「組織の中の一つの歯車だった」と主張したが、それでも責任を問われた。

映画「スペシャリスト」はその法廷シーンだけで成り立っている映画だ。NHKで紹介した時は、「アイヒマンて何て卑劣な奴だ」という印象しかなかった。自己弁護ばかりして、責任逃ればかりしている。特に、死刑が宣告されたあと、「なぜこんなことになったのか。詳細に本に書きたい。その時間をほしい」と言ってた。裁判官は「言いたいことは全てここで言え」と、ピシャリとはねつけた。ここに来てまでも未練がましい男だと思った。しかし、BOX東中野で実際に映画を見て印象が変わった。アイヒマンも結構、キチンと喋っている。弁護士なんていのと同じ法廷で、自分で自分を弁護し、「なぜ、ナショナリズムは暴走するのか」・・などについて喋っている。

彼は虐殺の政策決定をする立場にいなかった。又、「虐殺」にも実際には手をかけてない。と主張している。ただ、上からきたユダヤ人の輸送命令に従って実行し、あるいは書類にサインしただけだ・・と。だから自分は犯罪を犯していないし、裁かれることもないと。「上からの命令に反対し、書類にサインしなければいいじゃないか」と検察に問われて、「そんな市民的正義で妨げたのか?私が抹殺されただけでおわりだ」と言う。

「サインし、仕事を忠実にやっただけだというが、では、虐殺の実行者になっていたらどうしたんだ?」という問には、こう答えている。「その時は、自殺という方法でその任務から逃れたでしょう」。そして国家とは何か、あの異常事態で個人は何が出来たか・・と、逆に問い合わせる。ウッと考えさせられる場面もあった。

「戦争では悪が合法化される。その時に市民的正義感で太刀打ち出来るのか」とも言う。

だから、そんな問題も含めて、本に書きたいと言ったのだ。たとえ1年や2年、処刑が遅れても、本を書かせてやればよかったです。と、映画を見終った後は、思った。いや、ずっと生かしておいて、何か問題が起こるたびに彼の意見を聞いてみたらいい。その方が、「歴史の教訓」としてどれだけ役立ったかもしれない。それをしないで早急に処刑してしまったから、今回のような問題が起ったのだ。

今回のような問題とはこうだ。映画「スペシャリスト」の製作者のエイアル・シヴァンは若いイスラエル人だ。しかし1982年のレバノン戦争の時は兵役を拒否している。その時の理由が凄い。「この戦争はレバノンを侵略し、虐殺している。アイ

ヒマンのように国家の命令にただ服従だけしていたら、罪を犯すことになる」と言うのだ。40年たって「アイヒマン」は全く逆の使われ方をしている。イスラエルの指導者たちも驚いているだろう。「アイヒマンに象徴される人間たちによってユダヤ人は虐げられてきた。そのためにイスラエルという国家をつくり、他のアラブ諸国から守ってきた。」そう指導者たちは言っていた。「だから、もっと軍備を増強し、アラブ諸国、パレスチナ人から祖国を守らなくてはならない・・と。そのための「アイヒマン裁判」だった。

ところが、そのイスラエルにも国家主義が強くなり、暴走し、今や、アラブ諸国やパレスチナ人を抑圧し虐殺している。これではかつてのナチスと変わらない。ナチスにならないように不当な命令には従うな。抵抗しよう。我々はアイヒマンになってはならない・・と、シヴァンたちは主張するのだ。

NHKでは、解説者の高橋哲哉が、「我々は皆、潜在的アイヒマンだ」と言っていた。これにはショックだった。今会社や組織や団体の一員となって、いわば一人一人が「社会の歯車」になっている。自公のしかける流れにみな抵抗できない。証券会社、銀行、神奈川県警、新潟県警・・と、中にいる人間は(悪いと分かっていても)内部批判できない。たしかに、日本人も皆、アイヒマンなんだよ。後の世人々は言うだろうよ。「なんで一人でも抵抗しなかったのか」「市民的正義感はなかったのか」「クビになっても言うべきじゃないか・・と。アイヒマンを批判する資格はないんだよ。

・・と、大きな問題を問いかけている映画なんだよ。これは。

アイヒマンは言っていた。「私は、権力にあやつられる道具でしかなかった」「私は忠実に仕事をこなしただけだ。それが罪なのか。」今の我々は、「そうだ。それが罪だ」といって彼を断罪する。「アイヒマンは忠実に仕事をし、従順だった。それが犯罪だった」「オフィスで犯罪をしたのだ」「人道に対する罪だ」「命をかけて反対しなかったのが罪だ」。そして極端な場合はこう言うだろう。「ナチスの時代に生きのびことこそが罪だ」と。同じ言葉で、我々も断罪されることだろうよ、いつか。

さて、もっとこの話をしたかったんだが、二週も続いたんで、いやになってる人もいるだろう。だから、次に移る。それに、暗いネタで、何週もジメジメやってると、他の連載に負けてしまう。このHPから追放されるかもしれない。なんせ、「がんばるな!?新左翼」という強力なライバル連載が始まった。さすがは昔、極左過激派だけあって、詳しい。これは僕も勉強になる。もっともっと教えてほしいね。「4トロ」って、女問題で分裂したっていうけど具体的にはどんなことなんだろう。(乃木坂注・三里塚現闘団の男達が女性活動家を集団レイプしたらしいっす)法政や明治、早大などは暴力的な新左翼が支配してるらしいけど、一般学生は何故立ち上がらないんだろう。「市民的正義感で立ち上がっても奴らにやられるだけだ」と思ってるのか。自分さえよければいいと思っているのか。これだったら、皆、アイヒマンと同じではないのか。自治会予算はどうなってるのか。過激派の子供は皆、過激派になるのか。子供が他党派にいったり、右翼になったら、「組織の秘密」を守るために抹殺するのか。他党派の人間との恋愛はゆるされるのか。左翼だからセック

スは自由なのか? etc、もっともっと詳しくかいてくれよん。さらに、参考文献も紹介し、解説してくれよん。このまま続くと、一年後には、『がんばるな!? 新左翼』で単行本になるよ。あとは、激闘編、望郷編、墮落編・・と続ければいい。

そうだ。僕の「がんばれ! 新左翼」の方も刺激されて、がんばっているよん。2月に出た『アジャパーWEST』から連載(第4部・墮落編)が始まった。季刊だから、4年ぐらいたたないと一冊にまとまんないね。その頃は『がんばるな!?新左翼』の方が、どんどん単行本化されて、状況が逆転したりしてね。「なんだ、この鈴木の本は。『がんばるな!?\』のパクリじゃないか。そういえば昔から鈴木は人マネばかりしてたセコイ奴だったよな」なんていわれるのかな。かなしい。

もう一つ、敵に塩をおくるとだね、一回ごとに、テーマを変えて、「左翼用語の基礎知識」になるようにしたらしいね。「内ゲバ」「内々ゲバ」「変装」「集会」「デモ」「恋愛」「不倫」「後継者」「ハッカー」「ドロボー」「少年A問題」「処刑」「スパイ」「査問」「総括」「共産主義化」「鉄パイプ」「埋め返し」・・と、うわー、いくらでも出てくるよ。それで、「用語」別に本にしてもいい。

そうだ、おいらの、「用語」別の本も出来たんだ。それを見ていて、ヒントをえたんだけどさ。おいらのは、『右翼・公安用語の基礎知識』((株)コアラブックス発行)っていうんだよ。2月28日(月)、全国一斉発売だ。とっても読みやすくて1200円だよん。項目はね、「右翼」「新右翼」「エセ右翼」「デモ」「カンパ」「ビラ貼り」「潜在右翼」「公安」「YP体制」・・etc だ。

まじめな中にユーモアがあって、ふざけてるようでハッとする真実があって。こんなにたのしく勉強になる本はないって、みんな言ってるよ。「右翼が分かると日本が分かる。そして日本人、自分が分かる!」と本の帯にはかかれてるよ。表紙には僕の昔の精悍な時代のシルエットがドーンとでている。いやー、たのしい本だ。

そうだ、「自分が分かる」といえば、先週の赤坂の「スクープ!」、びっくりしたなー。うちの兄貴とひそかにメールで交際していたんだね。まったく、メグ・ライオンみたいな奴だ。え、「Yo got meil」とかいう映画あったよね。メールを交換してるうちに愛がめばえて、結婚するって映画。あれみたいだ。この二人も愛がめばえて結婚したらいいね。そうしたら僕が仲人してやると。えっ、弟じゃダメか。(乃木坂注・加えて妻帯者じゃなきゃダメです)でも本当に結婚したら面白いね。赤坂は急においらの「お姉さん」になっちゃうんだもんな。年下のお姉さんなんていいね。これからは「お姉さん」と呼ぼう。

それはともかくとして、「自分が分かった」。本当にありがとうございました。自分じゃ、はずかしくて、親、兄弟に昔のことを聞けないもんね。聞きたいと思ってたけど、やっぱ面と向かって、は恥ずかしい。その役、赤坂にやってもらって感謝感激だよ。これからもずっと続けてくれよん。今度、「きそちしき」の印税でたら、旅費出すから、仙台の母、兄、山形の弟、札幌の姉にも取材してくれよ。そうそう、小学校の同級生。20才の時の恋人。30才の時の恋人・・にも取材してよ。「自分さがしの旅」だね全く。

いやー、赤坂には感謝、感動、感激したよ。「休業中」なのに、おいらの頭の中

にかってに入って「背後霊ごっこ」をやってるから、うざったいなと思ってたのに、それはフェイントだったんだね。それで牽制していて、こんな大スクープを狙っていたなんて。おそれ入りました。おわり。(乃木坂注・今回はほとんど突っ込む隙がなかったなあ)

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張3/6

次は「HP用語の基礎知識」を書くかな

おかげ様で、2月26日(土)の「一水会を鼓舞する会」も盛況のうちに終わり、ホッとしましたね。300人も来てくれて、ビックリしました。木村代表を始めとした新執行部の実力ですね。木村代表は世界を股にかけた行動派だし、顔も広いし、「日本の一水会」を「世界の一水会」にしましたね。又、「木村さんが代表でやるんなら・・」と昔の活動家仲間も再結集したし、応援する人もドッと増えたし。いいことですよ。ちょうどいい時に僕も交替したと思っています。

「レコンキスタ」も驚異の充実ぶりで、2月号は8ページで、さらに3月号は何と12ページですよ。それで年間5千円だから安いよね。と前にも書いたけど。「どうか安いか。じゃ1万円にしようか」となるでしょうから今のうちに年間購読の申し込みをしてた方がいいですよ。telは03(3364)2015です。「顧問」として、レコン拡張の協力はしないとね。

そのレコンキスタだけど、文化面では、三島賞候補作家として、「日本のドストエフスキイ」と言われている見沢知廉と僕の新連載も始まる予定だったけど、僕のしか載ってなかったな。(三月号には載っている)なんでも、見沢のは原稿が間に合つたけど、例の字でしょう。それで「解説」に手間どってるうちに時間はどんどんたっちゃって、載せらんなかったらしい。大東亜戦争の時も、宣戦布告の翻訳に手間どって、それで「奇襲だ」「だまし撃ちだ」って言われたんだよね。「リメンバー・パールハーバー」とか。「日本人は卑怯だ」と未だに僕らはアメリカ人にいわれているよ。こまるよな。「歴史は繰り返す」で、見沢の「翻訳」「解説」も遅れに遅れて、戦争が始まっちゃったんですよ。それほど大袈裟な話じゃないか。しかし、解説に三ヶ月かかったというのはすごいね。だったら、次に載るのは又、三ヶ月後かよ。レコンは毎月出てるし、見沢は毎月書いてんのに、でも、「解説」に手間どり、載るのは三ヶ月に1回。不思議な連載だ。

見沢のは「見沢知廉の文化総研」で、僕のが「鈴木邦男の平成文化大革命」だよ。文革には思い出があってね。そのことを今月は書いたんよ。毛語録をふりかざしておいらが紅衛兵をやっていた頃の思い出だよ。ちょっと違ったかな。でも、同じようなことだろう。まア、読んでくんまし。

そうだ、見沢もワープロを習えばいいのに。そうしたら、送った原稿はすぐ載るよ。いま時、ワープロ位うてなくっちゃ、もの書きといえんよ。(乃木坂注・鈴木さんは"平成鈴木体"という特殊なフォントを使っているので、凡人には読めないんですよ。これを読めるのは、河井さんと赤坂さんだけ) 今、SPA!で「楯の会」初代学生長の持丸博の話を書いてるけど、彼の奥さんの芳子(よしこ)さんなんか、50の手習いで、ワープロをマスターしたよ。ただ娘が笑ってた。「お母さんたら、かわいいの。右手の人指し指しか使えないから、チョン、チョンと押してんのよ」。だったら手で書いた方が早いだろうと思うが、「いや、ワープロの方が圧倒的に早い」

と言っていた。おいらなんて両手を使って、ブラインド・タッチだから、芳子さんの10倍早いよ。(乃木坂注・別の意味でのブラインドタッチじゃないですか。日本語にするとやばいけど) それに今は、二台のワープロを前にして、右手と左手で別々の原稿を同時に書く練習をしている。どうだ、まいったか。天才の考えることは違うよな。と、自画自賛。

そうそう。今月のレコンは僕の写真が変わった。写真説明(キャプションというのかな? ちがうのかよ赤坂! 間違いを指摘すんなら、出来てからじゃなくて、ワープロの箱の中に入ってる時点で直してくれよ。そっちから覗いたら出来るだろ。スペルの間違いや、おいらの勘違いは前は直してくれたのにな。そいつが「休業中」なもので、おいらは間違った原稿ばっかり書いてるよ。何とかしてくれよ。本当は小屋番じゃない、管理人のじいやがやるべきなんだけど、なんせ年寄りだからできんのよ。漢字変換は出来るけど、それだけなんよ。というところでカッコをとじるか)。ずいぶんと長い()だったな。

そうだ、写真説明の話だ。そこにはだな、「文化人として活躍中の鈴木邦男顧問」と書かれてたよ。本当は、仕事がなくて、退屈なもんで、コタツにあたってマンガを描いてたんだけどね。写真を渡したら、事務局のシノラー(本当は篠原って言うんだけど、誰かがシノラーって呼んだら、皆そう呼ぶようになった)が、「これ若いですね。20年位前の写真じゃないですか?」と言う。失礼な。先週とった写真だ。一水会代表の激務から解放されてホツとしたら細胞までホツとして、若返ったんだよ。「ホントですか?」とそれでも疑り深い目で見ていた。

30年も運動ひとすじでやってきて、(青春)もなかったから、これから青春を取り戻すんだ。酒もタバコもマージャン、競馬、女・・もおぼえて遊んでやる。「いや、ムリしなくても若いじゃないですか」とチョコボール乾が言う。乾のことを「いぬぶた」なんて言わないように。風見さん。ひどいなー。ちゃんと叱っておいたからね。「『40の美人より18のブス』っていってましたよね。そんな若い子と遊んでるから若いんでしょう」と乾は言う。「そんな」ってなんだよ。「ブスい18」を受けてんのかよ。失礼な。そんことねーよ。まわりは、じいや、ばあやばっかりで。まるで養老院で原稿かいてるようなもんだよ。若いのはおいらだけだよ。ワープロは打てるし、ビデオ予約だって出来るし、ファックスだって送れる。ワープロのブラインド・タッチだって出来る。夜の床運動のブラインド・タッチだって出来るし、満員電車の中で女の子にブラインド・タッチも出来る。(これは痴漢になるのかな)。

「フルーツを食べてから若いんじゃないですか」と45才のじいやがいうけど、フルーツも食ってねえよ。主食は枝豆だよ。マメさえ食ってれば人間はマメ(健康)だって、「生長の家」でも教ってるよ。それに銀杏だね。天才歌手の川西杏さんも、銀杏好きなんだ。それで名前も杏にしたらしい。「銀杏は胃腸にいいですからね」と教えてやった。「そうですか」と感動していた。胃腸に銀杏(いちょう)をかけただけなのにね。すなおなんだ。

では、『右翼・公安用語の基礎知識』(コアラブックス)の話しだ。ウヅキじいや、マリばあや、赤坂ばあや、風見ばあやたちが掲示板にかいてくれとったけど、

これは読みやすいし、面白いですよ。出版社でも、写真、イラストを入れたり、強調するところはゴシックにしたり・・と、本作りも随分と工夫してくれて、いい本になりましたよ。これが売れたら、次はPart2「激闘編」、Part3「望郷編」・・と出そう。これじゃ、「がんばれ!!新左翼」と同じか。じゃ、「天の巻」「地の巻」にしようかな。(乃木坂注・大川総裁の「金なら返せん」ですよこれじゃ)「筑豊編」「自立編」「青春編」にしようかな。これは五木寛之の『青春の門』か。

そうだ、「街宣車」の件で書き忘れたけど。ある日、若い女性(の声)で電話がかかってきた。「野村秋介さんを紹介してほしい」と言う。(だから、野村さんが生きてる時の話だね。6年以上前か)。「許せない奴がいるから、街宣車を連ねて攻撃してほしい」と言う。それで聞いてみたら、自分を裏切った男だという。いや、男じゃない。その男を奪った子持ちの女が許せんという。まア、気持ちは分かるけど、思想性のある話じゃないしな、「ダメだよ」と断った。「でも、困ってる人たちをたすけるのが右翼でしょう」と女は言う。そんなのいちいちやってたらキリがないよ。「じゃ、北方領土奪還街宣の時に一緒にやってよ。『北方領土返せ!』『彼氏を返してやれ!』って」と言う。そんなこと出来るかよ。別にロシアが君の彼氏を拉致したわけじゃあるまいし。

さらに女は「でも・・」と言う。しかし、今考えたら、野村さんに紹介してやればよかったかな。「よし、やってやろう。これも弱者救済だ」といって野村さんは引き受けてくれたかもしれない。なんなら、他にも困ってる人をたすけてやる。

「いつも会社で部長に怒鳴られている。こいつを攻撃してくれ!」「となりのピアノの音がうるさい。抗議してくれ」・・と、皆、ひきうけたりして。これはいい。右翼の街宣車も、そうやって活用したら、国民の皆様に感謝されるよ。その時はおいらも頼もう。中野図書館から本をかりて返さない奴にも攻撃してもらおう。ビックリしてすぐ返すだろうよ。

そうだ、図書館も右翼に頼んでキチンと契約して、「取り立て」を頼んだらい。どこの図書館のおばちゃんたちも朝から晩まで、「本を返して下さい」と電話をかけまくっている。しかし法律の罰則もないから、全く効果が上がらない。本を読みたい人、必要な人には回ってこない。これじゃ、「日本文化の危機」だよ。そのために決然、右翼は立つべきだよ。図書館もやれよ。

ということを次の『右翼・公安用語の基礎知識』では書こう。あと、街宣車を使って「走るカラオケ屋」「東京一周抗議ツアーワー」とか・・。楽しい企画も一杯あるよん。さらにこれを書いてくれって要望があったら、掲示板に書いて下しゃいよ。じゃ、又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張3/13

激闘! みやま山荘攻防戦

この大事件はやはりキチンと記録しておかんといけんじゃろ。これも戦後史の貴重な証言だ。あさま山荘事件だって、もう風化してしまい、おぼえている人が少ない。だからこの事件も今のうちに書き留めておかんと。いや、ワープロだから、打ち留めておかんと。叩き留めておかんと。

このみやま山荘にすんでから何十年になるかな。「さあ、60年位住んでるんじゃないですか」と管理人がいう。管理人といつても、アパートの管理人じゃなくて、HPの管理人だ。アホな管理人だ。おいらは56才なのに。(乃木坂注・あれ?「昭和21年生まれ」と学生証に書いてませんでした? けけけ) 生まれる前から住んどるのか。でも自分でもよく分からん。20年か30年はいるだろう。これだけ古くなると、家も腐る、ネズミも出るし、ヘビ、トカゲも出る。狸や狐やゴキブリ、バッタ、ノミ、シラミも出る。これは、そうしたケダモノ達との壮絶な闘いの物語だ。

ネズミとの闘いも大変な死闘だったな。なんせ相手は話し合いが出来ない。「まるでヤクザか右翼ですね」と管理人は言うが、失礼なことをいいなさんな。右翼の方々はちゃんと話し合いが出来る。それに日本の為に日夜闘っていらっしゃる人々じゃなかか。うちのネズミは、天井裏をかけ回り、コンビニから買ってきたオニギリをかっさらっていく。おいらがいるのにも拘わらず、オニギリに飛びついてくる。こっちが恐くなって、「ネズミとり」の薬を部屋中にまいたが効かない。昔のネズミとりは効いたじゃないかと薬屋に文句を言ったら、「間違って赤ん坊が口に入れる事故があったんで、人間が食べても大丈夫な毒の量にしてるんです」という。人間に大丈夫ならネズミにだって大丈夫だろう。バカめ。

仕方がないから近所の公園にいって猫を捕まえ、拉致してきた。でも、ニヤニヤー鳴いてうるさいし、ウンチやオシッコをするし、かえってネズミより大変だ。アパートの管理人からも「猫をかっちゃダメですよ」と言われて、ネコは解放してやった。そんな時、インターネットで青酸カリを手に入れたんで、(乃木坂注・公安以外からも目をつけられますよ。ドクター・キリコじゃあるまいし) オニギリやパンに入れて部屋の隅にまいておいた。夜帰ったら、丸々と太った(乾のような)でっかいネズミが玄関と風呂場に死んでいた。ギャーッと悲鳴を上げてしまった。どうやって捨てよう。長いハシを買ってきて、おそるおそる紙袋に入れて、ゴミの日に捨てた。でも、ハシでつづいた時、ギョロリと眼をあけて、飛びかかるくるような気がして、ビクビクもんだった。これじゃ、人を殺して埋めるなんてとても出来ない。やった人は偉いと思った。(乃木坂注・○沢○廉さんはやっぱり凄いんですね)

そんな闘いの日々をいちいち書いてるとキリがなくなるな。だから、ここ1年間の「最終戦争」について書こう。あれは忘れもしない、1年前じゃった。突然、おいら、アトピーになった。アトピーってよく分からんけど、これがアトピーだと思っ

た。

とにかく、体中がかゆくて仕方ない。そこで、かきまくった。全身赤くなり、血だらけになった。あるいは、ウルシかぶれかとも思った。毎晩かゆくてねむれない。全身、湿疹、かさぶたばかりで女たちにも「近よらないで!」といわれた。

「変な病気じゃないの?」と疑われる始末。こんなことで病院に行くのもヤダと思ったが、明日は行くかと決意した日。そうだ、これは虫じゃないかと思った。

そういえば、みやま山荘に住んで30年。一度もタタミは替えてない。フトンも干してない。蚊、ダニ、シラミetcがドッと繁殖したんじゃないかと思った。それで、はじめ、バルサンをたいた。閉め切って家中に10本位まとめてたいた。その間、ルノアールで本をよんでいた。帰ってきたら、たしかに虫がちらばって落ちていた。ようし、こいつらのせいかと思い、毎日、バルサンをたいた。又、タタミの中にしみ通るという「ダニたいじ」もしかけた。しかし、夜中にまだ虫がいる。かゆくて眼がさめる。ちくしょう、ダニの奴らめ! と思った。殺してやるぞ! 皆殺しだ!

そしたら何と、ダニの奴が生意気にも口応えした。「ペッ、右翼め! お前の方こそ社会のダニだろう!」。これにはカッとなつた。よし、上等だ。テメーら、全員、火あぶりにしてやる! そしてアパートに火をつけようとした。そこでハッと我に返つた。いかんいかん、放火犯になるところだった。ダニの挑発に乗って、理性を失つてしまつた。危ない、危ない。

日本は放火は罪が重いんだよね。すぐ懲役10年以上いっちゃう。野村秋介さんは河野一郎邸焼打ち事件で、12年も千葉刑務所に入っていたんだ。でも野村さんは「ソ連との漁業交渉でヤミ取引をした。売国奴、河野は許せん!」といってやつたんだから思想犯だ。おいらの場合は、ノミ、シラミ、ダニとの闘いで「みやま山荘」焼打ち事件だもんな。アホといわれて、まず精神鑑定されちゃうか。

そうだ。「ダニとの闘い」とは知らずに火の手が上がつたのをみて、機動隊も駆けつけるんだろうな。そうなつたら塩見孝也さん、植垣康博さん、青砥幹夫さん・・と、赤軍、連合赤軍の関係の人たちも「支援」にかけつけてくれるだろう。(乃木坂注・ついでに赤報隊も・・来るわけないか) でも、<真相>を知つたら皆、ガックリくるだろうな。これじゃ、みやま山荘事件も歴史に残らないか。

えーと、「ダニとの闘い」の続きだ。いくら、一匹ずつ殺していくても、キリがない。根本的に退治するしかない。だから火をつける。それはダメだって・・。そうだ、タタミが悪いんだ。それで大家さんにいって、お願ひした。30年もタタミをかえてないので、かえてもらえませんか。お金は自分で出します。今はいいんですが、本が売れて印税が入つたら必ず払いますから・・と。そしたら大家さんがいい人で、かえてくれた。タタミを上げたら、もう大変なことになつた。又、本をどこかしてタタミを上げるの大変だ。その苦労といったら・・。引越しするよりも大変でしたよ。

さらに、フトンも、きたないのは捨てたり、使えそうなのは丸洗いに出したり、徹底的にやりましたよ。フトンの洗濯って高いんだね。1ヶが5千円位する。4ヶだと2万以上だ。新しく買った方がよかつたかもしれない。又、ついでに、フスマも替えてもらった。これで虫たちは何とか全滅。だと思う。あとは全身、ムヒをぬり

たくって、やっと「かゆみ人間」から脱出した。うーん、考えると長い辛い闘いで
あったよ。

これがみやま山荘攻防戦の全貌だ。スケールの小さな闘いだって?いや、おいら
にとっては命がけの、壮絶な闘いだったんよ。まア、どうせおいらは貧乏だから、
多分、一生このみやま山荘だろうね。でも老朽化したから、取り壊すといわれたら
困るよな。実は3年前にその危機があった。「建て替えるんで出ていってくれ」とい
われて、あーあ、おれはホームレスになるのか、と毎日泣き暮らしていた。そしたら、
その話は中止になった。ここを取り壊し、新しくアパートを建てて、それでや
るので、今のままやるとをプラス・マイナスを考えたらしい。バブルも終わった
し、新しく建て直すよりもこのままがいいか、と思ったらしい。それで、ホームレ
スになるのは免れたんですよ。でも、でも、いつかは老朽化し、廃虚になり取り壊
されるのかもしれないな。あさま山荘のようにクレーンで巨大な鉄玉をぶつけて、
ぶっ壊すのかもしれない。あーあ、やだやだ。その時こそ、本当に立てこもって闘
わなくちゃいけん。塩見さん、植垣さん、青砥さんにも共闘を呼びかけよう。

ということで今週は暗く、壮絶なお話でした。スイマセン。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張3/20

下北沢で革命映画を観たよん

「革命戦線の構築は武装闘争することである」。うん、異議ナーシ! と思った。そこで映画を観に行ったわけですよ。だってこの言葉は映画のパンフに書いてあつたんだもん。そう言えば、このHPの読者なら分かるよね。そう、「足立正生全映画上映会」のことだ。シネマ下北沢で3月1日から17日にかけて、一挙13本連続上映された。おいらは、5回分の特別観賞券を買って、毎日、下北沢に通い見ましたよ。「続死刑・予告編」「略称・連続射殺魔」「性遊戯」「女学生ゲリラ」「赤軍・PFLP・世界戦争宣言」・・・etcと。いやー、面白かったですね。感動しましたね。何で今頃、こんな過激な映画を、と思うだろうが、今だからこそ見てほしいということだろう。毎日、満員だったよ。又、追加公演をやるそうだから、このHP読者も是非見に行って下さいね。

ところで、無意識にHP「読者」と書いちゃったけど(いや、キーボードを叩いちゃったけど)、「読者」っていうのかな。よく、「HPにあそびにいらして」「おうかがいします」とかいうじゃん。何だこれはと思う。「見る」「書く」でいいじゃないか。お前が画面の中に入るわけでもないだろうし。ガキの頃やったママゴト遊びを思い出してるんじゃないの。でも、この調子でいくと、「読者」「見る人」じゃなく、「訪問客」になるのかな。又は「視聴者」になるのかな。でも、「視」はあるが、「聴」はないな。じゃ、「観客」か。あっ、「ビジター」っていうのかな。おい! はっきりさせろよ、管理人! (と急に怒鳴りつける) (乃木坂注・ROMとかアクティブというんですが)

しかし、どうして管理人だけ日本語なの? 他は、マウスとかチャットとかウィンドウズとか皆、英語なのに。だったら管理人も英語にすりやいいじゃんか。ホーム・ヘルパーとか、ハウス・キーパーとか。こりゃ別の意味になるか。じゃ、オールド・サーバントとか。

つまらんから、足立正生の話に戻る。何といっても圧巻は「赤軍・PFLP・世界戦争宣言」だよね。1971年につくられたんだ。全編これ、革命アジテーションの映画だ。よど号ハイジャック事件(1970年)の翌年に作られている。重信房子が出てきて長く喋るのもいい。貴重な映像だ。今は、よど号グループとは袂をわかったようなかんじだし、「よど号グループは仲間を肅清した」なんて発言している(産経新聞に出ていた)。そんな「発言」はしてない。ブル新(ブルジョア新聞)のデマだという人もいる。しかし、心は離れているのだろう。

だが、この映画をとった71年は、「よど号」グループに熱烈な連帯の挨拶をおくっていた。ただ、1ヶ所だけ気になった所があった。重信は、「ホクセンに行つた『よど号』の9人の同志は・・・」と言っていた。「ホクセンで何?」と近くでヒソヒソささやいている男女がいた。「分かんねーな」といっている。だから映画が

終わったあと、「北朝鮮のことだよ」と教えてやった。それにしても、「北鮮」なんて言葉、何十年ぶりにきいただろう。北朝鮮という言葉からして、使わない人が(左翼には)多い。「北朝鮮ではない。共和国と呼べ」と塩見孝也さん(元赤軍派議長)にはよく叱られる。井上周八先生(チュチェ思想国際研究所理事長)も、「共和国」という。

マスコミでは昔は「北朝鮮」と書けなかった。差別してるというわけだ。しかし今は、その下にカッコして正式国名を入れればいいことになっている。つまり、「北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)」というふうにだ。極右的連載といわれているSPA!の僕の連載でもこの原則は守られている。嘘だと思ったらバックナンバーを見てほしい。

それなのに、重信は「北鮮」といっている。「北朝鮮」よりももっとひどい。これは何なんだろう。30年前か40年前は、「北鮮が」と言う人も、ごくまれにはいた。しかし、今は右翼の人だって「北鮮」なんていわない。重信は長く日本を離れているから、昔、日本で使われた「北鮮」がポっと出たのかもしれない。「お父さんが"北鮮"といってたんじゃないですか。右翼だからその影響じゃないですか」と新左翼に詳しい管理人の爺やがいう。あっそうか。それはありうる話だ。「お父さんが右翼だなんてよく知ってたね」と言ったら、「鈴木さんの本で読みましたよ」という。あっそうか。『右であれ左であれ』(エスエル出版会)の中で重信末夫さん(重信房子のお父さん)と対談してたんだ。末夫さんは昔、井上日召の「血盟団」に参加していた。右翼テロリストだったんだ。でも、そんな純粋な父を娘は尊敬し、父も娘を誇りに思っていた。左右を超えた父子愛だ。「父子鷹」だ。

あっ、「父子鷹(おやこだか)」は子母澤寛の小説だった。勝海舟とその父・小吉の物語だ。いや、「父子鷹」はまだ麟太郎(海舟)が生まれたばかりで、ほとんど勝小吉の話だ。この続編の「おとこ鷹」では海舟も大きくなって、嫁をもらう。さらにそのあとは「勝海舟」に続く。壮大な大河小説だ。映画にもなってるが、おいらは大活字本で読んだよ。そして、重信末夫・房子のことを思つただよ。よし、いつか、この「父子鷹」を書いてやろう。続編は「おんな鷹」だな。そして、「革命家・重信房子」だな。これもシリーズ化できるか。

でも、「鷹」じゃ変か。アラブだと、さしづめ、コヨーテか。「父子コヨーテ」か。タイトルとしては、しっくり来ないな。アレつ、足立正生のパンフにコヨーテが出てるよ。唐十郎が書いている。「コヨーテの眼を光させてネゲブの礫漠に立つ足立君。流砂の東京より愛をこめて、乾杯」。へエ、かっこいい文章だね。その下には映画監督の若松孝二が書いている。「アッちゃん。帰つくんなら、また、一緒に映画でも撮るか!!」。

「又、映画をとる」なんて日が来るのかよ、と思った。と、ここまで書いたら電話だ。ウルセーな、せっかく乗ってるところなのにと思ったが、出たよ。何と、若松孝二だ。こんな偶然であるのか。でもSPA!の連載でもよくそんなことがある。書いてると文章が<言霊>になってその人間をよぶのだ。

「足立の映画、よく観に来てるそうじゃないか。でも冷たいよな。オレが出て喋る時に、直前に帰っちゃっただろう。色っぺえオナゴと一緒にいたそうじゃねえ

か。急いで帰る用事あったのか?」「いや、たまたま隣に座った女性ですよ。知らない人ですよ。ヤダナ。冤罪ですよ。そりゃー、話聞かないで帰ったのは悪かったけど、でも終電に間に合わないし・・」と弁解した。そして、「足立さんは帰ってくんですか?」と聞いたら、「分かんないが、帰されたら、旅券法違反くらいだから、日本で2年もム所に入りやいいだろう」じゃ、一緒に映画をとるっていうのも夢じゃないんだ。そうなのか。面白くなりますね、と言った。

「途中で女と帰りやがって。話があったのに。近いうちにメシ食おうや」ということになり、3月25日に食うことになった。その時は、重信や日本赤軍の最新情報を聞いてこよう。あっ、「赤軍・PFLP・世界戦争宣言」の話をしつったんだ。よど号ハイジャック、重信の他は、あとほとんどがPFLPの映像だ。射撃訓練の風景がよく出てくる。ゲリラ志願者の若者を集めて、銃の分解、組立てを教えるシーンが何度も何度も出てくる。銃を執る兵士にとってはこれは重要なんですよ。たとえ闇の中でもこれが出来ないといけない。ゴルゴ13を見ても、真夜中に、闇の中で分解したり組立てるシーンが出てくる。ブラインド・タッチが出来ないといい狙撃手になれないんだ。

僕はピストルは余りうまくないが、銃は百発百中だ。よく、タイやフィリピンやハワイ(行ったことないけど)で練習している。(乃木坂注・まずいですよ。赤報隊の件でまたガサ入れられますよ) でも、分解・組立てまでは出来ない。こんどアラブに行つた時に習わないと。でも、ボールペンの分解・組立ては出来る。闇の中でも出来る。「関係ないだろう」と爺やは言うが、それだってゲリラ兵士には大事な訓練だ。たとえば夜中、夢の中で、いいヒントがうかぶ。革命的なヒントがうかぶ。ハッと思って、目をさまし、闇の中でメモをする。その時、ボールペンの軸が甘くなっていて、ポロリと取れるかもしれない。それを素早く、闇の中で組立てなければならない。ほら、必要じゃんか。何事にもブラインド・タッチは必要なんよ。闇の中で、ブラのホックを外し、パンティを足の指でつまんでおろすことだって出来る。爺やに借りた「南極二号」を相手にして日夜練習したんだ。(乃木坂注・うえっ。もう返さなくていいです)

そうそう、柔道でも、ブラインド・タッチはやっている。寝技の練習の時、二人とも目かくしをして闘うのだ。そうすると目に頼らずに体のかんじだけで、押さえ込み、関節技をキメることができる。闇夜で闘う時にも役立つだろう。こんどおいらもやってみよう。オナゴを相手に、めかくしをして、「柔道ゴッコ」をするんだ。「尾形光琳ゴッコ」もいいな。と、意味不明のことをいいつつ終わる。

エート、「女学生ゲリラ」も面白かったんで、これも書こうと思ったら、もうスペースがなくなったね。じゃ、次回ということで。さいなら。(乃木坂注・ミニスカ・ルーズソックスのゲリラかな? ごつつい観たいっ・・とパソコンにかまけていたら、足立氏ら4人が日本に送還されたのを今知った)

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張3/27

「女学生ゲリラ」と爺やの謎

馬鹿か、この管理人は。と、おらは思つただよ。なんでかって？だって足立正生の「女学生ゲリラ」も知らんからよ。ふつう、新左翼だったら、足立正生、若松孝二の映画は全部観てんじゃないの？そんなのに、「ミニスカ・ルーズソックスのゲリラかな？ごっつい観たい」って注が入つてたよ。先週、元新左翼っていってたけど、もしかしてこいつは、「経歴詐称」じゃないのか。だったら、「査問」をしなくっちゃ。査問委員長はやはり、大作家見沢知廉だよね。(乃木坂注・更新されなくなつたら、富士の樹海に埋められたと思って下さい)

管理人の乃木坂爺やは自称「45才」「元新左翼の活動家」って言つてゐるけど、足立正生も知らんし、「PFLP」も知らんし、「女学生ゲリラ」も知らん。これはおかしい。どうせ右翼なんてアホばっかりだから、だませると思ったんだろう。そういえば年齢だって45才にしては、老けすぎとる。さらに、飲み会の時に、「山村工作隊にいた頃は・・」とか、「中核自衛隊にいた仲間が・・」なんて、ポロっともらしていた。(乃木坂注・実はポロロ事件の当事者なんです。あらら、東大卒つてのがバレちまつた) それに、「球根栽培法」とか「栄養分析表」なんて本も持つてたぞ。これは、その辺の右翼じゃ分からんが、おらには分かるだ。けっして園芸や料理の本じゃなかよ。日本共産党が昔、非合法運動をしてた頃の爆弾作りのテキストなんじゃよ。

フーン、こんな昔から、うちの爺やは活動しとつたんか。ということは、45才とは真っ赤な嘘。本当は65才なんだな。そうか。それで分かったよ。顔には生氣はないし、性欲も食欲もないといつてた。65才じゃ当然じゃろう。最近の左翼運動のことは知らんじゃろうから、教えてやるよ。そうだ、先週の続きで、「女学生ゲリラ」だ。これは1969年に作られた映画だ。31年前だから、「最近」だよね。(乃木坂注・森高千里の生まれた年だから「最近」と言えなくもないですが・・) 東大の安田講堂攻防戦が終つた後に作られた。でも、よど号事件や三島事件は70年だから、その1年前だ。連合赤軍事件は72年だから、その3年前か。ともかく連赤事件の後なら、こんな、牧歌的なゲリラ映画は作られなかつたと思うよ。

だって、ともかく、ほのぼのとしたゲリラ映画なんだ。その前に「女学生ゲリラ」の「女学生」って何だ。女子高生か、女子大生か分からん。昔は女学校というのがあったから、「女学生」でもいいが、今は、ないんだから、キチンと正しく使ってほしいよ。女子中生とか、女子高生とか、女子大生とか。

この映画では、女子高生だった。卒業式粉碎闘争の映画なんよ。卒業式で日の丸を掲げ、君が代を歌わせる。「国家の強制は許せん！」と反対運動をする。あれつ、これは国立(くにたち)高校の話だ。今、「ニュース・ステーション」を見つめていたので混同しちゃつた。でも、国立高校では「国歌斉唱」の時は生徒の半分位は座つてレジスタンスしてんのに、次の「校歌斉唱」の時は皆、勢いよく立ち上がって、元気

に齊唱している。おいおい、と思った。「校歌」だって、「強制」だろうよ。それに、こっちの方が、ずっといかがわしい。国歌を拒否すんなら、校歌も拒否しろよ、バカヤロー。「自分たちで新校歌をつくろう!」と、その位やってみろよ。高校生なんだから。それとも、誰かがいってたね。「高校生に国歌はもったいない。だから校歌だけ歌ってろ」という説に従って、校歌をうたったのか。ならば、校旗校歌だけの「自主卒業式」をやつたらいいだろう。(この説は以前、おらがいったんだっけ)。

国立高校の生徒で、マイクを突きつけられてこんなことを言ってた生徒がいたな。「国歌をうたいたくない生徒の自由があるのなら、歌いたい自由も認めるべきだ」ウーン、こりや、すごいね。正論だよね。だから、日の丸、君が代反対闘争も今はやりにくい。昔ならば、実力で粉碎すればよかった。実力で日の丸をはがし、焼いちゃえばよかった。でも、今そんなことしたら、「君が代をうたいたい自由、日の丸をあげたい自由」を侵すことになる。だから出来んのだ。そして、「君が代をうたいたい自由」の方が、圧倒的にふえてきている。さあ、どうする。反対派の諸君よ。元管理人の赤坂ばあやはどうする!たまには返事をしろよ!

そういえば、このばあやは最近出とらんな。メル友のうちの兄貴との仲をかんぐられてから、スネちゃって引っ込んでるんかな。そうだ、3日ほど前に、電話あったな。メールが使えねえから、電話してくるんだよ。赤坂だと分かったんで、反射的に「あっ、お姉さん!」と言っちゃったよ。うちの兄貴と結婚したら自動的に、おいらの「姉」になる。「でも、お兄さんには3人のお子さんがいらっしゃるんでしょう」「いいじゃないか。3人の母になれば」。さらにその3人の娘にはそれぞれ3人の子供がいる。つまり、32才の処女の赤坂は結婚するやいなや、「おばあちゃん」になるんですよ。運命の不思議だね。市民運動を長いことやって、世のため人のために尽くしてきたおかげですよ。こんないいことが一挙におこるんだ。盆と正月が一気にきたようだ。

あっ、大変だ。忘れていた。「女学生ゲリラ」の話だよ。卒業式粉碎闘争をやるんだよ。女子高校生が。「日の丸・君が代」反対のために。いや、ちがった。それじゃ国立高校だ。じゃ、何のためにこの女子高生たちは卒業式粉碎をしたんだろう。忘れた。ともかく、権威的なものは嫌いだからだろう。でもオナゴだけじゃ心細いっていうんで男子高生もさそう。オルグする。でも、世界情勢も知らんし、反帝反スタ理論も知らんから、理論オルグは出来ない。そこで、「肉体オルグ」だ。そういえば、ガキのくせに、やたらとファック・シーンが出てくる。当時のガキは、そんなにやってないはずだ。やってないから、セックスは「非日常」で、イコール「革命的」だと思ったんだろう。故に、革命映画にはファック・シーンが多いのでアール。

映画では、卒業証書を盗み出して、なぜか、山の中にかくれて、拠点をつくる。毛沢東の真似かもしれない。でも、権力と闘うわけでもないのに、山岳ゲリラになる必然性がない。警官は迫ってこないけど、学校の先生と生徒会長が迫ってきて、説得する。この生徒会長が何と、平岡正明なんだよ。特別出演なんよ。学生服をきて、本当に若いね。もしかしたら、この時、こいつは本当の高校生だったの? そん

なわけないか。「三馬鹿大将」とか「三馬鹿世界革命浪人」とか豪語して、左翼学生をアジリまくっていたんだからな。

65才の管理人爺やにはこんな「新しいこと」は分かんねーか。太田竜、竹中労、平岡正明は、「三馬鹿ゲバリスタ」といわれて、過激で、カッコよかったんだよ。平岡は、『全ての犯罪は革命的である』なんて凄い本を書いてたし。あと、西郷隆盛や石原莞爾の本も書いてたな。『大山倍達を論じる』という本もあったし、『山口百恵は菩薩である』という本もあったな。僕は、ジャナ専(日本ジャーナリスト専門学校)で久しぶりに再会したよ。3年前だ。平岡はジャナ専の講師で、「浪曲の歴史」について講義していたな。力の入った授業だったが、生徒は少なかったよ。それに2年前にやめてしまった。体調を崩したといってた。でも極真空手の二段だよ。この人は。体が弱いって本当かね。

しかし、足立正生を観にいったら、足立ら4人は日本に送還されてくるし、どんどん世の中がかわっていくよな。左翼の住む所がなくなっていくのか・・。「よど号」の人たちも、いつか帰ってくるだろうし・・。新左翼も「帰還編」というか、「望郷編」だね。

あっ、そうだ。『がんばれ!!新左翼』(Part3 望郷編)は、「解説」をかけてくれた宮台真司さんの原稿がやっと届いたので、4月か、5月までには出るだろう。宮台さんの原稿が又、すばらしい。僕の本の「解説」にはもったいないくらいの、すばらしい原稿ですよ。本文はよまなくても宮台さんの解説がよみたいっていって買う人がドッと増えるだろう。楽しみにしていて下さい。

あと、『夕刻のコペルニクス』(Part3 放浪編)は、このHPの「主張」がアップした頃には店頭に並んでるはずや。あ、「放浪編」はなかったか。あくまで「Part3」です。おまちがえのないように。それと、井上周八先生、重村智計さんと対談した『不思議の国・北朝鮮』(仮題)は4月末に発売の予定です。北朝鮮とチュチェ思想、それに国家、自由について語ってます。

ということで、又、来週。オーイ赤坂の姉ちゃん、元気かーい。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張4月3日

「七人の侍」の秘密

『夕刻のコペルニクス3』(扶桑社・1680円)が出ました。全国の書店に出てます。産経新聞(3月26日付)にも広告が出てました。ありがとうございます。「週刊SPA! の日本一危険な連載、堂々の単行本化。第3弾!」と出ていた。いいですね。特に、「日本一危険な連載」がいい。本当にそうだよね。「日本一危険なんだから「日本一売れて」ほしいよね。これは無理としても「日本十」でも「日本百」でもいいから売れてほしい。作家の夢枕獏さんが本の帯に推薦の言葉を書いてくれた。

「鈴木邦男は、右にも左にも、三島由紀夫にも『よど号』の田中義三にも、視線が熱い。左右を越えた共闘者への情が、本書を貫いている。今日の時代にあって、鈴木邦男というスタンスはまことに貴重である。鈴木さん、長生きして下さい」

いいですね。最後は何か、突然、私信のような感じで。わかりました。長生きしますよ。なんせ僕は「長生の家」出身ですから。あっ違った「生長の家」出身ですから。でも、「生長の家」はよく、「長生の家」と間違われるんですよ。「あっそこに入ると長生きできるんですか」「そういえば、皆お年寄りも元気ですね。なんて言われる。日々「生長」するということは、「長生」にもつながるんだろう。それとですね、よく「家の光」とも間違われた。何か、名前が似てるんですね。これは農協(JAだっけ?)の機関誌で100万部も出てるらしい。本屋に出てはいないが、100万人もとってるんだ。100万部といえば、日本では「家の光」と「通販生活」だけだ。

そうそう、「通販生活」ではヤコフォームの靴を買った。小田実が履いてたやつだ。「ヤコフォームと憲法9条は守っていきたい」といってた。ものごく履きやすうなので注文して買った。でも、この靴を履くと「護憲論者」になっちゃうのかなという不安もあったけど、でも、靴は履きたい。「ええい、いいや、護憲論者になんでも」と清水の舞台から飛びおりたつもりで注文した。これが履きやすいこと。横に広いんで足が楽だ。大地をしっかりとふみしめて履いてる感じがしていい。これなら五本指くつしたをはいている乾、赤坂兄弟でも大丈夫だ。

そこで、ヤコフォームを履いて3月19日(日)に、行って来たんですよ。「長生の家」じゃない、「生長の家」の講習会に。今でも年に何回かは行ってますよね。昔の仲間が券を送ってくれたりするんで。あるいは5月の全国大会のあとに「生長の家学生道場」の同窓会をやるから出て来い・・と呼び出されたりして。3月19日は谷口雅宣先生(生長の家副総裁)のご講話で、司会が田原康邦氏だ。その田原氏から「僕が司会をするんだから、ぜひ来てくれ」って言われて行ったんですよ。

田原氏は昔は青山学院大学の生学連(生長の家の学生部)の活動家だった。「なんだ青山女学院か」とバカにする人がいたが、「女子大じゃない。共学だ」と怒っていたっけ。ペギー葉山が歌う「学生時代」に出てくる大学ですよ。「薦のからまるチャペルで・・清い死を夢みた」という歌ですよ。いいね。おいらもミッショングだ。だけど、薦はなかったし、清い死も夢みなかった。ドロドロと生臭い欲望だけ

が体から出てきそうで、必死でおさえていたよ。

あっ、田原君だね。大学を卒業してから、内外タイムスに入った。優秀な記者で政治スクープを何度もやった。しかし、こんな金だ、女だ、スキャンダルだという汚れた世界は嫌だといって辞めてしまった。心が清らかだったんだ。内外タイムスのベテラン記者で、役員にもなれる時に辞めた。もったいない。でも「もっと清らかな生活がしたい」といって、生長の家の本を出している日本教文社に入った。そして今は「理想世界」という青年向け雑誌の編集長だ。

実は田原氏とはそれだけの関係ではない。青山で新左翼と闘い民族派運動をしたくらいの闘士なんだ。実は、実は、これを書いちゃうとまずいのかな。田原氏の「生長の家」における「出世」にヒビが入るのかな。でも悪いことじゃないから、書いてもいいだろう。僕らは三島事件(70年)のあと、一水会をつくったが、その時の7人の発起人のひとりなんだよ、田原氏は。「七人の侍」といわれていた(今、はじめて言った。これからはそう言うように)。他には阿部勉氏、犬塚博英氏、四宮正貴氏、田村司氏、おいら。これで7人だ。えっ、6人だって。じゃ他に誰がいたんだ。あっ、大石晃嗣か。こいつの姉ちゃんはあの有名なカメラマンの大石芳野なんよ。彼女の写真展にいって挨拶したら、「弟は別に右翼運動してたわけじゃないのよ。ひとに誘われてちょっと集会に行った程度なのよ。だから右翼だったなんて書かないでね」と言われた。「右翼の弟」を持ってると知られると困るのか。NHKに出来なくなるのか。でも、「誘われてちょっと」という程度じゃないぞ。なんせ、「楯の会」だったんだし。それに一水会設立の「七人の侍」だったんだし。その頃の写真を今度SPA!に載せてやろう。

一水会設立の経過は僕の『新右翼』(彩流社)なんかに詳しく書いたよね。三島事件の直後、昔の仲間が集まってきて、「月に一回位、集まって勉強会でもやろうか」となり、第一水曜日に集まってたら、誰いうともなく「一水会」という名前になったとか。「誰いうともなく」といったけど、はじめは阿部勉氏が言ったんだ。「まア、仮の名前として、こう付けときましょうか」と。この<仮の名前>が28年もつづくと、今さら変えられなくなっちゃった。

ところで、問題です。月に一回位集まろうといったけど、はじめはどこで集まつたんですか。これは今の一水会新代表も分からぬ。「シチズンプラザでしょう」と65才の管理人爺やが言うが、そのころはシチズンプラザはない。ボウリング場もない。(これはあったか)。「じゃ、四谷公会堂かな」と再び、爺や。おっ、ダテに年とってんじゃねえな。野村さんが生きてた頃はよく四谷公会堂の会議室で一水会の例会をやっていた。毎回、50名位集まり、一度は大ホールで「野村秋介講演会」をやった時は400人も集まつた。一水会第二次黄金時代だった。そして、今、新体制で一水会第三次黄金時代が始まろうとしている。

「ところで、はじめての会合はどこでやつたんですか」と爺や。しつこいな。でもその話をしてたのか。実は、何と、驚くなられ、この田原康邦氏の自宅でやつたんですよ。目黒にある家で、当時は田原氏のお父さんもお母さんも元気だった。「今はどうしたんですか。亡くなつたんですか」と爺や。今は? 今も元気だよ。せっかく気分よく書いてんのに、変な質問して、勢いをとめるなよ。

この時の講師が中村武彦先生だった。この時も今もお元気だ。写真をみると、田原氏の家で、皆正座して聞いている。20人か30人位集まつたと思う。「七人の侍」も勿論来ていた。今、思い出したか、この七人のうち三人は「楯の会」、四人は生学連だ。つまり、「剣と信仰」の合体した運動体だったんだね。一水会は。初めて知った。じゃ、これをスローガンにしようか。あっいけない。おいらは一水会代表をやめたんだった。どうも、ものわすれがひどくって‥。

そんな縁のある田原氏だから、3月19日の講習会に行ったんよ。あっ、思い出した。神奈川大出身の伊藤邦典も発起人に入ってたんじゃないかな。そうすると8人か。誰だ「七人の侍」だ、なんて言ったのは。無理にキャッチフレーズをつくろとするからじゃないか。バカヤロー。(と自分の中の7人のビリー・ミリガンが争っています) 邦典氏は生学連にして「楯の会」だった。滑川(なめかわ)純子さんと結婚したんだけど、僕が紹介したんだ。持丸博と松浦芳子さんもそうだったけど。そうだ、伊藤邦典にも「楯の会」当時の話を聞かなくっちゃな。「タコペ」の印税をもらったら秋田にいって聞いてこよう。彼は学生道場に入り、「楯の会」に入り、そして、むくぼ(漢字わすれた)という女と婚約し、皆に結婚の案内状を出し、指輪を買ひに行く時に、「実は‥」といい出されて、婚約を破棄されたんよ。他に好きな男が出来たらしい。それでガーンとなって、女を殺して自分も死のうかと思った。そうしたら、同じ死ぬんでも、「清らかな死」じゃないし、「決起」でもない。後に、だれかが(おいらのようだれかが)、「烈士になりそこねた男」といって、どっかの週刊誌に書くだろうよ。それじゃかわいそうだから、なぐさめてやって、「他に女はいくらでもいる。死ぬことはない。ほら、その辺にもかわいい子がいるじゃないか」といって、たまたま、そばを通った女性を紹介したら、何と、本気で付き合い、結婚しちゃったんよ。そんな話をSPA! でかこう。あっ、いけね。いい所は全部かいちゃったじゃないか。編集者の爺や(乃木坂注・以前にも言いましたが、変な体位でギックリ腰になった人) におこられるよ。大変だ。じゃ、「今週の主張」はボツだ。ボツにしろよ、爺や! (乃木坂注・いいっすよ! 鈴木さんの名前でムチャクヤなこと書いちゃお。抗議電話が殺到するようなことを)

(追伸)例のウワサがウワサを呼んでいる、評判の本、「北朝鮮の秘密」、4月末には出る予定です。ともかく、凄い。面白い。目からウロコがドバドバですよ。『秘密の国・北朝鮮』か、『ミステリアス北朝鮮』か、そんなタイトルになる予定です。井上周八先生(チュニエ思想国際研究所理事長)と、重村智計さん(毎日新聞論説委員)に僕が鋭く迫り、北朝鮮の(真実)を聞いています。又、北朝鮮を通して、国とは何か、自由とは何か、を聞いています。これは、北朝鮮論だけじゃない。日本論、日本人論になってます。混迷する「日本」が僕という体を通して、問い合わせ、闘い、絶叫してるんですよ。乞! 御期待!

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張4月10日

「神は細部に宿る」

「私の主人は脳梗塞で倒れたんです」とその人は言う。小渕首相のことではない。先週の続きだ。3月19日(日)の「生長の家講習会」の時の話だ。谷口雅宣先生(生長の家副総裁)の講話が午前と午後にあったが、その間に「体験談」発表の時間があって、おばさんが話していたのだ。「主人は56才です」。エッ、おいらと同じ年なのか。他人事じゃないな、と思って真面目に真剣に聞いていただよ。「それで右半身がマヒして、手は動かないし、さらにボケが始まったんです」。ゲッ、56才でボケるのかよ。そういえば、今は亡き管理人の赤坂にはいつも、「お前はボケ中年だ!」って罵られてたよな。しかし、ボケやマヒは治らないと思っていたが‥。でも、「主人が倒れて、入信し、やっぱり治りませんでした。ありがとうございます」では体験談の発表にはならない。少しでもいい方向にいったんだろう。でなければ壇上に立つわけがない。

この主人は倒れてから、ずっと病院に入院し、やっと退院てきてからは毎日、リハビリの連続。でも、どこに行っても、「こんなことやったって治らないんだ」と皆あきらめている人ばかり。これじゃ、かえって悪くなる。何とかしなくっちゃと焦っている時に、「生長の家」を知った。そして宇治別格本山の錬成会を行った。何ヵ月かそこで修業しているうちに、「病はない」「悪はない」という真理を悟り、天地一切のものに感謝するようになったら、スーッと病気が治った。右半身のマヒが治り、手も動かせるようになったし、ボケも治ったという。奇跡だ。万雷の拍手だった。僕もホロリとした。そして拍手をした。

こんなことを書くと、「嘘だろう」という人もいるだろうが、病気なんて、本当に治るんだ。別に生長の家だけが治す力があるわけではない。創価学会でも、立正佼成会でも治る。いや、オウム真理教や統一教会、ものの塔だって治る。心の持ちようでいくらでも病気は治る。ただ、統一教会やオウムで病気が治ると、かえって恐いかもしれない。「あっ、病気が治った。こんな奇跡が起こせるんだ。じゃ、全て本当だろう」と思って100%信じてしまう。青山弁護士も多分、こんな経過を辿って信者になったはずだ。小さな病気は治ったが、人生を棒にふった。そうなつたら、どうしようもないだろう。

この辺、統一教会はどうなんだろう。オイ! ちゃんと教えるよ、チョコボールいぬい! 頭痛が治ったとか、神経痛が治った、腰痛が治った‥とか。そんなことで入信する人も多いんだろうな。ちょっと具体例を教えてくれよ。

病気が治るのが奇跡ならば、病気になるんだって奇跡だ。ほんの小さな、ちょっとしたこと、心のイライラなどで病気なんかになる。ということは、逆のことだってあって当然なんだよ。おいらも、暗示にかかりやすいから、カゼ薬のCMを見ていて、「グッシュン、グッシュン」としているオバちゃん見てただけで、ゾクゾクっときて、「あっ、いやだな」と思い、かぜをひいちゃう。ひよわなんだよ。小渕さんだって、小沢と話し合ってイライラして、カーッとなって、そんで倒れた。よ

ど号グループの田宮高麿さんだって、日本から来た支援者と論争して、カーッとなつて頭に血が上つて、倒れたといつた。だから、病気なんて、(心)がおこすんですよ。ということは、逆からいうと、(心)で病気が治るということだ。又、これは僕のように冷静に、客観的に、突き放して見る人よりは、はじめて「生長の家」の話を聞いたといつた、素直な人の方が効果がある。信仰も長くやってくると、病気も治りにくくなる。いろんな、世俗の智恵がついてくるからだ。宗教の勉強をすればするほど、病気は治りにくくなる。生長の家の先生でも他人の病気は簡単に治すのに、自分の病気を治せない人がいる。又、他の家庭の親子問題や、嫁姑問題などはいとも簡単に解決してくれるのに、自分の家庭のことはうまくいかない人もいる。だからその先生はダメだというわけじゃない。他人のことは、ズバリといって直せるのに、自分のことになると、そうはいかないからだ。おいらも、他人の病気はよく治してやってるが、自分では治せないで、力せばっかりひいてる。(乃木坂注・変な体位でギックリ腰になった河井さんも治してあげて下さい)

3月19日の「生長の家」の講習会では、雅宣先生の御著書『ちょっと私的に考える』(日本教文社)を買ってきて今、読んでいる。なかなかいい。それと、昭和5年に出た、「生長の家」誌の創刊号の復刻版が売ってたので買ってきた。これは貴重だ。

それで、しばらくは宗教的な雰囲気にみたされて、清々しい生活を送つとったんですよ。そしたら、それから3日後、「生長の家」の昔の仲間から電話があった。「鈴木さん、小堀先生を知っていますよね?」といつた。「亡くなったの?」といつちゃったら、本当にそうだった。その日、葬儀だといつたので、あわてて小田急線に乗つて相模原市に行った。昔の仲間がたくさん来ていた。お坊さんは呼ばないで、生長の家の先生が「甘露の法雨」というお経をよみ、みんなも一緒に読む。

それでも早すぎたよね。57才だといつた。随分と先輩かと思ってたらおいらと一才しか違わなかつたんだ。小堀隆さんには本当にお世話になつた。北海道の教化部に勤めていて、その後、上京し、生政連(生長の家政治連盟)に入った。いい先輩だったし、よくおごつてもらつた。去年は和田亨さんが亡くなるし。北海道の人も淋しくなる。「岩田先生、高橋淳一さん、和田亨さんと、本当にいい人ばかりが亡くなりました。小堀さん、あなたはすごい。そんないい人にこんなに早く会いに行くなんて」と弔辞を述べてゐる人がいた。うーん、気持ちは分かるがなーと思った。そんなにうらやましいのなら、お前も行けよと思つちゃつた。

おいらの弔辞はですね‥。

「本当におせわになりました。そして力づけてもらつた。今でも思い出すのは、僕が全国学協を追い出されて、失意のドン底にある時でした。"北海道にきなよ"と誘つてもらい、一週間位、車に乗せてもらい、旅をしました。ただの旅行だったのか、あるいは生長の家の仕事で各地を回つてたのに乗せてくれたのか、今では思い出せない。多分、後者だったろう。カララジオから奥村チヨの"恋の奴隸"が流れつた。"悪い時はどうぞぶつてね。あなた好みの、あなた好みの女になりたい"という歌詞に二人で大声で笑いました。車のCMもかかつていて、速く走るのを強調してたんでしょうね。"走るというより飛ぶ感じ"といつてた。そんなバカなと思わず

言っちゃった。今ならこんな誇大宣伝は許されないでしょう。そんな時、小堀さんが運転しながら、ポツリと言ったんです。"同じ乗るんなら車より女の方がいいな"。エッ、何だと思ったんです。だって、生長の家の先生ですよ。そんな不謹慎なことを言うなんて、と呆然としました。いかに、自分の奥さんの乗り心地がいいかを話すんですよ。僕は純真だったから、"やめて下さいよ"と叫びました。でも今考えると、破天荒でスケールの大きな、心のあたたかい人だったと思います」

それで弔辞はおわりだ。列席していた人は驚いたろうな。いや驚かなかったよ。これは自分の心の中で言ったんだ。小堀さんだけに聞こえるように言ったんだから。「そんなこまかいことをよく覚えているね、鈴木君」と小堀さんは笑っていた。

他にはどんな話をしたか覚えてない。多分、宗教のこと、政治のこと、人生のこととも話したんだろう。しかし、こうした大きなテーマは全て忘れた。奥村チヨと、「走るというより飛ぶ感じ」と、「同じ乗るなら車より女の方がいい」・・のこの三点だけだ。やっぱり、「神は細部に宿る」って本当なんですね。

そうだ、今から20年位前、デパートガールのヒモをしてた時だ。一緒に生活してたんだけども、朝おきたら、「ねえ、クニ君、見て、見て!」という。「こんなにカールがうまくいったの。ルンルン」と一日中、ウキウキしている。そんなことで何がうれしいんだと思ったが、やっぱ、「神は細部に宿る」んだよね。ほんの小さなことで人間はハッピーになれるし、逆に、ほんの小さなことで不幸になったり、絶望し、自殺したりする。「あなたなんかキレイよ」といわれたり、「きたない」といわれただけで自殺した人は一杯いるよ。(小さなこと)が大事なんだよ。

ということで、おいらの今週のご講話はおわりです。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張4月17日

編集人と志賀直哉の謎

「噂の真相」(5月号)にはショッキングな記事が出てたよ。「封印された『赤報隊』事件は現職警察官の犯行だった」。神奈川県警の警察官だったらしいですよ、犯人は。それも、野村秋介さんの「元運転手」が告発している。なんとも凄い話だ。これが本当だったら、「容疑者」とされていた僕らの人権はどうなるんだ、どう賠償してくれるのだ。詳しくは本を読んでもらうとして、この警察官は過激な右翼思想の持ち主だったというし。普通、犯人を特定する場合、「動機」と「実行力」の二つから絞り込む。いくら動機があっても、銃の撃ち方を知らない、銃を持ってない、では犯人とされない。新右翼関係者は、「動機」があるが、「実行力」はないから、シロとされた(いや、灰色か)。その点、この警察官なら両方ともに備えている。又、事件の日は全て、休みをとっている。ウーン、すごい、これで赤報隊事件は解決か。

だったら、「右翼説」をいってきた人々はどうなるんだ。でも、まだまだ二転、三転するかもしれない。事件はいまだに五里霧中、藪の中だ。

いま、週刊SPA!で「三島事件」を書いてるが、当時の「楯の会」関係者に話を聞いても、かなり食い違っている。又、僕が「こうだ」と思い込んでいたことが覆されることもある。芥川龍之介の『藪の中』と同じだ。事件は一つなのに、各人の証言、見方、評価が各々違い、いっぱいあるのだ。又、「スコラ」で、見沢知廉が僕と木村三浩氏と対談しながら、15年前の「スパイ査問事件」について書いてたが、あれも三者三様、まるで「藪の中」だった。事件後、自首をすべきか、逃がすべきか・・。当事者たちの「証言」も違っている。「12年間、刑務所でそのことばかり考えていたんだから俺の記憶が一番正しい」と見沢は言う。しかし、そういうものでもない。一人でじっと考えてたら、自分の「思い込み」は全て正しくなり、訂正はきかなくなる。この事件も、いつか、「真相はこうだ」という全く別の話が出るのかもしれない。

たった15年前や30年前のことだって、分からぬんだ。戦争中のことはなおさら、藪の中だろう。そして、思い込みや、伝説や、作り話も生まれる。(乃木坂注・「ディズニーランド反対運動」をしていたある団体の前会長は、ディズニーランドが完成するやいなや、女連れで遊びに行ったという「伝説」もあります)

ここで、話はこのHPのことになる。ある雑誌の編集者がギックリ腰になった。これは本当らしい。どっかのバアやさんがそれを証言した。このバアやさんとギックリ腰には因果関係があるのか、ないのか。「いや、もっと若い女と寝てた時の話だ」という証言もある。ともかく、寝床でなったらしい。「無理な体位をしたらしい」という人もいる。「48手だけではもの足らず、裏48手の一つ、逆松葉くずしをやったらしい。"イヌブタ・スペシャル2000"をやったらしい」という証言もある。噂は噂を呼び、謎は謎を呼んでいる。そして20年後、このことは、いろんな本に書

かれるだろう。「はたして 逆松葉くずしとは何か。あるいはこんなものなのか」と、写真入りで想像、解釈がでたりする。大事件になる。このHPもその時の「証拠」となるだろう。「ほら、爺やもこう証言している」「17才の少女と交わってる時の事故だ、と真理バアやも証言してるぞ」・・と。(乃木坂注・独り舌技説もある) そして、「歴史」はつくられる。「歴史」なんて、そんなもんですよ。「薮の中」を笑えないんですよ、おいらたちもみんな、薮の中にいるんだ。「みんな、薮の中」という歌もあったね。「みんな、夢の中」だったっけ。

ここまで書いたら、その編集者から突如、抗議が来た。パソコンで打てるから、そのまま「盗聴」(盗視?)されるんだ。困るな、盗聴が合法化されてから、誰でも盗聴できるようになってしまった。その「盗聴」した編集者が言うんだよ。

「僕のギックリ腰なんか歴史に残りませんよ。下らない」。いやいや、将来、彼は有名な作家になって「昔、こんなことがあった」と本が出るかもしれない。あるいは、「鈴木邦男攻略本」が出て、その中で、とり上げられるかもしれない。断言する。きっとそうなる。おいらは予言者だ。

「こんな、どうでもいい話が後世に残りますかね」と彼はいう。残るんです。ささいなことでも、下らないことでも、それが謎をはらんでいれば残る。神は細部に宿るんです。だって、志賀直哉だって、「小さな謎」があるから、今も人気があるし、残っているんだ。「志賀直哉って"小説の神様"っていわれたんでしょう。あんな清らかな、聖人君子のような人にも、謎があるんですか」と、「謎の編集者」は言う。あるんだよ。謎ばかりなんだよ。

志賀は、作品数は極端に少ない。今は売れてるが、生きてるうちは口クに売れないと。収入もない。じゃ、どうして食ってたか。親に食わせてもらってたんだ。パラサイト・シングルだったんだ。いや、結婚してからも親に食わせてもらってたから、パラサイト・ダブルだ。でも、親に寄生はしてたが、家にひきこもっていたわけじゃない。芝居に行ったり、遊廓に行ったりして遊び回った。小説をかくための人生勉強といってたが、なに、ただの遊び好きだったんだ。

「城の崎にて」という短編がある。すばらしい小説だというので、小説家希望の人は皆、原稿用紙に一字一字うつして書き、練習している。見沢もやった。おいらもやった。城の崎は温泉場だ。志賀は東京で電車のホームからおちて足を怪我して、それで療養のために行ったのだ、と思っていた。でも通院がのびて、かなり後で城の崎にゆく。高校の国語ではそう習った。ところが違う。その怪我は治ったが、性病の病院にも通っていて、そっちが治らないので、城の崎にいくのはおくれたのだ。足の怪我の治療か何か分からんよこれでは。まア、これも足の治療かもしれないけど。(乃木坂注・真ん中の足ということですか?)

「それと僕のギックリ腰とどう関係あるんですか」と編集者は文句を言う。まア、まアあせんないで。その志賀には不朽の名作『暗夜行路』がある。中学や高校の国語教科書にも出てるが、じつは、かなり、エッチなんですよ。遊廓で女と遊び、赤坂ばあやのような巨乳おんなを抱いて、「豊年だ! 豊年だ!」と叫ぶ。もちろん、志賀じいやの実体験ですよ。これは。じっさいにやった人間じゃないと書けない。

さて、一つ一つ、エッチな場面を紹介してたらキリがない。問題は次の所だ。

「坂口が旅先で死んだらしいと聞く。何で死んだのかと友人の宮本に聞くと『播磨をやったそうだ。到頭やったネ』という」

これが有名な「播磨問題」だ。「暗夜行路」の謎であり、志賀直哉の謎だ。

播磨とは、やってはいけない「体位」のようだ。キルケゴールがいった「死にいたる体位」だ。いらい1千年(そんなにないか)、志賀直哉研究家はこの謎にとりくんできた。SPA! (96年5月22日号)で四方田犬彦も、この謎に挑戦している。「シックスナインじゃないか」「首をしめるんじゃないか」「アナルセックスじゃないか」・・と。阿川弘之は生前、志賀に聞いたそうだ。志賀は言った。

「あれは言葉だけが夢に出てきたんで、具体的にどうという形態は何もない。しかし、夢の中ではハリマと仮名だった。それを作りに書く時、国の播磨(磨)という字に直したのは、ある意味で弱くしたんだ。いろんな人に聞かれるけど、こっちはそれ以上は説明のしようがないんだよ」

何とも要領をえない説明だ。でも夢の中で、「形態(体位)」も浮かんだんだろう。あるいは自分で研究してる時に、発見したんだろう。「これは新しい形態だ」と思った。いつかは、詳しく書こうと思った。しかし、他の人から、「もうすでにある体位だ」と教えられ、ガックリした。だから阿川には「みんな夢の中」と歌ってごまかした。こんなところだろう。おいらの推理に狂いはない。だてに「火曜サスペンス劇場」を60年も観てるわけじゃない。おそれいろ、志賀め。

と、これはおいらの推理。それはそれとして、「播磨問題」は今後、何百年も謎のまま、語りつがれるだろう。と同時に「ある編集者の謎」として、「逆松葉くずし」(あるいは「逆松葉」「乱れ松葉」と呼ばれることがある)のことも長く語り伝えられることになるだろう。おそろしいことだ。こうして「謎」は生まれ、「伝説」は生まれるのだ。その歴史を皆は同時代的に体験しとるんよ。何という幸せ。

そうか、播磨は薬物かもしれないな、と今、急に思いついた。大麻かなんか吸つて、いつまでも、どこまでも入ってゆく。あっ、私も天国に行けそう。おいらもだ。といってる間に天国に行ったのだろう。あるいはSMプレーという可能性もあるか。よし、今年は「志賀直哉研究」に没頭し、一冊書いてみるか。

[HOME](#) [BACK](#)

「今週の主張」 4.24

「僕がサラリーマンだった頃」

お待たせしました。真理バアやも首を長くしてまってたんですね。そうです、『がんばれ!!新左翼Part3・望郷編』(エスエル出版会)が、いよいよ出ます。今度は本当です。だって、ゲラが出てきて、もう半分、校正したんです。それに、「解説」はあの、日本最強の論客、宮台真司さんが書いてくれたんです。これが実にいい。感動的な文章です。この解説だけで売れるでしょう。なんなら、「Part3」は宮台真司著にしちゃえばいい。それだけ力のこもった、そして長文の解説ですし。で、僕の文章は「付録」として後につける。いや、宮台さんの文を「本文」にして、僕のは「解説」にする。「いやに長い解説だな」と読者は思うかもしれないが‥。

これはいい。これなら爆発的に売れるだろう。エスエル出版会の黒田さんに提案したら、あきれられた。「自虐的ですね。鈴木さんにはプライドっていうものがないんですか!」と。いいじゃないか、卖れたら。エスエル出版会のことを考えて言つてんのになあ。画期的な売り出し方法だと思うのになあ。

宮台さんの「解説」もいいけど、僕の文も面白いよ。校正していく、ついつい、読みふけっちゃって、校正にならない。二回見たんだけどまだ校正ミスがあるだろうな。よし、今度は爺やにやってもらおうか。でも、この爺やはパソコンやインターネットなどの機械は詳しいが、生きた文字のことは余り分かんない。そうだ、「自動校正機」が出来ないかな。毎回、毎回、大変だからさ。誤字、脱字を直すだけじゃなく、その作者のクセも覚えて、直してくれるとか。そうなつたらいいのにね。

「何いってんですか。鈴木さんは昔、校正のプロだったんでしょう」と爺やに言われた。そうか、忘れていた。そうだったんだ。昔、産経新聞広告局校閲課にいたんだ。「何だ、広告の校閲か」と思う人がいるだろうが、編集局の校閲よりも広告局の校閲の方が大変なんだ。お金がからむ。ミスったら大変だ。だから必死だ。朝から晩まで目を皿のようにして読む。見る。見る。読む。おかげで目が本当に皿になっちゃった。それに当時は、ゲラが「青焼き」で回ってきた。印刷が悪くて見づらい。でも、お金がかかってるから、細かい字を必死になって読む。原稿と付き合わせて、神経をすり減らして読む。今考えてもシンドイ仕事だった。おかげで視力はガックリと落ちてしまった。それまで2.0あった視力が1.3になっちゃった。ちくしょう、視力を返せ!と叫びたいよ。

この校閲課には、1年半位いたけど、自分の人生の中で何か役立ったのかな。全く役立ってないような気がする。文学作品の校閲をしたというのなら、文学が頭に入り、自分も文章がうまくなるとか、情操が豊かになるとか、人間や人生が分かるようになるとか‥。いろいろ得になり為になるだろう。でも広告の校閲じゃな。「駅からたったの9分。緑ゆたかな理想のマイホーム」とか、「パチンコ、店員募

集」 「幸せを呼ぶペンダント」 「つけてるだけで女が寄ってくるブレスレット」 ・・とかだもんな。それで、ちょっとでもミスすると課長や部長に怒鳴られるし、始末書をかかされるし。いくら書いたか分からんよ。

「ダメじゃないか。もっと身を入れて校正してくんなくっちゃ。今度、一字ミスするごとに千円ずつ給料から引くからね」という。そんな。何も、わざとミスしてんじゃないのに。ひどい。それで思わず言っちゃった。「じゃ、当てる分はお金もらえるんですね。いいですよ、当てる方が多いんだから」。そうですよね。ミスなんて、千字のうちに1字位ですからね。「ウルサイ! 理屈をいうな。早稻田を出たと思って威張るんじゃない!」。何も、威張ってないよ。自虐的にペコペコあやまってんのに。「大体だな、大学の時に左翼と闘ってきたというから、特別に裏口入社で入れてやったのに。根性があって有能だと思ったのに・・」ハイハイ、無能で申しわけございませんでしたね。今考えても本当に無能社員、ダメ社員だった。こんなアホ社員にムダメシを食わせていたんだ。産経も大変だったろう。申し訳ない。

そうだ、広告の校閲ミスがあると、必ず「お詫びと訂正」が出る。それが一番多かったのがおいらだった。自慢じゃないが、産経はじまって以来といわれた。(ホント、自慢じゃないですよね、トホホ・・爺や)。アッと今ひらめいた。産経新聞から『新聞記者・司馬遼太郎』という本が出ている。司馬は生前、産経の記者だったんだ。そこで死後、作家になったんだ。あれ、変だな。そうか、「生前、記者だった」と書いたから間違ったんだ。生前だけど、若い頃、記者だった。そして作家になった。記者だった頃の仕事ぶりや、又、その時に書いた記事を集めて本にしたんだ。

だったらおいらも出してもらおう。『広告校閲者・鈴木邦男』。いいねー。まず、元同僚や上司の声を聞く。「ダメだったねー、あいつは。全く使いものにならなかったよ」「いつもミスばかりやってて、どれだけ産経に迷惑をかけたか分からんぞ」「ショッちゅう、『お詫びと訂正』を書いてたよな。その『訂正』の中にさらに校正ミスがあって、もう皆、あきれて声も出なかつたね。その企業はどうしたかって?勿論、広告を出すのはやめちゃって、読売にいったよ。鈴木のアホは売国奴ならぬ売社奴だよ。愛社精神はないし、反社分子だったよ」

うーん、シビアなこと言いますよね。でもこれは全て本当だ。歴史だ。「お詫びと訂正」をさらに校正ミスしたというのも本当だ。こんなことをやらかしたのは自慢じゃないが、おいらくらいだ。(乃木坂注・『がんばれ!!新左翼Part3』の校正は大丈夫ですか?冒頭で「半分」となってますけど)

『広告校閲者・鈴木邦男』には、さらに僕がミスった原稿も全部載せる。膨大な量だ。勿論、「訂正」をまちがった歴史的文章も載せる。うん、面白い本になるだろう。面白くないって? そうかな。でも、この本の校正はおいらが又、やるのかな。やっぱ、校正ミスだらけだったりして・・。やっぱり、そんな本、売れないかな。面白いと思うんだけどなー。広告局では他に、「SDM」と「地方整理」にいたよな。SDMは「サンケイ・リビング」っていう無料新聞を配るおばちゃんを集めるところだ。地方整理は地方版の広告を組んだり、行数を計算したりするところだ

よ。

広告局の前は販売局にいた。開発センター、計算課、増減課、担当員助手、それに新聞配達を2ヶ月(一回は研修。一回は夜逃げした販売店にいって)。これだけの部署を4年間で回った。無能で、使いものにならなかったから、タライ回しにされたんだ。くやしい! 「普通なら、1.2回の配置がえで、気付くんじゃないですか。会社は自分を必要としてないって。それを、9回もタライ回しされてよくいましたね。プライドがないんですか」と爺やは言う。やだな、エスエルの黒田さんと同じことを言うよ。ハイハイ、どうせ、おいらは無能ですよ。役立たずですよ。社会の嫌われ者ですよ。プライドなんて全くありませんよ、だ。

それにだよ、当時は「無能だからタライ回しにされてる、なんて思わなかったんだ。きっと将来、幹部になるから、そのために多くの部署を見せておこうと上の人は考えてるんだろう、と、おいらは思ってただよ。素直というか、純真というか。こんな純真な若者を「無能だから」といってタライ回しにし、あげくはクビにするなんて・・。ああ、世の中には神も仏もないものか。(乃木坂注・鈴木さんが有能だったら、一水会も新右翼の隆盛もなかたし、見沢さんの・・以下自粛)

でも、クビになったおかげで、今はものを書いたり、好きなことをやっていられるんだし。産経には感謝しなくっちゃ。それに、販売局の計算課にいた時の体験は今でも役立ってるよな。今ならパソコンだろうが、30年前だから、算盤なのよ。朝から晩まで、ただひたすら、算盤を打っていた。あっ、ちがった。パソコンは「打つ」だが、算盤は「打つ」じゃない。算盤を入れるというのかな。腕に黒い事務カバーをはめて、ひたすら算盤を入れてるなんて姿、とても想像できないでしょう。でも、やってたんですね。算盤は小学校の時にやっていて、5級をとってたから、足し算、引き算はおろか、何と、掛け算、割り算まで出来るんだ。でも、何十年もやってないから、会社に出勤前に、早くおきて家で、練習してたんよ。算盤の練習帳を買ってきて、パチパチと。

その時は、元「楯の会」の阿部勉氏のアパートに同居してたんよ。「楯の会」の事務所もかねてたから、いろんな奴が来てた。倉持清もよくきてた。(「SPA!」で最近取材した奴だよ)

毎日酒盛りしてたな、こいつらは。おいらだけ早く起きて算盤の練習をしてると、倉持が、「ほう、鈴木さんもすっかりサラリーマンですね」とニタニタ笑ってながめていた。チクショーと思った。その倉持だって今は仕事一筋だ。ミキブルーんを売っている。不動産の仕事もしてたらしいし、今は浄水器の販売もしている。

「SPA!」の取材で久しぶりに会った時は、その会社にいった。ちょうど訪問販売のおばさん達を前にして講習をやっていた。

「人間の体の90%は水で出来てるんですよ。だから、水をかえると人間も健康になるんです。これは三島先生もいってました。このきれいな水を飲むようになってから僕も皆に"きれいになったね"と言われてるんです」。

よう言うよ、と思った。でも、後で飲ませてもらったらうまかった。急にきれいになったような気がしたよ、おいらも。

「バリバリ仕事してるじゃないか、昔は俺が算盤入れてたら、バカにしてたくせ

に」って言ってやったよ。「いや、この仕事は三島先生のご意志です」って言った。ちょっと神がかり的だったな。そうだ、算盤の話だね。今でも役立っていて、税務署に確定申告する時なんて本当に役立ってるよ。そうだ、『販売局計算課・鈴木邦男』という本を出すか。こっちの方が面白そうだ。えっ、やっぱり、ダメ?

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張5月1日

憂国の詩を書いただよ

フン、そうですよ。どうせ、おいらは卖れないライターですよ。卖れないけど、原稿は毎日買いてるだよ。「世界一、ただ原稿を書いてるライター」といわれてるな。「誰がそう言ってんの?」。ウルサイ、背後霊の赤坂め、こんな時に出てくるんじゃねえよ。『がんばれ!!新左翼Part3』や、『不思議の国・北朝鮮』は何とか(多分、きっと、そのうち)出るだろうけど。あの本は出ない。10冊以上も、書いてんのに、出してくれない。もう、すべて、ただ働きだ。又、最近は「有料」原稿の注文が少なくて、「無料」のただ原稿ばっかり頼まれる。そして、アンケートばっかりだ。「20世紀最大の政治家は誰?」「最大の発明は?」「一番魅力的な女子アナは?」・・・etc。忙しかったら答えなけりゃいいんだろうが、断ったらもう仕事がこないと思うから、全て答えてるよ。そんなのが月に4つも5つもある。あーあ、ただ原稿ばっかり書いてるよ。10件に1つ位、「図書券」を送ってくるとこがある。そうすると、うれしいね。あ、原稿を書いてものをもらった、まるでプロのライターみたいだって感動するんよ。それに、けっこうアンケートも書くの大変だよ。こまかく書かされて、理由など書かされる。「そんなら書かなきゃいいじゃないの」。だから、もう仕事こないと思うから不安で書くんだよ。ひっこんでろよ、赤坂!

そうだ。アンケートの時は、ただでもいいけど、「抽選で図書券が当ります」とかやればいい。「20世紀最大の思想家は」・・・なんてのに答えたなら、その人の中から抽選で(読者の人気投票でもいいや)、当るようにする。現金か、図書券か、切手か、何でもいい。原稿書いて、当たったら現金がもらえるなんていいな。でも、ハッと気がついた。原稿書いてお金をもらえるのっていうのは、プロのライターとして当然じゃないか。おいら以外は、みな原稿を書いたら、その分、お金をもらっているんだ。チクショ、くやしいな。

といいながら、今、出てる月刊『現代』のアンケート特集にも書いてる。「これから期待できる若手」特集だったかな。歌手とか作家とか、俳優とか・・・。こまかく書かされた。「期待できる若手はおいらだ」と書こうと思ったら、「40才までの人をお願いします」と<注>があった。何だこれは、年齢差別だ。爺や差別だ。管理人の乃木坂爺や、赤坂バアやは怒れ! おいらもついでに怒るぞ! (乃木坂注・赤坂バア やも40過ぎでしたか・・・知らんかった) これからの日本は長寿社会だといいながら、こんなとこで差別してる。ゆるせん。あっそうだ。このことを書けばよかったですよな、『現代』に。

それと、『週刊ポスト』のGW号の「女子アナ特集」にも書いてるよ。「胸のきれいな女子アナは?」「足のきれいな女子アナは?」・・・と。もう、4回位、女子アナ特集では書いてるよ。女子アナの「権威」だね、おいらは。「女子アナ評論家」になれるかな。本屋で探して『女子アナ名鑑』なんて本を買ってきてまで研究してるよ。となりにあった『女子校制服図鑑』というのを参考のために買ってきて、(乃

木坂注・私はCD-ROMを持っています。特に玉川聖学院の制服が好き♪）線を引きながら読んでるし・・。

そうだ、女子アナのアンケートも、答えてくれた人の中から抽選で当たるようになればいい。何が当たるかって？もちろん、女子アナですよ。競馬やパチンコだって、当たりや、景品がもらえるんだ。そうしてくれよ。ついでに「レコンキスタ」の原稿や、このHPの原稿も、だけで書いてんだから、何か当たるようにしてほしい。それはムリかな。「主張」や「掲示板」に書きこんでる人の中から抽選で、「真理バアや」か「赤坂バアや」が当たります！なんていいじゃん。エッいらないって？そりゃないよ。バアさん差別だよ。

と、以上は本題に入るためのマクラだ。マクラは頭におくから、マクラっていうんだって。話の頭(はじまり)におくからだよ。分かったか、赤坂め！おそれいろ。頭(ず)が高い！

で、「本題」は何だっけ。アタマだけで終わりかな。ただの原稿ばっかり書いて、ビンボーで、本も買えない(ムリして女子アナと制服図鑑は買ったけど)。映画にもいけないし、好きなタバコも吸えないし、好きなパチンコや競馬、競輪にも行けない。好きなマージャンもやれない。しかたがないから、図書館で本をよみ、勉強ばっかしている。いくつになっても、おいらは「受験生」じゃないか。と、高石ともやの「受験生ブルース」を歌い出す。「僕はかなしい受験生・・」。あっそんなことしてらんねえよ。ただの原稿を書かなくちゃ。そうだ、ただの原稿のハイライト、本題の詩だ。

誰かが「掲示板」で書いてたけど、アンケートだけじゃなくって、今度は「詩」を書かされたよ。生まれてはじめてだよ。いい経験ではあるけど。2年ほど前に、「週刊朝日」に「四コマ漫画」を描かされたことがあったけど、あれ以来の「新分野挑戦」だな。そうだ、「SPA！」で「憂国ギャル」の主題歌を作詩したことわかったか。

あっ、とここで大変なことに気がついた。その作詩が潜在意識の底にあったんだよ。だって今回書いた詩のタイトルは「ゆうこく」っていうんだ。自分でも気が付かなかっただけ、あの時の作詩の「続編」のようになつた。じゃ、いっそ、「ゆうこく・Part2」とか、「プレイバック・ゆうこく」にすりやよかったです。

では、話を戻して、高校の詩集の説明からするよ。毎日新聞(3月30日)に、デカデ力と載ってたんで、見た人もいるだろう。こんな見出しだ。「キャスター、教師、主婦ら100人の詩集め"平成の万葉集"発行」「都立九段高校生が集めた現代人の怒り、恋、喜び。マンヨーシューニ〇〇〇」。

この見出しで全てが分かるだろう。高校生が、いろんな人たちに直接電話して詩を依頼したのだ。おいらのとこだって、突然高校生から「詩を書いて下さいよ」と電話があった時は、ビックリしたよ。「やだよ」といったのに、ムリヤリ承知させられた。気が弱いから、高校生にもすぐに諭破されて、書くハメになつただよ。毎日新聞の記事をちょっと紹介するね。

<目次に名を連ねるのはニュースキャスターの筑紫哲也さん。新右翼「一水会」代表の鈴木邦男さん。ミュージシャンで「叫ぶ詩人の会」代表のドリアン・T・助川

さんら100人。(中略)昨年の都知事選に立候補して落選した政治家(注:柿沢弘治だよ。かわいそうに名前は出してくんないんだ。選挙運動につながると思ってかな)は、「戦破れ無官となりしこの冬も 窓辺に近く寒桜咲く」と短歌に心境を託した。

「一水会」代表の鈴木さんは「ガングロ」(顔の黒い意)の女子高生を宇宙人に見立てて「まぶたの裏では、さっきの宇宙人を斬りすてている僕がいた」。さらに「日本人はどこへ行った。サムライは、どこへ行った。こんな日本、滅んでしまえ」と、今の社会へのいら立ちをストレートに表した>

なかなか(右翼)っぽい詩ですね。「右翼ってこう思われるんだろうな」という世間の期待に見事にこたえた作品になってますね。サービス精神も充分だし。うん、いいですよ。あっ、おいらの詩だっけ。客観的に批評しちゃいけんのか。「こんな日本、滅んでしまえ」なんて、「憂国ギャル」の歌にもこんな箇所がありましたね。やはり、「Part2」のような感じになりましたね。

でも、大変だったよ、書くのは。歌の作詩も大変だけど、こんどは「平成の万葉集」だからね。千年後には古文の教科書に載るだろうし。必死になって考え、書いたんですよ。はじめはめんどうだし、どうせ誰も読まんだろうし、原稿料もないし、そうだ管理人の爺やか赤坂バアやに書かせようと思っただよ。でも、歴史に残るかもしれないしな、と思って、必死で書いた。しかし、柿沢弘治や筑紫哲也、ドリアンなんて、皆、本当に自分で書いたのかね。「どうせ誰も読まんのだ、おまえ、適当に書いとけよ」と秘書か何かに書かせたんじゃないの。

その点、おいらは、真剣に書いただよ。(一瞬、爺やに頼もうかと思ったけど)。しかし、まさか毎日新聞に載るとは思わんかったな。しっかりした高校生たちだから、もっと自分たちで売り込んでんだろうな。文芸部の松永君と比田井さんの写真までしっかりと写っている。

<松永君は「右翼の人もニュースキャスターも、我々が思っているほど遠くにいるわけではなかった、と話している>。

この特集は、松永君が「前がき」を書き、美月さんが「後がき」をかいている。文章がうまいし、立派だ。やけにしっかりしている。うらやましい。最後の詩は絶叫詩人の福島泰樹が書いている。こんなプロも書いてるのかよ。タイトルをみて、又もやおどろき。「天馬よ翔けろ」。ゲっ、すげえ、だって。この天馬とは松永君の名前なんだ。

< 日の丸の次にくるもの濃き霧の 行軍をする君らに目に見ゆ
われわれの時代のわれはわれたらず状況を噛むわれわれである

天翔ける馬にしあれば松永君 この略奪の歴史を許すな >

うっ、凄い。高校生の天馬君をこんなに絶賛し、持ち上げている。おいおい、いいのかよと思った。こんなにほめてくれんのなら、おいらも自分で詩集を作ろうかな。そして、筑紫哲也、柿沢弘治、ドリアン、福島泰樹・・らに頼む。そんで、

「平成古今集」にする。そしたら毎日新聞でも又、大々的にとり上げてくれるだろ。いや、ダメかな。「右翼の鈴木が依頼したけど、誰も応じず失敗」なんてことになるか。高校生だから、皆、協力してくれるんだろうな、クヤシイ。じゃ、大仁

田君のように高校に入って、「文芸部員・鈴木邦男」として詩集をつくりやいいんだな。

そうだ、この天馬君、自分の詩ものっけてるが、「クロニクル二〇〇〇」という、むずかしい詩だ。「僕なんて居なかった。皆さん、僕なんて存在なんてしない筈の 人間についての記憶の片(かけら)を。手繰り寄せて、捏ね回して、僕を立ち上げようとする皆さん」「女に合鍵を差し込んで、僕を増殖するだけの、眼玉に夕陽を差し込んで、涙が落下する。僕が落下する」ヒヤー、おいらの詩よりもずーーっと深いよ。哲学的だよ。「女に合鍵を差し込んで」なんて、ドキッとするような表現だな。後生おそるべし。高校生に完敗したよ、おいらは。と、失意の中で今週も終わる。

そうそう、忘れるところだった。この詩集には何と「幼稚園児」なんてのも入っている。

「わかんない、いやなおまつりでおみこし。これでおしまい」。凄い! さらには「読み入しらず」というのもある。きっと停学中で、学校側に名前を知られてはまずい人間なんだろう。

【お知らせ】

4月27日(木)にテレ朝「ニュースステーション」の取材を受けた。例の「赤報隊事件」から13年目なので、5月2日(火)に「赤報隊特集」を放映するそうだ。かなり厳しい質問をうけて、たじたじになった。幕末の相楽総三の「赤報隊」が西宮、名古屋、大阪と進軍するが、事件はそれをなぞっているのではないかという。すごい発見だ。朝日新聞編集委員の清水建宇さんに取材されたが、まるでFBI心理分析官のロバート・K・レスラーのような人だった。僕の本も詳しく読んでいて、プロファイリングの上で、事件の<真相>を追う。もしかしたら、5月2日に、「赤報隊の謎」は全て解明されるかもしれない。

そうだ、『噂の真相』(5月号)の他に、『新潮45』(5月号)にも赤報隊のことが書かれていた。一橋文哉の「朝日が書けない『赤報隊』の正体」というショッキングな内容だ。俄然、騒々しくなってきた。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張5/8

「ニュースステーション」で尋問された

5月2日(火)の「ニュース・ステーション」(テレビ朝日)は凄かったですね。背筋が寒くなりましたね。取材が深いし、鋭く突っ込んでます。もう、これで事件は解決でしょう。幕末の「赤報隊」をなぞって、その足跡をたどって事件をおこしてたんですね。歴史にくわしい人でないと、とてもやれない犯行ですよ。「容疑者」とされた右翼の人が二人出て、インタビューに答えてましたね。一人は、昔、「赤報隊」という同じ名の団体を作ったことがある。そして、赤報隊の顕彰碑に賛同していた。もう一人はおいらですよ。この人も「顕彰碑」の賛同者になり、何と金まで出していた。「エッ、全くおぼえがありませんよ」といったら、「じゃ、この東京の鈴木邦男っていう人は同姓同名なんですか。だったら抗議しなくっちゃ」なんていわれた。(乃木坂注・同姓同名のクレー射撃の選手がいるので、その人になすりつけばいいのに) でも発起人の名をきいて、「あっ、友人だから、よく分からないけど賛同人になったんでしょう」といった。でも本当に忘れていたんだ、ボケてんね。(乃木坂注・でも、大昔の楯の会のことはよく覚えていますね。典型的な老化現象ですよ) それと、インタビューした清水さんは又、「SPA!」を丹念に読んでいる。僕は結構矛盾したことも書いてるから一つ一つ、つきあわせて聞かれたら、シドロモドロになる。それに聞き方というか、「尋問」がうまい。公安三課の人間よりうまい。たとえば、「少なくとも野村さんについてはすべて本当でしょう。この部分で嘘を書くはずがない。それと鈴木さんの性格からみて、ここは本当でしょうね・・」と、たたみかけてくる。まいったね。「以前、原稿をお願いした時に何度も会ったんで、鈴木さんの人となりは分かってるんです」という。本当にこわい人だ。(この人は昔、『論座』の編集長で、その時、原稿を頼まれた) 番組では5分位だったが、家にきた時は40分位取材された。こっちは冷汗がタラタラだった。そして「証拠品」のことも詳しく教えてくれた。その中の一つを見て、「アッ」と叫んでしまった。でもそれはカメラが回ってない時で、助かった。そこがバッタリ撮られていたら、もうおいらは犯人にされていただろう。放映中にも、その証拠品が出ていた。果たして何を見て、驚いたのか。勿論、ここでは書けない。「SPA!」でも書くのはやめる。うーん、ヒントだけでも書いておくかな。でも、それで又、ガサ入れなんかされたらやだしな。「新潮45」では一橋文哉が自由に推理してるので、おいらには「推理の自由」がない。この事件については、おいらには「言論の自由」はないんだ。

そうだ、もう一人の右翼の人のように仮名にしてもらえばよかったな、取材の時に。
「エー、では次に、某右翼団体の前会長のAさんにおうかがいします。Aさんは週刊「SPA!」の連載の中で"赤報隊に会った"といってるんですが」。

これじゃ、Aさんにする意味ないか。でも、一度されてみたいよ。
「もしもしAさん」
「はい、Aですよ」
「赤報隊に会ったのはいつですか」
「だからそれはですね・・」
と。いいじゃないか。
テレビでも言ってたけど、射殺された小尻記者は、ものすごい読書家だったんですね。下宿

で「家が傾くから、これ以上本を置かないでくれ!」って大家さんに言われたそうだ。ギクッとした。おいらも同じことを言われたからだ。まるで自分のような気がした。

そうだ、ニュースステーションは9時54分から始まるんで、初めから見とったんよ。そしたら、いきなり、「17才の少年が犯人でした。自首してきました」。エッ、赤報隊が逮捕されたのかと思った。よく聞いたら、別の事件だった。そうだよな、赤報隊事件は13年前だ。当時4才の赤ん坊がやれるわけがない。幕末の「赤報隊」は相樂総三が「赤心報国」の意味でつけた。愛知の右翼団体の人もその意味でつけたといつとった。「鈴木さんは知ってましたか?」と清水さんに聞かれて、「イヤ、赤い朝日に報復するって意味かと思いました」と答えたらバ力にされた。「『報』には元々悪い意味はないんです。報復の意味で使われたのは最近です」と、国語の授業のように教えられた。でも、当時4才の赤ん坊が赤い朝日に報復するために銃を乱射したかもしんないぞ。

話が横道に外れたけど、又、外れる、高校3年生が愛知県豊川町の主婦を殺したんだと。何ら恨みもない主婦で、通りがかりに上がり込み、殺した。「ともかく人を殺す経験をしてみたかった」と言ってる。なぜ自首したのかと聞かれて、「寒くなったり、疲れたから」。全く反省していないんだという。それにこの3年生は、成績は優秀なんだ。おいらもこんな人を知ってるよ。人を殺す経験なんて、なかなか出来ない。それをやったら、人間が変わるんじゃないかな。自分がとてつもなく大きな存在(超人)になるんじゃないかな、と思うんだ。「日本のドストエフスキイ」と呼ばれている作家はそんなことを言っていた。この高校生と同じだ。他にも殺人者で同じようなことを言ってた人がいるな。そうそう、新聞を見たら、この高校生の犯行はかなり計画的だし、<思想>がある。というか、変な話だが<思いやり>がある。だって、武器、着替え、逃走用の金を用意し、そして、だれでもいいから殺してみたいと物色してた。たまたま玄関がちょっとあいてた家を見た。まず表札を見た。「筒井喜代」と出ていた。喜代というから今風の名前ではない。きっと老人だろうと思った(彼の推理はピタリと当たり、喜代さんは65才)。それで殺そうと思った。「若い未来のある人はいけないと思った」と自供。凄い奴だ。神戸の「少年A」みたいだ。ともかく勉強のできる、優秀な高校生なんだ。優秀だからこそ、こんなことを考えるのかもしれない。刑務所の中でも本を読み、小説を書き、出てきたらいきなりどっかの文学賞をとるのかな。

この高三の事件は赤報隊事件とは全く関係がないけど、どっか動機や犯人像で共通してあることがあるのかもしれない。あっまずい。推理はやめておこう。おいらには「推理の自由」はないんだし。でも、そのうち、「SPA!」かなんかに、キチンとした形で一回、書いてみよう。

では、赤報隊の話は終わりだ。そして5月2日(火)の昼の話をしよう。火曜日はいつもジャナ専(日本ジャーナリスト専門学校)の授業だ。さて行こうと思ったら、でも連休の前だし、やるのかなと思って念のため学校に電話したら休みだった。じゃ一日原稿を書いてようかと思ったが、アッそうだ、昔の「生長の家」の仲間から券を送ってもらってんだと思い出して行ってきた。

武道館で「生長の家相愛会・栄える会合同全国大会」があったのだ。生長の家は5月1~3はいつも武道館を押さえている。1日は「白鳩会」(婦人部ですよ)の全国大会。3日は青年大会だ。おいらたちも昔は青年大会にいってたんだが、今は「相愛

会」なんよ。これはまあ、おじさんたちの会だね。それと「栄える会」というのは、経営者の会なんよ。たとえば、経団連、日経連、日本青年会議所・・と同じかんじだ。ただ、「栄える会」は信仰を基礎とし、国家のことを考える経営者の集まりなんだ。会長は和田一夫さん(ヤオハン)だったが、倒産したために、今は牛山精一さんがなっている。ヤオハンの和田一夫さんといえば、この人のお母さんが、NHK朝のドラマで「おしん」のモデルなんよ。和田一夫さんの息子は二人、学生道場に入っていた。長男は僕の先輩。次男は僕の後輩で慶應だった。和田和明といって、背が高くて優秀な男だった。このことは前に「SPA!」にも書いたけど、例の早大スト破りの時に、この和田君も連れていった。強制連行だ。「左翼のバカ学生を排除するだけだ。すぐ済む。危険は何もない。自衛隊と同じだ」といって、20人ほどを連れていった。すぐに排除できたのに、卑劣な赤学生どもは、鋪道の敷石をはがして投げたり、牛乳ビンの口をわざとギザギザに切って投げつけたりして、おいらたちはさんざんな目に会ったんよ。その時の赤学生のリーダーが宮崎学や吳智英たちよ。そんで、赤い学生に報復しようとして、赤報隊は生まれたんよ(時代が全く違うか)。

じゃ、生長の家の大会の話だ。体験談もいくつかあったけど、はじめにビデオ紹介があって、その後に本人の信仰発表がある。信仰発表もハイテクなんだ。それに「栄える会」だから、経営、企業がらみの話が多い。皆に感謝して、「笑いの練習」をやつたらお客様がどんどん来るようになったとか、リストラされて収入が三分の一になったけど、信仰に支えられて働き、家も新築したとか。大韓民国の人も体験発表していた。ハングルの「生命の実相」を読み、病気が治り、仕事も大繁盛してるという。いいことだ。できたら朝鮮民主主義人民共和国の人にも来てもらって体験談をしてもらつたらいい。「キム・ジョンイルさんは嫌いでしたが、生長の家の本を読み、"天地一切のものに感謝せよ"といわれ、ジョンイルさんにも感謝できるようになります。祖国愛もわいてきました。飢餓も治りました。ありがとうございます」なんて言つたら凄いじゃないか。

と書き終わったところに風見愛さん(ストリッパー)から電話だ。でも、ブツブツ切れる。「ごめん、ごめん。トンネルに入ったもんで」。危ないじゃないか。携帯をかけながら片手で運転してるんじゃないか。「仕事先の岡山に向かうところよ。さっきまで家でお父ちゃん、お母ちゃんとテレビ見とったんよ」と言う。「容疑者、鈴木邦男」が尋問されてるところを見てたという。でも、赤報隊のことはそっちのけで、「ヒヤー、ボロいアパートに住んどるんやー」「タダ原稿ばっかり書いとるさかい、貧しいんやろ」「そのくせ、スライド式本棚なんかあるでえ」「あ、『通販生活』で買うたんやろ。貧乏人のくせに見栄はって」・・と、一家全員で笑いものにしてたそうです。こっちは<容疑者>扱いされて、厳しい尋問をされてるというのに。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張5月15日

『がんばれ!!新左翼 Part3』は今週出るよ!

出ますよ、いよいよ。今度こそ、本当ですよ。『がんばれ!!新左翼 Part3。望郷編』(エスエル出版会)が、今週木曜日(5月18日)、全国一斉発売です。定価1500円+税です。264ページ。解説は宮台真司さん。これが又、いい。半年かけて僕の著作を全て読み、そして書いてくれました。もったいないような力作です。これだけでも1500円の価値は十分にありますよ。又、いつものように西村吉彦さんのイラストがいい。僕の文よりもこっちの方がメインかもしだい。イラストを見、そして宮台さんの「解説」を読むだけでも楽しい。面白い。表紙もいいね。まだ実物は見てないが、写真がFAXで送られてきた。いい絵だ。元気が出る。目立つ。

「革命の夢無惨」と大きく帯に書かれてる。「三部作、堂々の完結!! 新左翼随伴民族派論客=鈴木邦男が10年間書き綴った過激派への愛情」とある。勝手に「三部作、完結!」にされちゃっている。『アジャパー・ウエスト』には今、『Part4。墮落編』を連載してるので。でも、そっちは出す気がないようだ。又、「鈴木邦男との約束はこれで全て果たした」とエスエルは言っている。これを最後に僕とは縁を切りたいと思っているのか。謎だ。謎の出版社だ。

ともかく、今まで、随分と本を出してもらったエスエルだが、それもこれが最後になるのかもしれない。最後の出版にエスエルも総力を賭けている。松岡社長の意気込みも凄い。60年代後半の学生運動の写真や論文、資料などもふんだんに入れている。中核派の『前進』なども随分と出ている。本多書記長が革マル派に殺された時の『前進』もある。貴重な資料だ。そこにはこう書かれている。「本多書記長虐殺に怒りの総蜂起を!」「反革命殺人者・黒田、松崎、土門に死の処刑を。全反革命分子を一人残らず完全せん滅せよ!」とある。(乃木坂注・革マルの『解放』では「現代の黒百人組の終焉」との見出し。黒百人組とはロシア革命時の反革命テロ組織)凄い。殺人予告であり、殺人指令なんだ。黒田は黒田寛一で革マル派の理論的指導者だ。松崎は革マルの最高幹部、運動責任者だ。現・JR東労組会長の松崎明だ。実はこの松崎さんとは僕は友人だ。友人なんて言ったら態度がデカイか。何度かお会いしてるんですよ。でも、革マルの最高幹部とどうして知り合いになったか。それはこの「Part3」に詳しく書いてある。しかし、初めて会った時は怖かった。ビビったよ。中核派からは「処刑指令」が出てるんだ。いつ中核派が襲撃するか分からぬ。それに、この時は「革マルを辞めた」と衝撃発言をした直後だった。「そんなのは嘘だ。革マルがスンナリと辞めさせるわけがない。生きているのが、辞めてない証拠だ」とも言われた。僕は素直だから、「本当に辞めたんじゃないのか」と思ったら、「だからお前は甘い。アホだ」といろんな人から批判された。はたしてどうなのか、そのへんの謎解きも含めてじっくり読んでほしいですね。松崎さんとは何度か会って、その後、JR東労組の機関誌で対談し、2年前は何と、JR東労組に呼ばれて講演をしてきた。労働組合に呼ばれて喋ったなんて民族派広しといえども(狭いか?)、おいらだけだろうな。

それから、謎といえば、あの滝田修(伝説の革命家)と、「朝霞事件」とストリッパー・沢口ともみの不思議なからみの謎も、やっとここで解明されます。『Part2』で書き、『夕刻のコペルニクス』で書き、さらに『右であれ左であれ』で書き、さて、「この解決編は『がんばれ Part3』に続く!」とやったのだ。三つの単行本で疑惑をあぶり出し、盛り上げ、それがドッとこの『Part3』に続くのだ。凄い続きかただ。凄い展開だ。

この本は、構成もかなり変わっている。第1章から第7章までは6年前に書いたものだ。当時あった月刊誌「新雑誌21」に連載してたものだ。そして第7章から第12章までは、去年の9月に急遽、書き下したものだ。200枚を一気に書いた。キツかった。なんせ、11月には出すというので、あせって、必死で書いたんだ。ところが、出版は遅れに遅れて、6ヶ月後の今、やっと出ることになった。

じゃ、目次だけでも紹介しようか。

「第1章。三つの全学連と活動家の現在」

「第2章。右翼も左翼も信用回復運動を」

「第3章。帰ってきた脱走兵とベ平連同窓会」

「第4章。宿命の対決。中核派との闘い」

「第5章。東大全共闘の謎。安田講堂攻防戦はなぜ学生運動の天王山だったのか」

「第6章。右翼標榜愉快犯と義勇軍。大学受験『脅迫文の書き方』教室」

「第7章。新・スパイ大作戦と組織防衛」

「第8章。『現代の眼』が領導した『政治の季節』」

「第9章。丸山実の受難と新雑誌『X』『21』」

「第10章。思えば左翼も右翼もマンガだった」

「第11章。朝霞事件と滝田修とストリッパー」

「第12章。みんな"故郷"に戻ってくる」。そして「あとがき」、さらに宮台真司の怒濤の長文の「解説」だ。

どうです。ワクワクするでしょう。校正をしながら自分でもついつい読みふけり、校正にならなかった。しかし、おいらは6年前の方が文章がうまかったし、面白かったな、と思った。おいらは文章は進歩しないどころか退歩してるのかな。自分では必死で勉強し、練習しているつもりなのに。

それと、後半は200枚書き下ろしたけど、不安だったね。だって、それまでは基本的に毎月30枚ずつ、書いていったんだ。いろんな事件を追い、読者の批判、反響を受けながら。ところが後半は一挙に1ヶ月で200枚だ。道のないところを遮二無二走ってるので不安でしょうがなかった。それに前半と後半では文体も違うし、状況、考え方も違うし。何か、「6年前のおいら」と、「今のおいら」の共著のような感じだったんよ。こんなのでうまくいくのかな。ギコチない本になるんやなかろうか、と思った。でも出来上がったものを見て、驚いた。その不安も緊張も、いい方向に作用して、じつに面白い本になったんよ。ぜひ、読んで見て下さい。

と、ここまで書いたところにFAXだ。エスエル出版会(鹿砦社)からだ。「Weekly鹿砦社通信」だ。おっ、おいらの本の特集号やんけ。そして松岡社長が僕との付き合いについて書いとる。「がんばれ!!新左翼 Part3」遂に刊行! 鈴木邦男との奇妙で長い関係についての断章」とある。面白かったのはここだ。

<鈴木邦男との付き合いも本当に長くなる---。いわゆる「新左翼」出身の私としては、その異質な思想に学ぶことも多かった。鈴木が「新左翼」から多くを学び、自らの思想構築に役立てたように。その清貧の生き方など、不思議な人だという感が強い。彼ほどの高名な知識人が、いまも「みやま荘」という古アパートに住み、ちょっとした筆禍から何度も警察の家宅捜索を受けたりしている。このアパートの隣近所の人たちは、度重なる家宅捜索にどのような気持ちでいるのだろうか>

本当に、どのような気持ちなんでしょうね。「いやだな、早く出でていってほしいな」と思つてんでしょうね。でも、僕のように30年もいる人はいない。(乃木坂注・人生の半分以上住んでるんですか) みんな1年くらいでどんどん引越ししてゆく。あ、これっておいらのせいなんか。みやま荘というボロ・アパートによく住んでるっていうけど、貧乏なんだから仕方ないじゃん。何も金はあるのに、趣味で「清貧生活」をやってるわけじゃない。きれいなマンションにきれいなネエちゃんと住んで、外車を乗り回して、銀座のクラブを飲み歩きたい。松岡社長のようにSMクラブにも行きたいし、爺やのようにストリップにも行きたい。でも、貧乏だから出来ないだけだ。こうして、タダ原稿ばっかり書いてるからだよ。あーあ、一生、みやま山荘かよ。(と、溜め息)。後輩の見沢知廉は大作家になり、本は売れまくってる。マンションに住み、新潮文庫に2冊も入ってる。新潮文庫って、日本の作家のステータスですよ。夏目漱石や森鷗外と並んでるんですよ。見沢は。くやしいね。やっぱ、殺人を体験しなくっちゃ、ダメだな。ヤベー、この前の主婦殺しの17才少年と同じことを考えちゃったよ。そうだ、松岡社長は見沢の事件に触れて、こう書いてた。

<そんな鈴木も、バリバリの右翼活動家だった学生時代や、「行動右翼」とか「新右翼」とかいわれた1970年代は、コワモテだったといわれている。今の鈴木を見て「行動右翼」と言う人はいないだろうが、ここまで鈴木の内部で「コペルニクス」的転回をしたのはいつの頃だろうか? ---私なりに想像するに、今の見沢知廉を首謀者とする「リンチ殺人、死体遺棄事件」からではないだろうか>

ウーン、そうだったのか。じゃ、見沢が「今のおいら」を作ったのか。大作家・見沢の「作品」のひとつなのか、おいらは。知らなかったよ。謎だね、この人は。「この人」って、おいらのことだけ。自分で自分のことを客観視して不思議がってんだよ。文句あっか、赤坂め!(と、いきなり、やつ当たりする鈴木君でした。自分の貧しさと才能の無さに、自分でじぶんに苛立ってるんでしょうね、この人は)。

松岡社長は、さらに、おいらの「人のよさ」(バカということ?)についてこう書いとる。

<鈴木邦男の新左翼との随伴は、もはや執念ともいべきものといえる。かつて「日本のレーニン」といわれた塩見孝也や、連合赤軍事件の植垣康博らとは親交を深めていると聞くし、さらには、母校・早稲田でいじめ抜かれた宿敵・革マル派の最高幹部といわれる松崎明の「革マル脱退」を信じ切り、あろうことか、その組織の集会で講演するほどである。ここまでくると、もはや自らが組織した一水会のメンバーでさえ鈴木に付いていけないであろう>

そうか、この辺に鈴木が一水会代表をやめた原因があったのか。はじめて知ったよ。そして、この「Part3」を書いたために、おいらは一水会代表をやめることになったのか。

リーンと電話だ。その「日本のレーニン」塩見さんからだ。

「あ、どうもすみません」と条件反射的に謝ってしまった。

「なにか謝るようなことをしたのか」と塩見さん。

「いや、いつも叱られてばかりいるんで、つい謝ってしまって」。まるでパブロフの犬だよね、おいらは。

「今日はチャうんや。『創』読んだで。8割がたよかったです。いつものようにチャカしてるから、2割は引いとくんや」。

ホッ。8割だったら上出来やんけ。僕の連載「鈴木邦男主義」で「よど号30周年」を書いたよ。みんなも、ぜひ読んで下しゃい。塩見さんも8割おすすめですけん。(乃木坂注・『尊』

という『噂の真相』に酷似した雑誌にも鈴木さんは書いてますよ)

【ここで嬉しいニュースです。一体、本当に出るのかと心配されていた例の北朝鮮本が出ます。今、電話がありました。5月25日(土)発売です。『日本国民のための北朝鮮原論』(デジタルハリウッド出版)です。楽しみです】

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張5月22日

「光るボールペン」との運命的出会い

6月14(日)は秋田に行ってきましたよ。秋田新幹線「こまち」に乗って。秋田に住んでいる伊藤邦典氏(「楯の会」一期生)に取材しにだ。そうだ、4月24日(月)には茨城県太子(だいご)に住んでる伊藤好雄氏(やはり「楯の会」一期生)に取材に行ってきました。二人とも興味ある話をしてくれた。30年たって明かされる〈三島事件〉の新事実がいろいろあるだよ。だから、これからSPA!の連載を楽しみにしてくれよん。

といっても、この二人の話はまだまだ先になるな。先週は、あの「伝説の呼び屋」康芳夫さんと三島由紀夫、森田必勝の友情、交流の話だった。今週(5月24日(水))は当然、その続きのはずだが‥。もしかして、〈事件〉が起こり、2,3回、別のことを書くかも知れない。そうしたら、それが終わってから、康さんに戻り、やっと伊藤好雄、伊藤邦典になる。僕としては、今年は三島事件から30年だし、一年位ずっとこのことを書きたいんだけど‥。でも、「いつまでも昔話してんじゃねえよ」「暗い」「今、現在のことを書け」という声も多いしね。悩むね。そうだ、上二段は三島事件。下二段は現在のお話で、同時「進行ドキュメント」というのはどうだろう。二つの話が同時に読める。僕が二本の連載コラムを持つことになる。SPA!の担当者に言ったら、「ヒヤッヒヤッヒヤ」と笑って取り合わなかった。又、冗談を言ってると思ったのだろう。

でも、テレビもあるよな、ブラウン管に左右二つが映るのが。相撲は音を消して見ながら、ドラマを音を出して見るとか。音を出して歌番組を見ながら、音を消してプロレスを見るとか。ウッ、ほしい! いつか、ベストセラー作家になつたら買うぞ。(乃木坂注・そんな高価なものじゃないですよ) それにテレビの下の方に、ちょっと他の局のが映るのもあったな、あれ、何というの。あれでもいいよな。そうか、SPA!のおいらのページも、何も上下二段ずつ分けなくても、一段の半分位をカコミにして、別の連載をやってもいいんだな。何なら金をとって他人に売るとか。あっ、これはマズイか。

さて、話を秋田に戻す。伊藤邦典氏は何故か僕と同じく「邦」がつく。弟も邦明といって「邦」がつく。一水会創設「七人の侍」の田原康邦もそうだ。はたしてこれは偶然なのか。その〈謎解き〉から始まる。わきやねーだろう。こんなの、ただの偶然だよ、と笑い飛ばして、「みちのく篇」は始まるんよ。

「最近のタコペは暗い」というけどね、僕としては今しかないと思うんよ。書いておくのは。だから、必死に取材して書いてんのに。でも、「三島・森田の遺志を受け継いで‥」とか、「なぜ、あの時はつれていってくれなかつたんだ」「なぜ、おれは自決しなかつたんだ‥」と、そればかり考えていた30年なんだよ。みな、だから「楯の会」の人達は一様に暗い。まるで、「死なう団」(乃木坂注・「死ね死ね団」のモデルらしい)みたいだ。「だから皆も生き抜いて」じゃないもん。 「だから皆も死んじゃおう」って感じでね。

でも、でも、伊藤好雄氏は違うよ。三島事件のあと、ウジウジと考えてるだけじゃなくて、「経団連事件」を起こすんだもん。決起したんだもん。その辺のことをじっくり聞いてみた。「野村秋介に三島由紀夫を見たのか」「あれは第二の三島事件だったのか」とか。さらに伊藤邦典の話が面白い。こいつは明るい。「楯の会」の中では唯一、明るい。恋愛、結婚の話も明るくて、面白い。さらに彼とは昔、昔に〈接点〉があったのだ。二人は運動家になるように運命づけられていたのだ。それは子供時代のある〈事件〉から始まる。あっ、いけない。これ以上書いちゃダメだ。SPA!で書くんだから。だから、「予告篇」はこれでおしまい。

そうだ、秋田までは4時間20分もかかる。よし、集中して本を読めると思って、力バンに本ばっかり詰め込んで行つただよ。ふだん読めないのを、ひたすら読んだね。そうそう、行きの新幹線で不思議なものを売っていた。車内のアナウンスがあるよね、「携帯はご遠慮下さい」とか。そんなんじゃ、誰も「ご遠慮」してくれないよ。「車内での携帯電話は犯罪です。みつけたら即、逮捕します」とやればいい。そしたらおいらも民間協力、民間逮捕してやるよ。だって、ピースメーカー、じゃなかった、ケースワーカー、でもない。ピースメーカーしてる人にとったら「命の問題」だ。じゃ、ピースメーカーしてる人は、近くで携帯してる奴にはいきなり取り上げ、なぐりかかってもいいだね。「正当防衛」だ。何せ命の危険があるんだから。そんじゃ、おいらもピースメーカー入れようかな。そんで電車の中で、みなの携帯を取り上げ、床に投げ捨て、ふみつぶす。ついでに、ぶんぬぐる。女なら胸をワシヅカミにする。そんで、牛刀をふるって暴れてやる。「俺だって17才だ。神の声を聞いた」ってわめいて。でも、ピースメーカーを入れてるから正当防衛だ。ならんかな、ここまでやつたら。

あーあ、ここ15年間、「暴力否定宣言」しちゃって、「いい子」をしてるからストレスがたまってる。思い切り暴れてみたい。昔の右翼暴力学生に戻ってみたい。おいらの〈望郷篇〉だよ、これは。

そうだ、秋田新幹線のアナウンスの話だ。携帯なんかどうでもいいんだ。つづいて、車内販売のおしらせがあったんだ。もろこし、キリタンポ、フキ、秋田おばこ・・・とか売ってる。「秋田おばこ」っていっても、実際の女の子を売ってるわけじゃない。そういうお菓子なんだよ。そして最後に、「暗い中でもメモをとれる"光るボールペン"はいかがでしょうか。『こまち』でのみ特別限定発売です」。アッと思った。これは昔からおいらも考えていたんだ。それが実用化されていたとは・・・。

さっそく買っただよ。1ヶ千円。ボールペン1ヶにしては高いが、でも暗い中でもメモをとれるんだ。他にはどこでも売ってない。買っとかなくっちゃと思った。「何も、暗い中でメモをとることはないだろう。灯りをつけて書きやいいじゃないか」とお思いのあなた。そりや、違うぞなもし。たとえば映画の試写会にいく。別に試写会でなくてもいいが、映画や芝居やオペラに行く。気のきいたセリフに出会う。おっ、と思う。そんな時、メモをとっておかないと忘れる。そのたんびに外に出てメモをするわけにもいかない。そんな時、これさえあれば絶対に便利だ。

それと、夜ねてる時だよね。夢の中でヒントが浮かぶことがある。考え、悩みつ

づけていた〈赤報隊の謎〉が解ける時もある。もしかしたら、あるいは・・というヒントだ。でも灯りをつけるのは面倒だし、ねむいし・・と。それで又、寝込む。朝おきたら、すっかり忘れている。「ヒントが浮かんだ」ことすら忘れている。これで今まで何百というヒント、発見を失ってきた。でも、これからは大丈夫。この「光るボールペン」さえあれば、いつ、どんなヒントが浮かんでも、即、メモできるんだ。

それにこれは健康の為にもいい。寝ていて、いいヒントが思いつき、思わずガバッと起きあがり、それで、腰をグキッとひねったこともある。又、ペンやメモ用紙をねたまま探して首の筋を違えたこともある。そんな不幸なアクシデントからも、この"光ペン"は守ってくれる。そして、ここまで書いて、アッと思った。そう、君も気付いたはずだよね。あの優秀な僕の担当者のことだ。この場合の「優秀な」は「僕」じゃなくて、「担当者」にかかる。日本語は難しいな。正確にいうと、

「無能な僕の優秀な担当者」になる。かえって変か。これで彼の冤罪は晴れた。真理バアや、赤坂バアや、管理人爺や、いぬい爺やが言ってるように、そんな変なことをして彼はギックリ腰になったのではない。（乃木坂注・言いだしちゃは鈴木さんじゃないですか） 断じて違う。一人で寝てる時に、ハッといい企画が思いついたんだ。それでガバと起きた時に、グキッと腰に痛みが・・。うん、そうだ、かわいそうに。"光ペン"さえあつたらギックリ腰にはならなかつたのに。そして、変な噂なんか流されなくてすんだのに。

それで、彼にあげようと思い、「光ペン」をもう一本、買っただよ。そして5月15日(月)に会った時に渡した。これでもう変な噂は流れない。冤罪も晴れたね、とは言わなかつたが、渡した。僕のこんな深い気持ちなど分からないんだろう。彼は、「ヒヤー、めずらしかとね」といって、単純に喜んでいた。

(注)この「光るボールペン」(商品名は「ライトペン」という)が欲しいという人のために、発売元を一応、書いとこう。

東京都中央区八丁堀2の14の1
（株）日本レストランエンタープライズ
tel 03(3555)7536

(追伸) 5月17日(火)の夕刊に出てたけど、タイにいる田中義三さん(元赤軍派)がいよいよ日本に帰ってくるそうですね。早ければ6月だって。今度は日本で会えるか。

(追伸2) 里見岸雄『国体に対する疑惑』(展転社。2000円)が出た。これは凄い本だ。国体に対する「疑惑」を並べたて、それに対し、里見が一つ一つ回答し、論破してゆく。痛快な国体論だ。昭和3年に出て、一大ベストセラーになった本だ。それを、やっと今、復刊する。竹中労が絶賛してたし、三島由紀夫の『文化防衛論』のネタ本だとも言われた。おいらも多大な影響を受けた。『腹々時計と(狼)』『がんばれ!!新左翼』はこれに影響されて書いたようなもんだ。

(追伸3) 『がんばれ!!新左翼 Part3・望郷編』(エスエル出版会。1500円)が5月

17日(水)、届いた。やっと出た。本当に出た。予想以上にいい出来だ。表紙もイラストもいい。見てるだけで楽しい。これで1500円じゃ安い。このHPが出る頃には、本も書店に出てるよね。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張5.29

ありがとうございます。作家冥利につきます

涙がこぼれました。ありがたくて。うれしくて。感動して・・。こんなにまでして全国の皆さんが僕の本を探して、読んでくれてたなんて。掲示板は涙なくして読めませんでした。本当に作家冥利につきます。わたしや幸せものですよ。でも、僕の本を置いてる書店が少ないんですよね。申し訳ありません。僕の力不足なんでしょうね。出版社も頑張ってくれているのに・・。

R・サゲさん。「がんばれ新左翼3」を買って哀愁に浸りましたか。Part3は「望郷篇」ですが、「哀愁篇」にした方がよかったかもしれませんね。「哀愁の街に霧が降るのだ」という題名の本もありましたね。「哀愁のクニー」と呼ばれてた人もいましたね。あれっ、おいらか。でも誰がいったんだろう。赤坂ばあやか、真理ばあやか。どうも違うようだな。あっ、小林よしのりさんだよ。「ゴー宣」で描いてくれたんだ。最近会ってないけど、でも、大活躍ですね。小林さんは歌がうまいんですよ。一緒にカラオケに行った時に僕の為に「『いちご白書』をもう一度」を歌ってくれました。うまい。それに美声ですよ。

では掲示板に戻ります。ジョージさん、「赤報隊の秘密」買ってくれたんですか。ありがとうございます。実はあの本には秘密があるんです。「『赤報隊の秘密』の秘密」です。近いうちにSPA!で書きます。これはお約束します。この本は乗りに乗って書いた本でした。仙台の実家に帰って〈何か〉の靈に取りつかれたようになって書きました。「何かの靈」とは、もしかしたら赤報隊の靈かもしれません。だから、自分の知らないことまで書いてしまいました。憑靈ドキュメントです。事件の本質に一番肉迫してると思います。R・サゲさんは、僕のことを「赤報隊について語ることのできる唯一の人」とほめてくれましたが・・。うーん、むずかしいですね。〈推理〉をすればするほど、「犯人グループだからだろう」「知っていることは喋ろ!人が死んでるんだぞ」と脅されるし。ガサをかけられたり、別件で逮捕されたり、さんざんだったしな、もう二度と赤報隊には触れないで、二年後の時効になつたら、思い切って推理を書き、誌面で赤報隊に呼びかけよう。

そう思つてたんですが、5月2日の「ニュース・ステーション」のことは少し触れておいた方がいいと思い、先週書いたんです。そしたら、凄いことを思い出しちゃって、今週も続いてるんです。果たして〈謎〉は解明できるのか。いや、中途半端で終わって、次は「楯の会」の伊藤邦典の話にいこうと思ってる。そういうたら担当者に叱られた。「康芳夫さんの巻も途中でほったらかし。次の赤報隊も途中でほったらかし。それで又、次にいくなんてダメですよ」と。例の「光るボールペン」で書かれた抗議文が届いた。しかたがないから、一回、康さんに戻るよ。

ジョージさん。秋葉原の書泉の1階は僕の本があるんですか。ありがとうございます。「それに引きかえ御茶の水○○○は・・」って、どこの書店ですか。書いてもいいでしょう。それで皆で抗議しませう。「鈴木の本を置け!」「置かないと許さんぞ!」と。「置かないと爆弾を仕掛けるぞ!」と元過激派の爺やに脅してもらうのもい

いね。あっ、まずいか。くれぐれもやらないように、爺や。(乃木坂注・売れ行き好調なのは、実は鈴木さんが脅してるからじゃないんですか) この場合の「爺や」はこのHPの管理人のことだけど、でも、新左翼の活動家って皆、50代、60代で、本当に全員「爺や」ですよね。「がんばれ!!新左翼。爺や篇」になっちゃうな。「第1章。老人ホームの闘い」とか。老人ホームで女(おばあちゃん)をめぐり、元中核と元革マルのおじいちゃん同士が凄惨な死闘を展開するんですよ。そして、外では「内ゲバをやめろ!」と右翼の老人たちが街宣車で叫んだりしててね。でも、こうなったら、「新左翼」じゃなくて、「旧左翼」か「老左翼」だね。「がんばれ!!老左翼」にタイトルも変えるか。「頼むから生きのびてくれ! 老左翼」とか。

IWAIさん。大阪・天王寺の喜久屋書店で見つけてくれたんですか、ありがとうございます。「もう、この本に頬づりしたい気分ですよ」。うん、うん、分かりますね、頬づりして下さいよ。心ゆくまで。コーラとポテトチップスで、ゆっくりと楽しんで読んで下さい。

mohkenさん。「図書館にリクエスト」っていうのはいい手ですよ。ぜひお願ひします。自分でもやりたい位ですよ。これを読んでる人たちも皆、やってくれると、全国の図書館においてくれるでしょう。そしたら、本屋でも、ウカウカしておれなくなって平積みしてくれますよ。

ペネロープさん。webでオーダーしてるんですか。凄いですね。よく、仕組みが分かりませんが、でも、確実そうですね。本専門の宅急便みたいなもんでしょうかね。出版社は「〇日に発売」といっても、必ずしも本屋に並んでないことがあるし、大きい本屋にはあるんでしょうが、「どことどこにある」というのが分からないうし。みんなに迷惑かけてますね。だから、「〇〇書店には必ず出てます」という情報があると助かりますよね。

大久保俊宏さん。北野誠さんのビデオ「新青年計画」も見てたんですか。なつかしいですね。大阪にいって一緒にビデオとったんですよ。〈右翼〉の話をいっぱいしましたよね。「楯の会」シリーズ、楽しみですか。そう言ってもらうとうれしいですね。自分では力を入れて書いてるつもりなのに、「昔話なんかやめろ」「暗い」「面白くないぞ」・・と言う人が多くて、もうやめちゃおうかな、もう死んじゃおうかなと気落ちしてたんですよ。

2.3日前には「卑劣な愉快犯」から夜中、留守電が入っていた。そう、柳美里さん(作家)を脅して、サイン会を中止させた奴ですよ。「最近のSPA! はつまらん。30年前の昔話ばかりしてんしゃねえぞバカ野郎。お前の発言は何ら影響力はないんだ。それより、〈今〉のことを語れ! 子供の犯罪をどうするんだ。政治の混迷をどうするんだ。日本をどう変えるんだ。その〈現実〉を語れ!」と言ってました。ウーン、そうかなと思ってたんですよ。でも、ハッと我に返ったら、「こいつに言われたくないな」と無性に腹が立った。「17才の少年犯罪をどうするか」なんていってること、こいつも愉快犯なんだ。そんな卑劣な犯罪のない日本をつくらなくっちゃ。(注:こいつはよく電話をよこす。SPA! に取り上げてくんないもんだから、やたらと過激なことを言ってる。「反日野郎は殺す」「毒をまく」「反日の子供を無差別に殺してやる!」・・と。「やれるならやってみろよ」と書いて、その時だけ本

本当に実行したら、こっちも教唆でつかまるんで、ともかく無視してる。でも、ここで書いちゃった。このHPに連載で「愉快犯コーナー」をつくってやろうか)。

あまじゅんさん。「がんばれ! 3」は、寂寥感がありましたか。「下ネタ方面に墮ちていく革命闘士たちの末路が・・」と書いてますね。僕としては下ネタは嫌いだし、志のある文章を書くようにしてるんですがね。でも、塩見さんとか滝田修さんとか・・。皆、そういう方向に走っちゃうんですね。30年も40年も革命運動やってると、年とてから、「あっ、青春を浪費した。とり戻さなくっちゃ」と思うんでしょうかね。他人のことは言えないな。じゃ、「がんばれ!! 新左翼。青春回復篇」か。略して「回春篇」か。ますます、いやらしくなるな。

次は幽靈バアやの赤坂さんですね。面白かったですか。そういうてもらってうれしいですね。「宮台さんの解説は高尚過ぎて」。そうですか。いい解説だと僕は感動しましたよ。それに、「『本気でスズキがここまで狙ってると思われるのでしょうか』とツッコミたくなりましたが・・」だって。失敬な奴っちゃね。スズキさんはボーッとしてるけど、案外、何を考えてるか分かんないし。ありますよ。なかなか、クセ者ですよ。あいつは。ただ、出まかせに書いてるようで、しっかり計算してたりして・・。軽薄そうで、案外と深いのかもしれませんよ。と、本人が言つんだから、間違ひありませんよ。そうだ、今度ワニブックスから、宮台さんの「解説」だけを集めた本が出るんです。そんで、今週インタビューされんですよ。見沢知廉の「天皇ごっこ」の「解説」も凄いですね。「解説」だけを集めて本にするなんて、発想がすごかですね。8月には出るそうですよ。これもぜひ買ってくれよんですよ。

風見さん。旅先では本、ないですか。しかたないですね、じゃ、旅先に届けましょうか。webなんとかで。IWAIさんは、ナンバのジュンク堂や紀伊国屋も回ってくれたんですね。いつか、お金持ちになったら自分で朝日か産経の一面に広告を出しますよ。そして「鈴木邦男常備店一覧」とかものせて。そしてサイン会をやるとか。でも、「愉快犯」に脅されて中止になるかな。あっ、思い出した。「タコペ2」が出た時は東京の某大手書店でサイン会の話があったんだ。日にちまで決まっていたのに中止になった。まさか、あの愉快犯のせいじゃないだろうな。「上の人の反対で中止になりました」と店の人はいってたけど。

再び、mohkenさん。図書館にあったんですか、うれしいですね。僕のよく行く中野図書館にも東中野図書館にもありませんよ。革新区政なのに。(今は違ったかな)。見沢、佐川さんの本はいっぱいあるのに。やっぱり、特殊な体験をしないといい本は書けないのかな。人の心をうつ本は書けないのかな。

再びIWAIさん。MIOの旭屋、ユーゴ書店も探してくれたんですか。すみません。でも、ユーゴ書店って、ユーゴスラビアの人がやってんですか? ジュンク堂って、ジュンク共和国の人がやってるんですか。(乃木坂注・マリ共和国は真理ちゃんが治めてる国なんですよ) 「妻から頼まれた栗本薰の『グインサー』って何ですか。どんな本なんですか。せっかくだから少し紹介しておいて下さいよ。それに、「妻から頼まれた」ってさりげなく言うとこがいいですね。僕も書いてみたいですね。

それと、最後にメールを頂いたさん。ありがとうございます。ええ、いいんです

よ。「クーちゃん」て呼んで下さい。中学の時にはそう呼ばれていましたから。翻訳のお仕事をしてるんですか。凄いですね。大変なんでしょうね。そんなお話を教えて下さいよ。応援して頂いて、本当に心強いですよ。ありがとうございます。

というわけで、今回は「掲示板」への返事だけでおわりです。たまにはいいでしょう。『日本国民のための北朝鮮原論』(デジタルハリウッド出版)・1800円が今日届いた。5月29日に書店に並びます。よろしくお願ひします。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張6月5日

超異色対談『北朝鮮原論』を読んで下しゃい

5月30日(火)。ジャナ専(日本ジャーナリスト専門学校)の授業(現代史)で、今日は「人の殺し方」を教えてきた。知り合いの作家、活動家、ヤクザ、元警部補・・の例を示して、いろんな「殺し方」を教えた。又、多人数でやると「計画性」があると思われて刑が重くなるから、必ず一人でやること。逃げる時に、「ついでだから」といって金を持って逃げないこと。これだと、「強盗殺人」になって下手をしたら死刑になる・・と。「学校では絶対に教えない」授業をやった。首の絞め方も教えてやった。でも結論としては、「日本の警察は世界一優秀だから必ず捕まる。殺人は絶対に割りに合わない」と教えた。だからいいだろう。殺人を奨励してるわけではない。いくらうまくやっても捕まるし、人生を棒に振るからやめた方がいいと言ったんだ。その為にいろんな〈殺しの実例〉を教えてやったのだ。

「でも、殺人体験のおかげで作家になった人もいますよね」「必ず捕まるっていうけど、赤報隊は捕まりませんね」という質問も出たけど・・。じゃ、今度は本人を連れて来て答えてもらおう、と言っちゃった。

先週は本物の日本刀を持っていて、「首かりと切腹の歴史」を話した。生徒にも持たしてやった。「結構、重いんですね」「刃紋がきれいですね」と感動していた。本物を使った本物の教育ですよ。刃を舌でなめようとした女の子がいたので、「危ない。やめろ」と注意した。「でも、映画でこんなシーンがありました」なんて言う。映画では二セの刀を使ってるから大丈夫なんだ。これは本物だから舌が切れちゃうよ。事故があったらおいらは講師をクビだ。「刀を持つと俺は人間が変わるから、寝ないように。私語もしないように。カーッとなって斬りつけるからね」と脅したら皆、青くなっていた。まるで「教室ジャック」した犯人だよ。

「時々、生き物を斬ってんですか」と聞くから、「時々、夜中に公園で猫を斬ってる」と答えた。でも、脂が乗ってすぐ斬れなくなる。まア、三匹がいいところだな。と言ったら皆、本気についていた。「この先生はクレージーだから、やりかねないな」という目で見ている。

「時代劇で、何人もバッサバッサと斬るなんて嘘だからね。2、3人斬ったらもう斬れなくなる。多人数を斬る時は替りの刀を用意してやるんだよ。又、男と女と一緒に斬る時は、まず男を斬って次に女を斬る。はじめに女を斬ると脂肪が多いから、脂が刀にのってすぐ斬れなくなる。だから気をつけるように」・・と、一生役に立つことのない知識も教えてやった。

でも、「とってもタメになります」「役立ちます。他では絶対に教えてくれないことですので」と、何人かの生徒は言ってくれた。刀で脅しつけたせいか僕の生徒はおとなしく聞いている。ところが、昨日、他の先生に頼まれて他の学科の授業に出たら、うるさいの何の。それも大声で喋っている。他の先生の授業だからと、我慢に我慢を重ねてきたが、ついに耐え切れなくなって、怒鳴った。「私語したい奴は出ていけ!」と言った。「ス、スズキさん。僕の授業なんだから勝手に生徒を追

い出さないで下さいよ」とその先生は言っていた。

「ぶんなんぐってやろうかと思った」と自分のクラスで言ったら、生徒は、「日本刀で脅せばよかったのに」「斬りつけたらいいのに」と他人のことだから無責任なことを言っていた。でもなー、生徒を斬り殺して逮捕じゃな、これでおいらの人生も終わりだよ。あまりにみじめな人生の幕引きだよね。だから、もうキレないようしよう。

そうだ、今日の授業が終わって帰ろうとした時、「先生、サインして下さい」と一番前の生徒が本を出した。見たら、『日本国民のための北朝鮮原論』だ。エッ、もう本屋に出ていたのか。「芳林堂で買いました」と言ってた。うれしかったね。

「常在戦場」と書いてサインしてやった。これは、船木誠勝(プロレスラー)の好きな言葉で、おいらも好きなんだ。船木は30才。いい選手なのにな。5月26日(金)、ヒクソンと闘い、絞め落とされて負けちゃった。記者会見で、「引退します」と言っていた。40才のヒクソンは、「これからも、誰の挑戦でも受ける」と言っていたのに。40才に負けて30才が引退するなんて・・。残念だ。SPA!で前に書いたが、船木とは骨法道場で一緒に練習したこともあるし、いろいろと教えてもらった。だから淋しいね。

入場する時、船木は着物を着て、本物の日本刀を持って現われた。ピッタリと決まっていた。でも後で言っていた。「プレッシャーもあったし、錯乱しそうでした。これで死ぬかもしれないと思ったし。それならいっそ、この日本刀でヒクソンに斬りつけようかとも思いました。でも、それじゃバスジャックの少年と同じことになってしまうし・・」。ウッ、凄いと思った。そこまで、揺れる内心を明かしているのかよと思った。

この試合の日は、ある格闘技雑誌で原稿を頼まれて書いた。夜中の2時〆切だった。そして、もう一本、レギュラーの「ゴング格闘技」の原稿がある。しかし、これが大変だ。ゴン格は今、船木の所属するパンクラスから取材拒否をされている。SPA!読者なら分かるだろうが、前田日明が安生洋二のテロに倒れた時、「ゴン格」は「パンクラスも共犯か」と書いて、怒ったパンクラスから取材拒否をされてしまった。だから、船木をはじめパンクラスのことは一切誌面に書けない。「だから、ヒクソンの名前は出していいが、船木の名前は出さずに試合のことを書いて下さい」という。エッ、そんなこと出来るのかよ。難しいよ。「ヒクソンは鬼神だった。集中力が凄い。相手をグランドに持ち込んでからの・・」と書くのかな。〈相手〉と書いてもダメかな。こりや、不可能だよ。「早く謝って取材拒否をといてもらって下さいよ」と言ったが、「いや、ダメです。男には絶対に譲れないことがあります。右翼運動を長くやってきた鈴木さんなら分かるでしょう。男の誇りです」という。まいったな、右翼みたいなことを言う。「鈴木さんなら分かるでしょう」と言われてもな。「僕は誇りなんかないですよ。SPA!の連載を見ても分かるように、いつでも、どこでも、誰にでも、すぐに謝ってますよ」と言ったら、あきれっていた。ともかく、船木の名前を出さずに「ヒクソンVS船木」戦を書くんだ。さて、いかがいりますか。どんな注文にでも応じるのがプロのライターですからね。いいでしょう、やりましょう。

えーと、北朝鮮の本だね。これを紹介するのが当初の目的だったんだ。『日本国民のための北朝鮮原論』(1800円)だ。発行・デジタルハリウッド出版局。発売・駿台社だ。井上周八先生(チュニエ思想国際研究所理事長)と、重村智計さん(毎日新聞論説委員)に僕が話を聞いている。第一部は「北朝鮮理想国家論」と題し、井上先生に聞いた。「日本のマスコミは、朝鮮の眞の姿を全く伝えていません!」と井上先生は言い、いかに素晴らしい理想の共和国であるかを熱っぽく説く。〈神〉の素晴らしいを説く宣教師のようだった。拉致、テロなど一切ない。失業、貧困、差別なども一切ない。日本も北朝鮮になるべきです、と言う。ここまで断言されると、もう、何やら、すがすがしい。気持ちがいい。だから、ともかく聞きましたよ。どんなに素晴らしいか。そして僕らはどうしたら、そんな素晴らしい国をつくることができるのか、を。これは、北朝鮮を通してみた〈日本論〉でもある。今までとは全く違った北朝鮮本になったと思う。又、こういうことは僕でなければ聞けないことだと思った。「朝生」のように「激論」していたら、とても聞けない。いま時、絶対に聞けない貴重な話だ。そして、井上先生のお話の〈土俵〉に上って、そこで、国家の理想とは、人間の生きがいとは、自由とは、恋愛とは、・・について話し合ってみた。最近の仕事の中では一番、力をこめたものかもしれない。

第二部は「北朝鮮現実分析」だ。別に第一部の〈理想篇〉とのバランスをとったわけじゃないが、重村さんに〈現状篇〉を詳しく聞いた。「北朝鮮が早期崩壊することは絶対にありえない。だが、しかし・・」と言っていた。この人は北朝鮮問題では一番、バランス感覚のある人だと思った。とても勉強になった。

ともかく、今までにない北朝鮮本になった。これは自信を持って言える。表紙もきれいだし、買う気を起こさせる。帯にはこう書かれている。「次は何を起こそうとしているのか?」「テボドン、拉致疑惑、核開発、権力世襲・・。謎の国"思考回路"を明らかにする、超異色激闘対論!」。

そうだ、「週刊宝石」(6月8日号)には「宝石ブックセンター」で取り上げられていた。「北朝鮮は素晴らしい国」と言い切り、北朝鮮の切手に描かれるほど、ピョンヤンから最も信頼される日本人。その井上先生のことを「驚きと感動」をこめて紹介し、こう書いている。

〈そんな先生に対し、「説はごもっともですが」と控えめな対論を挑んだのが、新右翼の論客、鈴木邦男である。なんたる組み合わせの妙! しかも、互いに生真面目なところがいい。北朝鮮において「不倫はいけないことか」と聞く鈴木に対し、先生はこう答える。「よくないでしょうね。資本主義社会でもよくないんだから」。この噛み合わせの悪さで、話はメディアのあり方から天皇論にまで及ぶ。接点を模索せんとする両者の誠実さは、本書最大の魅力である〉。

これは「週刊宝石」の安田浩一さんが書いている。そうか、僕らは「誠実」かと思ったね。たしかに、まじめに、話し合ったな。テーマはいろいろあったけど、面白かったので、ひたすら聞いた。僕はこれが普通の〈聞き方〉〈話し方〉だと思ったが、世の中には余りにも「誠実でない」対論や激論が多いんだよね。それでいて何も生み出してない。そういう日本や、マスコミのあり方に対するアンチテーゼでもあるんですよ、この

本は。と、難しい言葉を使ったところで、今回は終わろう。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張6月12日

超能力中年になっちゃったよ

ギャッ俺には超能力があるよ、とビックリしちゃった。透視能力というか、予知能力があるんだ。「千里眼」というのはおれのことだったんだな。心が清らかになつたと思ったら不思議な力がついてきた。いや、元々あつたんだろうが、気がつかなかつただけなんだ。一水会代表をやめたんで、これからは思い切つて堕落してやろうと（初めは）思つたんですよ。酒と女とギャンブルに狂つてやろうと思つたんだ。今まで余りにストイックな生活を送つてきたし、これからは自堕落に生きてやろうと思つた。そんで60才になつたら、その堕落した生活をもとに壇一雄の『火宅の人』のような小説を書いて、作家デビューを果たそうと思つたんじや。

でも、仕事が忙しくて、本を出さなくちゃいけないし、学校で教えるために勉強しなくちゃならんし‥。堕落する時間がない。マージャン、競馬、競輪をやろうと思ったけど、ルールが複雑で覚えきれん。そんなこんなで俺の〈堕落篇〉は進まない。逆に前よりも、もっともっとストイックになっちゃって、酒も女もギャンブルも一切ない生活に入っちゃつた。心はどんどん清らかになるし、今では皆に「聖人クニ君」とか、「宣教師みたいだ」といわれている。そしたら、今まで〈見えない世界〉が見えてきた。人と会つても、相手の考えることが分かる。「今、こう言おうと思ったでしょ」と言うと、ピタリと当たる。猫や犬や、三色スミレ、チューリップとも会話できるようになった。（乃木坂注・ああ、鈴木さんが段々壊れしていく‥）まるで、聖フランチェスカのようだ。そんだけ、こんな事もあった。

6月6日(火)のことだ。ジャナ専(日本ジャーナリスト専門学校)の授業を終えて家に帰つてきた。うん、今年は本が4冊も出たなと考えていた。『右翼・公安用語の基礎知識』(コアラブックス)、『夕刻のコペルニクス』(扶桑社)、『がんばれ!! 新左翼Part3』(エスエル出版会)、そして『日本国民のための北朝鮮原論』(デジタルハリウッド出版局)の4冊だ。でも、これで今年の出版は終わりかな。いやいや、予定はまだあるぞ、と思っていた。秋に文庫本になるのが2冊ある。それに「創」の僕の連載「鈴木邦男主義」も本にしてくれるというし。今年は、だから、あと3冊だな。

しかし、原稿を入れてんのにさっぱり本にしてくれない出版社もあるし。それは一生、本にならないのかな、くやしいなと思っていた。インタビューされたもんでも面白いものはあるのに。そうだ、「日刊ゲンダイ」でやつてたのがあった。あれなんか一冊の本にしたら売れるのに。えっとタイトルは何だったかな。森鷗外の小説『ヰタ・セクスアリス』からとつて、「私のヰタ・セクスアリス」というんだつたよな。いろんな人達に性の〈初体験〉を聞くんだよ。俺は高3の時、初体験をしたから、その話をしたんだよ。いや、ちがつたかな。19才だったかな。ともかく「衝撃の初体験」の話をしたんだよ。あれなんかもう一冊になる位、インタビューをやってんだろう。出したら売れるだろう。おい、出せよ! と、思った。この「思い」が強かったからだろうな。なんと‥。

カギをあけて家に入つたら郵便がきつてゐる。「聖書の集いのおさそい」「アメリ

力から来た牧師さんのお話がありますよ」なんて手紙ばっかりだ。それに「世界日報」が毎日入っている。一ヶ月無料で配達するんで読んでくれ、という。だれが読むか、絶対統一教会になんか入んないぞ、おい、イヌイ! こんなの入れんなよ。統一教会は山田君を返せ! と叫んだ。このコーナーだったと思うが書いたんだよな、昔、生長の家学生道場にいた時に、同じ道場生の山田君が統一教会に拉致された。それなのに「世界日報」なんか入れて、俺まで入信させようとしている。太いやつだ。太い乾だ(本当に太めだけど)。なに! 「僕じゃありませんよ、もう統一教会はやめたんですから」だって。アッ、又もや離れている人間の声が聞こえた。合同結婚式で一緒になって「お尻叩き」の儀式をした奥さんとも別れたんだという。その元奥さんが、いぬいのホームページを見て、「背教者のくせに、自分だけいいカッコーをして!」と激怒したという。これもいぬいの声だ。聞こえるんだ。やだな。不思議な力がついちゃって‥。

そうだ、統一教会なんかどうでもいいんだ。そんな、新聞やら印刷物に交じって、「河出書房新社」から手紙がきていた。原稿依頼かな。でもこんな大出版社から来ないだろうな、と思いながら封を開けた。ビックリした。「日刊ゲンダイ」に連載していた『私のヰタ・セクスアリス』を出版したいので、再収録のお許しをいただきたく‥と書かれている。今年の秋に文庫で出すという。おいおい。つい10分前に「出してくれよ!」と思ったばかりなんだ。世の人々は「偶然」というだろう。しかし、こんな偶然はない。考えられるのは二つだ。一つは僕に透視能力、千里眼の能力があるということ。もう一つは、「本を出してくれよ!」と念じたら、10分間でこれが「実現した」ということ。うん、こっちの可能性の方が高いな。

実を言うと、『創』の僕の連載「鈴木邦男主義」も5年位続いてるし、本にしてくれないかなと思っていた。ただ、「思い方」が足りなかったんだな。今年になってから熱烈に思った。そしたら〈念力〉が通じて、篠田編集長から、「出しましょう」と電話があった。ただ、分量が多すぎるので、かなり削らなくてはならない。その作業を今やっている。「他の連載執筆者からも本にしてくれといわれてる。すこしづつやっていきたい。とりあえず、まず、香山リカさんの本を出す」と言っていた。そして今月号の『創』(7月号)を見たら、香山さんの本の紹介が出ていた。

『「こころの時代」解体新書』(1575円)で、勿論、創出版から出ている。あ、もう出たんだと思った。そして、「創」のラスト「今月の編集室から」を読んで驚いた。エッ、本当かよと思った。こう書かれていた。

〈香山リカさんの『「こころの時代」解体新書』が売れ行き好調で早くも増刷がかかりました。発売前に香山さんのHPで予約注文(サイン入りの特典付)を募ったのですが、何と800冊近い注文が。初版の1割近い事前予約がとれたわけで、しかも料金は事前振込みですから、これ出版社にとってはかなり強力。本のネット販売の比率が増えていることは知っていましたが、予想以上の威力です〉

スゲーと思った。と同時にこれは僕らに対する「プレッシャー」だとも思った。「鈴木さんもやって下さいよ」と言われているようで恐い。そのうちどこの出版社も、「HPで800部以上予約がきたら出してあげますよ」なんて、なるんじゃないのかな。出版社は安心して出せるが、ライターにとっては大変だ。これは香山さんだ

から出来ることだ。しかし、すでに初版が8千部で、1割はすでに金を払って予約している。こりや「創」にとってはウハウハだ。これだったら毎月だって香山さんの本を出せるよ。

宮崎学さんに会ったら、彼も似たような話をしていた。「HPで宣伝すると2000部は売れる」と。ただ、香山さんのようにお金を払っての予約ではない。HPをみて買った人が2000人位だろうという推測だ。その点香山さんは確実な数字だ。

「鈴木さんもHPで予約とって下さいよ。それを見て出すかどうか決めますから」なんて言われたら嫌だな。香山さんが800人としたら僕なんて80人も集まらないだろうな。もっと残酷な結果が出たら嫌だな。たとえばだよ、HPで予約をつくる。

「創」から電話がある。「出版はやめましょう。だって予約は2人しかありませんでしたよ。赤坂と乃木坂という人だけですよ。それに2人とも筆跡が鈴木さんと似てますよ・・」と言われたりして。そんな残酷な結果が出たら自殺するしかないな。

おーい、どうなんだよ、管理人! それに「掲示板」にかいてる人たち!!

そうだ、「予約」といえば、こんなこともあった。今、都民カレッジという生涯学習の学校で週一回、教えている。『がんばれ!! 新左翼Part3』の宮台真司さんの「解説」を読んだ人なら分かるよね。宮台真司さんの紹介で、行っているんだ。都立大学のオープンカレッジとして10年前に出来たのがこの「都民カレッジ」なんだ。東京都がやっている。だから、僕は東京都から講師料をもらっている。去年の夏頃、話があって、年末に決った。しかし、それで本決まりではない。「都民カレッジ」の「募集要項」に載せてくれるのだが、それで10人以上「予約」がないと中止になるんだ。僕は「ナショナリズムの歴史と功罪」というテーマにしたが、かたかったなと後悔した。これじゃ集まらないかな。「右翼の話なんか聞きたくねえよ、ペッ」といわれて誰も集まらんのじゃないか。そうなったら、せっかく宮台さんに紹介してもらったのに、申しわけないことになる。腹を切っておわびしなくちゃならない、と思いつめていた。

ところが3月になって、「申し込み者が29人いましたので、開講します」という通知だ。ホッとした。胸をなでおろした。それで今、毎週水曜日に行っている。有楽町の東京フォーラムの地下の「生涯学習センター」のとこにある。29人の内訳だが僕より若い人は5人だけ。あとは60代、70代の人。そして、みんな熱心だ。寝たり、私語したりする人はいない。質問もバシバシくる。それに戦争を体験した人も多いし、「ナショナリズム」については僕より詳しい。大変だけど、楽しい授業ですよ。

と、これを書いてる時に、エスエル出版会から怒りの「通告文」。SPA!に書いたことで、「許せない。告訴する!」と言っている。SPA!編集部の方もあわてて、次週のページを差しかえると言う。今晚、徹夜で書いてくれという。又、謝罪文を書くのか、あるいは裁判闘争になるのか。頭がいたい。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張6月19日

今週は文芸的に。「檸檬」の話。

梶井基次郎は名作『檸檬』の中で、丸善にレモンを一つ置いてくる。何喰わぬ顔をして外へ出る。そして妄想する。

〈変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑(ほほえ)ませた。丸善の棚へ黄金色(こがねいろ)に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉葉(こっぱ)みじんだろう」。そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。〉

これが『檸檬』のラスト部分だ。1924年10月に書かれている。76年前だ。僕なんかが生まれる前だ。でも、時間、空間を超えて、梶井が僕の「復讐」をしてくれたんだ。そんな気がしてならない。「復讐」の話は半分冗談、半分本気だ。何の

「復讐」かって? 分からない人には分からなくていいよ。このHPをずっと読んでる人だけが分かる。それでいいだろう。でも、梶井にこんなことを書かれて丸善は怒らなかつたのだろうか。「模倣犯が出て毎日、檸檬を置かれたら困る」「檸檬の型をした本物の爆弾を作つて置いてつたらどうするんだ。梶井は責任をとれるのか」「営業妨害だ。告訴する!」なんてことにならなかつたのだろうか。いや、逆に、「宣伝になっていい」と丸善は思ったのだろうか。「檸檬爆弾の置かれた丸善ですよ」と店の前に貼り出したのだろうか。あるいは、「これが梶井先生が置いた檸檬です」と、置いたのだろうか。梶井は妄想で置いたのに、丸善は、わざわざ店のマスコットがわりに毎日、新鮮な檸檬を置くわけですよ。さらには、「檸檬のテレカ」とか、「檸檬のキーホルダー」なんか作つて売つたりして‥。

ともかく、丸善の「その後の対処」が分からない。日本文学史を読んでも書いてない。誰か知つたら教えてくんまし。そうだ、ジュンク堂の由来は工藤淳という創設店長の名を逆にしただけだ、と教えてくれた人がいたな。彼なら知つてんじゃないか。(乃木坂注・mohkenさんですね) 名前を逆にして英語らしく見せるというのは、きっと「ブリジストン・タイヤ」からヒントを得たのだろう。創設者は石橋なんとかいう人だ。石(ストーン)と橋(ブリッジ)を逆にしただけだ。そうすると、あら不思議、「ブリジストン」という格好いい社名が出来ちゃつた。(乃木坂注・鳥井さんの「サントリー」もそうですね) だから、おいらも本屋をつくる時は、鈴木書店じゃなく、「ウッドベル・ブック・センター」にしよう。でも過激派から「檸檬爆弾」なんか本当に置かれたら嫌だな。だから書店はやめる。

そうだ、「パイナップル爆弾」というのがあるんだから、「檸檬爆弾」があつてもいい。(乃木坂注・機動隊が使う閃光弾は「レモン爆弾」と呼ばれてますね) 檸檬と全く同じ大きさ、色つやで爆弾を作るのだ。そうしたら、ポケットに入れてどこにでも持ち運びが出来るから便利だ。(乃木坂注・何をする気ですか。不穏な‥)

では、話を過激派から、文学に戻す。檸檬といえば、梶井基次郎と共に高村光太郎だよね。「智恵子抄」の中に「レモン哀歌」という詩がある。いい詩だ。読んでいて、檸檬の酸っぱさが伝わってくる。

〈そんなにもあなたはレモンを待っていた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとった一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりとかんだ
トパアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱっとあなたの意識を正常にした・・〉

レモンをかんだ瞬間だけ、智恵子は〈正常〉になったんだ。いや、光太郎にはそう見えたんだ。「鈴木さんが壊れてゆく」なんて管理人の爺やが言ってたな。だからおいらも毎日、檸檬を食ってるよ。その時だけ、〈正常〉になっている。今も、檸檬をかじりながらこの原稿を書いている。

光太郎の詩のラストはこうなっている。

〈写真の前にさした桜の花かけに
すずしく光るレモンを今日も置こう〉

光太郎はレモンを毎日、仏壇にそなえていたんだね。ホロリとしますね。爆弾がわりに丸善に置く人もいるけど。筒井康隆の本を読んでたら、子供のことを書いていた。机に向かってると子供が突然入ってきて、消しゴムを転がしてよこす。そして身をかくして、「爆弾だ!」と叫ぶ。「こんな独創的な遊びが出来るなんて、うちの子は天才だ」と書いていた。バカか、筒井はと思ったね。こんなの学校で皆やつてんだよ。独創性の一かけらもないガキだよ。あんなに面白い小説を書く筒井でも、子供については目が曇るんかな。このガキも、どうせなら消しゴムじゃなくて、檸檬かパイナップルでも転がせばいいんだよ。

そうだ、と話は飛ぶが、檸檬といえばサンマだよね。サンマには檸檬をかけて食うんだよ。佐藤春夫にもそんな話があったよな。ここで、本箱を探して見る。スライド式本箱だから、とても探しやすい。あった。これだ。「秋刀魚(さんま)の歌」だ。

〈あはれ
秋風よ
情(こころ)あらば伝えてよ
男ありて
今日の夕餉(ゆうげ)に ひとり
さんまを食(くら)ひて
思ひにふける と。〉

これだ、この詩だよ。そして檸檬をかけるんだよと思って読んだら、違う。アレッと思った。次はこう続くんだ。

〈さんま、さんま
そが上に青き蜜柑(みかん)の酸をしたたらせて

さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。〉

檸檬じゃないんだ。蜜柑なんだね。てっきり、檸檬だとばかり思ってたのに。しかし、サンマに蜜柑の汁をかけてくうのかな。甘いだけで、酸っぱくないんじやないか。それとも、酸っぱい蜜柑を選んでかけるのかな。あるいは佐藤春夫は蜜柑と檸檬の違いを知らなかったとか。でも、「その男のふる里のならひ」というからな。佐藤は和歌山県新宮市の出身だ。和歌山は蜜柑の産地だし、きっと、「サンマ用ミカン」も特別につくっとるんやろ。

ところで、檸檬という字は難しいよね。ワープロじゃ、「漢字変換」を押すと一瞬に変わるからいいけど、書くとなると大変だ。でも、こんな難しい字を一つ位、おぼえておくといいよ。人生、役に立つ。作家の伊集院静は彼女の前でこの檸檬という字を書いてみせた。「まあ、なんて学のある人でせう」とコロリと参って結婚したのが今の奥さんだ。篠ひろこだけ。まわりの映画人、テレビ人なんて、皆アホばっかりで、口クに漢字も書けないし、分数も分からん。そんな中で、檸檬を書いたんだもんな。尊敬されるよ。

だから皆も難しい漢字を何かおぼえましょう。「僕は殲滅ってかけるよ」(これじゃ元過激派だってわかっちゃうか)。「おいらは憂鬱って書けるよ。毎日そうだけど」(これじゃ嫌われるか)。「僕は紺碧って書けるよ」(キャッ、早稲田なの、ステキとなる。だろう)

では、話はもう一度、梶井基次郎の『檸檬』に戻る。梶井が檸檬好きだったのは、実は理由がある。彼は肺病だったからだ。本文でも書いている。

〈その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかったです。その頃私は肺尖を悪くしていつも身体(からだ)に熱が出た。(中略)その熱い故だったのだろう、握っている拳から身体内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。(中略)実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと云いたくなつた程私にしつくりしたなんて私は不思議に思える〉

梶井は、熱さましにいつも檸檬を持ち歩いていたのだ。だから丸善にもポンと置いてこれる。持ち歩いていただけじゃない。よく、食べていた。檸檬の酸っぱさが肺病に効くと思われていたのだ。肺病は日本文学の重要なテーマだ。堀辰雄の『風立ちぬ』を初め、肺病をあつかった小説は多い。「肺病が日本文学をつくった」と言われるほどだ。だからこそ、檸檬も日本文学の中では重要なテーマになるのだ。

山平重樹氏の小説に『モロッコの辰』というのがある。山平氏は元、日学同の活動家で今は作家だ。『ドキュメント野村秋介』とか、『ドキュメント新右翼』(二十一世紀書院)といい本をたくさん書いている。『モロッコの辰』は映画化されて、たしか、「横浜愚連隊物語」という題だったと思う。野村さんも若い時は、愚連隊に身を投じ、この「モロッコの辰」の弟分だった。映画にも、野村さんらしき人物が出てくる。

ところで、映画では、この「モロッコの辰」は肺病で、いつも檸檬を持っていて、かじっていた。梶井基次郎をつい思い出した。やっぱり肺病には檸檬なんだ。いや、そう思われてたんだ。ところで、何で主人公は「モロッコの辰」と呼ばれたのか。映画「モロッコ」が好きで、そればかり見てたからだという。ヘエー、イン

テリじゃないかと思った。だって、「モロッコ」といったら、名作だし、名画だ。クラシックのようなもんだ。愚連隊なのに、こんな名画をみてるなんて。チャンバラ映画なら分かるけど、と思った。それで野村秋介さんに聞いた。「バカだな、お前は」と叱られた。どれが名画で、どれが娯楽映画だなんて区別はないんだよ。なんせ映画が少ないんだから。きたやつは皆、みてたんだよ・・」と。アッそうなのかと思った。

というわけで、今回は、〈文学〉であり、〈娯楽〉でもあった。そんなんかんじの「今週の主張」でしたね。では、サイナラ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張6月26日

エスエルの本は早く買った方がいいだよ

ハイ、申し訳ありませんね。エスエル出版会の件では、皆さんにご心配をかけまして。「本を売るための八百長喧嘩じゃないのか」「プロレスじゃないのか」と、初めは思ってた人もいたようですが・・。違います。エスエルは本気で怒り、SPA!編集長あてに、厳しい「通告文」を送ってきました。「言い分が認められない時は告訴する」と言ってます。僕も含め、三者で話し合いは続いております。とりあえず、今週のSPA! (6月28日(水)発売号)に、「経過報告」が載りますので見て下さい。その次はどうなるのでしょうか。裁判になるとしたら、僕の「タコペ」の連載そのものも危うくなりますね。エスエルからは20冊ほど本を出してますが、それも危ういですね。「じゃ、早いうちにエスエルの本は買っておいた方がいいですね」と聞かれましたが、そうした方がいいでしょうね。松岡社長とは20年来の友人でしたが、それも、これで終わりになるかもしれませんね。どんどん友人を失っていつて、淋しいですね。これも僕の不徳のいたすところです。

「レコンキスタ」(1号～100号)の縮刷版の復刊は予定通り、エスエルから出るようです。こっちは木村新代表が「あとがき」を書いてるし、新パートナーとして仲よくやってくれるでしょう。「レコンキスタ」(101号～200号)の縮刷版(2)もやろうと言っています。これは楽しみです。1冊2万円と少々高いのですが、それだけの価値はありますよ。10年前に「縮刷版」が出た時は、「面白くて、毎日、家に閉じこもって読んでる」という手紙をもらいました。いやに実感がこもってました。縮刷版の復刊で、又もや、「引き籠り」が増えるでしょう。

そうだ、SPA! の話だ。何とか早くエスエルの件は解決させたいと思っております。そして、「楯の会」シリーズに又戻ります。「エッ、まだあんの?」とお思いのあなた。仕方がないでしょう。もう二人取材してるんだから。と言うと、取材した人に失礼だよね。これは面白い話が聞けましたし、アッと驚く「新事実」や、アッと驚く、未発表「写真」もあります。楽しみにして下さい。

そうだ、その前に、一回、どうしても書かなくちゃならんことがある。原稿は渡したけど、もしかしたら載らないかもしれない。載っても、又、「告訴」騒ぎになるかもしれない。ウーン、頭がいたい。どうして次から次と、問題が出てくるんじゃ。と、文句は言えないか。自分で蒔いている種だからね。

今年は三島事件から30年目だから、関連本がドッと出ると言ったけど、第一弾が5月の末に出た。直木賞作家の中村彰彦氏が書いた『烈士と呼ばれる男・森田必勝の物語』(文芸春秋刊。1667円)だ。「諸君」に3回連載したものをベースにして、加筆したという。とにかく、よく調べてるし、キチンと取材している。文章もうまい。森田必勝の中学や高校の同級生、初恋の人などにも会って話を聞いている。僕なんて、早大に入ってからの森田必勝しか知らなかったから、新たな発見がたくさん

んあった。

この中村氏は昔、学生運動をやっていたわけではない。昭和24年生まれだから、あの激動の時代が終わってから大学に入ったのだ。94年、「二つの山河」で直木賞を受賞した。他に、「遊撃隊始末」「保科正之」など時代小説が多い。森田必勝に関心を持ち、元日学同の宮崎正弘に話したら、森田のお兄さんを紹介してくれた。そこから取材を開始したという。宮崎正弘は去年、『三島由紀夫「以後』』(並木書房。1700円)を出している。この中で例の「森田必勝除名事件」について初めて認めたのだ。中村氏は宮崎の本を読んで、森田必勝という男を知り、書いてみたいと思ったという。

又、今年中に本を出すといっている持丸博(元「楯の会」初代学生長)も、宮崎の本を読み、これに刺激されて、「俺も書かなくては・・」と思ったという。ただし、中村氏とはちょっとスタンスが違う。持丸は日学同から除名された。そして三島や森田に対する見方も宮崎とは大分違う。又、楯の会を「大衆組織」から「決起」に大きく方向転換させた鍵を握る男がこの持丸だ。このことはSPA!でも書いた。だからこそ、彼の〈証言〉は貴重だと思うし、あの事件について語りうる「最後の一人」だ。だが、書くのが遅れているようだ。こっちまでイライラする。

じゃ、又、激励に行ってみようかな、土浦まで。

この他にも、元「楯の会」の人間で何人かが本を出そうとしている。いいことだ。どんどんやつたらいい。相談されて協力してるのである。あと、面白い企画では、「楯の会白書」を出そうという動きもある。あっ、マズイ。書いちゃいけないのかな。まア、いいだろう。元楯の会の全員にアンケートを出し、膨大な質問に答えてもらい、それをまとめるのだ。今年の11月25日までには本にしてまとめたいという。「なぜ楯の会に入ったか」「事件の時、どこにいたか」「何を考えたか」「その後、何をしてきたか」・・と。各人に答えてもらい、まとめるという。さて、どんなものが出来るのだろうか。

「楯の会白書」というのはもちろん、「全共闘白書」に刺激されたんだ。全共闘だってやってるんだから俺達も、というわけだろう。そうだ、6月10日(土)に日本青年館で、「全共闘世代の2000年紀集会」があった。そこでも、「全共闘白書」が売っていた。でも、大量に売れ残ったんだろうな。5割引きで売っていた。入ったらすぐ、本の売り場だったけど、何か暗かったな、雰囲気が。「唐牛健太郎追悼集」「田宮高齢追悼集」「塩見孝也追悼集」・・と、追悼集ばっかりだ。(乃木坂注・塩見さんは生きてますよ。生前葬しないで下さい) それに、「一緒に年取れずにごめんね」「定年帰農」という本もあった。何か、暗い。淋しい。「一緒に年取れずに」って、どういうことかな。活動家同士が結婚し、仲よく年をとっていったけど、片方だけ病気で死んじゃったのかな。それとも、男は若い女をつくって逃げたのかな。こんなに気になるんなら、買ってくればよかったな。

この集会の分科会は、「老人問題」「介護」・・といったテーマでやっていた。元全共闘も、今や老人問題なんだね。だったら、「老人決死隊」をつくるとか、「養老院全共闘」をつくるとか、その位やれよ。そこで、「定年後は活動家になろう!」と街で呼びかけるとか。いいじゃないか。

この集会は、「あれから30年・これから30年」と書かれていた。でもな、「あれから30年」は分かるけど、「これから30年なんかないよ」と皆、言ってた。「皆って誰だよ。そんなこと言ってたのはお前だけだろう」って? ギクッ。よく分かんね、君も。透視が出来るんだね。人の心が読めんだね。超能力だよ。

ところで、この集会は朝の10時から夜の5時まで。そのあと、パーティ。「パーティに出て下さいよ、鈴木さん。発言の場を設けますから」と主催者に言われた。でも会場費は3千円、パーティ代は7千円。高いよ。7千円出してまで「発言の場」なんかいらねえよと思って帰ってきた。それに、もう、「終わった人」たちばかりなんだ。喋ってても何ら刺激を受けないよ。

午後1時から、宮台真司さんと牧野剛さんがトークしてたんで、それだけを聞きにいったんだ。二人の話は面白かったし、勉強になった。でも、質問してる奴らが皆、アホで、いらついた。昔、運動してた人たちなんだろうな。「質問!」といって手を上げるんだけど、何のことはない、自分の意見をダラダラ言ってんだ。又、学生時代は俺はこんな運動をやってたんだ、偉いだろう、という自慢話ばかりなんだ。かわいそうに。こんな場でもないと、話す機会がないんだろうなと思ったよ。会社じゃ誰も聞いてくんない。もう、リストラだ。妻や子供も相手にしてくれない。友達もいない。だから、お金を出してこんな集会に出て喋るしかないんだ。

「その点、予備校の先生は毎日、生徒を相手に全共闘の話を出来るからいいんですよ」と牧野さんに言ったら、「そうなのか」と考え込んでいた。「さっきは、短く喋ろ! と怒鳴ったけど、彼らもかわいそうな人たちなんだね。じゃ、次の時は、"質問は一人30分以上"とやって、思う存分喋らせたらいいね」と言っていた。うん、でもな。喋る奴はいいけど、聞く人間は大変だ。僕だったら、たとえ金をもらっても聞きにいかない。それに、「次の時」はもうないだろう。「あれから40年」「あれから50年」「そして誰もいなくなった」と、やるのかな。だったら、いっそのこと次は、「全共闘世代の3000年紀集会」にしたらいい。今から楽しみだ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張7月3日

青谷舎の本も早く買った方がいいですよ

弁護士から手紙が来た。書留だ。重要な手紙らしい。ドキッとした。ついに来たか。告訴されたのか。これから裁判闘争か。いやだなと思った。

先週号(6月28日発売)のSPA! では「自己批判」とエスエル出版会の抗議文を載せたのに。それでは誠意が感じられないと思ったのか。ああ、憂鬱だ。

さてよ、もしかしたら、今週号(7月5日発売号)のことで告訴されたのかもしれない。これも危ないことを書いてたからな。あれれ、でも、まだ出てないよ。出てなくっても、よく「FOCUS」とか「週刊文春」なんかがあるじゃないか。事前にどっから聞きつけて、訴えるというのが。印刷所に「スパイ」がいるのかな。あるいは、周辺をしつこく取材されてるから分かるのかな。

・・・と考えたら、封を切る勇気もなくなった。だから、そのままにして外に出た。おいらはルノアーラーだから、高田馬場の「ルノアール」2号店で本を飲みながら、コーヒーを読んでいた。いや、違った。コーヒーを飲みながら、本を読んでいた。(ワープロを使っているとこういう変換ミスがよくある)。(乃木坂注・そんなミスありませんよ。某作家にもらった変な薬を飲んでんでしょう)

この時、『昭和史の論点』(文春新書)を読んでいた。坂本多加雄、秦郁彦、半藤一利、保阪正康の座談会なのだが、これがなかなかいい。「戦争以外の道はなかつたのか?」と本の帯に書かれている。意欲的な本だ。今まででは、戦前や戦争は「全て否定」。そして今は、「全て肯定」といった両極端な論が多かったが、これは、かなりバランス感覚のある本だ。戦前の日本の歩みや戦争突入の経過でも是は是、非は非として、厳しく指摘している。これは好感がもてるし、読んでいて勉強になった。17のテーマで話している。「国際連盟からの脱退」「二・二六事件」「南京事件へ」「ハル・ノート」「大東亜共栄圏」・・・と、どれも興味深い。

「国際連盟からの脱退」では、いかに日本の新聞が戦争を煽ったか。そして、戦争に突入する時に、いかに新聞の宣伝が大きいかが話されている。又、新聞の他に、陸軍、海軍など、「拡大を要求する組織の原理」が日本を戦争に引きずったと、秦郁彦は言う。さらにこう言う。

「特高警察もそうです。日本共産党がかなり活発だった頃、特高の組織はどんどん拡大しますが、昭和十年頃には日本共産党は壊滅し、仕事がなくなった。すると組織維持のため、こんどは美濃部達吉や津田左右吉などの中道リベラルをターゲットにします。これらも片付けると、また仕事がなくなる(笑)。そこで、最後には右翼狩りをやるんですね」

ウッ、今の公安警察と同じですね。歴史は繰り返すんですね。又、秦は「盧溝橋事件から南京事件へ」の中で、こんなことを言っている。

「南京事件で特徴的なのは、土台とすべき数字が乏しく、推測で論議せざるをえないことなんです。南京守備軍がどのくらいいたのか、南京の一般市民の人口がどのくらいだったのか、両方ともわかりません。戦闘で何人死んだのか、何人処刑さ

れたのか、初めからおしまいまでゲスワーク(推定作業)なんです。当時、南京市内に住民は二十万しかいなかったから、二十万殺せるわけがないというと、みんななるほどと思いますが、二十万しかいなかったという根拠もないんです」

「ウッと思ったね。「南京20万」というのは、僕らも初めから疑ってなかったが、この「前提」も疑わしいんだって。「左翼のウソにだまされるな」という「右翼のウソ」にだまされていたのかもしれないね。戦後、日本はアメリカの民主主義のおかげで目が覚めたと思った。ところが福田恆存は「悪夢から覚めたという夢をまだ見ているのだ」と言った。今の僕らも同じことだ。二重に嘘をつかれているのだ。

この本は他にも紹介したい所があるが、もうやめとこう。ともかく、いい本だ。690円だし、安いし。木曜日は河合塾コスモの「基礎総合」の授業で、これをテキストにしてやった。そうそう、河合塾コスモではHPをつくっている。木曜日の5時からは「基礎総合」で、以前は「牧野・鈴木ゼミ」という名前だった。牧野剛先生と僕が、各自に本を選んで、哲学、歴史、心理学の話をしている。大学のゼミよりも高度だといわれている。このゼミのことや、コスモの紹介がHPには出ている。又、毎月、「コスモ通信」を出していて、僕らも時々書かれる。最新号には僕が「喜ばしき形の学問」を書いた。それも出てるかもしれない。訪問してみたら。

<http://www.kawai-juku.ac.jp/cosmo.html>

と、その時、突如、音楽が鳴った。「その時」って、一体いつ? とお思いでしょうね。コスモの時、HPの時。いえ、ルノアールで本を読んでいた時ですよ。それが何と、チャチャチャーン、チャン・・というあの「スパイ大作戦」のメロディだ。いや、今は「ミッション・インポッシブル」のメロディだ。それも、けたたましく鳴る。一体何だと思ったら、となりの疲れ切ったおっさんが、「ハイハイ」と電話に出てるんだ。何と携帯の着メロなのだ。とび上がりっちゃったよ、おらは。お前には「実行不可能な指令」なんか来ないよ、パカ! と大声で怒鳴ってやった(心の中で)。でも、くたびれた中年とは実は世をしのぶ仮の姿で、本当は中核派の地下活動家だったりして。で、バイトで地下鉄工事をやってたりして。あるいは、地下商店街の店員をしてるとか。あるいは北朝鮮の秘密工作員だとか。チュチェ思想研究会の人だとか(これは別に危なくないのかな)。

ともかく、人騒がせなミッション・インポおじさんだった。でも、「インポ」って略すと変だね。ギックリ腰の人に女を抱けという指令が下ったみたいで。あの編集者は、もうギックリ腰は治ったでしょうか。治ったんでしょう。それに、「光るボールペン」があるから、もう再発することはないそうだ。ところで、その「ミッション・インポ」おじさんだが、チラッと見たら洋泉社新書を読んでいた。目ざといおいらは見ちゃったね、しっかりと。小浜逸郎+佐藤幹夫の『中年男に恋はできるか』。なんとまあ、過激な本を読んでいるもんだ。でも、こいつにはインポシブルだらうなと思っちゃった。管理人の爺やを見てもインポシブルだよ。でもな、乾太一(ふといち)なんかを見てると、「アブラ切った中年」という感じだし、毎月、「使いすて」で恋をしてるというし。うらやましい限りだ。

ここで、ちょっとお知らせだ。

6月22日発売の『ゴング格闘技』(8月号)の僕の連載「誰が為に鐘(ゴング)は鳴

る」に例の「ヒクソンVS船木」戦のことを書いた。ただし、ゴン格はパンクラスから取材拒否されているので「船木の名は出さないでくれ」という注文だった。おいらは手足をしばられて闘うような感じだったが、何とか苦労して書いた。興味のある人は読んで下さい。

過激なお笑い「ザ・ニュース・ペーパー」の公演にゲストで出る。7月15日(土)の18:00から。下北沢の本多劇場だ。他の日のゲストは立松和平、筑紫哲也、永六輔、C.Wニコル、辛淑玉、村山富市、知花昌一・・と大物ばかりだ。だから僕の出る時だけ人が来ないんじゃないかと心配だ。それに何の話をするんだろう。

7月16日(日)発売の「陶磁郎(とうじろう)」に、〈やきもの〉についてのエッセーをたのまれて書いた。これは季刊で、双葉社から出てるんだね。「新しいやきもの誌」と銘打っている。何でおいらに原稿依頼があったのかと悩んだが、きっと〈あのこと〉を知ってるんだろう。そうに違いない。だから、〈あのこと〉を書きましたよ。

というわけで今週は終わりです。では又。(と、ひっこむ)。アッまずい、まずい、(と又、出てくる)。弁護士からの手紙のことをすっかり忘れていた。一体、何なんだよ。やだな。開けたくないな。でも、いつまでも放ったらかしにしてられんだろう。しかたない、あけるか。ビリッ(破る音)。一読して、アッと声を出して驚いた。何と・・(以下次号)。いや、遊んでちゃいかんな。深刻な話だ。あの青谷舎が倒産するようだ。そんで社長も自己破産を申告してること。大変なことになった。青谷舎からは、去年、2冊、本を出してもらったのだ。一冊は宮崎学さんとの対談で『突破者の本音』(1500円)。もう一冊は、辛淑玉さんとの対談で『こんな日本、大嫌い!』(1500円)。どっちも、いい本だと思うし、力を入れて作った本だ。

実は青谷舎はそれまで、自分たちで書いたり、芸能人のゴーストライターをやったり、いわば編集プロダクション的に手堅く仕事をしてきた。一般的な本をつくるのは僕らの対談本が初めてだった。それで調子が狂ったということもあり、その直前に、保証する会社がダメになり、莫大な借金を背負わされたり・・と不運が続いた。会社はなくなっても、一からやり直すといっているが・・。二冊の本は大きな本屋にはまだある。しかし、それがなくなったら、どうなるのか分からぬ。だから、この二冊も、本屋で早目に買っておいた方がいい。「何か、僕が厄病神みたいで申しわけないです」青谷舎の社長には謝った。宮崎さんも辛さんも、太っ腹でいい人だから、「肝臓売っても金払え」なんてことは言わない。「これは僕の責任ですから、他でかせいで、お二人の印税は僕が一生かかっても責任をもってお払いします」と言った。「何も鈴木さんの責任じゃないし・・」とお二人は優しく言ってくれてるからホッとしてるが。でも、責任は感じる。「他でかせいで」といっても、「他」がないしな。

厳しく暗い状況が続くが、そのうち、いいこともあるだろう。まじめに、ストイックにがんばっていれば神様もきっと、助けてくれるに違いない。と涙にくれながら次週へ続く。

今週の主張 7月 10日

ヤケで映画ばかり観ている

タイの田中義三さんが帰ってきましたね。30年ぶりの帰国です。元気です。三宅島の噴火がなければ、一面トップニュースだったでしょう。「ニセドル裁判」でタイに3年3ヶ月。そして、さらに「日本への引き渡し」の是非をめぐる裁判で1年。計4年3ヶ月もタイにいたわけです。その間、僕は5回、タイに行ってきました。日本に帰ってきてからは、30年前の「よど号」裁判が始まります。しかし、大変ですよね。田中さんは今年51才。来月で52才。裁判が始まるまで1年位あって、裁判が1年か2年かかり、そして5年~8年位刑務所に行くのではないかと思われてます。そうすると還暦(60才)までにシヤバに戻ってこれるのか、微妙なところです。SPA!や、このHPでも田中さんの情報は書いてますので見て下さい。

それと、支援をしている「自主日本の会」のHPにも詳しく出ると思いますので見て下さい。さらに、何と「田中義三のHP」が開設されました。アドレスは

<http://www3.ocn.ne.jp/~tanaka43>

田中さんが喋ったり書いたりしたことを中心にし、裁判の状況などを報告しています。「獄中からのHP」なんて画期的です。日本で初めてでしょう。メールも直接出すといつてますが今は面会も出来ませんので、もう少し待ってほしいということです。

この前、日テレの「知ってるつもり」では、北朝鮮にいる「よど号」グループの家族も出てましたね。いい番組でした。田中義三さんの娘さんも出てました。「お父さんと鈴木さんは顔がそっくりだ」と言った娘さんです。なかなか美人で、「中山美穂」似といわれてました。田中さんには似てませんね。よかったです。きっとお母さんに似たんでしょう。次女の方は「田中さんそっくりだ」といいます。北朝鮮に行った人から聞きました。

田中さんは、帰国メッセージの中で、「声をかぎりに叫んだシュプレヒコール、肩をくんで歌ったインターナショナル」をなつかしく思い出し、再び、日本のために闘いたいといつてました。「そんな30年前の〈激動の時代〉を彷彿とさせる映画でしたよ」と鈴木君(早大卒・一水会によく来てる人)が言ってました。アニメの「人狼」(原作・脚本 押井守)です。たしかに学生と機動隊が激突するシーンは〈実写〉以上という評判です。火炎瓶が投げられ、機動隊員が火だるまになる。爆弾で人間や盾も吹っ飛ぶ・・と、凄いアニメでした。(でも、「セクト・反政府」というネーミングには笑っちゃった。)ぜひ見に行って下さい。伊勢丹デパート横の「シアトル新宿」でやってます。

そうだ、この前の土曜日は、夕方から朝まで、6本も映画を見ちゃった。昼すぎ用事があって外に出たんだが、アパートのドアを閉めた瞬間、「しまった!」と思った。「しまった」時に「しまった」なんて変だが、そう叫んじゃった。だって、力ギを部屋の中に忘れてきちゃったんだもん。大家さんに合力ギをもらいにいったら、いない。何度か、チョコチョコ帰ってきたり電話したが、いない。ヤベー、土

曜日だから、一家三人で、どこかに泊まりでいっちゃったのかな。そうしたら、おいらは明日まで部屋に入れない。と、あわてた。前にもこんなことがあったな。そん時は知り合いの家に泊めてもらったけど・・。

でも今は友人が誰もいない。SPA!では、いろんな人とケンカして、どんどん友人はいなくなる。おれは一人だ、孤独だ。しかたない。どっか、ビジネスホテルに泊まろうかと思ったが、まてよ、土曜だから、映画館はオールナイトじゃないか、と思って、映画に行った。ひたすら観ただよ。ストーリーがこんがらがらないかって?いいんだよ、そんなこと。本当に感動したら、そのシーンだけは心に残るだろう。それでいいんだ。

「ザ・ハリケーン」は中でも最高でしたね。涙がとまりませんでしたよ。こういう映画を作れるアメリカはすごいですよ。映画については僕は完璧に「親米・反日」ですね。だって日本映画って口クなのがないんだもん。もう作る必要もないよ。それに「ザ・ハリケーン」「グラデュレーター」なんて凄い映画が1800円で、「すずらん」なんて、どうでもいい映画も1800円。こりやおかしいよ。〈競争原理〉が全く働いていない。製作費もケタ違いだし、与える感動もケタ違い。「ザ・ハリケーン」が1800円なら、その辺の日本映画は1円80銭でいいよ。

「ザ・ハリケーン」は殺人容疑で20年も刑務所に入れられた無実のボクサーの物語だ。実話なんだ。中から本を出して、それにモハメド・アリやボブ・ディランなどが感動し、救援運動が広がってゆく。「書くことの力は大きい。拳よりも大きい。これがあれば世界中のひとと連帯できる。世界中の作家とも語り合える。ゾラとも話が出来る」といっている。〈文章〉の力は偉大ですよね。武器にもなるし、児器にもなるし・・。そして、自分に向かってくることもあるし・・。(ウツ、おいらのことだよ。文章に攻められ続けてるよ)

「ミッション・インポッシブル2」はメチャ楽しい映画でしたね。「ミッション・トラ・マーズ」よりもずっと面白い。「グリーン・マイル」もおすすめ。これは又、観たいね。何度でも観たいね。「エリン・ブロコビッチ」「レインディア・ゲーム」はそれなりに面白かった。

ところで、「新宿プラザ」だったと思ったが、1800円払う時、横の貼り紙を見たら、こう書いていた。「60才以上の方は子供料金です」。エッと思った。「老人」というのは「65才以上」かと思ったら、「60才」以上なのか。俺は、もう3年後じゃないか、ガーン。「映画代が安くなって、その分、いっぱい見れるからいいじゃないですか」となぐさめてくれる奴もいるけど、そんな問題じゃないぞ。チクショウ、誰が「子供料金」で見るもんか。ちゃんと、1800円払ってやるよ。バカにしている。世の中に「あわれみ」をかけられてたまるか。バスの「老人無料バス」だって使うもんか。(いつか見返してやる。世の中をアッと言わせてやる!)

チクショウ、頭に来た。そうだ、スクリーンを切ってやろう。いや、マズイか。「60才老人説に激怒してスクリーン切り」なんて新聞に出るかな。いや、どうせなら、その辺の下らない日本映画を切りやいいんだな。あんなの、もう上映できなくともいいよ。エッ、なぜ、「スクリーン切り」を思いついたかって?7年前に、「ミンボーグの女」に抗議してスクリーンを切った人がいたでしょう。大悲会の山崎さん

です。この前、その時の話をじっくり聞いたんですよ。「スクリーン切り」は勿論悪いことだし、本人もそう思ったからすぐ自首した。しかし、それで何を訴えたかったのか。それに、スクリーンを切った時は〈快感〉だったのか。そんな自分の「興味」もあって、じっくりと聞いてみました。でも、SPA!に載るのはまだ先になりますね。それよりも〈事件〉〈事故〉続きで、果たして連載がこのまま続くかどうかとも不安です。いろいろと、落ち込んでいるようですから、励ましてやって下さい、鈴木さんを。

えーと、月刊『創』はもう出てるでしょうね。僕の連載「鈴木邦男主義」は今回は、何と「ストーカー対談」です。これは面白いですよ。日本を代表する二人の大物ストーカーに対談してもらいました。一人は元公安調査庁の野田敬生さんで、ストーカー行為でクビになり、逮捕された人です。現代書館から『お笑い公安調査庁』など3冊の本を出します。もう一人は、栃木に住む松本せい子さんです。某大物作家のストーカーをやっています。そのことは『別冊宝島』の「サイコさんからの手紙」にも出ています。その二人のストーカーを会わせてどうするんだ、何を話させるんだ・・とお思いでしょうが、まア、読んで下さい。でも、「ストーカー」という言葉だけで全てを切りすてていいのでせうか。「ストーカーにも人権を!」

「万国のストーカー、団結せよ!」とも言ってました。(誰が? おいらだよ)

ついでに、「レコンキスタ」の宣伝もしておこう。今月から「年間6千円」になつたんだね、購読料が。毎月12page以上あってあれだけ内容が充実してるんだから、「年間5千円じゃ安い。値上げするかもしれないから早く申し込んだ方がいいよ」と言ったけど、僕の〈予言〉通りになったね。もしかして、僕のHPを見て値上げを決めたのかもしれないけど・・。7月号はもう出る頃だけど、僕の連載では、里見岸雄の『国体に対する疑惑』(展転社。2000円)について書いた。これは凄い本だ。70年ぶりの復刻だ。詳しくはレコンを読んで、それで、この本を買ってみて下さい。僕の評論活動のルーツになった本もある。では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張7月17日

今週は個条書き風に。夏だから・・

(1) 「創」(8月号)の「鈴木邦男主義」はもう読まれたでせうか。「ストーカー対談」で、日本が誇る二大ストーカーの野田敬生、松本せい子両氏が、実名・写真付きで登場しています。「私のことをよく書いてくれてありがとうございます。鈴木さんはストーカーに理解がある」と松本さんは喜んでました。「創」を勤め先に持つていて、「ねえ、見て、見て」と言つてゐるそうです。明るいストーカーですね。元・公安調査庁の野田氏は「面白かったけど、あそこまで書いていいのかな。心配ですよ。それに話を少し作つてはどう」と言つてました。いや、99%は〈真実〉ですよ。1%は「聞き違え」や「勘違い」「誇張」があるかもしれませんが・・。

「エッ、ゲラを二人に見せてないの?」と篠田編集長も驚いてましたが、でも、僕の責任で書いたんだからいいでしょう。三人の信頼関係もあったし、少々間違つたり、オーバーに書いても笑つて許してくれる、「心の広いストーカー」でしたし。このHPを見る人で、「オレもストーカーだ。野田氏と対談したい」という人がおりましたら、ぜひ言って下さい。実現するように努力します。

(2)この「鈴木邦男主義」はまとめて単行本になる予定だ。でも、5年以上も続いているし、60回をこえている。半分位は削らなくちゃならない。そんなこんなで、まだ編集作業に入っていない。

(3)それよりは、文庫本二冊の方が早く出るようだ。一冊は、10年前にIPCから出した『天皇制の論じ方』だ。9月9日に何と、ちくま文庫から出る予定だ。ただ、550枚の書き下ろしだから、文庫本にするに当り、半分近く削り、そして、50枚書き下しを加え再編集した。タイトルも変える予定だ。解説はあの大作家にお願いしている。詳しくは、もう少ししてから発表しよう。

もう一冊の文庫本は、『夕刻のコペルニクス』の第一巻だ。もう扶桑社文庫から出るのだ。ありがたいし、うれしい。単行本は初版1万2千部完売で、在庫がほとんどない。「1巻を読んでない」という人も多いでしょうが、もう少しの辛抱です。これも9月頃には出るでしょう。それと、10月に共著で『私のヰタ・セクスアリス』(河出書房新社)が出る。だから今年の後半期はこの4冊で終わりだろうね。では、いいお年を。

(4)と終わっちゃダメなんだな。ではSPA!のお話だ。よく、「毎週買うのは面倒だから、単行本になった時、買うよ」という人がいる。でも、いい所や危うい所は単行本に入つてない。「あとで、本で読める」という考えは甘いのだ。この連載は〈瞬間芸〉なのだ。すぐ消える。消えたら蘇らない。打ち続く「筆禍事件」で果たして連載が続くかどうかかも分からぬ。ましてや、「タコペ」(4)が出るかどうか

も分からぬ。だからコンビニで毎週買って下さい。今週も「大謝罪」ですよ。もう二度とこんなことがないようにと思ってます。とにかく、ガックリと、こたえました。

(5)このHPはマスコミの人も結構見てるんですね。ほとんど毎週、僕の〈独り言〉ばかりなのに。申し訳ありません。前に、「僕がダメ・サラリーマンだった頃」を書いたら、それを見て、「週刊宝島」が取材に来ました。今週あたり出るのかな。「若いサラリーマンにやってほしくないこと」の特集だ。「自分のサラリーマン時代を振り返って、今のサラリーマンに言いたいことを・・」と聞かれた。僕は、本当にダメで無能なサラリーマンだったからな。でも、必死に昔を思い出しながら喋りましたよ。

(6)6月大歌舞伎は夜の部が特によかった。宇和島騒動を描いた「君臣船浪宇和島」だ。4時間近いが面白くて、堪能した。来月は、いよいよ「東海道四谷怪談」だ。僕は歌舞伎を見始めて、4年位しかならないが、毎月見ている。でも、「四谷怪談」は一度もやってないので不満だった。それが、いよいよやる。大きな仕掛けも多いし、楽しみだ。この話はお岩さんの幽霊の出るシーンだけが有名だが、全体はかなり長いもので、ストーリーも複雑に入りこんでいる。原作を読んで驚いた。ぜひ、原作のも読んでみて下さい。

(7)ジム・キャリー主演の「マン・オン・ザ・ムーン」はあまり宣伝もされず、騒がれてもなかったので、あやうく見逃すところだった。二番館でやっと見たが、凄い。感動した。実在したコメディアン・アンディの話だ。とてつもない天才コメディアンだ。どこからどこまでが本気で、どこからが嘘か全く分からぬ。客のド肝を抜く笑いも、スケールが大きすぎて、逆に客が怒りだしたりする。テレビ局もNGの連続。そして喧嘩。それも〈笑い〉にする。思わず引き込まれてしまう。綿密につくり上げたストーリーも、客に「インチキだ。ヤラセだ」と暴露されて、彼は窮地に陥る。そして、失意のなかで、かえる。しかし、それも含めて、全てが全部彼の考えた〈笑い〉だ。そして、さらに彼の仕掛けは続く。当然、彼を理解できないバカな観客や興行主は怒り出す。失望する。そして、世の中に容れられないまま、若き天才は不遇のまま死んでしまう。いつの時代も、スケールの大きすぎる人間は理解されずに、いじめ抜かれるんだ。かわいそうなアンディ、と涙があふれて止まらなかった。

(8)吉野孝雄の『宮武外骨』を中野図書館から借りてきて読んだ。この外骨も批判、ユーモアの精神が、世の人々から理解されなかつたんだ。今は、結構見直されているけど。頭のかたい警察にはいつも目をつけられ、「不敬罪」で逮捕されている。「命がけのユーモア」なのだ。外骨についての本は他にもいっぱい出ているので、読んでみたらいいでしょう。

たとえば、自分の発行していた雑誌に「廃姓宣言」を発表する。人間は「姓」などがあるから差別がなくなるのだと、自らの姓を廃し、「廃姓外骨」と名乗る。差別をなくす為の一つの見識ですよね。大体、明治以前は日本人にはほとんど

姓がなかった。偉い人や尊い人を除いて(だからこそその廃姓なんだろう)。「三軒茶屋の太一君」とか、「鸚鵡(おうむ)村のユキリン」というふうに呼ばれていた。それでいいんだよ。だから「姓」なんてない時代の方が長いし、こっちの方が日本的なのかもしれない。「鈴木」なんていう姓は日本一多いし、固有名詞じゃない。普通名詞のようだ。「日本人の邦男君」と言われているようだ。だから、俺らも「廃姓」をしよう。「無姓邦男」だよ。でも「無姓」っていうと「夢精」と間違われてやだな。

話を進める。外骨はよく、書いたものを発禁にされたり、伏字にさせられたりした。そこで、チクショウと思い、初めから伏字入りの文章を何度も発表した。たとえば・・。

〈今〇〇軍〇〇事〇当〇〇局〇〇者は〇〇〇つ〇ま〇ら〇ぬ〇〇事までも秘密〇〇秘密〇〇〇と〇〇〇云ふ〇〇て〇〇〇〇新聞に〇〇書〇か〇さ〇ぬ〇〇事に〇して〇〇居るから・・〉

〇が伏字だ。これじゃ何を言ってるか分からないって? いえいえ、伏字を飛ばして読んで下さい。ちゃんと意味が通じる。伏字をひやかしてるんですよ。凄いですな。

それに、外骨を一躍有名にしたのは大日本帝国憲法の発布をパロディにした事件ですよ。「大日本頓智研法」を発布しようとして、条文まで発表した。そして「骸骨が研法を下賜する図」を出した。本物のガイコツが研法(憲法)を下賜し、臣民たちがうやうやしくそれをおし頂いている絵だ。今見ても、ゾゾゾーッとする。「痛烈なパロディ」というが、それを超えている。「不敬だ」と大騒ぎになった。しかし、宮武外骨は右翼に殺されもしないで生きていた。「嶋中事件」のあった頃(40年前)なら、確実にテロの対象だったろう。いや、今だってそうだろう。僕だって、「外骨許さん!」といって殺しに行ったかもしれない。こんなスケールの大きすぎる人間とは同時代に生きてなくてよかったです。おいらだって理解できなかつた。殺すしかないと思いつめただろうな。15年前の「新雑誌X」不敬イラスト事件を思いだしちゃったよ。

(9)うん、そうだ。やっぱり勉強して、小説家になることだな。と、唐突に思った。そうしたら、いろんな抗議もこなくなる。想像、妄想もしたい放題だ。荒俣宏の「帝都物語」なんて北一輝や大川周明は出てくる。さらに三島由紀夫や森田必勝まで出て来て大活躍するんだもんな。やっぱり小説はいい。そのためには見沢知廉先生に弟子入りして小説の書き方を教えてもらわなくっちゃ。もうすでに小説家志願の書生が一人いるというから、二人目の書生になるのか。

暑いですね。ですから、今週は文章もぶった切りにして個条書きにしてみました。エッ、いつもと変わらないって。そうかな。今、電話があった。赤坂さん、惜しかったですね。おつかれ様でした。皆で残念会をやりましょう。そして、又、がんばって下さい。

今週の主張7月24日

学生道場と陶磁器と春歌

前にも書きましたが、7月16日発売の季刊「陶磁器」(第23号)にエッセイを書いてます。これは陶磁器の専門誌で、毎号、いろんな人々が「陶磁器」についての思い出を書いてます。「お前にはそんな高尚な趣味などないだろ」とお思いのあなた。ちがうぞなもし。(と、漱石の「坊ちゃん」に出てくる生徒みたいな口調になっちゃった)。僕にだって「陶磁器」との出会いもあれば、胸キュンの思い出もある。愛もあり別れもある。そんな話を書いたとですよ。

内容を紹介するのは、ルール違反でしょうから(「何のルール」?って言われてもな。まア、お金もらって原稿書いたんだから、それをそのまま紹介するのは「商行為」違反じゃないのかな。よく分かんないけど)。ともかく、ルール違反でしょうから、それはやんないけど、昔々、「生長の家学生道場」にいた頃のお話を書いたんですよ。

あの頃は厳しい修業の中、よく勉強もし、愛国運動、宗教活動もしましたよ。夜のお祈りの後、皆でお茶やコーヒーを飲みながら話し合うのが「唯一の楽しみ」でしたね。テレビやラジオはない(置いちゃダメなんだ)。酒や煙草も禁止。女性との交際も禁止。楽しみといえば、夜、どっかの部屋に集まってお話しする。それだけ。今から考えたら、そんなの何が楽しいんだと思うけど、楽しかったんですね。それに「知的興奮」がありましたよ。皆、よく本を読んでたし、政治や社会、哲学だけでなく、文学、演劇の話などもよくしてました。夜おそくまで話し合い、「この楽しみが長ければ長いほど、明日の朝の〈地獄〉はつらいんだよな。〈天国と地獄〉だよ」と言い合ってました。朝は4時45分起床ですからね。まさにそうでした。冬など、「早朝起きる」という感じがなくて、「夜中に叩き起こされる」という感じでしたね。

それにしても、お茶を飲んで天下国家を論じ、文学を論じるのが〈天国〉だなんて、ほんとに、ささやかで、ちっちゃな〈天国〉ですよね。でも、あの時は先輩たちも、「この本はいい。これを読め」といろいろ教えてくれたし、「俺はこれが面白かった」・・と、情報交換の場でした。「もっともっと勉強しなくっちゃ」と思いました。国学院の井上稔君が中国の思想家の本を集中的に読んでたんですよ。彼の部屋でお茶飲んでた時、「荀子」という本があった。勿論、「じゅんし」と読み、中国・戦国時代の思想家ですよね。「性悪説」を説き、のちに韓非などに受け継がれ、法家思想を生むんですよ。ところが亞細亞大学の吉田晴彦が、「なんだこの本は。"じゅんこ"? けしからん。女の本を読んでんのか。軟弱な奴め。国賊だ!」と怒鳴ったんだ。皆、アッケにとられていたね。

東京経済大学の小山さんが、「やっぱり、アジャー大学はパーだ」と言って馬鹿にしてました。「あいつは、アジャー大学パー学部ざんねんH組への49番だ」とも

言ってました。それ以来、かわいそうに、ずっとバカにされてました。「そんなこと位で、いじめちゃかわいそうだ」と僕一人かばったんですがね。彼はいたたまれずに、道場を出てしまいました。でも、そんな彼でも今は「生長の家」本部の理事なんよ。偉いんだ。去年会ったら、「鈴木君も、ずっと生長の家にいたら、今頃、理事になれたよ。おしかったね、下らない右翼になって人生を棒にふったね」といわれた。何をいうんだ、この野郎。「荀子」も知らなかったくせにと（心の中で）馬鹿にしてやった。

こうみてくると、ストイックな生活の中で、ひたすら勉強していたようだけど（実際そうだけど）、でも、中には「春歌」を歌う奴もいたんだ。これが不思議だった。当時はだね、大学のコンパといえば必ず春歌のオンパレードだった。寺山修司だけ、「日本春歌考」というのがあったね。アレッ。別人の映画だけ。あれには当時、歌われた春歌が随分と出ている。大学は男ばかりだったし、コンパになると、「一つ出たほいのヨサホイのホイ。一人娘とやる時にや・・」とか、「実践のネエちゃんと○○○○やりたいな」なんて歌ばかりだった。又、一升瓶を股のところにはさんで、「よかチンチン」の踊りをする奴がいる。そんな春歌、猥歌が何十曲、何百曲とあるんだ。多分、〈女〉も〈性〉も遠い彼方の話だから、あこがれや妄想ばかりがふくらんで、そんな歌をうたっていたんだろうな。その証拠に今、「それら」がすぐ手に入る学生たちは、春歌なんかうたわんやろ。

大学のコンパでも歌うから学生道場でも、おぼえてきて歌う奴がいる。又、普段はボーっとしてるくせに、そういう方面にだけは記憶力がよくって、時には自分で作詞したりする奴もいる（決しておいらじやないよ）。高知出身で日大生の長田惣生（みなお）だ。毎日聞かされるもんで僕までおぼえちゃった。40年近くたってんのにまだおぼえてるよ。春歌じゃないが、こんな変な歌があった。「ポッポッポ鳩ポッポ。豆がほしいかそらやるぞ」という歌（「鳩」っていう題かな）の替え歌で、こんなのを歌ってた。「ポッポッポニワトリニワトリ。このトリ、クソして尻ふかぬ。それでも卵はおいしいよ」。ゲッ何だこの歌は、と思った。「それでも・・」というのが何か哲学的というか実存的でいいねえ。ウーン、深い歌だうなってしまった。これは果たして彼の創作なのだろうか。少なくとも僕らはそう思っていた。さらにこんなワイセツな歌を聞かせてくれた。

〈裏の畠のホウズキは、色づきや他人にもぎとられ。穴のないとこ穴をあけられ。末はフーフになりました〉。フーフは「夫婦」と、フーフー吹いて笛のようにして鳴らすのをかけてるんだ。いやらしい歌だなと思いながら、でもうまいなと思っていた。それにしても、本当に長田が作ったのか。あるいは彼の郷里・土佐の俗謡なのか。それが分からなかった。

ところが。ところがですよ。その世紀の謎が解かれたのだ。先週紹介した吉野孝雄の『宮武外骨』だよ。これは大活字本で読んだんだが、たしか新潮文庫から出るはずだ。この本の最後のあたりに、こんな記述があった。

〈大正4年。ヨーロッパの戦争を尻目に、日本は平和。「今日は帝劇、明日は三越」。巷間では、「あなた見なさい／ほうずきさえも／色もつかぬに見そめられ／色気づいたらすぐ手折られて／もまれてすわれて根をだされ／末はふうふとなるわ

「いな／ドンドン」という鄙猥な歌詞の「どんどん節」が流行していた〉

「そうか。これがルーツだったのか、と思ったよ。それにしても40年ぶりに、なつかしい歌に再会するなんて。この出会いは実に、実に感動的でしたよ。では、おしまい。」

(追伸) 7月15日(土)、「ザ・ニュースペーパー」にいってきました。6年前は実際に芝居に出たんですが、才能がなくて、その方のお呼びはなく、今回は、お芝居の間に20分位、「トーク」をしたんですよ。「言論の自由と〈お笑い〉」について、けっこう熱く語ったつもりです。

それから、お知らせですね。井上周八、重村智計両氏に僕が話を聞いた話題の本『北朝鮮原論』の出版記念会が8月3日(木)に行なわれます。塩見孝也さんの「自主日本の会」がやってくれます。井上、重村両氏もいらっしゃいます。興味深い話が聞けると思います。午後6時から、早稲田奉仕園 tel 03(3205)5411です。(地下鉄東西線早稲田駅からすぐです。早大文学部向かい入ってアバコブライダルホールという結婚式場の隣です) 講演がおわって、すぐ近くの居酒屋「レラチセ」で飲み会です。講演会だけだと500円。飲み会は2500円と安いですから、どうぞ、ご参加下さい。

では次週に。次回はアッと驚く衝撃のレポートをお届けします。暑気払いに・・・。それと、今週のSPA! はお見逃しなきよう。面白いですよ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張 7月31日

喜納昌吉さんに呼ばれて沖縄に行ってきました!

7月21(金)～24(月)まで沖縄に行ってきました。ちょうどサミット期間中で厳戒の沖縄でした。でも別に、「サミット反対!」と叫ぶために行ったんじゃないんですよ。喜納昌吉さんが、「ニライカライ祭り」をやったんで、それに呼ばれたんです。喜納さんのコンサートは毎日あったんですが、その他に、アメリカの先住民や、日本の左翼、学者、民族派を一堂に集めた「ピース8(エイト)。危機監視会議」を二日間やり、それに出席したんです。「予算がないんでボランティアで来て下さい」というから、ゲッ、そんじゃ行けないよと(心の中で)思った。それにサミット中で、飛行機もホテルも取れないだろう。と思ったらねこっちの心中を見すかしたのか、「旅費とホテル代は出しますが、謝礼はなしで・・」という。エッ、そんな嬉しいボランティアなら大歓迎ですよ、と言っちゃった。「ウワー、3泊4日の夏休みだ!」と単純に喜びまくったんですよ。

沖縄はでも、大変でしたね。そうだよね〈遊び〉のために旅費、ホテル代を出してくれたわけじゃないし。びっちり、会議、会議でした。同時通訳の人がいて会議すんですよ。初めてで、とまどいました。いい勉強になりました。

そうだ。沖縄は暑いし、寒いし、大変でしたよ。暑いのはメチャ暑いんですが、ホテルとか会議場とか、レストランとか、どこに入ってもガンガンにクーラーをかけていて、ふるえ上がる位なんですよ。新聞を見てたら、お巡りさんも、カゼをひいた人が多いと出てました。日射病じゃなくて、クーラーにやられてカゼをひいたんですよ。往復の飛行機もガタガタふるえてましたし、クション、クションとあちこちからクシャミが聞こえてきました。

沖縄3泊4日だし、ホテルの中、飛行機の中で本も読めるし、仕事も出来ると思い、カバン一杯もってたんですが、何も出来ませんでした。夜おそくまで行事があるし、寝る時間はないし、ヘトヘトで・・。4日間、本を一冊も読めませんでした。私の最近の人生の中では珍しいことですよ、ホント。ただ、「夕刻のコペルニクス(1)」(扶桑社文庫)の校正だけは何とかやりとげましたが。

7月24日(月)の夕方、東京についたんですが、仕事がたまってて、原稿はさっぱり書けないし、(書くつもりで辞書やらノートパソコンやら、原稿用紙をもってたんですけどね)。でも書けない。その日は、ほとんど寝ないで書いて、25日(火)も一日中、家で仕事してようと思ったら、6時50分から渋谷で『アジャパー・ウェスト』の読者会だという。サボろうかなと思ったんですが、「行く」といった以上、悪いかなと思って行ったら、疲れてるんで、すぐ酔った。酔っちゃいかん、これから仕事だと思ったが、帰るキッカケがつかめない。飲み会が終わってカラオケに行こうという。そこでも「帰る」と言えない、気が弱くて。脱走しようと思ったら、赤坂に発見され、連れ戻され、総括された(連合赤軍みたい)。さて、「山」に連れ戻された鈴木兵士は一体どうなるんでせうか。来週のお楽しみ。別に、お楽しみにならんか。どうなろうといいんだよね、そんなこと。じゃ話を変える。

この日は赤坂に3年ぶりで会った。(話は変わってないが)何か試験に落ちたというので荒れていた。からまれて、頭をポカポカ殴られた。おいらの兄貴とはメル友で「文通」してる。「メル通」っていうのかな。電波を使うから「電通」というのかな(これじゃ広告会社じゃないか。バカ、赤坂め!)。なんか、文通してるうちに愛が芽生えて、結婚するという話だ(勿論、冗談ですよ。「冗談なら冗談とことわれ」と赤坂に叱られた。しかし、ことわってたら、さっぱり原稿が面白くないよな。チャウですか、と大西純君の口マネをしちゃった)。

その赤坂にインタビューされた。何でも、この8月2日で、「HPたち上げ1周年」になるんだそうだ。その感想と、これから100年の決意をきかれたので、喋った。8月2日にはキャリーされるだろう。「キャリー」じゃないの、「アップ」だけ。「キャリー2」はあまり面白くなかったな。赤坂のせいだ。20年前、小学生の時に見た「キャリー」はあんなに面白かったし、こわかったのにな。(あっ、20年前小学生だったというのは冗談です。ゴメンナサイ)。赤坂の奴め、ムッとすることを言ってたな。おいらが、「今は必死で勉強して、60才になったら小説を書き始めようと思っとるんよ」と言ったら、「もうすぐですね」だって。「映画を子供料金で見れるからいいですね」だって。ムカーッ。「8月2日で57才ですね」だって。ウルセー。思い出したくないのに。今までかくしてたけど、本当は47なんだよ。(これも冗談)

「お兄さんが沖縄に行った時、喜納さんのお店に行ったんだって。でも残念ながら喜納さんは東京に行っていなかったんだって。沖縄に行ったんなら、お兄さんにサインをもらってくればよかったのに、ドジね」と赤坂。そんなの、帰ってきてから言うなよ。でも何故か、サインだけはもらってきてやった。仙台にこれから送ってやろう。喜納さんにもしっかり言っただよ。「うちの兄貴が喜納さんのファンで、お店に行ったといってました」。「えっ、会いたかったですね、残念でした。来る時は電話下さいよ。お兄さんによろしく」と言ってました。だからここに伝えます。でも兄貴が沖縄に行ったなんて、なんでおいらが知ってんだろう。不思議だ。あとで赤坂に聞いたのに・・。

先週のSPA!を読んで赤坂が「もしかして、この写真も全部ウソなんじゃないの?」と言っていた。おいらの一家と邦典一家が写ってる47年前の写真だよ。これはおいら、これは弟、これは姉・・なんていってるけど、誰も分からぬ。毎日新聞の「一億人の昭和史」あたりからとってきた写真じゃないのか。と、赤坂はかんぐってるんですよ。なぜかギクッとした。「鈴木は嘘つきだから、この写真も嘘じゃないの。どうせ誰にも分からぬと思って。身内の人はまさか、"嘘つき"と編集部に告発の電話をしないから」。

ゲッ。さすがは赤坂。するどい。白状しましょう。あれは嘘なんです。全く関係のない一家の写真です。謝罪し、自己批判します。総括します・・となったら凄いだろうね。でも、いくらおいらでもそこまでやる度胸はない。あれは本物ですよ。

「でもお兄さんがいないじゃないの。変よ」という。ゲッ、鋭い。こんなに頭がよくって、どうして試験に落ちるんだ。「だからねえ。それはだね。あっそうだ、カメラのシャッターを押してたんだよ」。「でもHPを見たら、もう一枚の写真でてる

よね。『梨園の誓い』の。それにはお母さんが増えてる。ということは、シャッターを押したのはお母さんだったんじゃないの」。さすが法律を勉強してるだけあって、理詰めでくるね。ウーン、どうしてかな。47年前のことだから忘れたよ。じゃ、「兄貴はまだ生まれてないんだよ」「後から来たんだよ、あそんでから」と、いいかげんなこと言った。でも、おいらは9才ということは小学校3年生か。秋田市立保戸野小学校だった。兄貴は9才上だから(8才上だったかな?)、18才か。そうか、大学生だよ。東北大に入ってたから、仙台に下宿してたんだ。それで有名な「梨園の誓い」にはいなかったんだよな。ホッ。これでおいらの正しさが証明された。おそれいったか、赤坂め! では話は変わる。

沖縄行ってる間、本が全く読めなかっただんで、「ノルマ」が達成できない。月末、「ルノアール」に閉じこもって必死で読まないといけん。でも寒いからな。なんで、どこもかしこも、クーラーをガンガンかけるんだよ。「弱冷房」の「マイルド・ルノアール」をつくってくれよん。コーヒーは一杯千円でもいいから。それとも自分の席だけ自分で温度を調節できるようにするとか・・。その位やってみろよ。文明社会なんだろう。携帯電話ばっかり作ってんじゃねえよ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張8月7日

皆の「夏バテ解消法」を教えてくれよん

沖縄の話の続きです。喜納昌吉さんの主催する「ニライカナイ祭り」は7月20日(木)から23日(日)まで連日、名護市辺野古海岸特設ステージで行われました。辺野古というのは今度、米軍のヘリポートが出来るとこなんですね。だからそれに対する抗議の意味を込めてやったんですよ。毎日、1000人以上の人気がつめかけて海岸は人で一杯でした。日本、アメリカ、アメリカ先住民族、インド、アイヌ、韓国・・・といろんな国からアーチストがやってきて、凄いライブでした。

それに、海岸で見ている人も凄いんですよ。あの知花昌一さんがいる。社民党の保坂展人さんがいる。イラストレーターの黒田征太郎さんがいる・・・と。黒田さんは10年振りくらいに会いました。昔、阿部勉氏に紹介されたんです。「阿部君は残念だったね」と言ってました。阿部氏に頼まれていろんな仕事をしたそうです。そうだ、野村秋介さんの本の表紙も何冊か黒田さんが描いている。「今はニューヨークに住んでるんですよ。来て下さいよ」と名刺をもらった。でもな、遠そうだな。

浜辺で寝ころんで音楽を聴いていたら、キリスト教の牧師さんに話しかけられた。いきなり布教されたんではない。喜納さんや知花さんのグループらしい。市民運動をしている牧師さんなのかもしれない。『がんばれ!!新左翼』や『夕刻のコペルニクス』を読んでいるという。沖縄の書店にもあるんだ。うれしいな。後藤聰という人だ。キリスト教の牧師だというから、「実は僕はこう見えても、ミッションスクール出身なんですよ。同じ神の子なんですよ」と言った。「本当ですか。信じられませんね」と言う。「一体、どこの高校ですか」「仙台ですよ」。「仙台のどこですか?」「しつこいな。どこだっていいだろ」と思いながら、「東北学院だよ。その榴岡(つつじがおか)校舎だよ」と言ったら、ビックリして思わず、十字を切って、「OH!」と外人のように驚いていた(外人じゃないのに)。そんなに珍しいのかよ東北学院が、と思ったら、「じ、じつは、僕も東北学院榴岡校舎なんですよ」と言う。オウ、マイ、ゴッドと私も叫んじゃったよ。沖縄に来て、高校の同級生と会うなんて。何たる奇遇。これもイエス・キリスト様のお導きだ。アーメン。

じゃ、同じ学年か。まてよ、1学年は3クラスで、全部で130人位しかいない。それが3年間同じだから、大体、顔は知ってる。こんな奴はいなかったぞ。じゃ、敵のスパイか。そんなとこにスパイが入っても仕方ないか。「何言ってるんですか。僕は鈴木さんの10年下ですよ」と言う。へエ、そうなのか。ここで仙台の高校事情を説明する。一番いい高校は男は一高、二高。女なら一女高、二女高、三女高。と、非常に分かりやすい。あとは私立がいっぱいある。男なら東北高校、育英高校がある。今はスポーツで有名だが、僕らのころは余りよくはなかった。県立の下にいい私立というとミッションの東北学院高校なのだ。ここは東北学院大の附属だ。そして、中学・高校と一貫教育だ。だから、高校から入れない。ところが僕らの頃は子供がグンと増えた。それで、急拵、本校の他に、「東北学院榴岡校舎」を作ったんですよ。僕はその一期生なんだ。

榴岡校舎はひどいボロだった。米軍の宿舎だったのを借り上げて学校にしたんだから、大体分かるだろう。3年間ずっとそうだった。しかし、10数年たって仙台近郊の旭ヶ丘に引越した。でも何故か今でも「榴岡校舎」と呼ばれている。

仙台には女子高も多いし、そのほとんどがミッションだ。宮城学院、尚絅学院、白百合学院、ウルスラ学院・・と。伊達正宗の時代から仙台はキリスト教が盛んなんだよね。ローマに少年使節を送ったくらいだし。今は沖縄に牧師を送っている。なんか、感慨無量だったね。だって、もしも、もしもだよ。おいらがはじめに聖書の勉強をし、洗礼でも受けて、「パウロ邦男」とかになってたら、いまごろ沖縄で牧師になってたのかもしれない。そしたら地元の市民運動の人たちと一緒に反基地闘争をやりながら、神の愛を説いてたんでしょうね。そんで、辺野古の海岸に来て、右翼に声をかけたりして・・。うーん、人生いろいろだ。男もいろいろだ。

ところで、ここからは皆さんに質問だ。クイズ、100人に聞きました。エッ、もうちょっと見てるの。じゃ、1000人に聞きました。第1問。この暑さ、皆様、どうやって乗り切っていますか。こういう時こそ、掲示板に皆、書いてくれよん。元管理人の赤坂ばあやに聞いたら、「ただひたすら食うこと」だと言ってました。風見愛さんに聞いたら、「ただひたすら踊ること」だと言ってました。夏バテ防止になるし、お金にもなる。一挙両得ですね。管理人の爺やに聞いたら、「ただひたすらステージに上がる」ことだといいます。よく意味が分かりません。精神的に清められてステージが上がることを目指してるんでしょう。元統一教会の乾君に聞いたら、「ただひたすら〇〇〇〇をすること」と言ってました。何故か伏字入りでした。いやらしいことかなと思って聞いてみたら、「おいのり」だと言ってました。若い女の子と一緒に汗をかきながらお祈りするんだそうです。やっぱりまだ「統一教会」は治ってないんだ。そうだ、まだ、おいらの家には「世界日報」が入っている。「贈呈」と書いてるけど、あとでまとめて請求されそうで恐い。入れるなよ、と乾に言ったら、「いいんじゃないですか、タダなんだから。読んでやればいいでしょう」と珍しくおいらに逆らう。逆らってまで統一教会(=世界日報)のカタをもつ。あやしい。やっぱ、「偽装脱会」だったのかもしれない。「背教者イヌイウス」を元奥さんがHPで批判してたけど、あれだって夫婦共謀してのヤラセなんだ。気をつけなくっちゃ。

と、ここで原稿を一時中断して、大阪に行く。(えー、ここで12時間が経過する)。はい、ただ今、戻ってまいりました。7月31日(月)、午後1時から大阪で黒田清さんの葬儀があったんです。タクシーに乗ったら、「あっ、黒田さんの葬儀ですか」と言われた。大阪の人は皆、知ってました。元、大阪の読売新聞社会部長。その後、やめて独自に「窓友新聞」をつくり、「黒田ジャーナル」を設立する。僕もいろいろとお世話になった。僕だって大新聞社にいて、その後、自分のミニコミを作って闘ってきた。だから黒田さんのやり方は勉強になったし、励まされた。

大谷昭宏さん、筑紫哲也さんが弔辞を読んでいた。もう一人、黒田さんの子供時代からの友人で弁護士の尾楚善司さんが弔辞。でも、読むんじゃなくて、直接語りかける。「お前は小学生の時、八宝菜を食べすぎて盲腸になったんだよな」と大声で言う。厳粛な葬式なのに、皆クスクス笑ってしまった。

中村敦夫、河内家菊水丸、黒田福美、宮崎学、みなみあめん坊・・・さんらにも会った。すごい人で入り切れない人が外にあふれていた。それに冷房のない、ものすごい暑さで、皆、ダラダラ汗を流して焼香していた。黒田さんは67才。まだまだこれからなのに。本当に惜しい。そうだ。黒田さんはジャーナリスト志願の若手のために、(そして、すでにジャーナリストになっている人のために)「マス丼」というのをやっていた。勉強会だ。毎月、そのために東京に出てきていた。そこに呼ばれて僕も話をした。それが黒田さんとの初めての出会いだったと思う。「マスコミ丼」のことらしいが、「マス丼」と略しちゃうと、別なことを連想する人もいる。だから変えたらいいんやなかですか、と生意気に黒田さんに言った。「そうでっか」と黒田さんは言っていた。人をレッテルで判断しないし、とてもスケールの大きな人だった。酒も好きで、僕もよく一緒に飲みました。この「マス丼」で前管理人の赤坂とも知り合った。だからこのHPも元をたどれば黒田さんのおかげで立ち上げたようなものだ。そのHPも先週で一周年に突入したんですね。早いですね、これも皆様のおかげですよ。一周年記念の「直撃インタビュー」も赤坂がやってくれた。読んでくれましたか。

そうだ。おらの夏バテ解消法を書くのを忘れてたね。おいらは「解消」しない。ただただ、自虐的に受け入れる。抵抗しない。どうにでもなれ、と捨て鉢になる。ごめんなさい、すみませんと〈夏〉に謝罪し、やられっ放しなっている。マゾヒスティックなんです。

それでもダメな時は。ですね、ともかく汗をかくことかな。柔道をやったりして、道着を着て、準備運動を軽くやってるだけでダラダラ汗をかいてくる。これが心地いいですね。そして気分がスッキリしますよ。汗みどろになって練習し、そのあとシャワーを浴びる。これが気持ちいいのなんの、セックスより気持ちがいい(セックスはしたことがないから分からぬが、多分、それよりも運動の後のシャワーが気持ちいいと思うだよ。想像で)。

黒田さんの葬儀も、汗だくだったな。まるでサウナに入ってるようだった。でも、いろんなものが洗い流されるような感じがした。黒田さんからは多くのことを教わった。それを生かしておらも頑張っていかなくては、と思った。

来週は1000人に聞きました。「眠れない時はどうしますか?」だ。(注:この原稿には一部(二行ぐらい)フィクションがあります。さてどこでせう。探してみて下さい)

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張8月14日

「安全な眠り方・眠らせ方」は?

「噂の真相」(8月号)の一行情報に書いてあったのは本当だったんですよ。「ザザンボ」「罵詈雑言」で有名な社会派映画監督・渡辺文樹さんが逮捕され、今、裁判中なんです。それで、8月2日(水)、徳島の拘置所に面会に行ってきました。

今、「腹腹時計」という新作映画をひっさげて全国を上映してたんですが、何しろ危ない映画ですし、それに今回は〈天皇制〉を扱った映画だ。それで、会場も一旦許可したあと、あわてて取り消したり。「それは許せん」と抗議したり。「天皇制を扱ったから国家権力が弾圧してくるんだ」と渡辺さんは言ってます。ビラ貼りで二週間も勾留されたし、今回は、会場の使用を取り消した県庁に行って抗議したら、「暴行・公務執行妨害」で逮捕され、3ヶ月もぶち込まれている。不当裁判だが、あの激しい性格だから支援する人々も二の足を踏む。それで孤立無援の闘いを続けている。

この日は、そのあと、香川県に行って「楯の会」の元会員に会い、SPA!の取材をしてきた。次の日は夕方、東京に着き、6時から早稲田奉仕園で『日本国民のための北朝鮮原論』の出版会。井上周八、重村智計さんも来てくれて、実にいい会になった。主催した塩見孝也さんにもお礼を言いたい。飲み会では、「横浜の叶姉妹」といわれる超美人姉妹、ジャナ専生、元管財人(管理人だっけ)の赤坂嬢などから、バースデー・プレゼントをもらった。ありがとうございます。嬉しかったです。でも、「もうすぐ還暦ですね」「その時は赤いチャンチャンコね」と言われるのにはマイルな。来年はもっと言われるんだろうな。再来年はさらに言われるんだろうな。「赤いヘルメットと赤いゲバ棒の方がいいんじゃないですか」と管理人の爺やが言っていた。でもヘルメットとゲバ棒は変だな。新左翼じゃないんだから。(新左翼の還暦祝いはどうしてんだろう。そんな体制的・ブルジョア的なお祝いはしないのかな)。

「でも、どうして"爺や"って言うの。かわいそう。まだ40代後半なのに」と超美人姉妹が言っていた。そうだよ、かわいそうじゃないか。"爺や"なんて言っちゃダメだって僕はいつも皆を叱ってるのに。(乃木坂注・鈴木さんが言いました)それに40代後半じゃない、まだ30代後半っていう噂だ。

さて、今週の「100人に聞きました」だ。いや、「1000人に聞きました」だ。暑いですね。皆さん、夏バテの克服法はどうやってますか。あ、これは先週聞いたか。どうも夏バテで夏ボケしてるよ、すんません。では今週は、「眠れない夜はどうするのでせうか」だ。

銀座みゆき座で、「サイダーhaus・ルール」を観たら、孤児院の院長さん(お医者さんもある)は激務でクタクタで、でも眠れない。それで、自分でエーテルを吸い込んで、やっと眠るんだ。エーテルとクロロホルムは同じものかな。ともかく、これなら睡眠薬よりも手早く眠れそうだ。でも、量を間違って、この人は死んじやう。だから危ないんだ。それに、前に、日本経済新聞を読んでたら、連続強姦魔が

捕まったという記事が出ていた。医者くずれの奴で、薬剤士だったのかな。これが本当のヤクザ医師(薬剤士)だ。ともかく、そいつが、一人暮らしの女を狙って忍び込み、寝てるところにいきなり、クロロホルムをかがせ、気を失っているところを犯していた。これなら抵抗されないし、「安全」に、「完璧」に仕事が出来る。犯すだけにしておけばいいのに、ある時、あまりに唇が魅力的だったので、接吻をしてしまった。本当にバカだね。そして自分もクロロホルムを吸っちゃって失神、眠り込んでしまって逮捕されたんだ。マンガのようだけど、本当の話だ(私は本当のことしか書かない。冗談の時はキチンと冗談だと明記する。ライターとしては当然のことだ)。

だから、クロロホルムって、それだけ強力なんだ。みんなも強姦する時には気をつけましょう(勿論、これは冗談ですよ。強姦なんか絶対にしてはいけません。犯罪ですから。平和的に、合意を得て、和姦だけをしましょう)。

「産経新聞」(8月2日付夕刊。あら、おいらの誕生日だ)にこんな記事が出ていた。「耳元で『パンツちょうだい』。下着"追いはぎ"続発。同様の手口、今年18件」。だめじゃないか、滝田さん!と思わず叫んじゃいましたよ、私は。勿論、これも冗談。エッ、なにが冗談なのか分かんないって。困ったな。『がんばれ!!新左翼Part3』を読んだ人なら分かるジョークなんだけどな。分からん人はいいや。分からんままに話を進めるが、「あの革命家のタキタさんがそんなことをするはずはない、鈴木は嘘を書いてるんだ」と激怒した人々が直接、沢口ともみさん(ストリッパー)に電話をして聞いたそうな。「あれは本当ですよ。はいてたのを脱いであげました」とちゃんと証言してくれたそうだ。「鈴木さんは嘘をつくような人ではありません。あそこに書かれたことは全て真実です」と。ほうらみろ、僕の書いてることは全て本当だ。

話が、あっちこっちへ飛んだな。眠れない夜は皆さん、どうしているんですか。クロロホルムは速効性があるけど、危なそだから、他にはどんな方法があるのでせうか。赤坂に聞いたら、「ともかく、ガツガツ食うことだ」と言ってました。風見愛さんに聞いたら、「ともかく踊ることだ」と言ってました。乾太一君に聞いたら、「ともかく〇〇〇〇することだ」と言ってました。何だ、これじゃ全く先週と同じことじゃないか。もっと気のきいたことを答えろよ。でも乾の「〇〇〇〇」は今度はオナニーだろうなと爺やが言ってました。そうするとすぐに眠れるんだそうですよ、爺やは。(乃木坂注・それじゃあ「自慰や」ですよ)ステージに上がったような気分になって。でも、やっぱり乾は「おいのり」だと言ってました。他の人々はどうやってるんでせうか。「昔、宗教運動してたんだろう。自分で自分をコントロールできなかったら、何のために宗教やってたんだよ」と友人にバカにされました。でも、これだけは違うと思うけど。僕は眠れない時は、ついつい酒ですね。台所で。それで、キッチン・ドランカーになってしまいました。まずいよな。

そうだ、思い出した。みゆき座で「大人一枚」っていって1800円出したら、隣のおばあちゃんが、「シニア一枚」って言って千円で入ってた。何だ、シニアって?と思って窓口を見ると、大人1800円、学生1500円、「子供・シニア 1000円」と書いている。そしてシニアの下に「60才以上」って書いている。ガーンとなった

ね。国や都は「65才以上」を老人とみなして、都バスなどの「老人バス」は「65才以上」なんだ。それなのに民間の映画館が勝手に「シニア(老人)は60才以上」なんて決めていいのか。越権行為だ。違法だ。犯罪だ。それに、「シニア一枚」なんて、涼しい顔してこんな悪法に従っている奴も同罪だ。「シニア料金をやめろ! やめないと爆弾をしかけるぞ」と脅してやろうか、本当に。と思った(これも冗談ですよ。困るな、本気にして警察に密告なんかしちゃ嫌だよ)。

では最後に、まじめなお知らせ。

8月5日から渋谷のユーロスペースで話題の映画「新しい神様」がロードショウ公開されている。週末には「超豪華、"神様"トークショー」が開催されている。これはチラシの文章のママです。宮台真司、香山リカ、塩見孝也さんらの、本当の「超豪華」ゲストにまじって、全然豪華じゃない、貧しい僕もゲスト出演します。9月8日(金)です。でも他の週は金、土は毎回、豪華だから、どうせ行くなら、そっちに行ったりいいでしょう。はい、自虐のお知らせでした。

それと、8月30日には「夕刻のコペルニクス1」(扶桑社文庫)が出来ます。又、同じ日に、宮台真司さんの『援交から革命・多面的解説集』(ワニブックス)も出来ます。他の本に書いた〈解説〉だけを集め、解説された人のインタビューも出ています。巻頭は何と、「がんばれ!!新左翼」です。これは凄い本になりそうです。

9月9日は僕の『言論の不自由?』(ちくま文庫)が出来ます。大作家・見沢知廉先生の「解説」もやっと間に合い、ホッとしております。それに30枚の大作です。本文よりも「見沢先生の解説」で売れるでしょう。でも、原稿をもらうまでが大変で、もらってからも大変だったようです。そのお話は来週に・・。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張8月21日

「鈴木邦男って狼？」

「タイトル案」、どうもありがとうございました。月刊「創」の連載「鈴木邦男主義」がまとまって本になるんですが、いい題名がなくて、「掲示板」に書いたら、さっそく、ドドドーンと書き込んで下さり、感謝しております。じゃ、「IT時代に生きる。鈴木邦男主義」にします。これで決まりです。でも「IT」って何の略なの？ どういう意味？ 地球以外の生物のこと。あれはE・Tか。じゃ、インターナショナル・トリックの略なの？ 自分でも理解できないんじゃ、まずいかな。

横浜のゴージャス姉妹の「テロルのルールズ」もいいですね。で、「ルールズ」って何？ だらしないこと？ 大らかに、いいかげんに考えて、テロなんかやめようということか。これはいい。それとも「ルール」の複数形なの。「テロのいろんな方法」とかいうのかな。「言論にもルールがあり、テロルにもルールがある。ルールのあるテロをやろう、ということかな。これも斬新な発想でいいよね。これにしようかな。「完全テロマニュアル」でもいいかな。もっと欲張って、「完全テロ・リンク・查問マニュアル」もいいか。「テロ・リンクの基礎知識」もいいか。いつか挑戦してみよう。売れるかもしれないな。「2000年みやま荘革命」は笑いました。でも、2000年も変わりませんよ、みやま荘は。みやま荘は永遠に不滅です。いっそ、「3000年みやま荘革命」の方がシュールでいいんじゃないの。(シュールってどんな意味？ 自問自答してちゃダメか。よく分かんないけど使っちゃった。自己批判します)。「右翼は不便です」。これもシュールですね。それに右翼は不幸ですよ。「不幸な右翼」の方がいいかな。「不幸な右翼=クニオ・クレエゲル」というのもいいかな。昨日、読んでたんですよ。「るによわーる」で。あっ、いけない。

「ルノアール」と書こうと思ったら、ワープロが勝手に「るによわーる」と書いちゃった。超新型の音声入力なんで、こんなことがよくある。大学では、第二外国語でフランス語をやってたから、フランスなまりになっちゃう。

ともかく、その「るによわーる」で、トオマス・マンの『トニオ・クレエゲル』(岩波文庫)を読んでいたんですよ。いいですね、学生時代に読んだのとは又、別の感動を味わいました。この「トニオ」というのは、トオマス・マン自身だという人もいますが、実は、本当は「クニオ」なんですよ。知らなかっただろう。繊細で、内向的で、女性とも口をきけず、でも感受性が強くて、まじめで、ウソのつけない少年なんですよ。そんなナイーブな少年から見たらこの世界も、全く別に見えるんですよ。お盆で、喫茶店はすいてるし、なぜか、シベリウスの音楽がかかっていて。本の世界に没頭して、3時間で読んじゃいましたよ。北杜夫も『どくとるマンボウ青春記』で、この本について書いてます。何十回読んだか分かんないといいます。100ページ位の短い本ですよ。暗記するくらい読んだといいます。

又、僕の本の題名に戻ります。「モンド右翼」。よく分かんないけど、シュールでキッチュでサイケでいいですね(言葉の意味、全然知らないで使っている。モーニング娘。と同じです)。でも「モンド」って何。エドモンド・ホテル？ 必殺仕事人の

中村モンド? 退屈男の早乙女モンドのように強く、かっこよくないから、きっと中村モンドでしょう。お奉行所の仕事は世をしのぶ仮の姿。実はその正体は・・。おいらそっくりだ。ちがうか。「実は・・」がないもんな。でも、「正業」というか「雇の顔」では、皆にいじめられて、「ダメ役人」だし、家に帰ると女房と姑に、「バカ」「無能!」「不能!」とののしられ、いじめられ・・。これもおいらそっくりだ。だから、いつかこのタイトルは使わせてもらうね。

「和魂草」もいいね。ゲームのタイトルにしてもいいね。道に迷って、右翼になったり、左翼になったり、リンチしたり、テロしたり、死んだり、生き返ったりするゲームですよ。そうか、ゲームを作ろうかな。これからは。

「鈴木邦男の冒険」。それもいいね。実は、「言論の冒険」とか、「思想の冒険」という案も考えたんですよ。三島由紀夫に「夏子の冒険」という本もあります。たわいのないお話ですが、タイトルがよくって、おぼえています。映画にもなりました。「21世紀の日本の太陽--それが鈴木邦男主義だ」。いいね、でも自分でいうのは恥ずかしい。「21世紀の日本の常識」、「愛国は右翼と左翼を超える」。これもグーですね。(これも意味分からんで使ってる。「グー」は「グッド」の略なのかな? それともおなかがすいてることかな?)。「愛国は生と死を超えて」「生と死を超えた憂国」というのも、いいかも。エスエル出版会から出した対談集『右であれ左であれ』もこれと似てますよね。

15年ほど前、彩流社から本を出した時も、タイトルが決まらなくて、悩みに悩み、ノートに50ヶ位のタイトル案を書き出したんですよ。そしたらライターの須藤真理子さんが、「本の題名ならチョロい。まかしどき。考えてやるから酒飲ませろ」というんで、大久保のお魚のおいしい高級酒屋に行ったと思いねえ。高いものから順に注文し、食いまくり、飲みまくる。しかし、考えてくんない。「ウー、くった、くった。もう帰ろう」という。そして、「食いすぎたのは、あなたのせいよ」と歌まで歌い出す。これじゃ飲み逃げ、食い逃げじゃないか。「しょうがないな。じゃメモとってよ。言ってあげるから」。ハイハイ、お願ひしますだ。それで、ズラズラと彼女はタイトル案を並べただよ。「今が苟だよ、新右翼」。「忘れられない味、新右翼」「スカッとさわやか。新右翼」「夏こそ新右翼」「一家団欒・新右翼」「新右翼は健康の素」「これでもか、新右翼」・・。なんだ、なんだ、メニューを読んで、「新右翼」とつけ加えてただけじゃないか。ヒテーなー。それで、もうやめた、やめた、と怒って、じゃ『新右翼』だけでいいや、となつて出来たのが、その本です。この『新右翼』は彩流社に注文するか、一水会に申し込んでいいのですが、東京なら、新宿の紀伊国屋と高田馬場、池袋の芳林堂などにあります。高田馬場の芳林堂には僕の本が14冊もあるし、ここが一番あると思っていたら、何と池袋の芳林堂は20冊もありました。2Fの思想書のコーナーです。昔の本や、まったく買う人もないような本もあるし(僕のもそうかな)、いい本屋ですよ、ここは。

それでは今週のメインの見沢知廉先生の「解説」の話です。9月9日にちくま文庫から『言論の不自由!!』が出るのですが、果たして見沢先生の「解説」が間に合うかどうか不安でした。だって、連載原稿はよくおとしているし。「スコラ」の連載

対談は何回か休んでるし。「ヤンナイ」では、たまりかねて担当者が書いてたし。「レコンキスタ」は二ヶ月、連續休んでたし。それで、ちくま文庫も不安だったんですよ。だから、ギリギリになってこなかったら、彼の承諾をとって僕が代筆します。でなかったら、家にいって話を聞いて書いて下さい、と言った。「そんなにひどいんですか」と担当者は青くなっていた。「そういえば、原稿をもらえなくて、喋ってもらおうとしたら、その約束を二回続けてスッポかされた担当者もいましたよ」と言ってる。しかたない、見沢の名前でおいらが書こうかと覚悟を決め、下書きをはじめていたら、そこにtel。「もらいました。奇跡です」と喜んでいる。それも30枚だという、大作だ。「鈴木邦男って狼?」というタイトルだ。平和主義者ぶってるが本当は、ケダモノじゃないのか、テロリストじゃないのか。そんなことを書いたんだろう。楽しみだ。「そりやよかったね、では」と電話を切ろうとしたら、「それが・・・」という。「全く読めないんです。噂には聞いていたけど、これほどまでにひどいとは。文字じゃないんです」。「鈴木さんは読めるでしょ?」。読めないよ。あいつから来た手紙だって一度も読んだことないもん。そのあと必ず電話くるよ、"手紙でも書いたけど"って。「読めねーから、読んでねーよ」というと用件を言う。だったら、最初から電話すればいいんだ。「読めね一手紙」だけ不要だよ。余分だよ。だから、いくら汚い字を書こうと、おいらは平気だ。読まないけん、そんな苦労してまで読む必要もない。

「でも今回は鈴木さんの本ですよ、鈴木さんことを書いてるんですから、読めるでしょう。読めるはずですよ。助けて下さい」という。いやだなと思ったが、おいらの本だ。明日、朝一番で会ってくれという。歌舞伎の券、買ってたのに、ムダになってしまい、ともかく会った。いくら「悪魔の字」といわれても、「鈴木邦男論」だ。その鈴木邦男が読めないはずはない。ところが甘かった。そのおいらが読めないのだ。「文字の格好から類推してはダメだ。前後関係から推理しましょう」と必死で考えた。翻訳して「解体新書」を書いた杉田玄白や前野良沢になったかんじだった。杉田玄白らはそれで、歴史に名が残り、苦労はむくわれたが、おいらは全く報われない。2時間考えたが、それでも5ページだ。その5ページのうち、どうしても分からんのが3割位ある。こりや、ダメだ。「鈴木さんでも分からなかつたら、もうムリですね」。「あいつの家にいって、読み合わせをするしかないよ」「そうですね」となった。はじめから、そうすりやいいんだ。あいつめ。(あ、いけない。はじめは「見沢先生」だったのに、そのうち「あいつ」になっちゃった)。見沢先生のストーカーを呼ぼうと思ったが、仕事でこれない。彼女なら、全部読めるだろう。(いや、ストーカーの私でも半分しか読めない、と言っていた)。ウーン、そうだ、母親は読めるという話だが、呼ぶわけにいかない。「スパ!」の件で、昔、すさまじい抗議をされ謝罪したことがあったし。

そのあと、どうなったか・・。もう書きたくないよ。担当者は見沢先生にtelし、何と一晩かかって、読み合わせした。さらに、担当者がいうには、「体調悪いんですね、文章が乱れてました」という。その乱れを直したり、又、見てもらったりで、丸々4日間かかったという。じゃ、はじめから喋ってもらって書きとめた方が早いのに。ともかく出来、原稿がちくま文庫から送ってきた。おっ、こういう文

だったのかと初めて分かった。驚いた。いいねえ。武闘派クーニンの面目躍如だ。〈狼〉だったんだよな、この僕は。ケダモノだったんだよ。「モンド主義」だったんだよ。いいねえ、女にも「ケダモノ!」って言われてみたい。ともかく、力のこもった、一級品の「解説」ですよ。僕の文よりも見沢先生の「解説」で売れるでしょう。お楽しみに!

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張8月28日

やっとエルミタージュの謎が解けた！

とうとう解けた。エルミタージュの謎が解けた。例の「父親に自分の乳を飲ませて命を救った親孝行な娘」の話ですよ。ローマの「二十四孝」といわれる(?)お話です。ずっと前に、東武美術館でやった「エルミタージュ美術館展」で見たと思った。だから、エルミタージュの本を図書館で何十冊も探したがない。マリドンがロシアに行ってエルミタージュ美術館に行くというから去年、探してもらった。それでも分からぬ。じゃ僕の記憶違いなのか。他の美術館か。小田急美術館、伊勢丹美術館、三越美術館(もうないけど)、国立西洋美術館、上野の森美術館、東京都美術館・・と探して歩いたが分からぬ。エルミタージュじゃなくって、大英博物館かもしれない。ルーヴル美術館かもしれない。もう、わけが分かんなくなった。去年、掲示板に出したら、「それはルーペンスの絵ですよ」と教えてくれた人がいた。それでルーペンスの絵を集中的に探してみた。でもない。じゃ、あれは白日夢だったのか。「そうよ、あんたのいやらしい妄想が作り出した幻想よ」と旧管理人の赤坂には馬鹿にされ、ののしられた。それで探索を諦めていた。



さて、「現場百遍だ」と初心に帰り、東武美術館に行った。8月19日。「マティスとモデルたち」を見てから、事務局で昔の展示の記録を見せてもらった。ここだけでも「エルミタージュ展」を何回もやっている。一日かかって記録を調べた。あった! 何と8年前だったのだ。「エルミタージュ美術館展--17世紀オランダ・フランドル絵画--」の中にあったのだ。カラーコピーしてきたので管理人の爺やに渡した。これで自慰やしないで、ちゃんと写真にとってHPに出してくれよんと頼んだ。どう、見ましたか。やっぱりあったでしょう。トロイの遺跡を発掘したシュリーマンのような気分ですな、私は。

本当にいい絵ですね。特に授乳する娘の表情がいいですね。牢番の兵隊に見つからないだろうかとオドオドし。こんなことしていいのかしらと恥ずかしがり。でも、ちょっぴり気持ちがいいわと陶酔し。夫に悪いわと罪悪感に苛まれ。でも仕方ない。他に方法はないのだからと固く決心し・・。そんな複雑な心のありさまを表現してますね。世界的名画ですよ。そのわりには中学や高校の美術の教科書には入ってない。世界史でも教えない。歴史教育は偏向しとるよ。

この絵には解説文がついているので紹介しよう。作者はルーペンスではなかった。初めは、ヤコブ・バッケルの作品としてエルミタージュに取得され、その後は17世紀の無名のオランダ画家の作品と考えられていた。誰が作者か分からぬなんて、日本の写楽のようだ。もしかしたら写楽が描いたのかもしれません。しかし今は、どうもコーエンベルグの作品らしいと考えられている。

ではこの絵のタイトルだが、「キモンとペラ」という。古代ローマの物語のエピ

ソードだという。キモンという名のローマ人が餓死の判決を受けた。彼の娘ペラは、牢獄の父を訪れ、牢番に隠れて父に自らの乳を吸わせて死から救ったのだという。この題材は16-17世紀西ヨーロッパの美術、特にネーデルランドのカラヴァンジオの後継者達の間で大変人気があったという。ということは、他にもこの題材から絵を描いた人がいたということか。もしかしたら、ルーペンスも描いてたのかもしれない。前に掲示板で、「それはルーペンスですよ」と教えてくれた人は、そのことを言ったのかもしれない。

それにしても、何とも、ゾクゾクするような色っぽい絵じゃないか。近親相姦的な危ないエロチズムがありますね。でも、古代ローマの有名な物語というが、学校では誰も教えてくれなかった。まてよ、ローマは狼の乳で育てられた二人の兄弟によって建国された、と習ったな。つまり、ローマの原素はミルクなんだ。雪印国家だったんだ。(自分でも何言ってるか分かんねえ)

でも、キモンはなぜ餓死の判決を受けたんだろう。テロリストだったのかな。過激派で国家に謀反を企てたのかな。それに娘がちょうど都合よく乳が出るということは、夫もいて、子供も生まれたばかりだったのだろう。夫や子供は文句を言わなかつたのかな。「おれたちの乳を他人にやるなんて許せん!」と。いや、他人じゃないか。乳か。いや、父か。父だって変だ。実の娘の乳を飲んでまでも生きのびたかったのだろうか。僕なら拒否するね。恥ずかしい。日本の武士だってそうだよ。武士は飲まねど高楊枝だよ。娘の乳を飲むくらいなら餓死するよな。それが武士道だ。

その後、このキモンはどうなったんだろう。いつまでも死なないから許されて釈放されたんだろうか。餓死しないから面倒だと首をはねられたんだろうか。知りたい。でもギリシャ神話や聖書の物語と違い、古代ローマの物語なんて余り出てないよ。何で調べたらいいんだ。元統一教会の乾君、調べてくれよ。森君も調べてくれよ。叶姉妹のゴー姉ちゃん、ジャス姉ちゃんも調べてくれよ。

キモンがもし、釈放されたとして、その後、娘、娘の夫、子供と一緒に仲よく暮らしたんだろうか。三人で仲よく乳を分け合ったのだろうか。あるいは乳をめぐって骨肉の争いが起こったのだろうか。知りたい。それにしても、8年前、これを見た時の感動、驚愕、ショックは忘れられない。会場に入ったらすぐにあったのだ、No.3だった。それも122cm×142cmだ。大きい。ウワーッと大迫力で迫ってくる。な、なんだ、これはと驚きましたね。あまりじっと立って見てちゃいけないような気分になって・・。でもあとで一体なんだったんだ、と心に重く残る作品ですよね。コーエンベルグが1634年に描いたとされています。今から370年前ですね。日本じゃ江戸時代ですね、そんな昔の絵なのに、現代の絵のように僕らにせまり、ドキっとさせますね。ということで、今回は絵画の勉強でした。

では、続いては文学の話を少し。

家の掃除をしながらCDを聞いていたんです。CDといっても島倉千代子やモーニング娘。ではない。「サウンド文学館」(学習研究社)だ。「中原中也の日記・手紙」を聞いていた。「一日を二分して、前半は読書、後半は原稿書きにしよう」と言っている。「逆でもいいが、前半を原稿書きにすると書けない時は一日中、その

ままになり、読書すら出来なくなる。これでは一日がムダになる。だからまず前半は読書をして、それから後半は原稿書きにした」。なるほどと思い、僕も決意して夏休みは「中也式」で過ごした。

どんな本を読んでるか中也は日記につけている。ホフマン、パスカル、ドストエフスキイ、チェーホフ、小林秀雄・・と挙げている。フン、フンと聞いていた。と突然、驚いた。こんな箇所があったのだ。

「谷口雅春の『久遠の実在』を読む。これは全く正しい。その通りだ。ただ話が俗っぽい所もある。しかしそれも一般の人々に話しかけるには仕方のことだろう」。

ヘエーと思ったね。「生長の家」と中原中也なんて、考えてもみなかった取り合わせで、ただただ驚いてしまった。それにしても誰にすすめられて読んだのだろう。自分で哲学書として読んだのかな。それとも親類の誰かに「生長の家」の信徒がいて、本をもらったとか。でも、もうなら普通は『生命の実相』だ。こっちの方が「生長の家」のバイブルだ。『久遠の実在』を読んだというのが、シブイ。あるいは『生命の実相』は先に読んでたのかもしれない。誰か知ってる人がいたら教えて下さい。

そうだ、中原中也のお母さんが思い出を語っている本がある。中原フク(述)、村上護(編)で『私の上に降る雪は=わが子 中原中也を語る』(講談社文芸文庫・1200円)だ。これはいい本だ。ホロリとさせられる。30才で夭逝した天才詩人のことを94才になった母が語るのだ。中也が入院し、死ぬ前に長谷川泰子が見舞いにくる。かつて中也を捨てて小林秀雄の元に走った女だ。さらにこの時は別の男と一緒になっていた。その時の母の感想はこうだ。「そのときは夫婦づれでしたが、髪をクシャクシャにして、こわいような人じゃのう、と思いましたね、もしかしたら、この母が「生長の家」だったかもしれないね。

この本のタイトルは中也の「生ひ立ちの歌」からとっている。余りにも有名な詩だ。

「幼年時。私の上に降る雪は 真綿のやうありました」 「少年時。私の上に降る雪は纏(みぞれ)のやうありました」(中略) 「二十三。私の上に降る雪はひどい吹雪とみえました」 「二十四。私の上に降る雪は いとしめやかになりました」。

本当にいい詩ですね。雪だけでその時々の自分の精神状況をあらわすなんて、うまいし、ジーンときますよね。

では最後に、先週、掲示板に書いたことの訂正というか、補足をしましょう。

「創」の連載をまとめて本を出すのに、タイトル案を募集したら、「民族派戦線異常あり」というのがありましたね、あっ、見たことある。さてよ、このタイトルで昔、本を出したぞと思った。だからこの掲示板でもそう書いた。ところが、ちょっと違っていた。本のタイトルは『民族派最前線』(島津書房・2300円)だった。平成4年に出しているから8年前だ。「明確なる敵を求めて」という挑発的なサブタイトルもついている。「共産主義の死滅」「アメリカとどう付き合うか」「天皇論と三島由紀夫の復権」「テロでは何も変わらない」「民族と宗教の時代」・・と、なかなか熱のこもった論文が並んでいる。もう本屋で見ることはないだろう

が、惜しい本だ。島津書房（03-3209-2663）に電話してみたら、まだ在庫があるかもしれない。帯には「鈴木邦男最新評論集」と書かれている。これも珍しい。最近は余り「評論」はしていない、「エッセイ」ばかりだし。

ともかく、『民族派最前線』という本を8年前に出した。でもそれだけではない。エスエル出版会から出した『がんばれ!!新左翼』（11年前に出し、去年復刻版が出た）。がある。この本の「初出一覧」を見て驚いた。これがあったので勘違いしたのだ。

初出は「秀麗の山河」という民族派の機関紙に昭和61年4月号から63年12月号まで連載したものだ。初出のタイトルは「がんばれ!!新左翼」ではなかった。何と、「新左翼戦線"異常"あり」だったのだ。このエスエルの本と島津書房の本が頭の片すみにあったので、「民族派戦線異常あり」を見て、「あれっ、前に使ったぞ」と思ったんだ。どんどんと〈謎〉が解けてゆく夏ですね。

というわけで、では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張9月4日

東北人は詩人だ

野村秋介さんが亡くなつてもう7年になる。平成5年10月20日、朝日新聞本社役員応接室で自決した。当日、全日空ホテルでは全国から右翼・民族派の人々が集まり、「新しい時代に対する民族派の使命」と題するシンポジウムが開かれていた。野村さんは朝日新聞に寄り、社長と会つてからこのシンポジウムに駆けつける「予定」だった。ところが参加者に届いたのは「野村さん自決」の衝撃的なニュースだった。

最後の著書になった『さらば群青』(二十一世紀書院)には野村さんの自決に至る心情や怒り、祖国への愛情などが縷々書かれている。朝日に代表されるマスコミに對し命をかけて抗議し、警鐘を乱打したのだ。それと共に、最後に鬪つたのは寺山修司だった。寺山の〈思想〉だった。自決の当日、シンポジウムに集まつた人々に、「天の怒りか、地の声か」と題した野村さんの文章が配られた。あとで分かつたが、これは野村さんの「遺書」だった。その中にこんな箇所がある。

〈私は寺山修司の「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし 身捨つるほどの祖国はありや」という詩と十数年にわたつて心の中で対峙し続けてきた。そして今「ある！」と腹の底から思うようになつてゐる。私には親も妻も子も、友もいる。山川草木、石ころの一つひとつに至るまで私にとっては、すべて祖国そのものである。寺山は「ない」と言った。私は「ある」と言う。〉

そして最後に自分の辞世の歌を書いている。「さだめなき世なりと知るも草莽の一筋の道 かはることなし」。この「遺書」は今、僕の『新增補版・新右翼』(彩流社)の「資料編」を見ながら書いている。ぜひもう一度読み返してほしい。〈祖国〉をめぐつて、ぜひ野村さんと寺山で話し合つてほしかつたと思う。「遺書」でこう書いたからといって、野村さんは寺山を嫌つていたのではないし敵意を持っていたのでもない。むしろ寺山は好きだつたし愛読していた。愛読していたからこそ死の間際もつい寺山の歌を思い出し、それを借りて自分の心情をぶつけたのだ。

野村さんは句集『銀河蒼茫』を出しておつり、〈俳人〉としても評価されていた。俳句をやるキッカケになつたのは五・一五事件で有名な三上卓さんの影響だった。その他には寺山修司と山頭火が好きだつたし、その影響が強い。野村さんの句集を読んでいてもそれははっきりと感じられる。

去年亡くなつた阿部勉氏も寺山修司が好きだつた。よく読んでいた。野村さんと寺山論を語つていた。阿部氏は秋田県角館の出身だ。「東北人は詩人だ」とよく言つていた。寺山修司、石川啄木、宮沢賢治・・と、東北は詩人が多い。雪の多く、寒い風土が詩人を作るという。「東北人は詩人だ。関西人は評論家だ」とも言つていた。東北人は口が重い。言つたいことは胸の中で詩になるのだ。口の重い東北人は文学に向かうと詩人になり、政治に向かうと右翼になる。だから阿部勉氏は、「右翼は詩だ。左翼は散文だ」とも言つていた。右翼と左翼が論争してもつま

らない。それは「詩と散文の違いだから」とも言っていた。

僕も寺山修司は昔から好きで読んでるし、演劇も観ている。「月蝕少女歌劇団」を主宰している高取英は以前、寺山と一緒にやっていた。だから寺山作品もよく上演している。そっちの方も、ほとんど観ている。今年の8月2日から20日まで小田急美術館で「寺山修司展」が開かれた。超満員でゆっくり見れないだろうなと思ったが、意外にすいていた。「四大文明展」や「謎の超古代文明展」(伊勢丹美術館)にお客さんは皆、行っちゃったのかもしれない。大昔の文明展もいいが、寺山もいい。寺山の文章や歌や演劇には僕らが気がつかない、僕らが失った〈カオス〉がある。〈古代〉がある。やっぱり東北人は詩人だと痛感する。

寺山は青森生まれだが、自らの故郷についてこう書いている。

〈下北半島は斧のかたちをしている。大間村から北海岬にかけての稜線がその刃の部分である。斧は津軽一帯に向けてふりあげられており、今まさに「頭を叩き割ろうとしている」ように見えるのが青森県の地図である〉

地図を出して見た。たしかにそうだ。イタリアは長靴で、下北は斧だ。これが詩人の感性だろう。文章とは何か。詩人の感性によればこうなる。

〈書くことは速度でしかなかった。追い抜かれたものだけが紙の上に存在した。読むことは悔悟でしかなかった。王国はまだまだ遠いのだ。「書かれた詩句」以上に、「消された詩句」の方が人の心を打つこともあるのだ〉

うーん、凄いことを言うね。「追い抜かれたもの」だけが存在し、それが文章として残り、「作品」になるんだ。早い速度で追い抜いていったものはどこに行ってしまったのか。それは、「思い」なのか「思想」なのか。速すぎて、文字にしては書きとめられないのだ。人間が飛ぶときは、文章などは邪魔になるのかもしれない。寺山はこうも言っている。

〈鳥は飛ぶときつばさで飛ぶが、
あなたは飛ぶとき何で飛ぶのですか?
アランの「幸福論」で飛べるのか?
モーツアルトのジュピターで飛べるのか?
あのひとの愛で飛べますか?

なみだはにんげんの作るいちばんちいさな海です〉。

寺山の文章はどれも皆、いいですね。彼はボクシングや競馬も好きで、それに左翼運動にまでのめり込んだ。ボクシングについてはこう言っている。

〈ボクシングは殴り合いのかたちで行われる「肉体の対話」だと思っていたのである。キャッチボールも私にとってはことばのかわりに球を用いる「対話」であった。戦いはスポーツだが、勝つことは思想だ!〉

いいですね。勝つことは思想なのか。哲学的だ。戦っているだけではスポーツでおわる。そこを抜けて〈勝とう〉と思うのは思想なんだろう。ボクシングは「肉体の対話だ」というのもいい。「読書」だって対話だな。最近はのその対話ばっかりだな、僕は。携帯をもってる奴らの〈対話〉は、本当は〈対話〉にもなってないんだ。携帯を捨てよ。書(寺山の)を読め!

〈この世でいちばん怖ろしいのは怪物でも戦争でもなく、「何も起こらないこ

と」ではないのか?〉

これなんかも、体が震えるほどいいですね。やはり寺山は思想家ですね。革命家ですね。左右の運動家たちの心情をズバリと言い当ててますね。だから毛沢東は「造反有理・革命無罪」と言ったんですよ。又、平岡正明は「すべての犯罪は革命的である」と言ったんですよ。寺山はこれを実践した。芸術の為、革命のために「のぞき」をやって捕まったことがある。通りがかりに女の風呂場をのぞいたのだ。当時の週刊誌に大々的に書かれていた。そして非難されていた。でもいいじゃないか。寺山がやったんだ。のぞかれた女も芸術の為、革命の為に喜ぶべきだよ。最近では15才少年がやはりのぞきをしたと叱られて、カッとなって一家6人を殺傷した。「寺山修司だってやっていたのだ。のぞきは革命的行為だ。そんなことも理解できないのか」と15才少年は涙ながらに供述しているという(この部分は噂だけであり、未確認情報だ)。

では最後に、寺山のなかで僕の最も好きな文章だ。「自分が生まれた瞬間をおぼえている」と言った三島由紀夫を彷彿とさせる文書なんだ、これが。

〈一歳・・はじめての映画。あけた瞼のあいだからさしこむ剃刀の刃のような光。太陽は私を射る最初の映写機だった。何も映っていないスクリーンをじっとみている。「待っていると、何かがはじまる」。一体なにが? 私がはじまるのだ。私は 私自身の映画だった!〉

○最後にお知らせ。8月31日(土)、出ました。『夕刻のコペルニクス(1)』(扶桑社文庫。580円)です。生まれて初めての文庫本です。単行本を見なれてたので文庫になると、なんか可愛いかんじです。でも内容は過激で危ないんですよ。ぜひ買ってみて下さい。(2)は10月末に出ます。

○飲み屋で、突然、「アンディ・フグが死んだ」とつぶやいたら皆にバカにされました。でもあとで分かったんですが、ちょうどその時間にアンディは死んでたんです。「鈴木の超能力は本物だった!」と皆に驚かれています。9月6日発売の「創」(10月号)では、エスパー清田さんに会って超能力の話をじっくりと聞いて書きました。

○8月27日(日)の「PRIDE 10」は凄かったですね。試合も熱いが、気温も熱かった。クーラーなしで、闘う方も見る方も汗びっしょり。家に帰って12時。それから4時までかかって原稿を書きました。今出てる『Kファイル』に載ってます。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張9月11日

赤坂生誕百年大麻パーティーに出ただよ

余りに暑いので頭がパニクッちゃって、「大麻パーティー」に出た。エッ、ホント?とリアクションがある所だが、掲示板に皆、書いちゃってるから、衝撃度が薄いよね。大麻は吸うのはいけないが、そのまま食べるのは合法らしい。それでもフグのように〈毒〉の部分は抜いて料理するのかな。下北沢のその名も「麻」というレストランにいったんだ。大麻ビールを飲み、大麻豆腐、大麻サラダ、大麻納豆(そんなのないか)…なんかを食べた。こわごわ食べたけどおいしかった。でもその夜から鮮明な夢を見続けている。毎日キッチンキッチンとおわり、「以下次号」になって続く。僕のは宗教的な清らかな夢だ。乾の淫夢とは違う。乾は邪教の罪で牢にとじこめられ、なぜか赤坂に似た爆乳女が面会に来て、ナマ乳の差し入れをするという。こんな恥ずかしい夢は、とても書けない。

なぜそんな淫夢を乾は見続けているか、簡単だ。当日は赤坂の誕生祝いだったのだ。それに、「キモンとペロ」のカラー絵画を見せられたからだ。その二つがミックスして幻覚を見たのだ。しかし、誕生祝いというは普通、まわりの人が「やってやろうよ」といって人を集めるものだ。ところが、「8月31日は私の誕生日だから皆、祝うように!」と指令が来たのだ本人から。おいらは他に用事があったけど、「行かないとあとでこわいわよ」と皆におどされて、しかたなく行った。「なんで呼んでくれないんだ」と泣いてる奴がいたが、知るか、そんなこと。きっと赤坂に嫌われてるんだよ。でも、出席の権利をゆずってやりやよかったな、金もらつて。どうも最近は鬱病で、人に会うのがキツイ。この前、「新婚さんいらっしゃい」を見てたら、新婚で同じ家に住みながら、直接話さないで、お互いの部屋からメールを交換して「会話」してるんだという。ずい分とシャイな夫婦なんだ。SEXもメールを通してやってるんだろう。おいらもそうしようかな。

「ところで赤坂さんは何才なの?」とここでメールが来た。パソコンを打ってる途中でもメールが入ってくる。新しい機種なんだ。チャットしながらポンピング(打つこと。えっ、知らないの?)してるんだよ。あっ、赤坂の年か。それは企業秘密だよ。「企業って何?」。ウルセー、ともかく言っちゃダメって言われてるんだよ。ただ大台に乗ったことは事実だ。「大台っていくつ? 30? 40? 50? 60?」ウルセー、60だよ。ともかく、おいらにどんどん近づいてきたんだ。「これからも健康に気をつけて、一日でも長生きして下さい。次は還暦祝いですね」と言ったら喜んでいた。

「皆でお金を出し合ってバースデイ・プレゼントしよう」とおいらが提唱した。「さすが気配りの鈴木さんね」と皆が感動していた。風見愛さんが赤坂に、「何がいい?」って聞いたら、「男が欲しい」という。そういわれても困るよな。「乾をやれば」と僕は言ったのだが、「あんな太ったの嫌!」と、なかなか好みがうるさい。K君、S君、M君とあたったが交渉人は失敗。「ナマの男は無理だから、男の代用品を買ってやればいいじゃないか。歌舞伎町で売ってるだろう。大人のオモチャ

が」と言う奴もいた。ひどいことを言う。でもサイズが分からないし、電動式か油圧式か、どれがいいのか分からない。それで、あきらめて、リングにした。へんなリングじゃなくて手首にはめる装飾用のやつですよ。

当日「ありがとう」と皆に見せている。あっ、リング式の血圧計かとすぐ分かった。これからは健康に気をつけて一日でも長く生きてもらわなくちゃならない。いいものを買ったね、と言ったら、「違う」という。「体脂肪計でしょう」と乾が言う。又もやムッとしている。「時計ですよ」というが、巾が広くて、時計には見えない。やっぱり血圧計だろう。

この日、僕が持っていたコーエンベルグの「キモンとペロ」の原色コピーを皆に配った。いや、カラーコピーは高いので乾にだけあげた。赤坂が横から見て、「やっぱり、ルーペンスも描いたんじゃないの。マリちゃんにもらってたでしょう」と見せてくれた。ルーペンスの方は、娘が主じゃなくて乳を飲んでる親爺が主だ。娘の表情がよく分からない。だからマリッペにもらった時に、「あれっこれじゃないぞ」と思ったのだ。そうか、いろんな人がこの「キモンとペロ」を描いてたのか。「そうよ、横浜のゴー姉ちゃんも書いてたでしょう」という。あっ今日はまだ見てなかつたと、携帯でピンポンパンと掲示板を見た。あつ出ている。へー、ゴー姉ちゃんは大学で「美学美術史学専攻」だったのか、おいらと同じだ。でも、どこの大学? 帰国子女だって噂だからオックスフォードかな。ケンブリッジかな。ピョンヤン大学かな。ともかく、勉強になりましたよ、他の皆も、こういう学問的な書きこみをどんどんするように。やっぱ、掲示板を見て、「勉強になつた」と思い、「おっ、この本も読まなくちゃ」と知的刺激を受けるようなことを書こうよ。「パーティーによんでくんない」とか泣きごといわんで。(ちょくせつ、いやがらせ電話をかけてやれよ。)

ゴー姉ちゃんの指摘でアッと思ったのは、ここですね。16世紀のトレント公会議で「マリアの授乳」を主題にすることを禁止されたため、「キモンとペロ」が流行したのではないか…と。これはありうる。いや、その通りですよ。君は鋭い。このトレント公会議に出ていたおいらが言うんだから本当だ。

それに、スタインベックの「怒りの葡萄」のラストにも出てきたんですか。この本は学生時代に読んだけど、おぼえてないなあ。「生長の家」の運動をやってた時だから、今と違い、「乳」なんかに关心がなかったんだよね。ストイックだし、〈乳〉なんて文字は無意識のうちに飛ばして読んでたんでせう。

これが「孝行の道徳的規範として取り上げられた」というのも凄いですね。じゃ、西部邁が10月に出す『国民の道徳』(扶桑社)にも入れてもらわなくっては。何なら実演写真つきで。そういうえば、(これは言っちゃいけないと赤坂にかたく口止めされていたんだけど)、「キモンとペロ」を見て、赤坂が、「うちと同じ」とつい、口をすべらしていた。皆、エッと赤坂を見ていた。一瞬、空気が氷った。

そこに、赤坂の携帯が鳴った。「ひょっこりひょうたん島」の着メロだ。しきりにあやまっている。普段は皆をどやしつけているのに、赤坂があやまる人なんていののか。ところがいたんですね。父親だった。怒鳴り声がビンビン聞こえてくる。

「何時だと思ってるんだ。若い年頃の娘がこんなおそくまで遊び歩いて! へんな男に

でもひっかかったらどうするんだ!」。切ったら又、かかってきた。今度は母親だ。やっぱり同じことを言ってる。箱入り娘なんだ。でも、「若い」「年頃の娘」って誰? ウルサイ。かってにチャットしてくんないよ。赤坂のことだよ、きっと。

でも、赤坂の家は「キモンとペロ」状態だつていったよな。とすると、娘が変な男にひっかかるのが心配だというのは変だ。「父親はただお腹が空いてただけじゃないの。お乳が飲みたくて。それで娘を呼んでんじやないの」風見さんが言っていた。そんなところが正解でしょう。

ところで、ゴー姉ちゃん。キモンはこの後どうなったんですか。処刑されたのか釈放されたのか。これからも乳を飲みつづけたのか。出獄したんだから、雪印のミルクで我慢しなさいといわれて、そして離乳食になったのか。その辺を教えて下さいよ。たのんます。

では本の紹介ですね。8月30日、『夕刻のコペルニクス(1)』(扶桑社文庫。552円)が出ました。又、9月9日、『言論の不自由?』(ちくま文庫。640円)が出ました。見沢知廉さんの30枚の「解説」つきです。題して、「鈴木邦男って狼?」。なかなかいいですよ。最後の「?」は本のタイトルに合わせたんでしょうな。実はこのタイトルですが、あれこれ考え、これしかないと決めたわけですよ。ところがパソコンで検索して見ると過去に同じタイトルの本があった。朝日新聞社発行の『言論の不自由』だ。何でも赤報隊事件について書いた本だという。「鈴木さん、知つてました」「知りませんよ。赤報隊ウォッチャーの僕でも知らないんだから無視していいんじゃないですか。それとも同じタイトルの本を出すと訴訟さわぎになりますか。問題があるんですか」と聞いた。「それはないんですが…。うーん、どうしましょうかね。ここまで考えてやっと決めたタイトルですからね」「じゃラストに?!をつけましょう」「そうしましょう」となった。だからこの?!は徒やおろそかには出来ない。大事な?!なのだ。

それと、前にもちょっと紹介したけど、宮台真司さんの多面的解説集『援交から革命へ』(ワニブックス。1500円)が発売中だ。都庁をバックに宮台さんが立ってる写真が表紙にのっている。新刊書コーナーに積まれてるから、皆も見たでしょう。

「宮台真司の90年代思考集成」と帯には書かれている。第1章は〈国家論〉で、「『表出』の根に連なる真正右翼」だ。そう、僕の『がんばれ!!新左翼』の「解説」が何と、トップなのだ。つづいて、僕のインタビュー。さらに見沢知廉『天皇ごっこ』の「解説」で、「『天皇モード』が輝くとき」。そして、見沢のインタビュー…とつづく。なかなかの力作だ。今までにはない〈宮台真司〉が出ている。宮台さん初めての天皇論、国家論だ。これは話題を呼びますよ。

はい、それから又、僕の本に戻ります。『通販生活』(秋の特大号)は緊急特集「10代の犯罪」。如月小春、ピーター・バラカン、福島瑞穂なんかと共に僕も書いてます。タイトルは「50代の犯罪者から見た10代の犯罪」。ちがった、「人々が安心して暮らせる社会を守るのが『愛国心』なのに、いまの大人たちにはそれがない」。さらに、「K-Files」(VOL5。ぴいぷる社)では巻頭でも書いてます。8.27西武ドーム「PRIDE 10」の観戦記です。では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張9月18日

「小学生の作文」と言われただよ…物語

映画「新しい神様」は大ヒットですね。渋谷の「ユーロスペース」で絶讚上映中です。評判がいいのでまだまだ上映が続くそうです。映画はレイトショウで夜の9時から10時45分まで。終わって毎日、主演の雨宮処凜さんと監督の土屋豊さんが観客とトークをしてる。さらに金、土はゲストを迎えての「週末特別トーク」をやっている。9月8日(金)には僕も呼ばれて話してきた。僕じゃ誰も来ないだろうなと思っていたら満員だったんで、ビックリ。だって、他の日は宮台真司、大槻ケンヂ、見沢知廉、香山リカ…と超豪華ゲストだ。だから、「どうせ同じ金を出すんなら、宮台さんとか大槻さんの時に行け。その方がトクだ。僕の時なんか来るな」と言ってた。「なんて自虐的なオッサンだ」と言われたが、これは正論だろう。僕だって見に行くんなら他の日にする。

そう言ったにもかかわらず来てくれたひとにはお礼を言わなくちゃ。ありがとうございます。そこでも話したんだけど、二人を「右翼の世界」に紹介したのは僕ですよ。今を去る5年ほど前ですかな、土屋さんは街で「あなたにとって天皇とは何ですか」と一人一人聞いて、それを映画にした。なんとねばり強い人かと感心した。出来上がって、「ぜひ見てくれ」といわれて見た。そして〈天皇制〉についてトークをした。それ以来の付き合いや。それが今や世界的大監督だ。

一方、雨宮さんは、これも5年前。吉祥寺、いや高円寺かな。そこのライブハウスにおらが行ったと思いねえ。とうじ魔とうじという特殊音楽家がいただよ。その人のライブを見に行った。二次会に行ったら、「人形作家・雨宮」がいた。当時はただの人形作家だった。それが今や世界的大女優だもんな。つまり、二人とも僕をキッカケに、いわば「踏み台」にして右翼の世界に顔を突っ込み、そして大活躍し、「新しい神様」をつくった。ところが、映画が世界的に大ヒットするや、僕のことなんか忘れてしまった。あっ悲しい。僕は嫌われてるのかな。(あっ、誰かのマネになった)。と、ひがんでたら、9月8日に呼んでくれたんですよ。それで、うれしくて、ハイになって喋っただよ。(何か、一水会フォーラムでも二人をよび、僕が聞き手だ。えーと、9月18日(月)か。あっ、更新の日だから、今日じゃないか)。

さて、話は戻って、特殊音楽家とうじ魔とうじさんだ。エッ知らない?有名なんですよ。バケツとかほうきとか、ハタキとか茶碗とか、その辺にあるものを楽器にしちゃうんだよ。「すべての台所道具を楽器に!」といったかんじよ。これ、喜納昌吉さんの「すべての武器を楽器に!」をパロった。いいだろう、喜納さんの言葉だって、〈元〉がある。竹中労の「汝、花を武器とせよ!」だ。これを喜納さんは喜納さんらしく変えて使ったんだ。と僕は思っている。

この、とうじ魔とうじさんのライブで雨宮さんと知り合ったといった。実はこの、とうじ魔とうじさんの紹介で僕はあの天才在日歌手・川西杏さんと知り合い、長い友情をはぐくむことになる。

又、とうじ魔さんの奥さんはライターの塔島ひろみさんだ。「車掌」というミニ

コミを出している。そして、あの名著『鈴木の人』(洋泉社)を出した人だ。SPA!にも書いたから覚えている人もいるだろう。日本で一番多い姓・「鈴木さん」について書いたんだ。僕も座談会で参加した。「鈴木さん」は、「やさしくて、ひかえ目で、気配り上手で…」と、鈴木さんの特徴をしっかりと書いていた。日本人で一番多いということは、日本人の代表であり、エッセンスなのだ。「鈴木が分かれば日本が分かる」。だから鈴木を愛することが即、「愛国心」になるのだ。だから皆で鈴木さんを愛そう! とこの本は主張してるわけじゃないが、おらは強く強くそう思つたね。

そこで話は又もや、雨宮さんの「新しい神様」だ。チラシを見たら凄いね。各界のビッグな人々が絶讚、絶讚、また絶讚じゃないか。なかには、「スゴイよ、この映画。『ゆきゆきて神軍』、超えるよ!」なんて書いてた人もいた。そこまで言うかよ。まだ原一男(監督)も主演の奥崎謙三も生きてるんだぞ。読んだら気、悪くするよ。木村三浩氏も見沢氏も宮台真司さんも書いている。おいらも頼まれたんで必死になって考えて書いた。短い文で難しいんだよ。そしたら、雨宮のやろう、「なにこの小学生の感想文みたいなの?」。ガクっときたね。いちおう、プロのもの書きですよ。そのプロに向かって「小学生」とはね。ひどいよな。その「小学生」なみの文章はチラシで見て下さいよ。

そうだ。「新しい神様」の二作目は奥崎謙三と共に演させたらいい。左と右のカリスマ同士が裸でぶつかり合う。うん、これしかない。奥崎は刑務所を出てきてから、本当に裸でぶつかり、映画を撮った。何というタイトルだったかな。「神様の愛い奴」だったかな。ソープ嬢やヘルス嬢を相手に革命的本番までやってのけた。この過激派老人にはこわいものはない。出来ないことはない。それで、雨宮さんとの共演だ。やるかやられるか。くうかくわれるか。スリリングで、ハラハラ、ドキドキする大作になるよ。

あるいは鳥肌実と「右右共演」するとか。でも、「鳥肌は嫌い。名前聞いただけで鳥肌が立つ」と雨宮さんは言ってたから共演はムリか。

しかたない。じゃ、寅さん亡きあと、「女もつらいよ」シリーズだね。これをやろう。まず、北海道に行き、北方領土返還を訴えて貝殻島に泳ぎ渡る。ロシア兵に撃たれて死亡。つづいて、沖縄にいって〈琉球独立〉を叫んでクーデターを起こす。(最近「ゴルゴ13」にこんなのがあったな。「沖縄シンドローム」だったかな。最近、やたらとゴルゴについては詳しいんだよ。なぜか)。でも、クーデターは失敗し、米軍に射殺される。さらに岩手にいって「吉里吉里国吉里独立」を叫び…と、話は続く。生まれ変わり、死に変わりしながら続く。1年に1作ずつ作り、48作までやる。そう、「寅さん」の記録に迫るのだ。

「そうだ。こんど、本を出すんですよ。太田出版から」と雨宮さんは言っていた。9月25日に出るらしい。1400円だ。『生き地獄天国』というタイトルらしい。爆発的に売れるだろう。1万部売れたら印税は140万円。天下の太田出版だし、世界的女優の自叙伝だ。100万部は売れるだろう。そしたら印税は1億4千万円だ。ウワー! 一億だよ、「そんなに、何に使うんですか」と叫んじゃった。でも、「ひとの印税の計算なんかしないで下さいよ」と冷たく言われちゃった。

ここで「お知らせ」です。

これを書いてる途中でピポピポと音がして、FAXがきた。例の大坂でやる「左右激突」の案内だ。今年は宮崎学(作家)と松原好之(河合塾講師・英語)の一騎打ちだ。そして司会が僕だ。テーマは、「不屈の中年犯罪者から屈折の少年犯罪者へ」。なかなかこったタイトルや。〈不屈〉と〈屈折〉と掛けたんやろ。韻をふんどるのかもしらん。1回から10回までは塩見孝也さん(元赤軍派代表)と僕が「左右激突」のメインやった。ところが、「もうおもろない。こいつらはダメや」と去年は2人とも降ろされた。そんで中山嶺雄氏と宮崎学氏の「左右激突」だった。そのことを攻撃してSPA!にも書いたら、単行本の(3)ではおとされてしまた。なぜやろう。

ともかく、塩見さんと僕は10年もやってて、お払い箱になった。「これは許せん」と塩見さんは激怒したが、仕方ない。ところが今年は「司会でどないや?」と松原さんからtel。「塩見さんと二人の原状回復。求めるのはこれだけです」と断つた。そのあと、いろいろあって、司会を引き受けた。

実は一つの魂胆があったんや。正面から「二人の原状回復」を要求してもムリや。だからまず司会になる。汽車賃(今どき汽車なんてないか。じゃ交通費だ)は出る。それと、ちょっと講演料も出る。それをそっくり全額、塩見さんに回す。そして、「聴衆」として聞きに来てもらう。僕は司会の特権で、「わざわざ塩見さんが来ていらっしゃいますので、一言」といって壇上にあげ、そのままずっといてもらう。そうしたら、実質的に(原状回復)になるんやないか、と思った。

その話をしに病院にいった。なぜ病院かって? 病院でバイトしてるんですよ。ちがった入院してるんですよ。心臓が悪くて。救急車で運ばれ、一時は大変だったようだ。だから見舞いにいって、ベッドの塩見さんの写真をとってきた。「おい、写真なんかとるのかよ。又、変なことに使うつもりだろう」と言う。なにをおっしゃる。元気になってから、「あっ、あの時は大変やったな」とおもい出すためですよ、と言った。それで、河合塾の〈作戦〉を耳打ちした。どこに敵のスパイがいるかもしれないから小声で言った。「そこまで俺のことを考えていてくれたのか」と、よろこんでくれるかと思ったら、何と、激怒した。「誰がいくか! そんな屈辱的な案はのめない」と言う。「屈辱の中年犯罪者」にはなりたくないらしい。それでは、しかたない。宮崎、松原、鈴木の三人で予定通りやることになりそうだ。

10月1日(日)の午後1時から6時までです。河合塾大阪南校です。telは06(6774)2581です。午前11時から入場整理券を配るそうです。早くいかないと入れませんよ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張9月25日

これからは、「エスパー鈴木」と呼んでくれ！

「ゴルゴ13といったら、やっぱり鈴木さんでしょう」と、彼は編集会議で主張してくれたという。「だって鈴木さんはゴルゴ13を30年間ずっと読んでたし、それで"男の生き方"や"危機管理"を学び、国際政治も学んだっていいますから。やっぱり鈴木さんしかいないですよ」と。それでおいらに決まったんだよ。エッ何の話かって。先週ちょっとヒントを与えたじゃないか。しょうがない。説明するか。何から話し始めたらいいかな。

「ゴルゴ13」という劇画があるよね。昭和43年11月に始まった。「ビッグ・コミック」(昭和44年1月号)から載った。だから今年で33年目だ。三島事件や、「よど号」事件、連合赤軍事件よりも前から始まっていたんだ。凄いね。それが「400話」を迎えた。それを記念して、「ザ・ゴルゴ学」という本を出すことになった。ゴルゴは出生はよく分からないが、世界を飛び回るスナイパー(狙撃手)だ。殺し屋だ。今まで何百人の人間を殺したか分からない。又、世界の重要事件の全てにからんでいる。ケネディ暗殺事件、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、ダイアナ妃死亡…と。国際政治のディテールがこれでもか、これでもかと書かれているし、これで国際政治を勉強した人も多い。大学の国際政治学よりも、この劇画の方がずっと役に立つ。

ところで、「ザ・ゴルゴ学」では、ゴルゴ13の33年の歩み、その魅力、暗殺の哲学、出生の秘密…などを一冊の本にした。最後に作者のさいとうたかを氏へのインタビューがある。で、誰がいいかとなって、おいらになったんですよ。「そんな大役は、とてもとても」と断ったんだけど、「いや、鈴木さんしかいません」と引き受けさせられた。

確かにおいらはゴルゴ13と同じ年だし、血液型もA型で同じだ。同じく完璧主義者だ。同じく殺し屋だ(これは違うか)。非合法運動をやってた時は、「こんな時はゴルゴならどうするか」と常に考えて行動してきた。僕の生き方は全てゴルゴだった。人生に必要なことは全てゴルゴから学んだ。

「じゃお願いします。インタビューの前にもう一度ゴルゴは読んで下さい」という。もう一度といっても龐大な量だ。「400話記念」といったけど後でよく調べてみたら増刊号に描いたのもあったりで、「470話」だという。リイド社から出ている単行本で118冊だ。ゲッ、そんなにあんのかよ。「まア重要だと思うのは30冊ほど送りますから、あとは本屋か古本屋で買うか、マンガ喫茶で読むかして下さい」という。話が来たのは3週間前だ。そんなことは無理だ。他にも仕事は一杯あるし。不可能だ。ミッション・インポッシブルだ。

「まア、できるだけでもいいですから読んで下さい」と言う。それで、手帳に1から118まで数字を書いて、読んだものから丸で囲んでいった。ひたすら読んだ。面白い。勉強になる。よし、全部読んでやろうと思い、買った本は家や電車の中で読み、時間のある時はマンガ喫茶に入りびたりで読んだ。そして、9月12日、全巻

読破した。バンザイ！

次の日、9月13日がさいとうたかさんと会う日だった。「これこの通り、3週間で118冊全部読んだんですよ」と手帳を見せたら、驚いていた。「ウワー、僕だってもう忘れているのに」。インタビューの内容は書けないが2時間以上も話しこんだ。僕は主にゴルゴに流れる「哲学」と「日本に対する警告」について聞いた。あとは「男のストイックシズム」かな。初対面なのに実によく喋ってくれた。そして、〈思想家〉だと思った。

「ゴルゴ13」はただのクールな殺し屋の物語ではない。その底には、人類への怒り、憂い、警告がある。終戦秘話がよく出てくる。なぜシベリアに60万人も抑留され7万人も死ぬことになったのか。誰に責任があったのか。又、日米コメ戦争、コンピューター戦争なども出てくる。自虐や自尊を超えた〈憂い〉がある。嘘だと思ったら、マンガ喫茶で読んでみたらいい。ショックを受けるだろう。この「ザ・ゴルゴ学」は11月中旬に出るそうだ。楽しみに待ってほしい。

9月13日、このインタビューが終わって編集者と、すき焼きを食べた。「ゴルゴの話の後ですから、やっぱ肉を食いたいですね」と彼は言う。だから菜食主義者の僕も付き合って食べた。ふだん禁酒・禁煙なんだけど、この日だけはホッとして酒をガブガブ飲み、タバコをプカプカふかした。そしていい気分で家に帰ってきたら、一枚のFAXが。「鈴木さんは超能力者ですね、やっぱり」と書かれていた。読み進んでアッと叫んだ。(以下次号)。エッまだ終わっちゃダメなの。仕方ない。もったいないが、書いちやおう。「ゴング格闘技」からのFAXだった。この日、プロレスの高田延彦選手が緊急記者会見をした。10月31日(火)に大阪城ホールで行われる「PRIDE 2」で高田選手はラスト・マッチを行う。その相手がイゴール・ボブテヤンチンに決まった、というのだ。「2ヶ月前に鈴木さんが予想した通りですよ」と驚いていた。

実は、7月末に高田選手に僕がインタビューした。それは「ゴング格闘技」の増刊号に出ている。「年内にもう一試合やって、それを最後にしたい」といっていた。8月27日の「PRIDE10」(西武ドーム)では予定されてないし、10月の大阪か11月の東京だろう。10月の方が可能性が高いかなと思った。相手は全く決まってない。白紙だといった。そこでこんなやりとりがあった。

高田 年内には、間違いなく出場したいですね。

-----もちろん、選手は日本人じゃないですよね。

高田 それはないと思います。

----僕は、ボブチャンチンとの試合なんか見てみたいと思いますが。

高田 ハハハ、良いところを突いてますね。まあ、次は、良い形で締めたいんで、いつものように刺激と緊張感のある選手と戦います。強くてやりがいのある選手を選びたいですからね。

どうです。僕の「希望」というか「予想」がズバリと当ったんですよ。高田選手には何度かインタビューし、高田論も何度か書いている。「高田番」記者とも言われている。だから高田選手の考えていることが分かるようになってきた。それに、最近、未来が見えるようになってきた。予知能力があるんだ。超能力者になってきた。これからは「エスパー鈴木」と呼んでくれ。

このインタビューで高田選手は、「ハハハ、良いところを突いてますね」と言っていた。考えてることをズバリと突かれて驚いたのかと思った。まてよ、あるいは、この時は漠然と打撃系選手のことを2、3人考えていて、その時、僕にボブチャンチンといわれて、それにひきずられたのかもしれないとも思った。

「ゴング格闘技」からのFAXは、それで、次の日に会いに行って話を聞いてくれという。メル友の森君も高田選手に会わせてくれといってたが、緊急だし、夜中なんで、連絡のしようがない。次の日、高田道場に行った。高田選手は開口一番、「鈴木さんに言われたんでボブチャンチンに決めたんですよ」と言って笑っていた。でも2ヶ月前は、ボブチャンチンも含めて2、3人を考えていたようだ。「だから鈴木さんにマインドコントロールされたんですよ」と言う。ウッ、だったら恐ろしい力だ。

「予知」だけでなく、いろんな超能力も開発してきた。そのうち、キーボードを叩かないでも、画面を見ているだけで文字がどんどん勝手に並ぶだろう。恐るべし、鈴木君！と自分で驚いてしまった。

では、10月のお知らせです。10月1日(日)は1:00から河合塾大阪南校で「左右激突討論会」です。一水会フォーラムは10月11日(水)7時からシチズンプラザで、ジャーナリストの恵谷治氏です。「SAPIO」でもおなじみで、中国、北朝鮮問題のエキスパートです。

10月19日(木)は6時から四谷公会堂で野村秋介さん追悼の「群青忌」です。長谷川三千子先生(埼玉大学教授)が記念講演をする予定です。10月31日(火)は文庫版「夕刻のコペルニクス 2」(扶桑社)の発売です。解説は呉智英さんに書いてもらいました。では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張10月2日

「鬼平犯科帳」を全巻読破しただよ

つげ義春さんに会った。あの名作「ねじ式」の作者だ。エッ、この人かと驚いた。だって、「普通の人」なのだ。キッチンとスーツを着て、温和そうな人だし、どう見ても会社の部長さんて感じだ。喋り方もジェントルマンですよ。「テレビの討論会で鈴木さんは見てましたよ」と言う。へエ、テレビなんかも見るんだ。「火曜サスペンス劇場」や「キスイヤ」「ジェリー・スプリングター・ショウ」なんかも見てるのかな。聞いてみたかったけど初対面で、アガっていたので聞けなかった。

マンガ家といったら、どっか崩れているよね。服装が崩れてるとか、喋り方や顔が崩れてるとか。生き方が崩れてるとか。つげさんにはそれが全くないんだ。まア私生活は知らないけど、会った感じでは崩れはない。それは驚きだった。つげさんに会ったのは別に仕事じゃない。「まんだら屋の良太」を描いている畠中純さんのパーティで紹介されたのだ。そういえば、畠中さんも〈崩れ〉のないマンガ家だな。描いているものは思いっきりエッチで、いやらしい。でも実生活は真面目な人だ。よきパパだ。もう性欲もないという。「だからこそ妄想の世界で、思い切りいやらしいことを描けるんです」と言っていた。そういうものなのか。畠中さんはH系の他に宮沢賢治の童話を版画にしている。やはり心の中は純でピュアなのだろう。畠中純というくらいだし。マンガ喫茶にいって畠中さんのマンガをも一度、読み直してみよう。それに「ねじ式」もだ。昔はおいらも「マンガ評論家」を自称してた時もあったんだし。真面目にマンガを読まなくっちゃ。

だからといって、(と突然話は変わる)。だからといって赤坂のことを「ゆあつ式」と言るのはやめろよ! 赤坂は前の管理人だし、おせわになった人だ。だから、「ゆあつ式」なんて言って馬鹿にしちゃいけない。「そんなこと誰もいってないよ」

「大体、ゆあつ式って何のことだよ」…だって。かくしてもダメだ。おいらにはちゃんと聞こえるんだ。パソコンを通して、これを読んでいる1万人の心のうちが見えるのだ。おいらを誰だと思っているんだ。おい、その兄ちゃん。そこのネエちゃん。えっ、聞こえないよ。もっと大きな声でいえよ。おっ、聞こえた。聞こえた。「超能力者のクーニン」か。そうだよ、そうだよ。分かってるじゃないか。遠くのこと、未来のことも見えるんだ。君らの心の中なんて簡単に分かっちゃう。

だから、「ゆあつ式」なんて言わないように。えっ、「はじめてのビジターだから、ゆあつ式って分からぬ」って? こまるよな。うちは会員制なんだから。はじめての客やフリーの客はお断りなんだよ。どうしても見たけりや、少なくともこの「主張」は初めから全部見て、それから訪ねて来なせえ。「大麻パーティの巻」で、ちゃんと書いてるじゃないか。あーあ、こんなふうにネタをバラしちゃ、面白くないな。

大体、失礼だよな、赤坂のような若い女性をつかまえて、「ゆあつ式」だなんて。エッ「若い女性って誰のことか?」。失礼のダブルだよ。赤坂だよ。若い、未婚、未通の女性に失礼だ。「未通ってナーニ?」ウルセー、自分で辞書ひけよ。

でも赤坂も偉いよね。けなげだよね。何かの資格をとるために必死で勉強し、昼は本屋でアルバイトしてるらしい。おいらも昔、学生運動の世界から追放された直後、仙台の本屋でバイトしてた。あん時も「ダメ店員」だったよな。本を読んでいて、客が来たのも気付かなかったり、万引はされ放題だったし。「お前がしたんだろう」って? ギクッ、失敬な。そんな悪党じゃない。ただのダメ店員で、万引を見つけられないだけだった。配達すりやいつも間違ってたし。それでも、縁があって産経新聞社に入り、そして、そこでもダメ社員でクビになり、右翼になり、右翼もクビになり…と「クビ人生」が続くよ。だから赤坂もそれにならって本屋のバイトをしてるらしい。そして無事に、予想通り、クビになるらしい。第一の関門は突破した。次は産経新聞入社だね。

はい、ここで話は変わります。本当に変わる。先々週は、さいとうたかをの「ゴルゴ13」について書いた。「ゴルゴ13」の単行本118冊を読破したといったけど、今、やはり、さいとうの「鬼平犯科帳」に挑戦してる。「鬼平」の原作は池波正太郎だ。「ゴルゴと違い、鬼平には原作があるんでやりやすいですか」と聞いたら、

「原作がある分かえってやりにくい。難しい」と言っていた。原作の、小説でなければ出せない(よさ)(味わい)が出せない。それでいて、鬼平の面白さは伝えなくちゃならない。そこが大変だという。劇画を見て、なるほど、これは大変だと思った。小説は池波の独特の書き方がある。会話は「」だが、その他に()に入れた心情描写というか、つぶやきのようなものがある。これがやたらと多い。たとえば「22巻」(特別長篇・迷路)でひろってみると、

もし曲者が同じ浪人者だとしたら、

(これは、ただごとじゃない…)

ことになる。

(別のものが、一つになる…)

わけではない。

(むう…)

平蔵は、胸の中で唸った。

(わからぬ…)

妻も知らぬ大金だ。

細川ひとりが、小遣(こづか)いにしても、

(たのしみながら、十年は保(も)つ…)

ほどの大金なのだ。

(て、手ばなすのは惜しい。まったく惜しい)

さりとて、怖い。

長官の眼が怖い。

(何も彼も、お見通しなのやも知れぬ)

どうですか。この()は池波ならではのものだ。他の人はとてもマネが出来ない。おいらごときがマネしたら、「文法的に間違ってるよ」といって突き返される

だろうよ。しかし、この池波の文体のよさ、凄さ、味が劇画には入れられない。そのハンディをどう突破し、〈劇画〉にしたのか。その視点から読んでみようと思った。

実は、おいらは鬼平は映画やテレビではよく見ていた。昭和42年に鬼平は生まれ43年から連作ものになった。ちょうど「ゴルゴ13」と同じ頃からだ。そして昭和45年からテレビ放映が始まった。八世松本幸四郎だ。他に丹波哲郎、萬屋錦之介、中村吉右衛門が鬼平をやった。最近の人は鬼平といえば吉右衛門と思ってる人が多いだろう。しかしおいらなんかは初めにやった幸四郎の姿が瞼に焼きついている。

映画やテレビは実によく見た。だから鬼平犯科帳というのはアクション時代劇だとばかり思っていたし、勸善懲惡ものだと思っていた。そこに〈文学〉があるとは思わなかった。ところがある日(つい、2年ほど前だが)、東中野図書館で鬼平のテープを借りた。プロレス会場に行く電車の中で聞いた。エッと驚いた。映画やテレビと全然違う。小説の朗読だったから、池波の〈文学〉がそこにあった。映画やテレビでは省略されていた()の中の心理描写もある。そして、出てくる悪党たちが実に生き生きとしていて、魅力的だ。鬼平なんか余り出てこない巻もある。又、悪党でも使える奴は殺さないで、罪をチャラにして自分の密偵にしたりする。単なる薄っぺらい勸善懲惡ではない。これは凄いと、文章にしびれた。又、池波文学に感動した。それで、「よし、全巻読んでみよう」と決意した。半年かけて読破した。文春文庫で1巻から24巻までだ。それに、別巻の「乳房」というのがあって、全部で25冊だ。面白かったし、又、自分の文章修業の上でも勉強になったと思う。しかし、池波はどうやってあんなにうまい書き手になったのか。長谷川伸に弟子入りしてからだというが、その前から、芝居を(それも子供の頃から)見ていた。それが大きな影響を与えたようだ。絵も好きで祖父は鎌木清方に弟子入りさせようとした位だったという。

祖母や母も、質に物を運んでも六代目菊五郎は見に行くという「心を飢えさせないための知恵」を持っていたという。これは新潮日本文学アルバム『池波正太郎』(新潮社)に出ていた話だ。いいねえ、この「心を飢えさせないための知恵」という言葉。三島由紀夫も子供の頃から歌舞伎ばっかり見てたし、「歌舞伎ノート」をとってた位だ。それが後年、大作家として花開くんだ。

池波は10才の時、新国劇で「大菩薩峠」を見た。辰巳柳太郎の机竜之介と島田正吾の宇津木兵庫だ。

〈十歳の私は興奮と感動に身ぶるいがやまなかつた。「何をふるえているんだい?」と私の肩を抱いた従兄の声を、いまも忘れない。いまにして思えば、この観劇の一日こそ、後年の私を劇作家にさせた一日だったといえよう〉

と後に池波は書いている。10才といえば、小学校4年じゃないか。凄い。おいらなんて、その頃は山川惣治の「少年王者」ばっかり読んでいた。世の中に芝居とか小説があることも知らなかった。そうだ、この前、一水会フォーラムに来た女子高校生はやはり早熟で、小学校4年で三島由紀夫の「禁色」と「仮面の告白」を読んだという。凄い。きっと大人になったら池波のような大作家になるだろう。

観劇の他に、池波を大作家にしたものとして、芝浦で旋盤機械工として働いてい

た体験がある。職的な仕事の呼吸と、その中から心と体のリズムを身につけるに至ったという。又、先輩にいい人がいて、その人は機械を人間のように扱い、擬人法で説明した。「機械に飯(油)を食べさせる」といったり、図面の見方と機械の性能の関係を女性の各部分の引用によって説明したりした。ウーン、なんとなく分かりますね。

だから、池波は自分を〈職人〉のように思っていた。実際、職人だった体験もあり、又、自分の〈血〉の中にも職人気質が色濃く流れていた。こう書いている。

〈どうも十年ほど前から、原稿紙にペンを走らせていても、何やら、二人の祖父(片や宮大工であり、片や鎌職人であった)が鑿(のみ)や鏽(やすり)を使っているような気分になってくるのだ。万年筆のペン先を洗っているときも、職人が道具の手入れをしているような気分になってくる。こういうのを「血…」というのだろうか。〉

こういう〈血〉はいいですね。うらやましい。おいらにはこんな血はないけど、でもペンを走らせていると、今まで考えてもいなかつことが出てくることがある。だから昔、「思想はペン先に宿る」と書いたことがある。『行動派のための読書術』だったかな、これを思い出した。その点、ワープロは、ちょっとな…。レポートや、こういう軽い文章ならいいけど、「創」の連載のようなものは、どうしてもペンでなくてはダメだ。ワープロでは書くのは早いけど、文がすべってしまう。これは欠点だ。だから、ワープロはこのHPだけにしている。「創」や「SPA!」はノミやヤスリを使うように、一字一字、きざみ込むようにして書いている。どっちがいいかという問題じゃなくて、書く内容によって使い分けているつもりだ。

ここでお知らせ。読み終わった「鬼平犯科帳」(25巻)をほしい方にあげます。家が狭いから置いておけないし、古本屋に売ってもタダ同然でしょうから、ならば、タダで知り合いにあげた方がいいと思ったので。ただし、宅急便代(千円位)は負担して下さい。ほしい方はハンドルネームじゃなく本名で。それと住所、電話も書いてハガキか手紙で申し込みを。多い時は抽選にします。本が届いたら宅急便代を送って下さい。連絡しない人は外れですから気を悪くしないように。では又、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張10月9日

「左右激突」では打ちひしがれたよ

10月1日(日)、河合塾大阪南校に行ってきましたよ。第12回「左右激突討論会」だ。1回から10回までは塩見孝也さん(元赤軍派議長)と僕がメインで「左右激突」だった。ところが去年は2人とも突然降ろされてしまった。もうこれで終わりだなと思ったら、今年は「司会をやってくれ」といわれた。「塩見さんも一緒に…」といったがダメだった。それで、心残りだったが行ってきた。宮崎学さん(作家)と松原好之さん(河合塾英語科講師)がメインで、「左右」だ。宮崎さんは元日共だし、今も「左」なんだろう。あるいはアナキストか。すると松原さんが「右」になるのか。でも松原さんは元・全共闘だ。成田闘争でパクられ3ヶ月間、ぶち込まれた。それをウリにしている講師だ。この逮捕のために、内定していた就職(お菓子の不二屋らしい)がバーになった。そこで小説を書きはじめ、どっかの新人賞を一回とり、本にもなった。しかしその後パッとせず、生活にも困り、河合塾の講師になった。そんな「輝かしき新左翼」のプライドがあるのに今年は「右翼」の側に入れられた。かわいそうに。「まア、右に入れられても仕方ない。天皇制だけは反対ですけど…」という。

それに大状況の問題は討論しない。もっと身近なことだ。若者の理想、生きがい、家庭…といった問題を中心に討論した。このテーマなら宮崎さんはやはりアーナキーで反体制派だ。今は独身だが過去3回結婚し、子供も6、7人いる。慰謝料、養育費も日々払わなくてはならない。「そのために本を出しまくっているんだ。印税は全て昔の女房、子供の為に消えている」と言う。かわいそうなような、うらやましいような。宮崎さんは別れた「家族たち」はいるが、「家庭」はない。「愛人は5人いる」と冗談めかして言ってたが。一方の松原さんはマイホームパパだ。この日も午前中は子供の運動会にいきホームビデオでとってきたという。それで打ち合せに遅れてきた。

今回のテーマは「不屈の中年犯罪者から屈折の少年犯罪者へ」。だから当然、少年犯罪が中心テーマだし、少年法改正をどうすべきかも話し合われた。宮崎さんは「改正なんて必要ない」という。松原さんは、「大人と同じに扱え。少年法を改正しろ」と言う。だからこの少年法問題に関しては〈左右〉もキチンと成り立つかもしれない。つまり、「少年法をめぐる左右の激突」といったかんじだった。

女の子が聞いていたが、「宮崎さんは国家も、国旗、国歌も必要ないというけど、それはテレビじゃないですか」と。なかなか鋭いところを衝いている。僕もそう思った。そうだ。今はもう〈左翼〉はないんだろう。この世の中を認めた上で、さて、具体的な問題ではどこを変えてゆこうか、という。これなら〈右・右〉対決ではないのか。「左右激突」から「右右対決」への過渡期世界観が今年の討論会かなと思った。

この討論会に来る時、塩見さんを病院に見舞ったら、「裏切り者め!」といわれた。自分だけ司会で復帰するなんて卑怯だという。「あくまで二人の原状回復。こ

れこそが我々の要求ではないか! 鈴木君の妥協は許せない」と言う。だからそれを要求する為にも今回の過渡期を乗り切らなくちゃならない。僕がもらう旅費、ホテル代、謝礼は、全て塩見さんにあげるから来て下さいよと、言ったのに…。ダメだった。来てくれたなら壇上に上げて、そのまま「居住権」を主張して、〈原状回復〉をしようと思ったのに。どうしても「屈辱の中年犯罪者」にはなりたくないという。10月1日は、まずそのことを報告した。「そんなことを考えてたんですか、まいったな」と松原さんはあきれていた。しかし、宮崎さんは「獄中20年」の塩見さんをメチャクチャにこきおろしていた。聞いててかわいそうだった。携帯で電話して、「電話参加」してもらおうかと思ったが、これもダメだった。

あと、当日の様子はIWAIさんや立花さんが詳しく書いてくれるだろう。神楽坂さんも楽しみにしてるので、ぜひ、長い報告を書いて下さいよ。IWAIさんは、「鈴木さんは司会じゃなく、主賓としてコメントして下さい」と言ってくれてるが、来年はもうないでしょう。宮崎・松原の二人にはとても太刀打ちできません。大体、僕は多勢の前でしゃべることは出来ないんだな、と痛感した。「屈折、屈辱の自虐中年」ですよ。生徒のアンケートを見ても「司会はいらん」「役不足」「ひっこめ」「死ね」といったものばかり。読んでいて泣けてきたよね。こっちは真面目にやってたのに。喧嘩腰でパフォーマンスをやれば「面白い」「いい企画だ」とい、冷静に話し合おうとすると、「おもろない」「やめろ」だもんな。いやになる。

大体、僕はSPA!の連載でもそうだけど100人読者がいたら、理解してくれるのは5人か6人だろう。それでも5、6人が長く読んでくれるから打ち切りにならないで続いているんだろう。とても100人全員に読ませる力はない。

これは講演会でもそうだ。宮崎さんは全員が知ってるし、話も面白いから、全員を楽しませることが出来る。松原さんだって話がメチャうまいし、力業(ちからわざ)で皆を笑わせ、感動させることができる。その点、僕は知名度もないし、話術もない。300人集まったけど、「来てよかった。聞いてよかった」と思ったのはIWAIさんと立花健治さんと、もう一人、「創」を読んでるといったおじさんの三人だけだよ。300人のうちの3人か。「支持者」はたったの1%だ。あとは「つまんな」「普通のことしか言えんのかバカ」「もう来んな」だもんな。まア、匿名のアンケートだからといって、こりゃないだろうよ。深く傷ついたね。だから来年はないよ。主賓でも、司会でも、ないよ。

今年は何やら、「貝殻追放」されたような感じだったな。「貝殻追放」って昔、世界史の時間に習ったよな。それを、何十年ぶりかにフツと思い出した。アーア、暗い。生きていてゴメンナサイ。

(1)さて、話かわって、赤坂は「冤罪事件」に巻き込まれてるそうだ。電車で若い男にチカンして逮捕されたらしい。「冤罪だ」といってるけど、「赤坂ならやりなねない」と皆に言われてるらしい。かわいそうに。エッ、違うの。じゃ、どういうこと? まア、僕同様、傷心の赤坂をこれ以上いじめないように。「ゆあつ式」なんて言って、からかわないように。でも「処女歴50年だし、だからきっと固いだろう

し」「何が固いの」「だから男に対するガードが固いんだよ。それを打ち破るには、ギチギチとねじり込むようにしなくちゃダメでしょう」「だから、ネジ式なのかよ」という会話が風見さんとの間に交わされたようだ。だったら、「ゆあつ式」よりも「ネジ式」の方がピッタリかもしれない。

(2)秋田県の富山さん。「片手でどこでも本を読めるマシーン」ありがとうございました。又、ほたるイカ、ありがとうございました。とてもおいしゅうございました。気がついたら全部食べていました。そしたら手紙が出てきた。「ほたるイカは赤坂さんにも分けてください」。ゲッ、もう手おくれだよ。赤坂ゴメン、ゴメン。こんど「ネジ式」をプレゼントするからよ。

(3)「ネジ式」といえば、通販生活の方から『つげ義春アンコール劇場』という本を送ってもらった。何と、通販生活で出したんですね。この本。5年前に。これは貴重です。ありがとうございました。HPもいいもんですね。

(4)そうだ。又、赤坂の話に戻る。「冤罪事件」の渦中にある赤坂は、なんとか復讐したいといっている。ワラ人形を作ってクギを打つのが一番効果があるんで教えてやった。でも、これは自分にもリアクションがあるので気をつけるように。そうだ、図書刊行会で出している「書物の王国」シリーズが完結した。今まで「夢」「両性具有」「妖怪」…と出てたし、人気シリーズで結構売れていた。僕も全部読んだ。そして最後に出たのが決定版で、「復讐」だ。これは赤坂の為に出たようなもんだ。本屋でバイトしてんだから、万引きして読んでみろよ。これは勉強になるね。「火曜サスペンス劇場」や「土曜ワイド劇場」よりも為になる。役に立つ。特に「牝猫」というのがよかった。ストーカーという作家が書いたんだ。ほんで、この人もストーカーなのかな。でも、アイルランドの小説家で、「ドラキュラ」を書いた人だという。じゃ、有名な人だ。この人にちなんで「ストーカー」という言葉が出来たのかな。まさかね。ちゃんと調べてみろよ、赤坂。おまえさんの為に苦労してんだから、おいらは。この小説は、未婚、未通の年増猫が人間に復讐する話なんだけど、思わずゾゾーッとするね。ウーン、こんなこともありうる、と思わせる。だからこれを見習ってやつたらいい。ぜったい確実だ。成功するよ。でも、その前に猫にならなくっちゃね。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張10月16日

阿部勉氏の一周年忌で角館に行ってきた。

秋田県の角館に行ってきた。阿部勉氏の一周年忌法要だ。東京からだけでも40人ほどが行った。他に茨城、札幌、栃木…と全国から友人が集まつた。「楯の会」の仲間もいたし秋田の同級生もいた。100人以上の法要になつた。10月8日(日)午前11時から角館町の龍願寺で行われた。

阿部勉氏のことは「SPA!」や「創」「レコンキスタ」で書いたが、学生運動の時からの仲間だ。年は僕より3才下だ。角館の神童といわれ、高校で成績はトップ。東大と早稲田を受けて、現役で早稲田の法学部に入った。全共闘の暴力支配に反撥し、日学同(日本学生同盟)に入る。さらに三島由紀夫の「楯の会」に入る。

昭和45年4月に僕は産経新聞社に入社するが、その時、高田馬場の阿部勉氏のアパートに居候していた。そして同年11月25日、三島事件が起こる。阿部氏のアパートは「楯の会」の事務所も兼ねていたから大変だった。

それから数ヶ月後、阿部氏は恵比寿に転居した。さらに下北沢に移る。その頃、「月に一度位、昔の仲間が集まって勉強しよう」と阿部氏が提唱し、「一水会」が出来た。一水会という名前は阿部氏が付けた。彼の恵比寿、下北沢のアパートが一水会の事務所になった。だから本当は一水会の代表は阿部氏なのだ。でも、5人の世話人制にし、「郷土の先輩だから」と僕を立ててくれたので、いつの間にか僕が一水会の代表になったのだ。そして去年の12月まで代表を続けた。

「郷土の先輩」といったが、僕も秋田出身だ。「いや、福島出身じゃないか」と言う人もいるだろうが、福島県郡山市は実は生まれただけだ。親父が税務署に勤めていたので東北地方を転々とした。幼稚園と小学校1年は秋田県の横手市、2、3年は秋田市、4年から中学2年までは湯沢市にいた。だから秋田が僕の郷里なのだ。ちなみに中学3年と高校は仙台だ。それから早稲田に入る。

学生時代の阿部氏は、明るくて、さわやかだった。中学、高校時代は野球部にいたというスポーツ青年だった。いい男だった。コーラのホームサイズをらっぱ飲みしていた。阿部氏と話してると、つい秋田弁が出たりした。「んだ」「んでねつと」と喋ってると他の仲間に「ロシア語ですか」とひやかされた。実は秋田弁とロシア語は似ている。「んだ」(そうです)はロシア語で「ダ」(だ)という。「んでねつと」(ちがいます)は「ニエット」(ちがいます)という。だから、「秋田弁・ロシア語同祖論」が言われるほどだ。それに阿部氏は色が白くて、ほりの深い顔をしていて、白系ロシア人の末裔ではないかとも言われていた。

子供時代はどんな顔をしていたのかなとふと思った。それで法要が終わって、夜、阿部氏の実家にお邪魔した。お父さんはずっと前に亡くなつて、お母さんは入院中。家にはお兄さん夫妻と子供たちがいる。子供時代からの写真がアルバムに整理されていた。生まれた時から、あのままだった。小学校の写真でも、すぐに分かる。利発な子は昔から顔つきが違うのだ。

小学校の写真をみて驚いた。子供たちがゲタばきなのだ。いや靴の人もいたか

な。それに二人ほど着物をきている。まるで「おしん」の世界だ。僕の小学校の時の写真を見るとやはりゲタの人もいる。でも、着物の人はいない。阿部氏の方が若いのに、変だ。僕は秋田市・横手市・湯沢市の学校だが、阿部氏は角館町だ。市と町の違いなのかもしれない。

中学、高校では野球部。高校ではキャプテンをやっていたという。成績はトップでスポーツマン、当然、女にはもてた。死ぬまでもてた。でも、「女なんか」と取り合わなかった、高校時代は。大学時代は学生運動ばっかりで、女性との交際はない。大学を出たら、それなりに付き合っていたようだ。

そうだ、阿部氏はもの凄く字がうまかった。キッチンと習字を習った字だと思った。お兄さんに聞いたら、小学校から習っていたという。エッ、僕も小学校の時は習字を習っていたのに、ものにならなかった。親父がうまくて、その血筋は弟にいった。弟は習字をやらないのに、生まれながらにして字がうまかった。だから学校に出すものはよく弟に頼んで代筆してもらった。屈辱的な話だ。自虐的少年時代だ。

「あっ、勉さんは母親に似たんですよ」とお兄さんのお嫁さんが言う。「お母さんの字とそっくりです」と言う。お母さんは学校の先生で、習字も教えていたという。だから阿部氏にも教えたんだろう。うらやましい。高田馬場で阿部氏と住んでた時、時間があると正座して読書してたし、又、時々、習字をやっていた。日曜日など近所のスナックのおねえちゃん達を集めて習字を教えていた。あの時の光景は今でもおぼえている。「俺にも教えてくれよ」といえばよかったんだが、「後輩にそんなこと言えるか」と思ったんでしょうね。プライドがあったんですよ。それに、「まア、いつか教えてもらおう」と、のんびり構えてたんですね。こんなに若くして亡くなるとは思わないから。勉強は思い立った時やらなくてはダメですね。

角館で法事が終わって直会の時、親類の女の子(当時は「女の子」だった)が、「実は私、勉さんに家庭教師をしてもらったんです」と言ってた。「一体、何を教えてたんだ、あいつは」「スケベ」…と、およそ法事らしからぬ野次が飛ぶ。

彼女は中学生で、阿部氏は早大にはいったばかり。休みで帰省するたびに、英語、国語、社会を教えてくれたという。社会の教科書を見て、「これは皆、ウソだよ」と教わった。唐十郎の『右翼と少女』を読めともいわれた。読んだが、中学生だから、さっぱり分からない。帰るたびに、今、東京では凄いことがおきてると、興奮して話す。三島のこと、革命のこと、吉本隆明のこと、高橋和己のこと…。でも田舎の中学生にはチンパンカンパン。家庭教師をつけたのにかえって成績は下がった。

でもいい話だと思った。東京での経験を話したくて仕方がないんだろう。分かる、分かる。僕らだって大学に入った時はそうだった。若かった。青かった。一途でしたよ。でも大学を出て、右翼になってからは阿部氏は、〈浪人〉的な生き方だった。普通は浪人を経て大学生になるのだが、彼は大学を出てから素浪人になった。一度も就職せず、一度も結婚せず。あっ、結婚はしたか。でも別れた。子供は三人いて、みな立派に育っている。長男は去年結婚し、もうすぐ子供が生まれる。

そうしたら阿部氏も「お爺さん」だったのに。みんなに、「爺や」と呼ばれただろうに。

阿部氏は酒が強かったし、女性にもてた。晩年の阿部氏しか知らない人は、だから不幸だと思う。僕は学生時代の、努力家、勉強家の彼を見ている。難しい古文、漢文もスラスラ読んでたし、文章も実にうまかった。「レコンキスタ」にも二、三度は書いてたが、本当に名文だ。だからもったいないと思った。大学教授になるか、作家になって、もっと広い世界で活躍してほしかったと思う。だから、法事の後、そんなことを僕は話した。しかし東京からきた右翼の人たちに野次り倒された。「阿部氏の才能、学識は狭い世界に埋れさせるにはもったいなかった(俺達が狭い世界か!と野次)。もっと広い世界で大活躍してほしかった。たとえば大学教授になるとか(大学教授が何ぼのもんじゃ!と野次)、小説家になるとか(小説家が偉いのか!と野次)、…」僕は野次り倒されて早々に挨拶をやめた。河合塾の「左右激突」みたいだ。ちょっと喋るとすぐに論破されちゃうよ。ロフトプラスワンも、「面白くない」というので追放されてしまったし…。いいさ、一人で本を読んでよう。

あっ、掲示板では、「左右激突」について、いろいろ、なぐさめてもらいありがとうございました。うれしゅうございました。最近、「掲示板」が活発になってきたようでいいですよね。乾君の昔の友人も出てきたりして…。(桜田淳子は芸能界にカムバックするんですか、統一教会をやめるんですか?)僕の昔の友人は出てこないね。50以上だとパソコンもワープロも使えないんだよな、きっと。掲示板を見て、「よしがんばろう」「よし、この本を読もう」と、元気になり、刺激になるものにしましょうよ、僕も「カキコ」しますから。(ウツ、カキコなんて初めて使った。感激だ)。それにしても、ポンポンとキーボードを打つてると文章が子供っぽくなっちゃうな。気をつけないと。

又、角館の話に戻る。二次会、三次会とやってそこで泊まり、翌日、帰京した。駅でボーッとしてたら、売店に名菓「乳頭の夢」というのがあった。なんだ、これは。いやらしいなと思って、思わず買ってしまった。乳房の形をしてるんだ。成人指定のお菓子だ(そんなことないか)。何でも田沢湖のそばに乳頭山というのがあって、そこにちなんでこのお菓子が売られてるそうだ。山は乳頭の形をしてるのだろう。来年、三周忌に来た時に登ってみよう。それに阿部氏の文章はいくつかあるので探してみて、自分でまとめてみようかなと思った。他人が書く「追悼集」よりもずっといいだろう。と思いながら、乳頭饅頭をつまんで食べた。ひとつ、ふたつ、と。一人で全部食べ終わった頃に東京に着いた。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張10月23日

今週は気分一新、音楽の話だ

これは僕の中の〈革命〉だった。音楽とはこういうものかと、初めて分かった。音楽について僕は何も知らなかったんだと思った。感激した。感動した。こんなふうに音楽を教えてくれた人は誰もいなかった。いや、今の日本の作曲家や音楽の先生でもいないだろう。レナード・バーンスタインの「ヤング・ピープルズ・コンサート」全25巻を見終わったのだ。中野図書館から1巻づつ借りて見たのだから、4ヶ月近くかかってしまった。ビデオは1回で1本しか借りれない。CDやカセットテープは3本、本は7冊も借りられるのに。

でも中野図書館のビデオは多分日本一だ。特に文学や音楽に関しては凄い。前はオペラをずっと借りて見てたが、ある日このバーンスタインのビデオが目に止まった。「ウエストサイド物語」の作曲家にして、指揮者だ。その位の知識しかない。でも音楽について〈講義〉してるらしい。それも子供を集め、オーケストラ(ニューヨーク・フィルハーモニック)を従えて、講義をするという。子供向けだったら僕にでも分かるかなと思った。音楽の歴史や、民族性、クラシックと現代音楽はどう違うのか、等々について話すのだろう。自分の全く知らない世界だから、かえって勉強になるだろう。音楽に対する考え方も変わるかもしれないし、本業の〈物書き〉の参考になるかもしれない。よし、これも勉強だと思って第1巻、「音楽って何?」を借りた。驚いた。とても分かりやすい。そして、とても内容が高度なのだ。小学生位の子供たちが会場一杯につけかけている。親もいる。彼らに向かって、「音楽が表現する物語はなにか」「物語のない、絶対音楽とはこういうものだ」とオーケストラを指揮し、世界の名曲を紹介しながら解説する。こんな高度な、質の高い、密度の濃い授業は日本の大学でもない。分かりやすい言葉で、バーンスタインは解説するが、決して子供に妥協しない。楽しんでる子供もいるし、目を輝かせている子供もいる。又、「ついて行けないよ」「子供だからそんなこと分からなくてもいいんだ」といった顔をして、キヨロキヨロ回りを見たりしてる子供もいる。それをちゃんとカメラは映し出している。凄い。

第2巻は「アメリカ音楽って何?」。つまり音楽の中に〈民族性〉が出るのは何故かという極めて思想的な問いかけだ。基本的には民族や国家の言語の違いが音楽に表われる。言葉が違うから音楽が違う。言葉の強弱、アクセント、のばし方、早さ…それが詩に表われ、音楽に表われる。イタリア語は母音の美しさが特徴だし、スペイン語は子音を重視する。フランス語は抑揚がない。ドイツ語は重く、質実で、力強い。時として尊大だ。では英語を基盤にしながら、なぜ、イギリス音楽、アメリカ音楽は違うのか。まず、〈英語〉といっても微妙に違う。イギリス英語は舌の回転が早いし明瞭だ。アメリカ英語は西部のようにのんびりとしていて音をひきずる。その違いが音楽の違いになる。さらに歴史や風土や、独立、革命に対する考え方の差が出る。思想が出るのだ。そんな難しい内容を、でも分かりやすい言葉で話し、実例(音楽)をふんだんに紹介しながら話してくれる。1巻は1時間だ。どれ

もこれも初めて聞くばかりだし、カルチャー・ショックだった。

第3巻は「オーケストレーションって何?」。第4巻は「交響曲はどのように作られる」。第5巻「古典派音楽って何?」。以下こう続く。「音楽の中のユーモア」「協奏曲って何?」「コンサートホールの中の民族音楽」「印象主義って何?」「メロディって何?」「ソナタ形式って何?」「シベリウスを讀えて」。

そして第17巻が「音楽の原子--音程を学ぼう」だ。ちょっとこの話をしよう。音楽を作るのは個々の音ではない。音程が音楽を作るのである。個々の音を長くひっぱっても音楽にならない。2音、3音と集まり、その緊張関係が音楽になる。つまり、音と音との間のインターバルが音程で、これがあるから音楽になる。1つの音だけだと(物質の世界の)陽子や電子のようなものだ。陽子や電子が寄り集まり、結びついて原子になる。これと同じことだ。ウツ凄い説明だ。これを小学生相手にやるんだ。アメリカの小学生は何て優秀なんだろうと思った。いや、こんな素晴らしい講義を受けられて何て幸せなんだろうと思った。これを受講する為にだけでもアメリカ人になる価値はある。

でも、これは今のビデオではない。昔のビデオだ。何と、1958年から72年までテレビ・シリーズとして放映されたものなのだ。42年前に始まったのだ。その当時、僕なんて中学2年生だ。音楽なんて島倉千代子と三橋美智也しか知らなかつた。Oh! 何という貧しい音楽体験。それに中学の音楽の時間は、日本のどうでもいいような曲しか教えてくれなかつた。いや、「生の音楽」はなかつた。バッハ、ヘンデル、シューマンとか作曲家の名前と作品をただ暗記させられただけだつた。

「クラシックの作曲家を5人あげなさい」という下らない試験問題もあつた。だから、「ババア、屁出る、はいドン、ブー」と覚えた。下品だね。バッハ、ハイドン、ヘンデルだ。でも最後のブーは誰だ。ブーシキンは作曲家じゃないし、ブーチンは今の露大統領だ。同じ42年前でもアメリカと日本のこの違い! 文化的の違い! 学校教育の違い! これじゃ日本も戦争に負けるわけだ。

あつ、これは戦後か。でも、戦前といえばウォルト・ディズニーの「ファンタジア」を皆さん、見てますよね。僕は10回も見たし、ビデオも買った。ディズニーの中では最高傑作だと思う。「魔法使いの弟子」の話なんて感動して何回か、いろんなところに書いた。文句なしに素晴らしい。それにこれは戦前に作られたものだ。日本の政治家や軍人でも見てた人がいたんだ。山本五十六も見て、「こんなすごい映画を作れる国と闘って勝てるわけはない。どうしてもやれと言われば1年か1年半は闘うが、それ以上は無理だ」と言った。アメリカの音楽映画一つとっても力の差、文化の差は歴然としてるのに、「座して死を待つよりは」と勝ち目のない戦争に突っ走った。愚かだ。

「ファンタジア」は今年、「ファンタジア2000」として甦り、新宿のアイマック・シアターで見た。普通のスクリーンの十倍位はある(もっとあるのかな)大画面で見て、圧倒された。でも、こんな映画のスクリーンを切るのは大変だな、と突然考えた。来週のSPA! から、「ミンボーの女」のスクリーンを切った山崎氏の話を始める。その第1回目をさっき書いてFAXで送ったばかりだ。だから、つい思い出しちゃつたのだ。

では再び、バーンスタインのビデオに戻る。第13巻まで紹介したが、あとは25巻までの中で特に感動したものを書いておこう。「グスタフ・マーラーの魅力」

「ハッピー・バースデー、ストラヴィンスキー!」「ラテンアメリカの精神」「ショスタコーヴィチの誕生日を祝って」「4分の3拍子に乾杯」。そして最後の第25巻が「フィデリオ--命の贊歌」だ。ともかく25巻の全てがいい。自分の住む区の図書館に行って、置いてなかったら、中野区に引っ越した方がいい。それだけの価値のあるビデオだ。

このビデオには小澤征爾の「解説」も付いているが、こう言っている。「…生涯に渡って音楽を愛する心を育てるには、できるだけ早いうちから音楽への関心を育むことが鍵となります。レナード・バーンスタインはまさにそれをやってのける才能をもった人で、彼のやり方には子供を見下すようなところがまったくなく、また常に刺激に富んだものでした」。そしてバーンスタインの次のような言葉も入っている。「ヤング・ピープルズ・コンサートは私の人生の中でも最も気に入り、最も誇りに思っている仕事の1つだ」。仕事の1つだと言ってるが、最も気に入ってるものの中でも最も気に入ってるものだと思うよ(日本語にすると変な表現だが)。

ともかく、こんな凄いのが聞けてアメリカのガキはうらやましいと思った。きちんと生の音楽教育をやり、世界の音楽を教え、民族性が音楽に表われることを教え、その上で〈誇り〉も教えている。日本なんて何も教えなくて、ただ、日の丸・君が代の押しつけだもんな。生徒から見て尊敬できない先生が、「日本に誇りを持って!」と言っても生徒は反撥するよ。「お前が言うんじゃな」と。あっいけない。バーンスタインに感動する余り、又もや「親米・反日」的になってしまった。自己批判しなくっちゃ。

でも、日本の音楽教育も考え直さないと。中学では暗記だけだったし、高校ではどうだったかな。ミッションだから毎朝、賛美歌を歌ってたな。あれはいい音楽教育だったな。今でも思い出して歌っている。カラオケには何故、賛美歌がないんだろう。そうだ、皆で抗議運動をしよう。「全国のミッション出身者は団結せよ!」。

そうだ、高校では選択で音楽をとってたんだ。さすがに暗記ではなく、クラシックを聞かせていた。でも、〈歌詞〉がないから意味が分からんのよ。当時の僕らは。ある日、シーベルトの「冬の旅」をかけながら田口先生が、「これはこういう場面なんですよ」と解説してくれる。へエー、〈物語〉になってるのかと初めて知って驚いた。だったら、ちゃんと教えてくれよと思った。でも〈物語〉のない絶対音楽があると知ったのは、かなり後だった。

そして最近になって突如、音楽について目覚めてきた。東中野図書館で小泉文夫の「民族音楽」(全16巻)を借りて聞いた。NHKの「名曲アルバム」を20巻買った。又、メメちゃんからオペラのビデオ40本を借りて見た。今まででは、世界の有名なオペラをほとんど知らなかったのだ。何というアホな私。「カルメン」がこんな話だとは知らなかった。ピンクレディの「カルメン」と、カルメン・マキそれにカルメン焼きしか知らなかった。(えっ、「カルメン焼き」だって? でも省略してそうなったんだろうよ)。「椿姫」も「魔笛」も、「アイーダ」も初めて見た。と長くなつたの

で、「オペラ挑戦編」は次号で。そうだ、「オペラ開眼」は、メメちゃんのビデオの前に、5年前、「日本ワグナー協会」の青年が一水会現代講座に来ていて、彼から少しづつ教えてもらったんだ。その話も含めて、次回に。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張10月30日 だから皆もオペラを観て!

5年ほど前、中西君という青年が一水会現代講座によく来ていた。「日本ワグナー協会」に入っているとのことで、ワグナーのことをよく話していた。講座が終わった後の飲み会でも、音楽が好きな人同士で話していた。右翼・民族派の人にはワグナー好きが多い。街宣車でワグナーを流している団体もある。

その頃、「ベルリン・ドイツ・オペラ」が日本に来た。ワグナーだけの作品を5つ位上演するという。「これはもう二度と見れませんよ。〈歴史〉に出会えるんです。どんなことをしても見るべきです」と中西君はいう。僕はオペラなんて見たことはない。何か暗そうだし、客も高尚というか、オツにすましているようだ。ワグナーの曲だって、プロレスラーの藤原喜明が入場の時に「ワルキューレの騎行」だったかな、あれをかけて出てくる。それで、あっ、ワグナーもいいもんだなと思ってる位だ。

「いや、面白いですよ。それに〈物語り〉も壮大で楽しめますよ。字幕スーパーがつくから言葉だって大丈夫です」と言う。「ただし、安いチケットから早く売れちゃうので今は高い席しかないでしょうが」という。「高いって1万円位?」「いや、3万とか5万です」。ゲッ、そんなに高いのか。「いや、それほどの価値はありますよ」と力説する。だったら君が金を出してくれよと思ったが気が弱い僕としては言えない。

迷いに迷ったが、3本見た。上野の東京文化会館と渋谷のNHKホールだった。1回が3万円だから、計9万円だ。よくそんな大金を持っていたと思うが、「ドロボーしてでも見るべきです」と中西君が言うので、きっとドロボーして金を作ったのだろう。「ニュールンベルグのマイスター・ジンガー」と、「ローエングリン」を観た。これがオペラかと圧倒され、感動して見た。あっ三本見たといったな。もう一本は何だったろう。「タンホイザー」だったかな、「トリスタンとイゾルデ」だったかな。いや、「ニュールンベルグの指環」だったかな。何せ、このあと、中野図書館からビデオを借り、めめちゃんからも借り、計50本ほどのオペラビデオを見まくった。だから、ゴチャゴチャになっているのだ。そうだ、とここで思い出した。「バルジファル」だった。

でも、長いんですよね。オペラって。休憩時間を入れて5時間か6時間もある。休憩の時はロビーでワインを飲むのが〈通〉なんだ。僕は通じゃないし酒も嫌いだから飲まなかった。作曲家の三枝成章さんに会った。「おっ、いいことですよ鈴木さん。どんどん観たらいいでしょう。人間が大きく豊かになりますよ。ひいては、これから運動や著作にも役立ちますよ」という。そして作品について色々と解説してくれた。とても勉強になった。

中西君にも何回か会った。「終わったら軽くやりましょうよ」と言うので付いて行ったら居酒屋で焼酎だった。ワグナリアン(というのかな。ワグナー好きの人だよ)は皆、ワインを飲むと思ってたのに。それにしても、これほど付いて行けない話

もなかったな。6人ほどいたが、皆、詳しいし、話が専門的だ。

ともかく、これをキッカケにして、クラシックの音楽会やオペラなどにも行くようになった。佐川一政さん(作家)もクラシックが好きで、よくコンサートに誘われた。弟さんが音楽をやっていて、オーチャード・ホール(テレビ朝日の隣にある)で何回か聴いた。なかなかよかったです。

そして決定的だったのは中野図書館とめめちゃんだ。先週書いたように中野図書館のビデオ、レーザーディスクは凄い。美術、音楽、文学とあって、いくら見ても見つくれない。その頃、めめちゃんと知り合った。

オペラのビデオをかなり持ってるという。あっ、一水会の20周年大会で会ったんだった。「じゃ、私の持ってるオペラのリストを書いて送るわ。見たいのを言ってくれたら貸したげる」という。「でも必ず返してよ。大事なものだから」と心配そうだ。それはキチンとやりますよ。こう見えても几帳面なんだから。今は少々ダラシなくなったけど、生学連書記長の時は「事務の鈴木」といわれてた位ですから、と言った。学生時代の話をしても仕方ないんだが、めめちゃんのリストによると30本位持っている。面白そうなのを6本注文した。注文したというのは変か、レンタルビデオ店じゃないし。ともかく、お借りした。あっ、これはこういう話なのかと驚いたものも多かった。ただ、見るのは大変だった。1本の時間が長い。それに1本のビデオに2、3本入ってる。6時間フルに入っている。だから、たった6本見るのに2ヶ月位、かかった。そうだ、字幕つきのオペラだから、集中して見なくてはいけない。他の仕事をしながらじゃダメだ。だから時間もかかる。横になって見ると、そのうち寝込んでしまって、あっいけないと巻き戻して見たりする。普通のビデオだったら早く見れるのに。たとえば「火曜サスペンス劇場」とか、「キスイヤ」なんかだと、家の掃除をしたり、書籍整理をしたりしながらでも見れる。画面に目を向けてなくても、音だけきいていれば十分だ。いい所だけ振り向いて見ればいい。ケシゴム彫刻家のナンシー関さんは仕事がら、いつもテレビを見ている。でも、余り画面は見ないで、いわばラジオとして利用している。ドラマなど、目の不自由な人のために副音声っていうのかな、情報を説明してくれる、あれにして聞いてるという。普通に見ると「あっ、男が部屋を出ていった」と分かるが、副音声では、「その時、男は疑わしそうな顔で出ていった」なんて説明してくれる。(その説明でかえって犯人が分かったりして困るんだが)。ナンシーさんはテレビを見ながら(いや、聞きながら)、せっせと机に向かって消しゴム彫刻をしてるんだ。そして、何かニュースがあって、あっこれは描いとかなくちゃと思った時にテレビを見て、顔のデッサンをする。そしてあとで彫る。いろんな人の顔を彫っている。「天皇陛下の顔もあるんですよ」と見せてくれた。「でも右翼に襲われないかしら。あっ目の前にいたわね」と言う。でも、ナンシーさんを襲って勝てる右翼なんていないよ。一水会にも来てくれたことがある。脚本家志望の関口和広君も来ていた。「こいつは"オナニー関"って言われてるんですよ」と誰かが紹介したら、「ゲッ、やめてくれよ!」といってた。ナンシーさんことを言ったんじゃないからいいだろうがと思ったが、まぎらわしくて、いやらしい名前を聞いて不愉快になつたらしい。

さて話は再び、高尚なオペラに戻る。めめちゃん所蔵のビデオは結局、全部見せてもらった。さらに中野図書館からも借りて見まくった。今思い出せるのは以下だ。「フィガロの結婚」「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」「セビリアの理髪師」「さまよえるオランダ人」「リゴレット」「椿姫」「アイーダ」「オテロ」「トスカ」「蝶々夫人」「トゥーランドット」「サロメ」「ばらの騎士」…等々だ。

楽しみで見たんだが、中には〈義務〉も〈ノルマ〉もあった。〈忍耐〉もあった。それを通してはじめて、あっこんな面白い話だったのかなと分かったもののが多かった。三島由紀夫もワグナーが好きだった。あの衝撃的な映画「憂国」もバックに流れるのはワグナーの「トリスタンとイゾルデ」だ。純日本風の映画なのにワグナーとは変だという人もいるが、ここはワグナーしかないだろう。三島は「憂国」で青年将校に扮して切腹をする。この〈体験〉が実は1970年の三島決起・切腹の遠因になった。そう言う人が多い。遠因じゃない、直接のキッカケになったという人もいる。「いや、問題を解く鍵はバックに流れていたワグナーなんですよ」と西岡昌紀さんは言う。これを聞いて驚いた。

西岡さんはお医者さんで、以前、「マルコポーロ」に「ナチ・ガス室はなかつた」を書いて大騒ぎになった中心人物だ。これで「マルコポーロ」は廃刊になった。「ガス室」についてはロフトで西岡さんと話したこともあるが、今はちょっとおいておく。「憂国」のバックに流れる「トリスタンとイゾルデ」の話だ。岩波文庫でも出てるが、お話は悲恋物語だし、忍ぶ恋だし、最後では二人とも死んでしまう。「三島さんはこの小説を読み、このオペラを見、それで『憂国』を書き、映画にしたんでしょう」と言う。アッと思った。そういう面もあるだろう。僕らはともすれば2.26事件への傾斜という点からだけ見てしまう。これではいけない、西岡さんの指摘に、驚き、かつ反省した。

だから皆さんぜひ、このビデオを見てそのあとで「憂国」を見たらいい。印象も代わるだろう。そうだ、来年も「都民力レッジ」で授業をやることになった。今年は「ナショナリズムの歴史と功罪」と題してやったが、来年は「三島由紀夫を読む」と題してやろうと思っている。「憂国」や「人斬り」や「東大全共闘との討論」それに「トリスタンとイゾルデ」のビデオを見ながら、同時に「奔馬」「金閣寺」「鏡子の家」などを読むんですよ。まア、計画は壮大なんですが、実際にはどうなりますか。

お知らせが2つ。10月19日、野村秋介さん追悼の「群青忌」が行われました。鳥肌実も来ました。初めて会い、いろいろ話しました。会場で「大悲ジャーナル」(10月号)が販売されてました。「野村秋介追悼特集号」です。僕も書いてます。「『反共右翼からの脱却』の対談の真相」です。22人の人が書いていて、実際に読みごたえがあります。横浜市南区六ツ川3の27の34 二十一世紀書院
TEL 045(731)2291 までお申し込みを。1部千円です。

11月24日(金)6時半から高田馬場シチズンプラザで「野分祭」です。今年は三島・森田自決から30年です。翌25日は憂国忌が行われます。又、30年にちなんで三島関係の出版、特集がかなり出る予定です。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張11月6日

文庫版「夕刻のコペルニクス2」が出た!

不思議だ。奇妙だ。世にも奇妙な物語だ。10月26日(木)の夜中、FAXがコトコト鳴った。1時頃だったから、もう27日(金)なのか。又、嫌がらせのFAXかなと思ったら、元赤坂からだった。ああ、やっぱり。25日(水)に「A」を見に行こうと誘われたのにスッポかしたから抗議だ。「我々美女三人が誘ってるのに断るとは許せない。誰もお前なんかともう遊んでやんないぞ」と。あるいは、秋田県の富山さんからもらった干物のホタルイ力を一人で食ったから怒ってるんだ。それに、大槻ケンヂのビデオも送ってないし。じゃ面倒だ、いっそSPA!で謝罪しようか。ここ2ヶ月位、「謝罪」してないから淋しい。又、「謝罪文」を書きたくてウズウズしている。

…と思ったら、違っていた。元赤坂からのFAXは抗議ではなく、礼状だったのだ。なにに。「文庫版の『夕刻のコペルニクス2巻』届きました! ありがとうございます! 車内吊り広告にも宣伝で出てましたね。掲示板にも書いておきました」エッと思った。だって、僕だって

まだもらってなかったからだ。10月31日(火)書店発売で、27日(金)に本は出来るという。扶桑社の書籍部の人が言うんだ。「だから鈴木さんに届くのは28日(土)か29日(日)になります。献本リストに載った人たちにもその頃、着きます」と言う。この本を作るのにお世話になった人や、宣伝してくれそうな人は「献本リスト」に書いて送った。HPの爺や(現管理人)や元赤坂(元管理人)もリストにいれた。でも誰もまだ届いてない。大体、扶桑社に聞いたら、まだ発送していないという。それなのに26日(木)の夜に届いたといって、元赤坂から喜びのFAXなのだ。何が何だか分からなくなってしまった。奇妙だ。不思議だ。もしかして、「狂言」なのだろうか。でも、こんなことで狂言しても仕方がない。

元赤坂は「掲示板にも書いておきました」と言っているので、パソコンで掲示板を開いてみた。キギ、ギギギーッ(掲示板を開く音。最近、宮沢賢治ばかり読んでるんで、つい擬音語、擬態語が出てくる。これを「オノマトペ」と言うんだよね。オナペツトに似ていて、いやらしいね。賢治さんもそう思わなかつたのでせうか。でも、何故、賢治の文にはオナペツトじゃない、オノマトペが多いのでしょうか。井上ひさしが秘密を解明してました。つまり文章が長くなると、最後に来る動詞が何を受け、何を表わしてるので分からなくなる。意味も薄れる。だから、動詞を強調するために付けるんだという。主語と動詞を近くにおけばいいのに、はじめに主語を出し、ずーっときて、やっと動詞がくると、文の流れが分からなくなる。最後にきて、「吹いた」といわれても、印象が薄い。だから、「ゴーゴー、ビュービューと吹いた」と「吹いた」を強調するために、つけるんだって)

なんかやたらとカッコの中の文章が長くなつたな。そうだ、元赤坂の掲示板を見たんだよ。「『夕刻のコペルニクス』2巻、もう読んだ?」という脳天気なタイトル。読んでるわきやねえだろ。発売されてないし、著者の僕だってまだ読んでな

いんだ。お前さんにだってまだ送ってないんだ。でも、本人は読んだと主張している。「今週の主張」だ。「解説は吳智英さんで、よど号の田中さん、柳美里さんのサイン会事件、ビートたけしさんとの対談…と盛りだくさん」とちゃんと紹介している。じゃ、本当に読んだのかな。でも、単行本で読んでいたから、それで書けるのかもしれない。吳智英さんが解説だなんて文庫本を読まないと分からん。やっぱり、元赤坂にだけは時間・空間を超えて、本が一冊、飛んでいったんだろう。何やら感動的な話だ。現代のメルヘンだ。

「一番好きなのは『山下悦子さん』の巻」だと元赤坂は言う。僕もそうです。元赤坂はさらに書いてます。「もともとハイレベルの謝罪率がウリの本連載ですが、山下さんについては、超むかつくけど、書けば抗議されるに決まっているので、先回りして『謝りながら揶揄してやった』そうです。よく思いつくなーと＾＾； 天才といっていいでしょう」

へエー、「天才」ですか。こんな誉め言葉を言われたのは生まれて初めてですよ。うれしいですね。でも『謝りながら…』というのは、まるで僕が喋ったようになってますね。とてもこんな傲慢なことは言いませんよ。こわごわ、ビクビクしながら書いたんですよ。

それにしても山下さんはかわいそうですよね。街を歩いていたらいきなり狂犬にかまれたような、あるいは、いきなり交通事故に会ったような気持ちでしょうね、相手は最初から謝っているから、「謝れ!」とは言えないし、怒りのやり場がないでしょうね。本当にご同情申し上げます。エッ、「お前がやったんじゃないか」って? すんましぇん。ついつい、「一人の読者」になって読んだもんで。それにしてもあれはいい方法でしたよね。又やってみたいな。

10月8日(日)に阿部勉氏の一周忌法要で秋田県角館町に行ってきたと前に書いたよね。その法要の後、直会(なおらい)があったんだけど、秋田市の松田君に言われた。「毎週SPA! を買ってたけど、鈴木さんは謝罪するふりをして相手を徹底的に攻撃、糾弾している。"ユーモアも分からん奴が表現者だなんて言うんじゃねえ、バカヤロー"とそう言ってる。謝罪じゃなく、糾弾だ。罵詈雑言だ」… そ、そんなことはないよ。いつも平身低頭、ひたすら謝っているじゃないか。「心の狭いアホだ。こんな奴らに物を言う資格はない。死んじまえ」なんて思ってもいない。いつも心から謝っている。もう一度きちんと読んでくれよ。怒りをかって単行本、文庫本に入れられなかつたのは多いが、それらを全部入れて、『夕刻のコペルニクス・完全版』を出してはどうかという人もいたが、やめてくれと断つた。昔の『腹腹時計』のように秘密出版したいという人もいたけど、ダメだと言った。

「でも本当は、いつか『謝罪論集』を出したいと考えてるんでしょう」と松田君は言う。宮台真司さんはいろんな本に書いた「解説」を集めて、『援交から革命へ=多面的解説集』(株式会社ワニブックス。1500円)を出している。作家の見沢知廉氏もいつか「解説集」を出そうと思ってるらしい。その手初めに僕の『言論の不自由』(ちくま文庫)に「解説」を書いてくれた。頼まれたのは10枚なのに張り切りすぎて30枚も書いちやつた。近いうちにやっぱり解説集を出すつもりだからだ。でもタイトルはどうすんのかな。うん、これしかないな。『クスリから天皇制へ』。

「鈴木さんも解説集を出したらいいいじゃないですか」と松田君は言うけど、僕は人望がないから、誰からも「解説」を頼まれない。この前、初めて本を出す人がいたので、「解説を書いてあげるよ」と言ったら、「いいです。売れなくなるから」と言う。失敬な奴だ。だったらヤケだ。いつか「鈴木邦男謝罪集」を出してやろう。タイトルは何にしようかな。『自虐のすすめ』がいいかな。それとも『寝技の達人』かな。論争は「立ち技」で、謝罪は「寝技」のようなものだし。あるいは元赤坂の言うように『謝罪の天才』か。5年か10年たって、ほとぼりが冷めてから出すか。それとも、関係者が生きている間はずっとダメなのかな。こういうことには〈時効〉がないもんだろうか。遠藤誠弁護士に聞いてみよう。

そんなわけで、文庫本の『タコペ』2よろしくお願ひします。今年は、単行本はこれで終わりでしょな、「創」に連載した「鈴木邦男主義」の単行本は作業が遅れているようで、この分だと、来年でしょな。文庫本「タコペ」3も来年かな。それと単行本「タコペ」(4)も来年の末に出るでしょ。週刊だから1年で48回。合併号があるから45回位だ。90回分で1冊になるから、2年で1冊の本になる計算だ。担当者に言われて初めて気がついたけど、11月9日(水)発売の号で「夕刻のコペルニクス」が何と300回を迎える! ヘエー、そんなになったのかと驚いた。「もう6年目ですよ。小学校に入った子供がもう中学ですよ」と担当者は言う。よし、じゃ来年からは「中学生編」だ。中学生になった「コペルニクス」がたくましく、どう変わってゆくか、楽しみですね。

あと、11月15日(水)にあの『ザ・ゴルゴ学』(小学館)が出る。これはきっと歴史的資料として価値あるものになるでしょ。今年出るのはこれくらいかな。じゃいいお年を。いや、まだ2ヶ月あったか。

「夕刻のコペルニクス」は、やっと小学校を卒業して来年から中学生だといった。それでなんだろうか。最近、無意識のうちに小学生が主人公の小説を熱中して読んでいた。井上靖「しろばんば」と下村湖人の「次郎物語」だ。ふつうはこんなのは小学か中学で読むんだろうが、その頃は小説なんて読んだことがなかった。だから、今、読んでいるんだ。両方ともなかなか感動的だ。両方ともほとんど自伝らしいが、実にいい。僕なんてこんな波乱に富んだ多感な小学生時代を送ってない。

「今、『しろばんば』を読んでる」と学校で生徒に言ったら、「えっ今頃読んでんの。私は子供の時に読みましたよ」と馬鹿にされた。今だって子供じゃないか。

「それに、続編があるんですよ。知ってた?」と言われ、帰りに馬場の芳林堂に行って探した。本当だ。いっぱいある。「しろばんば」は小学生位だが、それから段々と大きくなって、高校に入って柔道にあけくれ、さらに新聞記者になり…と。作家になるまでの幼年期から青春時代までが何冊にも分けて出てるんだ。とにかく、目につくだけ買ってきて。全部、新潮文庫だけど、こうだ。『幼き日のこと。青春放浪』『あすなろ物語』『夏草冬濤』『北の海』。よし、がんばって読もう。

最近はやたらと本ばかり買ってるな。山本周五郎は勿論だけど、宮城谷昌光の文もうまいなーと思い、集中的に読んでる。塩見さんも宮城谷は好きで読んでると言った。あと、津村節子のものも、まとめて読んでる。その他、中野図書館からは毎週7冊ずつ借りて読んでるし。仕事(学校、原稿書き)以外は一切人と会わない

で本を読んでる。だから、どんどん友達がいなくなる。まあ、今まで、いっぱい会ったからもういいだろう。では来週。来週は「津村節子と赤軍派」です。
「エッ、全く関係ないだろう」だって。いや、あるんですよ、来週のお楽しみだね。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張11月13日

早大第2校歌「人生劇場」の謎が解けた!

今年は三島事件から30年で、いろんな本がドッと出ている。又、雑誌でも三島特集が目立つ。『文学界』(11月号)では石原慎太郎や平野啓一郎などが書いている。今発売中の『諸君』(12月号)では「元全共闘VS元楯の会」という対決座談会をやっている。「SPA!」で僕が取材した本多(旧姓・倉持)清、松浦(旧姓・持丸)博も出ている。「あっここれはSPA!でも言ってたな」というエピソードもあって興味深い。

『論座』(10月号)では岡村青が「30年後の『楯の会』会員たち」を書いている。

「11.25事件の記憶との格闘」とサブタイトルはなっている。田中健一、伊藤好雄、塩田尚、本多清、森田治(必勝の兄)などに話を聞いている。だが、塩田、本多の写真が入れ違っている。朝日新聞社にしては珍しいミスだ。二人ともおじさん顔だからレイアウトをする人が区別がつかなかったんだろうか。田中義三さん(よど号グループ)の娘さんは「鈴木さんとお父さんは顔が似ている」と言ってた。50を過ぎたら思想が違っても顔は似てくる。ましておいておや、同じ思想の「楯の会」なら…。と朝日を弁護しておこう。

ここに又もや元赤坂からカタコト、ギコギコと音を立ててFAXだ。うるさい奴だ。原稿を書き始めると必ずこうして邪魔をする。性悪猫のようだ。

〈申し訳ございませぬ! 朝生、ビデオはおろか、「へー。やってたの」と見ていた人すらおりませなんだ。んー、時代なんでしょうかね。昔は面白かったけどって。役立たずですみません〉

何か変な日本語だな。ワープロばっか使つてると文章が乱れるよ。たまには万年筆で書け。なんだこの小学生の作文みたいなのは、とは言わない。言うと反逆して何を書かれるか分からぬ。最近そんな事件があった(あっ、俺のことだったか。SPA! だったよな)。

なに謝ってんの元赤坂はと思った。あっそうか。ビデオを頼んでたんだ。朝生が北朝鮮問題をやっていた。それを録画し忘れたんだ。「北朝鮮ウォッチャー」としてはこれは押さえておかなくてはと新聞のテレビ欄に丸をつけてたのに。それでも忘れた。ドジだ。でもハッと気付いた。元赤坂ならとてるだろう。「エッ、やつてたの。でも大丈夫。市民運動仲間はきっとチェックしてる。必ずとてるわよ、まかせなさい」と爆乳を叩いた。その時のドンドンという音が受話器を通して聞こえた。ところが、とてる奴はいなかった。だったら初めから「掲示板」に書きやよかった。二重頼みしたら元赤坂は気を悪くすると思ってカキコを遠慮したのに。損した。

それで朝生ビデオは見れずじまい。と思ったら運命の女神はオラを見放さなんだ

(いけない。元赤坂のクセがうつっただよ)。

ある日、内幸町を歩いてたと思いねえ。突然、保険のおばさんに声をかけられた。でも勧誘じゃない。「あら、朝生に出てる鈴木さんじゃない」「人違います。先を急ぐので失礼します」「なに気取ってんのよ。鈴木さんでしょう」「昔出てたけど今は出てません」…という話になった。そこでパッと天の啓示だ。毎月朝生を見てる→保険の人→きっと几帳面→録画してるんじゃ。と、連想が働いた。そして俺らの推理はドンピシャリと当った。「じゃ、ダビングして送るわ。そのかわり」そこで危険を察知して、「はい、そのかわり『タコペ』の文庫(1)(2)を送ります」と言って別れた。で、あとビデオと本を物々交換して、さて、これから見ようかというんですよ。もしかしたらあの保険のおばさんは元赤坂の生まれ変わりかもしれない。「申し訳ない」という気持ちが昂じて変身したのかもしれない。それとも元赤坂の20年後の姿をおいらが見てしまったのだろうか。まるでメルヘンだな。

話は変わる。三島事件、経団連事件のことを書こうと思って山平重樹氏の『ドキュメント新右翼・果てなき夢』(二十一世紀書院。2400円)を読み返していた。これは新右翼の歴史では一番詳しい。全国をまわり100人以上の人々に取材をしたという。経団連事件(1977年)のところを読んでたら、決行前夜、食事をしながら歌をうたったという。ヘエーと思った。経団連事件の参加者は野村秋介、森田忠明、西尾俊一、伊藤好雄の4人だ。このうち西尾、伊藤は早稲田出身だ。だからこの2人が歌ったんだろうと思った。70年の三島事件の時は市ヶ谷の自衛隊に向かう車の中で三島たち5人は「唐獅子牡丹」を歌ったというし、歌は世につれ、決起につれ…だ。

なぜ「人生劇場」の歌が早稲田かというと、この歌は早稲田では「第二校歌」といわれている。早慶戦でも、飲み会でも必ず歌う。第1校歌の「都の西北」よりも多く歌う。別に第2校歌用に作られた歌ではないが早大生は勝手にそう思い、決めてるのだ。なぜなら、尾崎士郎の小説「人生劇場」が早稲田を舞台にした小説だからだ。

俺も学生時代はよく歌ったなと思った。コンパでは必ず硬派の学生が立ち上がり、「これから第二校歌を歌う!」と怒鳴り、まず前口上から始める。それにしても一体、あれは何だったんだろう。「歓楽は女のイノチにして…」とか、「オトメの貞操は異性に供せられ」とか、「哀れメリーは…」とか。へんな言葉を連ねて怒鳴っていた。全く「人生劇場」とは関係のない前口上だ。でも、上体を後ろにそらせながら大声で言うんだ、長々と。そして終わると、「やーると思えば、どこまでやるさ」という歌がやっと始まる。奇妙だった。不思議だった。これは今の早大生も分からんやろ。どうだ掲示板に力キコしている早大出身の神野、それにゴンぎつね、いや、いんば沼きつねだったかな。分かるか?俺が分かんねえんだから分かるわけないよな。それで、中野図書館で本を探してた時フッと「人生劇場」を手にとって借りてしまった。

昔、読んだよな。もう三回目くらいかもしない。でも今度は大活字だ。読みやすい。家が暗くても読める。読もうという楽しさ、意欲がわく。主人公・青成瓢吉が早稲田に入学し、ストライキに巻き込まれる。それも学費値上げではない。明治から大正にかけての話で、大隈さんがまだ生きていた頃だ。今、早稲田のキャンパス中央には大隈さんの銅像があるよね。実はあの隣に大隈夫人の銅像を大学側は作ろうとした。これは本当の話だ。「それはないよな」と学生は反撥する。夫人は尊敬するけど、これじゃ大学の私物化だ。大隈さんの言っていた「学の独立」にも反するじゃないかと。大隈さんも少々おぼけになられたのかもしれない。ここはオレが作った大学だ。そこに家内と並んで立って何が悪いと、そう思ったのか。あるいは夫人を慕う人々の熱意に反対できなかったのか。夫人も現存してたし、「うわー、超ウレピー」と喜んだらしい。

そこで青成瓢吉は、一世一代の名演説をする。夫人の銅像は大隈老侯の庭園に建てたらいい。もし校庭に銅像が必要なら、血をしぶり骨を削って早稲田の基礎をつくった小野梓先生の銅像を作るべきだと。まさに正論である。そして言う。「諸君は昔、山崎闇斎が孔孟の教えを説いたあとで学徒に質問したことばを知ってるか?」ちょっと長いけど引用しよう。闇斎を尊敬する三島由紀夫を彷彿とさせるような演説だ。

〈山崎闇斎は学徒に向ってこうたずねたではないか。若し孔子と孟子が陣頭に立って、日本へ攻めよせて来たら諸君は何とするか。学徒のうちひとりとして答え得るものはなかった。そのとき闇斎、声をはげまして曰く、孔孟若し来らば彼と一戦をまじえて速かにうち破らんのみ、何となればこれ孔孟の教うるところなるが故であると、---諸君、われ等もまた大隈老侯の教うるところに従わねばならぬ、学の自由と独立をまもらんがためにわれ等は大隈夫人の銅像建設に身をもって反対すべきである。『事実』は遠きにあらず、窓のそとにあり、侯が言うところの、当面すべき事実とはまさにかくのごときである〉

火のような演説だ。凄いアジテーションだ。そして夫人の銅像建設は阻止される。このしばらく後だ。級友の夏村大蔵と寝ころびながら社会学の話をしている。雑談にも社会学や歴史の話をしているのだ。当時の早大生はすごか。「それで休みはどうする」という話になった。瓢吉は「帰らん」という。本を読みたいからという。当時の早大生はよく本を読んでたんだ。すごか。それに学資も稼がなきゃならんと言う。「何をする?」「まだ考えとらんが」。そこで夏村は言う。「貴様は演説がうまいから『活弁』をやれ」。活弁というのは無声映画の説明役の弁士だよ。瓢吉は「銅像問題」でも学生をアジリ、中止させている。演説のうまさには定評がある。「バカにするな」と瓢吉は言う。と、その次を読み始めて、アッと声を出してしまった。これか。これだったのかと、ひとりごちした。紹介しよう。

〈しかし、夏村はそんなことには無頓着で、何処かでおぼえてきたのであろう、弁士の口真似を朗々とやりだした。「歓楽は女の生命にして、虚栄は女の真情なり、僅か七日の虚栄を得んがために処女の尊き貞操は犠牲に供せられたのでありま

した。親を偽りし罪おそろしく哀れメリーは…ふふん、どんなもんじゃ」〉

こ、こ、これだったのか。疑問に思い、悩み、苦しむこと40年、やっと「人生劇場」の前口上の謎が解けた。感動で思わず涙ぐんでしまった。あとは声を放って泣いた。そうか。だから歌の内容とは関係のない「哀れメリーは」なんかが出てくるのか。しかし、間違っておぼえてることもあった。「異性に供せられた」じゃなく「犠牲に供せられた」だったんだ。まあ、同じことだけど。歌うやつが地方出身でなまってたからかな。よかった、よかった。これで人生最大の疑問がとけた。早大出身の神野、いんばぎつねも知らんかったろう。「人生劇場」は新潮文庫でも出でるから読んでみろよ。急げ! 芳林堂へ。

でも、も一つ疑問だ。夏村大蔵の活弁の真似は実際の映画の口上なんだろうか。だったら何の映画なんだろう。おーい、誰か知らんか。掲示板に書いてる人達よー。(と遠くに向かって声をはり上げている)。分かったら教えてくれよー。あるいは実際の映画ではなく、尾崎士郎がつくったのかもしれない。エッ「来週は〈津村節子と赤軍派〉の巻って予告してたじゃないか」って。忘れてた。「人生劇場」の感動が余りにも大きかったんで、申しわけない。では来週だ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張11月20日

日本赤軍と『二十四の瞳』

重信房子が逮捕された直後、マスコミからドッと取材の電話があった。「鈴木さんは重信房子のお父さんとお知り合いだったそうですが…」というのが多い。お父さんは血盟団に入っていたし、生前、そのことを詳しく聞いた。背筋のピント伸びた、明治生まれの人だった。娘のことを誇りにしていたし、「娘は右翼です」と言ってたのには驚いた。戦前の右翼運動は血盟団事件、5.15事件、2.26事件…と、命をかけた〈革命〉運動だった。娘たちの命をかけた運動も、だから〈右翼〉と見えたのかもしれない。あるいは、ナショナリズムが底にあると言ったのかもしれない。

お父さんに会ったのは昭和49年の3月だった。1974年だ。今から26年前か。その当時のこと思い出したら、又、詳しく書いてみたいと思う。マスコミからの取材は父親がらみのことが多かったが、その他に、「鈴木さんは実は知ってたんじゃないですか?」と何人から言われた。つまり、重信が日本にいることを知ってたんじゃないかと言うのだ。そんな馬鹿な。赤軍派関係には友人も多いが、知るはずはない。「でも北京にいることは知ってたんでしょう?」という。それは知っていた。でも、日本には帰るはずがないと思っていた。「でも、HPでは『次は津村節子と赤軍派』と書いた直後に重信は逮捕された。予告してたとしか思えない」という。ウーン。この管理人の爺やも同じことを言っていた。津村節子というのは嘘で、本当は重信房子だという。津村は芥川賞作家で、いくら考えても赤軍派には接点はない。その通りだ。ウーン。これは自分でも分からない。一体、俺は何をかこうとしてたんだろう。実はあれは「自動書記」で書いてしまったのだ。天の啓示というか、ペンが勝手に動いたのだ。いや、ワープロだから、指が勝手に動いて、トントンと叩いたら、あんな文章になったのだ。だから今回も、「津村節子と赤軍派の巻」はない。

11月11日(土)午後1時から青山葬儀場で島成郎さんの告別式があった。島さんは60年安保の時の全学連指導者だ。享年70才。僕よりはずっと先輩だ。しかし、当時の全学連委員長の唐牛(からうじ)健太郎さん、島さんには20年以上前から、お世話になった。いろいろ教えてもらった。島さんは安保闘争のあとは精神科医として沖縄、北海道、東京で働いていた。北一輝も好きで研究していた。この告別式で連合赤軍の植垣康博さんに会った。捕まった重信さんのメッセージを(弁護士を通して)もってきていた。それで記者たちに囲まれて質問攻めにあっていた。

植垣さんは今は静岡で農業をやり、お茶を売っているといっていた。「日本の基盤は農業ですよ」と言っていた。「毎日、大八車をひいて働いてますよ」と言う。大八車なんて懐かしいな。若い人は知らないかもしれない。荷物を運ぶ大きな二輪車だ。「なんで大八車っていうか知ってますか」と植垣さんに聞いた。「え、知りませんよ。長い間獄中にいたんだから」「あれはね、八人分の仕事の代わりをす

るという意味なんです」「そうですか。さすが現代文の先生ですね」と驚いていた。

しかし驚くには及ばない。僕だってつい4日前に知ったんだ。壺井栄の『二十四の瞳』を読んだら出てたのだ。「でも、脚注なんか付いてないだろう」と言われるかもしれないが、注のついた本で読んだのだ。恥ずかしながら、今、講談社の「少年少女日本文学館」(全30巻)を読んでいる。子供向けの本だが、でも原文そのままで。これがいい。それに、全て漢字には仮名をふり、難しい言葉には赤で横に説明がついている。上には「大八車」などについて絵入りで解説している。挿し絵も多いし、読んでいて楽しい。もっともっと読みたいという気にさせる。文庫本で読むよりもずっといい。子供の為だけでは勿体ない。山本有三の「ウミヒコヤマヒコ」、新美南吉の「ごんぎつね」、山本周五郎の「ちいさこべ」、井上靖の「しろばんば」、井上ひさし「汚点」…など、いい作品がいっぱいある。今、半分位読んだ。本はたまるので、読んだあとは予備校で生徒にあげている。「汚点」を読んで泣いちゃいました、という生徒がいた。「やっぱ、新美南吉がいい」という子もいた。僕も新美は好きで、全集を読んだ。ある出版社から「童話を書きませんか」といわれて挑戦した時、新美を読みふけったのだ。こんなものを書きたいと思った。しかし、童話はまだ出来てない。読めば読むほど、自分なんかとても、と思っちゃうんだ。

で、『二十四の瞳』の話だ。これは多分、皆は映画で知ってると思う。高峰秀子が大石先生になった。昭和29年に松竹で映画化された。おいらは11才。小学校5年生か。秋田県湯沢市にいた。湯沢東小学校の生徒で、先生に引率されて湯沢劇場でこの映画を見た。この時の印象が強い。というより、それしかないんだ。その後、何度か映画化されて、別の女優も大石先生をやったが、見ていない。原作も読んでないと思う。あるいは文庫本で読んで忘れてしまったのかもしれない。同じ文章でも、文庫本と、絵入りの大型の本では、印象が違う。理解も違う。心に残り方が違う。今回、少年向けの本で読んでみて、「あれっ、こんな本だったのか」と驚いた。やけに左翼的だし反戦的なのだ。天皇をからかったりもする。イデオロギー的なんだ。だからいけないというんじゃない。その抵抗精神は、ほほえましいと思った。小豆島を舞台にした、大石先生と12人の生徒の心暖まるお話、とだけ思つてたのに。違っていた。

壺井栄は、プロレタリア作家だから、反戦思想はあると思ったが、これほど露骨に出てたとは…。昔の映画にもこんなに出てたんだろうか。しかし、小学6年の僕は全く覚えてないし、たとえ出ていても理解できなかっただろう。ボケーッとした、田舎のアホな小学生だったし、大体、高校生になるまで、日本に天皇陛下がいるということも知らなかった。全く社会性のないガキだったんよ。

『二十四の瞳』の中では、たとえば、こんなとこがある。「天皇陛下はどこにいらっしゃいますか」と大石先生が生徒に聞く。小学校でこんなこと聞くのかよ。もしおいらが小豆島の生徒なら、「天皇陛下ってナーニ?」と聞いて、廊下に立たされたろうな。ところが、小豆島では皆、ハイハイと手を上げる。「東京です」「宮城です」と答える子が多いのに、仁太くんは違う。「天皇陛下は、押し入れの中に

おります」と答える。皆はドッと笑う。でも「どうして、押し入れに天皇陛下がいるの?」と大石先生はやさしく聞く。仁太は、がてんのいかぬ(「納得できない」と注がある)顔をしてこう言う。

「学校の押し入れの中にかくしてあるんじゃないんかいや」。奉安殿のことだったんだ。又、奉安殿のなかった小学校では天皇陛下の写真は押し入れに入れて、かぎをかけてしまっていたんだ。そして、この本の上には「奉安殿」の解説がある。

「御真影(天皇・皇后の写真)と教育勅語(戦前の教育の根本方針を示した明治天皇のことば)を安置した建物」。

でも、実際に小豆島の学校でこんなことが話されたんじゃない。大体、壺井は教師の経験はない。あこがれていただけだ。だから、彼女が創作した会話だ。戦争中のことを書いたから、軍国主義や天皇制へのささやかな抵抗として読めるかもしれない。かわいいものだ。皆も、早く読んでおいた方がいい。今そのまま右傾化の時代が進むと、「こんな反日的な小説はけしからん、子供に読ますな」「発禁にしろ」といわれるかもしれない。

この小説を読んでいて、エッと思う発見がいくつかあった。大石先生が休んでる間、「男先生」がオルガンをひいて音楽の授業をする。「ふりくる矢だまのただ中を おかげすすみし国ため つくせや男児の 本分を 赤心を」という「千引の岩」という歌を教えている。オルガンをひきながら、男先生は歌い出した。それが何と、こんな歌い方だ。「ヒヒヒフミミミ、イイイムイ ハイツ」。アリヤ、これは何だと思った。おっさんが、「ヒヒヒ…」なんてつぶやいて、いやらしいな。変態かなと思った。さらに歌う。ここで子供たちはドッと笑う。それにしても「ヒヒヒ…」は何だろう。次の文を読んで、やっとおいらもがてんがいった(納得した)。

〈…生徒たちは急に笑いだしてしまった。ドレミハを、男先生は昔流に歌ったのである。しかし、いくら笑われても、今さらドレミにして歌う自信が男先生にはなかった。そこでとうとう、ヒフミヨイムナヒ(ドレミハの音階)からはじめて、男先生流に教えた〉。

そうか、昔はドレミじゃなく、ヒフミ…だったのか。全く知らなかった。もしかしたら、「ドレミ」は敵の英米の言葉(音階)だからといって、大和流のヒフミヨ…で歌ったんだろうか。「日の丸」の歌はドドレミミレ…だから、昔流でのやったら「ヒヒフミミフ…」になるのか。なかなか優雅だ。いいじゃないか。これに戻しても。「教育勅語を見直せ」とか「復活させろ」という声もあるが、それよりもこの「ヒフミヨ…」を復活させた方がいい。

そうだ。大石先生は他にも、こんなことも生徒に教てるんですよ。「あかって、なんのことか知ってる人?」「プロレタリアって、知ってる人?」。こんなこと、小学校のガキが知るかよ、でも何人かは手をあげて、答える。ゲッ、湯沢東小学校よりもグーンとレベルが高いよ。さらに、大石先生は聞く。「資本家は?」

「労働者は?」。これは同僚の稻川先生が、「アカ」だと警察につかまった次の日のことだ。だから大石先生は〈思想教育〉をしてるんだ。さらにこの本ではプロレタリア作家・小林多喜二のことなども書かれている。この本を読んでる今の子供た

ちにも思想教育をする。小林は警察で死んだといってるけど、「ほんとうは拷問で殺されたのだが、新聞には心臓まひで死んだと報じられた」と、書いている。

大石先生は、このあと結婚し、子供も出来る。しかし反戦的な母親を子供は批判する。そのシーンは実にリアルだ。ぜひ読んでもらいたい。あっ、こうやって紹介してたら、どんどん長くなっちゃったな。じゃ、この辺で中断するか。ここで、

『右であれ左であれ』(エスエル出版会)を読み直してみた。重信房子の父親とのインタビューが載ってるのだ。そして、アッと叫んだ。何と、壺井栄のことが出てるじゃないか。それが意外にも…。では、来週。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張11月27日

狼オバさんはゴルゴの標的になるのか

ぐっすり眠っていたら、突然の地震だ。(地震はみな突然だけど)。大きい。地面がグラグラする。大変だ。起きなくちゃ。と思うんだが体が動かない。(神野がよくかかるという)金縛りだ。まいったな。おいらのような信心深い人間でもかかるのか。きっと雨宮処凜の生靈だ。なんだよ、あの位のことで祟(たた)るなんて。負けるか、チクショウと思ったがダメだ。起き上がれない。地震はずーっと続いている。それに、奇妙だ。上下、左右に揺れるだけでない。グーン、グーンと体が前に持つて行かれるようだ。おいおい、こんな地震があるかよと思った。恐怖のあまり、おいらの頭や感覚が変になったのかもしれない。このままじゃ家に押しつぶされて死んじゃう。必死に「生長の家」のお経を唱えた。しばらくしたら雨宮の生靈は去った。そして目が覚めた。何だ、長距離バスに乗っていたんだ。

外界の物事が刺激して夢をつくるというのは本当だ。それにしても、「前に進む地震」の夢を観るなんて、おいらも非凡だ。なんでバスに乗ってたかって。11月21日(火)の夜、茨城県つくば市の青年会議所に呼ばれて講演してきたんだ。「国を愛してなぜ悪い。国を嫌ってなぜ悪い」というテーマで、日本共産党茨城県委員会常任委員の本木雄蔵さんと討論したのだ。「日の丸、君が代」の問題を本木さんが言いだしたんで、それを中心に話した。このHPも初めの頃は「日の丸・君が代」ばかりやってたよね。僕自信も皆に、「君が代」博士っていわれてる位だから(テレるから言うなって、赤坂め!)、得意分野だったし、大いに論議しただよ。そのあとは、二次会、三次会…と、そして翌22日(火)の朝、つくば市から東京までの長距離バスに乗ったんだ。仕事も終わり、ホッとして、疲れも出てグッスリと眠っていたら〈地震〉に会ったんだ。

この日から一週間前、やはり寝てる時に夢を見た(「夢は寝てるから見るんだろう、バカ」と赤坂が嫌みを言う。残念でした、おいらは昼、起きてる時だって見れる。白昼夢を見ている)。大器晩成のおいらにもやっと陽が当り、本が売れ、急にリッチになり、みやま山荘から脱出し、あこがれのマンションに引越すことになった。「いい物件がありますよ。陽当たりはいいし、角部屋で、過激派に襲撃されてもすぐに脱出できますし」と不動産屋は言う。「でも、場所が赤坂じゃな。赤坂は嫌いだ。青山も乃木坂も嫌いだ」と言った。その時だよ、電話で叩き起こされた。エッ夢だったのか。何時だ。夜中の3時半じゃないか。誰だこんな礼儀知らずの奴は。西部邁の『日本の道徳』を読めよ!と思ったら、「流浪のストリッパー」風見愛だった。「大変よ。知っとる。○○○が死んだんよ!」興奮して叫んでるが、関西弁でよく聞きとれない。特に名前らしいが、○○○がよく聞こえん。

「エッ、赤坂が死んだのか!」「ちゃうねん」(変な関西弁だ)。「じゃ乾か。塩見さんか。重信か?」「ちゃうちゃう」。「じゃ誰が死んだんだよ。早く言えよ、人騒がせな。こんな夜中に電話して」「ゴルゴが死んだんよ」「……」「聞いとる?ゴルゴ13が死んだんよ」。何、いってんや、こいつは。夜中から白昼夢を見とる

よ。「おーい、お前さんも長距離バスに乗っとるんかー」と叫んじゃったよ。

ゴルゴ13は33年前にデビューして以来ずっと第一線で頑張ってるじゃないか。不死身だよ。馬鹿、アホ、寝ろ! と悪態をついたが、「ほんまやねん」と言う。

「ニュースでやっとったんよ」と言う。頭が混乱した。「誰がそんなことを言ってたんだよ。自分で見たんか」と言ったら、「赤坂さんに聞いたから、これはホンマや」と言う。ガクッと来た。またあのデマ女か。あいつは嘘つきやんけ。狼少年だ。いや狼少女だ。いや狼おばさんだ。あんな奴の言うことを信じちゃいかんよ。

「でも、電車の中吊りで見たって言っとったけん」と風見は喰い下がる。変だな。もし本当なら大変だ。せっかく、『ザ・ゴルゴ学』が出版されようという時に、本人が死んじゃったらマズイ。でも、でも。この本はゴルゴの「便乗本」ではない。400話を記念して出す初のオフィシャル・ブックだ。不安になってパジャマのままサンクスに行って一番新しい「ビッグコミック」を買った。ちょうど第400話の(上)が始まったところだ。ピンピン生きてるじゃないか、赤坂め! こんなデマを流して赤坂はただじゃ済まないよ。きっとゴルゴ13に消されるだろう。かわいそうに。でも、お前さんがまいた種なんよ。迷わず成仏してくれよん。けっして幽霊になっておいらに祟らないように。

そこで、安心して寝た。デマ女のことは忘れて平和な一週間が過ぎました。いつの世もこんなデマ女はいるんだよね。「豊川信用金庫がつぶれそうよ」とヒソヒソと女子高生が電車の中で喋っていて、それを聞いたオバさんが皆に吹聴し、ドッと取り付け騒ぎになったという事件があった。実はあの、女子高生こそ、誰あろう若き日の赤坂であったことは知る人ぞ知る秘密だ。

一週間後の「ビッグコミック」も買った。ゴルゴの400話(中)が載っている。エッと思った。何と、あろうことか、ゴルゴが射殺されたのだ。あっ、赤坂はこのことを言ってたのか、と思った。でも、こいつはおいらと違い透視能力があるわけじゃない。きっと電車の中吊りを見たんだ。400話記念の宣伝が出てたんだろう。「ゴルゴ死す??」とか出てたんだ。もしかしたら「??」はなかったかもしれない。アホな赤坂はそれをマトモに信じ、日本全国、自分の知ってる限りの人に電話をかけまくってたんだ。15年前、「豊川信金があぶない」と言いふらした時と同じよう…。これで謎が解けた。

謎は解けたけど、ゴルゴは死なないんだよ。だって、400話の(下)が残ってる。(中)で死んだのなら(下)はいらない。それにそれに、隣のページには「ゴルゴ13」の「脚本を募集します」という記事が出てる。終わっちゃうのなら、こんな募集はやんないよ。「ゴルゴ死す」は話題作りなんだ。それを真に受けてアホ女め、と思ってたら、宅急便だ。ウワー、『ザ・ゴルゴ学』が届いた!

おっ、驚いた。Oh! 何とまた立派な本であることよ。これだけ豪華で楽しくて、詳しい本はなかったとよ。『ザ・ゴルゴ学』(小学館。1800円)がそれだ。334ページ。1800でも安い。「The Encyclopedia of GOLGO13」と書かれている。凄い。「20世紀最大の謎であり続けたGは存在そのものが現代の神学である」と帯びに書かれている。ピシッと決まっている。これは「ビッグコミック特別編集プロジェクト」の成田さんが書いたんだろう。なかなかいい。表紙をめくると、扉に

も、格好いい文章が。なになに。「男にとって必要なことは全て、『ゴルゴ13』から学んだ。司馬遼太郎が左右の学生運動に影響を与えたという人がいるが、本当は『ゴルゴ13』の方が影響が大きかった。劇画に影響を受けたというと恥ずかしいから言わないだけだ」。なるほど、そうかそうか。で、これは誰が書いたのと思ったら、「鈴木邦男(本書ロングインタビューより)」とあった。そうだ、おいらが書いたんだ。作者さいとうたかをにも2時間半のロングインタビューをやったんだ。多分、これが今年最後の大仕事だね。おいらは今年は6冊ほど本を出した。でも、連載をまとめたり、単行本を文庫にしたりという本が多かった。既にあるものを土台にして書き足したり、削ったり、直したりした。その点、『北朝鮮原論』と『ザ・ゴルゴ学』は、ゼロから始めた仕事だ。両方とも僕は一部しか担当していないが、かなり準備したし、必死で取り組んだ。だから今年の一番の仕事はこの二つになるだろう。ぜひ、読んでほしい。そして感想を聞かせてほしい。売れ行きがよくて、売り切れ店が続出で、今、増刷をしている。何店か回ったら、手に入るだろう。1800円で買って、読んでつまらなかつたという人には僕が1800円返します。僕に本を送り返してくれたら金を送ります。それだけ自信をもってすすめることの出来る本だ。

僕のインタビューは16ページだ。はじめは10ページだったが、これは面白いと編集部の方で、増頁してくれたのだ。僕がよかったですではなく、さいとうたかをの話が面白かったのだ。33年前からゴルゴは何故イデオロギーを超えることが出来たのか。左翼寄り、右翼寄りの脚本もあったのではないか。又、それらを超えるながらも、時々漂ってくる国や世界に対する〈憂い〉や〈怒り〉は何か。男とは?闘いとは?…といったことを聞いた。今までのインタビューは、「ゴルゴの出生の秘密」「金は何に使うか」「最終回は?」といったものが多かった。でも、それだけじゃ面白くないと思い、おいらは〈思想的〉な角度から切り込み質問した。さいとうたかをも真正面から受けとめて答えてくれた。白熱のインタビューになったと思う。「ゴルゴの価値観、アイデンティティ、死生観、セックス観、そして彼の心の中の善悪までを問い合わせた」とリードにはある。あとは読んでからのお楽しみだ。

それにしても、「オフィシャル・ブック」と言うだけあって、ゴルゴのことはあらゆる角度から分析し、調べ、統計をとり、論評している。このプロファイリングの苦労は並々ならぬものがある。たとえばこんなかんじだ。「ゴルゴの総収入と総支出を計算する」「ゴルゴと寝た女たち。107人完全リスト」「登場した武器・兵器カタログ」「依頼人のプロフィール」「ゴルゴが葬った暗殺者たち」…と。これでもか、これでもかと調べている。驚くばかりだ。そして圧巻は、「ゴルゴ13。全463話パーフェクトリスト」だ。一話ごとに粗筋を紹介し、標的、依頼人、報酬、任務地などを詳しく書きこんでいる。これも大変な作業だ。僕もインタビューの前に、もう一度全巻読んだ。メモをとり、リイド社の単行本(118冊)を読んでからインタビューに行った。これでも目がチカチカするし、キツかったが、プロファイリングする人たちは、何度も何度も読んで統計をとり、分類してたんだ。僕よりもずっと大変だ。

ところで「400話記念」の本なのにどうして、「全463話」のリストがあるか

だ。ナンバリングされたのは確かに400話だが、その他に「増刊号」などに書いたのや、特別編などもあったのだ。それであわてて手作業で数えてみたら(米大統領選みたいだね)、実は何と463話もあったというのだ。このリストをながめながら、不思議なことに気づいた。空白の所がポツポツとある。題237話、245話、266話だ。タイトル名も書かれていらない。だから思い出しようがない。「単行本未収録作品」と書かれて、その枠はまっ白だ。下に、断わり書きが書かれている。「この作品は都合により、初出以外の発表を自粛しておりますので、御了承下さい」と。じゃ、リイド社のものにも載ってないで、初めの「ビッグコミック」にしか載っていないのか。何かの理由で抗議が来て、単行本にいれられなかつたのか。ウーン、そうなるとなおのこと見てみたい。でも463話のうち、クレームがついて発表できないのが3話か。1%弱だ。これは少ないだろう。僕の「夕刻のコペルニクス」は300話を迎えたが、少なくとも30から40話は、単行本に載せられなくて、落とされている。何十年かたって、「ザ・タコペ学」という本が出たら、「パーフェクトリスト」では「単行本未収録作品」として書いてくれるかな。

ということで、『ザ・ゴルゴ学』は本当におすすめです。ここで赤坂が勝手にチャットで入ってきた。「あれっ、来週は壺井栄と『右であれ左であれ』だって書いてたよ」。ウルセーなー。仮にそう予告してただけじゃないか。「でも、その前には『津村節子と赤軍派』って書いてたよ。それもやってないよね。ウソつき!」。ウソつきの狼オバさんにウソつき呼びわりされたくねえな。ペッ。もうあのことは忘れてくれよ、あれはね、頭が混乱してた時の話だから、もうないんだよ。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張12月4日

「帰りたい、帰れない」症候群

11月24日(金)の野分祭は高田馬場のシチズンプラザで行われ、200人が参加した。作家の中村彰彦氏が第二部の記念講演を行った。中村氏は『烈士と呼ばれる男--森田必勝の物語』(文芸春秋刊)を書いた人だ。その取材を通して森田必勝の決起までの25年について語ってくれた。興味深い話で、感銘を受けた。翌25日(土)は九段会館で憂国忌に出席した。超満員で千人が集まつた。記念講演は西尾幹二氏だった。三島事件当時の思想的状況について詳しい話が聞けた。

この二つの集まりは、どちらも開会前から多くの人がつめかけていた。そのために、音楽を流していた。野分祭ではモーツアルトの「レクイエム」が流され、憂国忌ではワグナーの「トリスタンとイゾルデ」が流されていた。この曲は三島が生前最も愛した曲で、自作の映画「憂国」のバックにも流れている。そういえば、三島・森田に限らず、追悼祭というと必ず故人にちなんだ曲が流される。早大全共闘の彦由(ひこよし)さんが亡くなった時は「レクイエム」と、もう一曲、三橋美智也の「武田節」が流れていた。剣道の達人でもあった彦由さんが好きで、いつも歌っていた歌だという。今年の初めに亡くなったブントの指導者・篠田邦雄さんの時はベートーベンが流れていた。元「盾の会」で元一水会副会長の阿部勉氏の時はどうだったろうか。歌はなかったような気がする。酒を愛し、若山牧水のような生涯を送った人だったが、酒席では歌が入るのを嫌った。「歌なんか歌うな。興醒めだ。だまって飲め!」と怒鳴っていた。だからその遺志を継いで音楽はなかったのだろう。

11月11日(土)に青山葬儀場で、元ブント書記長・島成郎さんの追悼式があった。享年70才。やはり会場には歌が流れていた。モーツアルトやワグナーではない。いやに分かりやすい歌だ。「帰りたい、帰れない。帰りたい、帰れない」と叫んでいる。加藤登紀子の歌らしい。なんか、ジーンときた。このちょっと前、11月8日に日本赤軍の重信房子が逮捕された。重信は捕まつても数年で出られるだろう。だから逮捕覚悟で帰ってこれた。しかし、今、アラブにいる日本赤軍は、死刑や無期を求刑されてる人間が多い。とても帰れない。又、北朝鮮にいる「よど号」グループも望郷の念にかられているが帰れない。その人々の魂の叫びのように思われた。やるせない。切ないなーと思った。

でも、この歌は余りにもタイムリーだし、余りにもピッタリと合いすぎている。歌の正式なタイトルは何というんだろう。それに本当に加藤登紀子が歌っているのか。SPA! やHPに書くにしても、いいかけんなことは書けない。キチンと調べてみなくてはいけない。「調査なくして発言権なし」と毛沢東も言っている。歌の本がないので、カラオケに行った。そこで調べてみようと思ったんだ。大体、カラオケっていうのは友達と行くもんだが、おいらは友達がいない。だから一人で行った。まず加藤登紀子の歌を見た。10曲位ある。「百万本のバラ」。この中に「帰りたい、帰れない」というフレーズがあったかなと思ってかけたがない。「この空が

飛べたら」 「ひとり寝の子守歌」。これも違う。連合赤軍事件で27年も刑務所にいた植垣康博さんは、この「ひとり寝の子守歌」と鶴田浩二の「傷だらけの人生」が好きだといっていた。何か、連赤兵士の生活そのものが表われているようで驚いた。

加藤登紀子を10曲かけたが全部違う。じゃ、別の人か。ユーミン、バンバン、それに「フランシーヌの場合は」を歌った中核派シンパ歌手の新谷のり子。それに日吉ミミもかけてみたが違う。おっかしいなと思った。

ここでアッと思った。あった！ 「帰りたい、帰れない」とラストに繰り返して歌っている。そして、「ここは無言坂」と続く。そうだ、香西かおりの「無言坂」という歌だ。ヘエー、これだったのか。フーンと感心した。だから全部聞いてみた。特に二番がいいね。「あの町もこの町も雨模様 どこへ行くはぐれ犬ひとり 慰めも言い訳もいらないわ 答えならすぐにでも出せる…」。そうだよな、答えは出たんだよ。〈望郷〉だ。そして、「帰りたい、帰れない」だ。やっぱり、日本赤軍、赤軍派の歌じゃないか。それに赤報隊も歌ってるんだろうな。「エッ、赤報隊も海外にいるの？」 「いるんじゃないの。北京にいるって噂だし」 「ウソでしょう」 「ウルセーな、赤がつく奴らは皆、海外にいるんだよ」。…と、自分の中のビリー・ミリガンたちが論争をしているよ。

フー、やっと分かったか。ホッとして時計を見たら、あれっ3時間もたっていだ。一人でカラオケ屋で3時間もいたのか。でも、大調査を終え、満足して家路につき、寝た。ところがこの夜、夢を見た。体が揺れる。グーン、グーンと体が前に持っていかれるようだ。いけない。これは先週書いたネタだ。バスの話じゃない。歌のことだ。香西かおりの「無言坂」で解決がついたはずなのに、でも、まだ違和感があった。香西はかなり丁寧に、たたみかけるように、いかにも演歌的にうたっている。でも島さんの追悼式で聞いた「帰りたい、帰れない」はハスキーに叫んで、突き放すような歌い方だ。ウーン、どうも違うんじゃないだろうか。それで一晩中考えて、疲れなくなった。

翌日、河合塾コスモの授業の日だ。牧野先生はじめ元・全共闘の先生方がいっぱいいる。聞いてみた。「分かんねえ。『いちご白書をもう一度』なら知ってるけど」と言う。それを聞いていた生徒が、「インターネットで調べてみたら」という。エッ、分かんのかよ。コスモではインターネットが普及していて、HPも作っている。木曜日の5時からの「牧野・鈴木ゼミ」(今は「基礎総合」という授業になった)の様子も写真入りで紹介されている。あれ、畳の上でゴロゴロ寝ころんで本を読んでいるよ。おっ西部邁の『国民の道徳』をテキストに読書会をやったのか、と、そんなことも分かる。興味のある人は「河合塾コスモ」のHPを見たらいい。

そうだ、この前、会議で、「これからは会議の通知はメールですることにします」と言っていた。郵便だと地方にいってる時、見れないからだそうだ。又、全員ノートパソコンを持って。いつでも生徒からの質問に答えられるように…と言っていた。僕はいいけど、パソコンを使えない先生は大変だ。一体どうするんだろうか。

と、ハイテク・コスモで、例の歌を調べた。まず原点に戻って、「加藤登紀子」

をひく。今まで歌った全ての歌と歌詞が次々と出てくる。アレッ、あったよ、その名もズバリ、題名からして、「帰りたい、帰れない」。歌詞を見てみた。やっぱりこれだ。そうか、これだったのか。何のことではない。一番最初の直感が当ってたんじゃないか。じゃ、カラオケで調べた3時間は何だったんだ。時間の浪費だったよ、ブンブン。

だから皆も、加藤登紀子の「帰りたい、帰れない」を買って聞くように。そしてアラブの日本赤軍や北朝鮮の「よど号」グループに思いをはせませう。そうだ、「よど号」の家族の5人が12月に帰ってくるそうだ。交渉が難航してるが、必ず帰ってくるだろう。どんどん帰ってくるね。

このところ、週刊誌は重信のことばかりだね。それも、いじわるをして、昔の若くて、本当にかわいらしかった頃の写真と、今を比べて載せてんだよ。かわいそうに。「誰? このオバサン」とか、「ふつうのオバサンになった」と書かれてる。ある新聞は「これじゃ普通の市民運動のオバサンだ」と書いていた。「市民運動の」とわざわざつける必要があんのだろうか。「市民運動家」は汚いという誤解と偏見があるんじゃないだろうか。怒れ! 赤坂!

重信だって何も好きこのんでオバサンになったわけじゃない。あの若い美人の頃に「帰りたい、帰れない」と思っているんだろうよ。

さて最後に。三島事件から30年目で、ドッと三島関係の本が出ている。『諸君』12月号では元全共闘と元楯の会が激論をしてるし、いろんな雑誌が特集している。その中で、出色なのが『中洲通信』(12月号)だ。博多の中洲にある飲み屋のママさん(藤堂和子さん)がオーナーになって発行している。でも全国の書店に置いてある。新宿の紀伊国屋にもある。ともかく凄い雑誌だ。以前、「竹中労特集号」をやっていたのにも驚いたが、今月の「三島特集号」もいい。竹中労が昔書いた三島論も載っている。又、いろんな方面から三島を斬り、語り、評価している。「三島と骨」「三島と映画」「三島とレコード」…そして、「三島由紀夫ってどういう人の?」という入門講座もある。僕はインタビューを受けた。「"三島由紀夫の死"というアンビバレンス」という題だ。

それと、12月6日発表の月刊『創』(01年1月号)の僕の連載「鈴木邦男主義」では今回は、「重信房子の父」を書きました。26年前に会った時のインタビューそのものは『右であれ左であれ』(エスエル出版会)に収められている。まだ本屋にあるだろう。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張12月11日

キーパーソン病って何だ!

前の夜、塩見孝也さん達の集会があった。田中義三さんの裁判にどう取り組むか。北朝鮮から帰国する「よど号」の家族たちをどう迎えるか。といった集会だった。おわって二次会になり、したたか酒を飲んだ。「二次会女」と皆に言われてる赤坂も風見愛さんと共に出席していた。野分祭の時も、二次会にだけはしっかり出ていた。ともかく、「よど号」の話やら、新しく運動に参加した青年の決意発表やら、赤坂の二重まぶた整形問題、などで話が盛り上がり、おかげで、あたしゃ悪酔いして頭痛がした。

夜遅く帰ってきて、疲れはて、グッスリ眠り込んでいた。そしたら早朝、ドアをどんどんと叩く音がする。又、バスに乗ってる夢でも見てるんだろう。あるいは大工さんになった夢でも見てるのか。それとも前世はキツツキだったから、夢で前世に戻っていたのか。まるで、井上ひさしの『道元の冒険』のようだ。

800年前に生まれた道元は曹洞宗の開祖だ。とっても偉い坊さんだ。昼はお寺で善男善女を集めて説教をする。しかし、夜は変な夢に悩まされる。800年後の未来の人間になっている。そして女の肉体にしか関心のない強姦魔になっている。こんなに修業をつんだのに、どうしてこんな淫夢を見るのか、理解できない。一方、こちらは800年後(つまり現在)の強姦魔だ。昼は破廉恥きわまりない男だ。女を犯しまくっている。でも夜はなぜか聖人君子になって、多勢の人の前でお説教をしている。どうも道元らしい。何と、800年の時間と空間を飛びこえて、この二人は行ったり来たりしているのだ。いや、実はこの二人は同じ人間なのだ。二人にして一人なのだ、という極めて幻想的、形而上学的なお話だ。

おらも昼は聖人君子だから夜は800年後の強姦魔になっている。こっちでも、あっちでも犯しまくっている。ウーン、凄い夢だ。800年の時間を超えた「クーニン君の冒険」だ。あっ話が横道に外れた。ともかく、赤坂と会って悪酔いして帰ってきただよ。グッタリして眠ってるから、少々のことじゃ起きんよ。戸をドンドン叩いている。またかよ。ウルセー。思い切って起きて、玄関の戸を開けた。そしたら何と、9人の刑事が! ガサ入れだ! ガサ(家宅捜索)令状を見せる。ホッペをつねつたら、痛い。夢じゃない。

と、ここからがいい所だがやめる。あとはSPA! を買って読んで下さい。以上、予告編でした。

今度は、落語家のお話だ。12月2日(土)立川ワコールさん改メ立川談慶さんの「ニツ目昇進」落語会とお祝のパーティがあった。そんで出席したんよ。ワコールさんは慶應大学の落語研究会だった。卒業してから(株)ワコールに勤め、一生懸命にお仕事をしていた。カバンに本だけつめこんで、あっいけない。これは群よう子のタイトルだった(これだけは面白かった)。ワコールさんは、カバンにプラジャーだけつめ込んで、毎日セールスに歩いていた。だってワコールは女性下着の会社なんだもん。でも落語の夢を捨て切れず、電車の中でも、歩いていてもブツブツと独

り言で落語をやっていた。で、カバンは網棚の上に忘れて…ということが重なった。遺失物を発見した駅員さんも驚いた。「あっ、これは下着ドロボーか」。カバンを取りに来た本人を見て、「やっぱり」と思った。でも(株)ワコール社員の名刺があったので助かった。それが無けりや、立派な下着ドロだ。

そんなこんなで、立川談志のもとに入門し、苦節8年半。やっと二ツ目になったんですよ。この人は「夕刻のコペルニクス」の熱烈な愛読者だ。それで〈ある事件〉のことで相談された。どうも殺人事件の容疑者にされかかった。僕はその事件の謎をたちどころに解いてやった。それで彼は容疑者から外された。そして、今回は二ツ目だ。さらに可愛い奥さんをもらって、二重の喜びだ。それをお祝いするパーティだった。

「でも分かりませんよ。まだ容疑者ですよ。二ツ目披露パーティの席上、刑事が来て、手錠をかける、なんてことになるかもしれませんよ。そうなったら面白いですね。まるで『砂の器』ですよ」と快楽亭ブラックさんが僕に耳うちしていた。ひどいね。仲間の不幸も話のネタにしているよ(おいらも同じか)。

パントマイムの松元ヒロさんも来ていた。「チエゾーを知っていますか?」というから、「ファンでしたよ。ガキの頃は東映の時代劇ばっかり見てましたから、人生に必要なことは全て東映映画で学びましたよ」といったら、「そればっか」と馬鹿にされた。「でも前は、火曜サスペンス劇場で学んだとか言ってたし。最近はゴルゴ13から学んだって言ってましたね」「自分以外は全て師です。松元ヒロさんが本を出したら、"人生に必要なことは全て松元ヒロから学んだ"と書きますよ」。「また調子いいんだから。でも片岡千恵蔵じゃないんですよ。朝日新聞社から出ている『知恵蔵』ですよ。それに「現代のキーパーソン」が出ていて鈴木さんも入ってましたね。息子もビックリしてましたよ。おやじ、負けてるじゃないかって」。

「エッ。何ですか、そのキーパーソン病って?」と聞いて笑われた。本当に知らなかったのだ。「病気じゃないんですよ。まア、中には病気の人もいっぱいいますけど…」と言う。不安になって帰りに本屋に行って見たら、たしかにあった。キーは鍵なんだな。パーソンは人だ。現代の鍵になる人かな。どんな家でも開けられて、ドロボーに入れるんだろう。

そうだ。ワコールさんに戻る。ワコール改め談慶(だんけい)だが、ちょっと言いにくい。談志の談と、慶応の慶だ。来賓の祝辞があつて談慶さんが「ありがとうございます」といったら、すかさず談志が、「バカヤロー、談慶(ダンケ)シェーンって言うんだよ!」。これには会場大爆笑でした。もしかして、これを言いたいために談志は命名したのかもしれない。

しかし、8年半も「立川ワコール」だったんだ。(株)ワコールは気を悪くしないのか。あるいは宣伝になると喜んでいたのか。長い間、それが疑問だった。でも、後者だった。だって会場にはワコールの社員がドッと詰めかけていたし、ワコールの社長からも祝電が来ていた。又、新婦もワコールの社員だという。祝電といえば、民主党の羽田孜からもきていた。「大物と知り合いなんですね」とブラックさんに聞いたら、「ワコールの後援会長が長野の市会議員(県議だったかな)だから、その縁だろう」と言っていた。それに「愛知県警・木下」という祝電もあった。あ

れは一体何だろう「あの事件は愛知県下で起こったのか」。こわくてブラックさんにも聞けなかった。ただ事件が明るみになった時、SPA!に書かなくちゃならん。だから、忘れないようにここにメモがわりに書いておこう。

では赤坂の話だ。毎週1ヶ所位、赤坂のネタを入れとかないと淋しがるだろうから。(すぐ淋しがる病気だ。でも淋病ではない)。赤坂にあるビデオを貸してくれといわれてた。別にいやらしいビデオではないが、もらった人の名前がかかるから言えない。そのビデオを見て、もういいやと他の番組を重ね録りして使ってた。ところが「貸せ貸せ」と赤坂はしつこい。バカヤロ! 重ね録りしちゃったからもう消してねーよ! と言えたらいいんだが、気が弱くて言えない。「今探してますから」とそのたびにごまかしていた。ところがある日、チェックしてみたら、何と、3時間、重ね録りしていたんだが、その部分だけ(つまり赤坂が必要な部分だけ)奇跡的に生き残っていた。ゲッとのけぞった。まるで赤坂のようじゃないか。叩かれ、ひっかかる、必死に消そうとしてるのにしぶとく生き残っているなんて。コンクリートの小さな割れ目から花を咲かせているタンポポ(じゃないドクダミ草)のようじゃないか。感動で目頭が熱くなりましたね。

その赤坂が送ってくれたけど、「週刊金曜日」に見沢知廉氏が「本のひろば」というコラムを書いてた。(1)とあるからもしかして連載? 週刊金曜日も勇気があるというか、無謀というか。そこでおいらの『言論の不自由』(ちくま文庫)を取り上げていた。この本は結構読んだという人がいる。今週のSPA!で取り上げたが、横田基地に突入して逮捕された21才の青年も事件直前にこの本を読んだといっていた。見沢氏は、この本とさらに鳥肌実、雨宮処凛を取り上げ、〈右翼〉が人気上昇中だという。そして結論。「この現象、ワイマール末期と似てませんか?」。えっ、ワイマールって何、と思っちゃったよ。ヒトラーが政権をとる直前と似てるというのかな。もうちょっと親切に説明してくれなくちゃ、学のないおいらには分からんぞなもし。そうだ、この前にこう書いてたな。「国旗・国歌法、盜聴法、新ガイドラインや住民基本台帳法--等なんぞとキナ臭い。大正デモクラシーから昭和ファシズムへの、あの暗い予感がする…」。そうなのか。おいらの本についてはこんなことも書いてたぞ。

「40年間ペンの場で〈右の中のリベラル派の砦〉を演じてきた鈴木邦男の初の文庫、『言論の不自由?!』(ちくま文庫)。元本に比べ、右翼や天皇への不信がヒートアップしている」。

エッと驚いたね。二つの点で驚いた。一つ目。「右翼への不信」は大きいけど、「天皇への不信」なんかあんのかね、おいらに。でも、三島賞候補の見沢氏が言うんだから、本当だろう。〈読み〉の深さはおいらなど足元に及ばない。だったらそうだ。自分の中の「知らない自分」を指摘されたかんじだ。

驚いた二つ目。元本の『天皇制の論じ方』も、『言論の不自由』も読んでくれてたんだ。ありがたい。ホッとした。だって、『言論の不自由』の「解説」を書いてるじゃないかって? いやー、そこなんですよ。本を持ってる人がいたら、読み返して下さい。リンチ殺人事件の時、鈴木は何を言い、どう行動したか、については詳しく書いてるよ。SPA!とは違うが、こっちが真実だ! と。でも、この本については

一行も書いてない。もしかしたら本を読まないで書いたんじゃないかと不信を持ったんだよ。それで、いろんな人にもそのことを喋った。でも違ってた。ちゃんと読んでたんだ。ごめんなちゃい。謝罪します。SPA! でも近々謝罪文をのせるつもりだ(SPA! は関係ないか)。では、よいお年を、あっ、まだあったか。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張12月18日

実録・暴力夫と巨乳妻の新婚物語

まだか、まだか、と心待ちにしていたこの1ヶ月でしたが、とうとう来ました。ビデオが届いたんですよ。でもHビデオじゃないですよ。乾や赤坂じゃあるまいし。宅配で、受け取ったその場で金を渡すなんて、そんなビデオじゃないですよ。相手の携帯に電話して1時間以内にバイクで届けるという、あれでもないですよ。でも、2回ほど買ったことはあるけど…。あくまでも社会勉強のためですよ。そうだ、雑誌の連載でどうしても必要だったんですよ。そこで、嫌だったけど、〈仕事〉で見たんですよ。

おっと、Hビデオの話じゃない。届いたんですよ。大阪の立花健治さんから。「朝まで生テレビ」、じゃなかった、「新婚さんいらっしゃい」に出た時のビデオです。あっ、見たことあると覚えてましたよ。「新婚さん」は放送開始以来、40年間ずっと見ている。全部見ている。家にいない時はビデオとって見ている。必要なところはメモをとって見ている。人生に必要なことは全て「新婚さんいらっしゃい」から学んだ。いつかこの番組のオフィシャル・ブック『ザ・新婚さんいらっしゃい学』が出来たらきっと巻末インタビューは僕だろう。それ位、熱心に見ていい。何度か出ようと思ったが、そのたんびに女に逃げられた。だから番組見学にだけは行った。

でも、40年の間、(そんなにやってないって?まあまあ。インターネット的表現ですよ。名を隠して嘘をつくよりは可愛いでしょう)、「新婚さん」に知ってる人が出たのは初めてだ。いや、出た時は知らなかったんだな。立花さんが今年の河合塾の「左右激突」を聞きにきてくれて、「実は昔、『新婚さん』に出たことがあるんですよ」というので、「ウワー、見たい。ビデオ送って下さいよ」と頼んでいたんだ。

立花さんが出演したのは7年前。桂三枝も若いね。山瀬まみも若いね。まるで岡本夏生のようだ。あっ、本当に岡本夏生だったんだこの時は。その前はシェパード(犬じゃない。千昌夫の奥さんだった人)で、その前が片平なぎさだ。さらにその前がミヤコ蝶々だった。エッあれは違うの。「おもろい夫婦」だっけ。いや、あれは京唄子やったわ。じゃ、ミヤコ蝶々は何やったんやろ。(乃木坂注・「夫婦善哉」ちゃうか?)

それで、立花夫妻の紹介だ。番組では、立花健治(27才)、妻・佳枝(24才)と元気よく自己紹介していた。7年前だから今の夫は34才。妻31才だ。お仕事は?と聞かれ、「第一高等学院で英語を教えてます」。大検の予備校なんだ。そこで英語を教えている。だから留守録も英語で入っている。ドギマギした。外国人の友達が一杯いるんだろうか。それともそう見せかけて、生徒をおどかしてるだけなんだろうか。

「どこで知り合ったんでっか?」と三枝。ここで発見。三枝(さんし)と三枝(さえぐさ)は同じ字だ。作曲家の三枝成章さんとはテレビ討論会で何回か会った。原稿に

も書いた。ゲラを読んでて、「何でここに(さんし)が出てくるんや。おっかしいなー」と戸惑ったことが何度もあった。まぎらわしい。三枝(さんし)さんが三枝(さえぐさ)さんの娘と結婚したら三枝三枝(さえぐさ・さんし)じゃないか。こりや、もっとまぎらわしい。だから結婚すんなよ!

ベストセラー『美人論』を書いた井上章一さんは、専門は建築学だ。桂離宮のことも研究している。「でもウチの女子大生に桂離宮のこと聞いても知らしまへん」。なかの一人は、「それ、落語家でっか?」。本当の話だ。桂三枝や桂文珍と同じように、桂離宮という名の落語家だと思ったらしい。でも「桂は落語家だ」と思っただけでも頭のよか女子大生じゃないかいな。

話が横道に外れた。「どこでせ知り合ったんでっか?」と桂離宮じゃない、桂三枝が聞いた。そしたら、大学の後輩だという。どっちが? ウルセー赤坂め、勝手に出てくんな。女に決まってるだろう。男は27才、女は24才といってんだから。「でも男は四浪して大学に入ったかもしれないじゃん。そしたら男の方が後輩じゃん」。ウルセー、そんなに頭悪かったら予備校の先生になんかなれねえよ。シーサーと赤坂怪猫を追いはらって、話を戻す。夫は関西外大の日本拳法部で3段。奥さんもここに入部。ジャッキー・チェンに憧れて自分もやろうと思ったが、練習を見てムリと分かって、マネージャーになる。試合にもついて行く。こんな美人のマネージャーが付いてたら、頑張って優勝も狙ったんだろうよ、立花さん。と思いや、開始30秒でKOされてしまった。いいとこを見せられなかつた。

でも、入部した時から目をつけていたんだ。下宿に誘って、襲つた。日本拳法は立技のパンチ、キックだけじゃない。寝技もある。試合では一回戦KO負けとはいえた3段の猛者だ。女子マネージャーごときがかなう相手ではない。試合では負けたけど、下宿の寝技では一本勝ち。合体! そんで目でたく結婚。

「奥さんのどこが気に入ったんですか?」と桂三枝。「胸です」と堂々と言いましたね、この拳法3段は。「93センチもあるんですよ」。ウヘーッと思って、見つめましたよ。「そんなにあるように見えませんなー」と三枝。そうなんだ。体の線が出ないようにスーツを着ている。ズルイ! セーターとかTシャツで出ろよ。そんなに自慢するなら、と思いましたね。ともかく、美人で巨乳だったから、ムラムラっとして襲いかかり、寝技で仕留めたんだろう。

じゃ、結婚生活はさぞや気持ちいいだろう。いや、楽しいだろう。「ところが喧嘩ばかりしとるんです」と奥さん。何でも、夫は野菜が全然ダメなんだそうだ。ピーマンが嫌いというガキはいるけど、野菜は全部食べれないなんて聞いたことがない。「そんなアホな」と三枝も驚いていた。でもホンマやった。奥さんの丹精こめた料理の中に、小さなプチトマトがあるだけで、「バカやろう! オレに恨みでもあるんか! こんなの食えるか!」とテーブルごと引っくり返す。「巨人の星」の星一徹のような奴だ。しかし奥さんも負けてはおらん。茶碗を投げる。皿を投げる。大喧嘩になる。7年間ずっとこの繰り返しなんだろう。一見したところ、ニコニコして優しそうな夫なのに。実は暴力亭主だったんだ。今朝の産経新聞を見てたらDVという言葉が出ていた。ドメスティック・バイオレンス(家庭内暴力)というんだ。まさに立花さんだよな。でもな、シロート相手に拳法3段が喧嘩しちゃいかんぞな、も

し。

これで「新婚さん」のビデオの紹介は終わりだ。つまり、「暴力亭主と巨乳」。この二つのテーマがあったんで数々の予選を突破して出れたんだよね。めでたし、めでたし。

そうだ。もう一組の夫婦もオモロかったね。奥さんは料理屋の娘で長女。男は婿に入らにやならんのやけど、「向いてない」といわれて、ホッとし、次女が婿さんを迎えて店を継ぐ。でもお母さんは家出。店のお客さんと再婚。あわれな父ちゃん。「でもお父さんとお母さんは性格も性も不一致だったんです」。よくいうね、娘が。「性の不一致なんて、あんた見たんかいな。夜、寝てるところ…」と三枝が言つとった。そうや、そうや。なんで娘ごときが分かるんじやい。「だってお母さんが言ってたんだもん。私は嫌いなのにお父さんがしつこくてね」。ここで会場は大爆笑でしたね。

でも、いるんですよね、こういう母親って。息子には言わないけど、娘だと安心して言っちゃうんだよ。「友達おやこ」だからかね。「お父さんがしつこくて」なんてのはいい方じゃないか。なかには「お父さん、弱くてね。浮気しちゃおうかしら。どう思う?」と娘に相談してる母もいる。「ずっとごぶさたなのよ。アタマにくるわ。あんたからもいってやってよ」。そんなこと言われても娘も困るよな。

その点、男同士は言わないようですな。父が息子に、「お前の母さんはしつこくてな。まいるよ。何とか言ってくれよ」なんて父親はいない。「貧乳のくせに、サービスも悪いし」と息子にこぼす父親もいない。男の方が思いやりがあるからだ(と思う)。女はすぐバラしちゃうからな。いかんよ。若乃花・貴乃花のお母ちゃんだってそうだ。

で、おもろい二組の「新婚さん」が終わって、「パネル・クイズ」があった。でも立花夫妻は全然とれんのよ。もう一組はハワイ旅行が当ったのに。「教師のくせに頭悪いんじゃないか」と囲りからさんざん馬鹿にされたらしい。かわいそうに。「何で俺だけ当らんのだ」と拳法3段で暴れりやよかったです。

「いや、実はですね」と立花さん。でも、そのお話は来週のお楽しみだ。「新婚さん」に出た友達なんて一人もいなかったから、聞きたいことはぎょうさんあつた。あんなこと、こんなこと。予選はどうだったのか、その後、野菜嫌いは直ったのか。今でも暴力をふるっているのか。巨乳はさらに成長、進化するものなのどうか。そして「新婚さん」の番組の秘密も聞いちゃいました。ここまで言っていいのか。いいんです、「朝生」と違い、一回出たらもう出ることはない。「再婚さんいらっしゃい」はない。だから、たっぷり語ってもらいました。待て! 次号。

[HOME](#) [BACK](#)

今週の主張12月25日

巨乳版「天国と地獄」物語

12月19日(日)、「グラン・ワークショップ」に行ってきました。新左翼の戦旗派が主催する集会だ。いや、今は「戦旗派」ではなく、「ブント」といっているようだ。そこで、「21世紀の社会運動を展望する」と題したトークライブが行われた。荒岱介、宮崎学、鈴木正文、そして僕がパネラーだ。なかなか楽しかった。入口のところには公安が50人もいた。ものものしい。でも中は若者で満員。社会文化会館(もとの社会党会館)が一杯なのだ。ブントはすごいと思った。今週、そのレポートを書こうかと思ったら、元統一教会の乾太一君が、「いや、自分に書かせてくれ」というので、〈権利〉をゆずることにした。岩井さんが大阪の「左右激突」を長期レポートして大評判をとったので、それにならってやってみたいという。乾君は横浜の美人姉妹と来ていた。「二次会に行きますよ」と言ってたのにこない。美女二人を拉致してどっかに行ったんだ。二次会ではあら(荒)、珍しや、見沢知廉氏が来ていた。出版社の人間らしいのを従えて、ベルサーチに身をつつみ、頭をかかえながら小さな原稿用紙に絵を描いている。「失礼な。これは字ですよ。人のことをいえるんですか」と文句いってた。「何できたの?」と聞いたら、「僕は元、戦旗ですよ」という。あれっそうだっけ。

じゃ、「ワークショップ」の報告はこれでおわり。あとは太一つあんに任せます。僕はSPA!に近々書くであります。では先週の続きをいきます。世界を変える「ブント」から急に、「新婚さんいらっしゃい」の話になる。

立花健治さん(27才)、妻・佳枝さん(24才)が「新婚さん」に出た時の話を聞いた。7年前だったから今は、夫34、妻31だ。まず出演の時の裏話から聞いた。

「『新婚さん』はずーっと見てたし出たかったんです。僕から申し込みました。第一次予選、第二次予選と勝ち上がり、やっと出ることができました」

出たい人はワンサカいる。しかし、これは、という面白い目玉になる話がないとダメだ。その点、立花夫妻はあった。DV(ドメスティック・バイオレンス。要は家庭内暴力)の夫と巨乳の妻だ。この二点セットで並みいるライバルを抜きに抜いて、「新婚さん」に出た。でもシロウトがよく、しゃべれるよね。

「あれはね、構成作家がいて台本を作っていくんですよ。何度も何度もやらされました。この後はこの話。あっそんな形容詞はジャマだからいらん。説明がクドいからそれはカット…と。そりや、厳しいですよ。本番の直前までやらされましたからね。それと、パネルクイズの練習もやらされました。勿論、違うパネルですけど。だって、パアーッと照明がついて、カメラが三台も迫ってきたら、アガッてしまって何も喋れませんよ。だから、場慣れのための練習なんです」

フーン、そんなもんか。それで、「巨乳のその後」ですが、新婚生活は楽しかったやろな。なんせ93cmの巨乳やから。ところで何カップやろと思って聞いたら、Eカップだという。

「デパートで売ってないんですよ。仕方なく通販で買ってました。街と一緒に歩

いても、男はみな、ふり返りますからね。そりや得意でしたよ、どうだ、すげーだろうと。夜なんかでも楽しくて楽しくて。いじったり、なめ回したりして、何てオレは幸せなんだろうと思いましたよ。"今日は3万円分トクした"なんて思いました」

"3万円分"って何だろうな、よく分からん。

うれしくて、楽しくて、少々錯乱気味のようだ。ここでお乳のウンチク学です。女性のブラジャーのAカップ、Bカップというのはトップバストとアンダーバストの差で決まるんです。その差が10cmはA。12.5cmはB、15はC、17.5はD、20がEです。立花さんの奥さんは差(海拔!)が20cmもあったのです、おめでとう。実はこの詳しい数字はジャナ専の男子生徒に聞いた。彼は、今まで真面目一方だったのに、彼女が出来て、急に性に目覚めた。今まで本ばかり読んでたのに、もう本は読まん。愛の会話(携帯を1日に50回もかけてる)と愛の実技だけ。その彼が「Aカップとは…」と教えてくれたのだ。

でも、ここで疑問。乳房が出てる人はいいよ。中には全く出でない人もいる。胸囲は120cmもあるけど、トップもアンダーも同じ。これは何カップ? 「マイナスAカップ」、「マイナスBカップ」というんかな。「でも、ほしごうのような乳首は出とるやろ。だからトップとアンダーの差が全く同じということはありえないぞ、アホ」と赤坂は言う。別にお前さんのことを言っとるわけじゃないんだから、勝手に出てくんないよ。たしかにそうなると、「差」が5ミリとかあるな。それに、乳首が陥没してるやつもあるよ。やっぱり「マイナスAカップ」「マイナスBカップ」が必要だろう。しかし、恥ずかしいだろうな。「私、胸囲は120センチです。でもマイナスCカップです」なんて。その点、立花家は幸せだ。巨乳は一家を明るくする。今も、楽しくて仕方ないんだろうな。

「ところが…」と話のトーンが落ちて、暗くなる。「エッ、どうしたですか。他に男を作って逃げたんですか?」「そんならいいんですけど…」。よくないよ。じゃ、奥さんが病気になったの。「それならいいんですけど…」。それもよくないよ。じゃ、一体なんだよ。「引力の法則なんです」と又もやわけの分からんことを言う。

「巨乳はたれるもんなんです。今、31才なのに。もう見るかげもないんです。朝なんか大変ですよ。わきから下から肉をかき集めてブラジャーに入れて、それで巨乳らしく見せてますからね、あんな外見で男がナンパしたら大変ですよ。ホテルに入って、"なんやこれは。サギやないか"と怒り出しますよ」。

そんな! 浮気されたらいやでしょう。「もういいですよ。浮気しても何しても。ただ、相手の男がかわいそうだなと思いますね。だまされて」。巨乳の切れ目が縁の切れ目かいな。たれたら、もう愛情はないのだろうか。でも、大げさに誇張してるんだろう。大阪人やさかい。それに、少々たるんだにしてもアンタがもみすぎたとか、吸いすぎたとか、原因はそれやろう。

「ちゃいまんねん。そんなに吸ってませんよ。やっぱ巨乳はたれるんです。うちのカミさんなんて、ヘソが三つあるようですよ。ポイッと肩にかけられますよ」ボロクソにいうな。奥さん、見てたら大変だよ。離婚になってしまわないから

ね。

「若い時は、指で押したらポンとはじき返しましたからね。肌に弾力があって。今はズブズブ…と入っていきますよ。底なし沼ですよ。どうしてくれるんですか」

そんなこと僕に言われてもなー。あるいは奥さんが瘦せて、そんで一時的に、乳がたれたんじゃないのか。「いや、いまもデブです」「・・・」。フォローの仕様がない。でも、巨乳は全てたれるということはないだろう。「いや、他に9人、巨乳と付き合いましたが、みなたれてます。だから今は小ぶりの女とだけ付き合ってます」

エッ、そんなに浮気してんのか。本当に奥さん、このHP見てないんだろうな。「大丈夫です。巨乳は頭が悪いから」。そこまで言うかよ。でも同じ大学だったじゃないか。同じクラブのマネージャーだったし、頭いいんじゃないか。「巨乳の女は頭が悪い」というのは「貧乳のブス」が意図的に広めたデマですよ。CIAの謀略ですよ。フリーメーソンの陰謀ですよ。なあ、赤坂! 巨乳でも司法試験に挑戦してよな。巨乳でも国会議員になってるしな、辻元清美は。

「でも、すぐにたれるんです。ウウウ・・・」と泣き出す。高価なオモチャを買ってもらって大喜びしてた子供が、ちょっと遊んだら、オモチャが壊れてしまい、ウエーンと泣いている。そんな感じなんだろうか。かわいそうに。でも由実かおるなんて50すぎてもプロポーションがいいよ。体型は20代の時と全く変わんないという。身長、体重、B.W.Hも…。

「甘いですよ。鈴木さんも見る目がないんですね。昔の写真と今の写真を比べて下さい。今はヌードになりませんが、服の上からでも分かります。ブラジャーの位置が下になってます」

へエー、そうか。一大発見だ。お乳研究博士の立花先生にはかなわない。でも、熟女ヌードとかあるぞ。まだ、巨乳健在のやつがいるじゃん。

「あれもサギなんです。四つんばいになって、ブドウのように上から、たわわに実てるよう見せてますが、あれは立つとベターッとたれてるからです。又、乳の下に手を入れてるでしょう」

あれは、ホーラ、食べなちゃいと、巨乳を差し出してるんじゃないの、男の欲情をそそるために。

「ダメダメ。見方が甘い。たれてるから、下から持ち上げて、差し出してるかっこをしてるんです。手品です。プロレスです」

そうなのか。世の中を見る目が変わったな。

「トップレス・バーにいくと18.19の女の子でもたれてんのがいますよ。今度、ご案内しますよ」

ハイハイ、行きましょう。でも、たれてない子もいると思うけどな。立花さんの巨乳史観は極端から極端に走ってるよ。巨乳自尊史観から、巨乳自虐史観になってるよ。巨乳は「善」だったのに、一転、今は、巨乳は「悪」だと決めつけている。

そうだ、じゃ巨乳はいつ生まれるのか。いや、いかにして生まれるのか。遺伝か。栄養か。運動か。

「カミさんは小学生の時から大きくて、中学の時にもう93あったっていいますか

らね。でも遺伝じゃないです。母親は小さいし、親類にも巨乳はいません」

じゃ、おばあちゃんは? 隔世遺伝ということがあるし、巨大な乳バンド(昔の人はブラジャーのことをこう言った)をしてたんじゃないかな。聞いて下さいよ。「いやですよ。もうたれてるから、口もききたくない」という。冷たいなー。「新婚さん」の番組ではあんなにニコニコして、こんなに幸せな男が他にいるかという顔をしてたのに。「それも巨乳にだまされたんですよ」。

ウーン、巨乳版「天国と地獄」だ。立花さんは1月に上京するそうだから(あるいは年末かも?)、もっとじっくりとお話を聞きたい人はどうぞ。巨乳の「暗い未来」におびえている赤坂もどうじょ。

[HOME](#) [BACK](#)